

酒々井町飯積上台遺跡2・飯積原山遺跡3 柳沢牧墨木戸境野馬土手

— 酒々井南部地区埋蔵文化財発掘調査報告書4 —

平成27年3月

独立行政法人 都市再生機構

公益財団法人 千葉県教育振興財団

し す い いい づみ うえ だい い せき いい づみ はら やま い せき
酒々井町飯積上台遺跡2・飯積原山遺跡3
やなぎ さわ まき すみ き ど ざかい の ま ど て
柳沢牧墨木戸境野馬土手

— 酒々井南部地区埋蔵文化財発掘調査報告書4 —



序 文

公益財団法人千葉県教育振興財団は、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立され、以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県教育振興財団調査報告第738集として、独立行政法人都市再生機構の酒々井南部地区土地区画整理事業に伴って実施した酒々井町飯積上台遺跡、飯積原山遺跡、柳沢牧墨木戸境野馬土手の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

これらの調査では、旧石器時代の石器群、縄文時代の集落跡、奈良・平安時代の集落跡、近世の牧跡に関連する遺構が検出され、また大量の土器・石器等の遺物が発見されるなど、この地域の歴史を知る上で欠くことのできない貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、本書が学術資料として、また埋蔵文化財の保護に対する理解を深めるための資料として広く活用されることを願ってやみません。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々をはじめとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様に心から感謝の意を表します。

平成27年3月

公益財団法人 千葉県教育振興財団
理 事 長 堀 田 弘 文

凡 例

- 1 本書は、独立行政法人都市再生機構による酒々井南部地区土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県印旛郡酒々井町飯積字台上390-1ほか(に所在する飯積上台遺跡(遺跡コード322-009)、飯積字宮田台551-4ほか(に所在する飯積原山遺跡(遺跡コード322-005)、飯積字宮田台523ほか(に所在する柳沢牧墨木戸境野馬土手(遺跡コード322-005)である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人千葉県教育振興財団が実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の担当者及び実施期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、調査研究部長 伊藤智樹、整理課長 今泉 潔の指導のもと、主任上席文化財主事 木原高弘・沼澤 豊、上席文化財主事 西川博孝・橋本勝雄が担当した。
執筆分担は、木原が第1章、第3章第1節、第3節1・2の遺構、第4・5節、第4章、第5章第2節3、沼澤が第2章第1・3・4節、第5章第1節2、西川が第3章第3節の土器・土製品、第5章第2節2(1)・(2)・(4)、橋本が第2章第2節、第3章第2節、第3章第3節の石器、第5章第1節1・第2節1・2(3)である。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、下記の諸機関・諸氏から御指導、御協力を得た。
千葉県教育庁教育振興部文化財課、独立行政法人都市再生機構、酒々井町教育委員会、千葉大学教授柳澤清一氏、千葉大学大学院生山山明弘氏
- 7 本書で使用した地形図は以下のとおりである。
第2図ほか 都市再生機構 1/2,500現況図(平成6年作成)
第4図 国土地理院 1/25,000地形図「酒々井」(N1-54-19-10-4)
- 8 調査地周辺の航空写真は、京葉測量株式会社が1972(昭和47)年3月に撮影したものを、約1/5,000に拡大して使用した。
- 9 本書で使用した座標はすべて日本測地系に基づく平面直角座標(国家標準直角座標第IX系)で、図面の方位はすべてその座標北を示す。
- 10 遺構実測図で使用した記号で特に用例が示されていないものは、●は土器、■は土製品、▲は石器、★は鉄製品の出土位置を示している。

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	調査・整理の方法	4
第2節	遺跡の位置と環境	9
第2章	飯積上台遺跡	15
第1節	概要	15
第2節	旧石器時代	16
1	第3ブロック	16
第3節	縄文時代	25
1	竪穴住居跡	25
2	土坑等	25
3	遺構外出土遺物	27
第4節	古墳時代以降	30
1	土坑	30
2	溝状遺構	30
第3章	飯積原山遺跡	34
第1節	概要	34
第2節	旧石器時代	50
1	第23ブロック	50
2	第24ブロック	53
3	第25ブロック	53
4	第26ブロック	62
5	第27ブロック	62
6	第28ブロック	67
7	採集・単独出土資料	67
第3節	縄文時代	74
1	竪穴住居跡	74
2	土坑等	96

3 遺構外出土遺物	136
第4節 奈良・平安時代	146
1 竪穴住居跡・掘立柱建物跡	146
第5節 野馬土手・溝状遺構・道路状遺構・土坑	167
第4章 柳沢牧墨木戸境野馬土手	179
第1節 概要	179
第2節 野馬土手	182
第5章 まとめ	185
第1節 飯積上台遺跡	185
1 旧石器時代	185
2 縄文時代以降	185
第2節 飯積原山遺跡	187
1 旧石器時代	187
2 縄文時代	191
3 奈良・平安時代	232
報告書抄録	巻末

挿 図 目 次

第1図	グリッド名称例	4	第33図	第23ブロック出土遺物分布図(1) -石器別分布図-	51
第2図	調査対象範囲と地形	5	第34図	第23ブロック出土遺物分布図(2) -石材別分布図-	52
第3図	振替後の地区割り全体図	8	第35図	第24ブロック出土遺物分布図(1) -石器別分布図-	54
第4図	遺跡の位置と周辺の遺跡	11	第36図	第24ブロック出土遺物分布図(2) -石材別分布図-	55
第5図	飯積上台遺跡旧石器時代ブロックと 確認グリッド位置図	12	第37図	第24ブロック出土遺物実測図(1)	56
第6図	飯積上台遺跡遺構分布図	13・14	第38図	第24ブロック出土遺物実測図(2)	57
第7図	第3ブロック出土遺物分布図(1)	18	第39図	第25ブロック出土遺物分布図(1)	58
第8図	第3ブロック出土遺物分布図(2)	19	第40図	第25ブロック出土遺物分布図(2) -石材別分布図-	59
第9図	第3ブロック出土遺物実測図(1)	20	第41図	第25ブロック出土遺物実測図(1)	60
第10図	第3ブロック出土遺物実測図(2)	21	第42図	第25ブロック出土遺物実測図(2)	61
第11図	第3ブロック出土遺物実測図(3)	22	第43図	第26ブロック出土遺物実測図	62
第12図	第3ブロック出土遺物実測図(4)	23	第44図	第26ブロック出土遺物分布図(1) -石器別分布図-	63
第13図	第3ブロック出土遺物実測図(5)	24	第45図	第26ブロック出土遺物分布図(2) -石材別分布図-	63
第14図	(8) SI001	25	第46図	第27ブロック出土遺物実測図	64
第15図	縄文時代土坑等	26	第47図	第27ブロック出土遺物分布図(1)	65
第16図	遺構外出土縄文土器	28	第48図	第27ブロック出土遺物分布図(2)	66
第17図	遺構外出土石器	29	第49図	第28ブロック出土遺物分布図(1) -石器別分布図-	68
第18図	土坑・溝状遺構	31	第50図	第28ブロック出土遺物分布図(2) -石材別分布図-	69
第19図	遺構外出土土師器	33	第51図	第28ブロック出土遺物実測図	70
第20図	飯積原山遺跡旧石器時代ブロックと確 認グリッド位置図	36	第52図	採集単独出土遺物実測図(1)	72
第21図	飯積原山遺跡縄文時代遺構分布図	37・38			
第22図	飯積原山遺跡奈良・ 平安時代以降遺構分布図	39・40			
第23図	遺構分布図(1)	41			
第24図	遺構分布図(2)	42			
第25図	遺構分布図(3)	43			
第26図	遺構分布図(4)	44			
第27図	遺構分布図(5)	45			
第28図	遺構分布図(6)	46			
第29図	遺構分布図(7)	47			
第30図	遺構分布図(8)	48			
第31図	遺構分布図(9)	49			
第32図	第23ブロック出土遺物実測図	50			

第53図	採集単独出土遺物実測図 (2) ……73	第92図	縄文時代土坑等出土製品 …… 134
第54図	(61) S1001 (1) ……74	第93図	縄文時代土坑等出土石器 …… 135
第55図	(61) S1001 (2) ……75	第94図	遺構外出土縄文土器 (1) …… 137
第56図	(61) S1001 (3) ……76	第95図	遺構外出土縄文土器 (2) …… 139
第57図	(61) S1001 (4) ……77	第96図	遺構外出土縄文土器 (3) …… 140
第58図	(61) S1002 ……78	第97図	遺構外出土縄文土器 (4) …… 142
第59図	(61) S1005 ……80	第98図	遺構外出土土製品 …… 143
第60図	(61) S1006 ……81	第99図	遺構外出土石器 …… 145
第61図	(62) S1001 (1) ……82	第100図	(63) S1001 …… 146
第62図	(62) S1001 (2) ……83	第101図	(63) S1002 …… 147
第63図	(62) S1002 ……84	第102図	(64) S1001 …… 148
第64図	(62) S1003 ……85	第103図	(64) SB001 …… 150
第65図	(63) S1003 ……86	第104図	(65) S1002 (1) …… 151
第66図	(65) S1001 ……88	第105図	(65) S1002 (2) …… 152
第67図	(68) S1001 (1) ……89	第106図	(65) S1003・(12) S1045 …… 154
第68図	(68) S1001 (2) ……90	第107図	(66) S1001 (1) …… 155
第69図	(68) S1001 (3) ……91	第108図	(66) S1001 (2) …… 156
第70図	(68) S1002 (1) ……93	第109図	(66) S1002 (1) …… 158
第71図	(68) S1002 (2) ……94	第110図	(66) S1002 (2) …… 159
第72図	(71) S1001 ……95	第111図	(66) S1003 …… 160
第73図	縄文時代土坑等 (1) …… 115	第112図	(66) S1004 (1) …… 161
第74図	縄文時代土坑等 (2) …… 116	第113図	(66) S1004 (2) …… 162
第75図	縄文時代土坑等 (3) …… 117	第114図	(66) S1005 (1) …… 163
第76図	縄文時代土坑等 (4) …… 118	第115図	(66) S1005 (2) …… 164
第77図	縄文時代土坑等出土土器 (1) …… 119	第116図	(66) S1006 …… 165
第78図	縄文時代土坑等出土土器 (2) …… 120	第117図	(69) S1001 …… 166
第79図	縄文時代土坑等出土土器 (3) …… 121	第118図	(51) SD001・(52) SA001・(52) SD001・ (52) SD002・(51) SK003 …… 168
第80図	縄文時代土坑等出土土器 (4) …… 122	第119図	(52) SA001・(52) SD001・(52) SD002・ (55) SA001・(55) SD001・(55) SD002 …………… 169
第81図	縄文時代土坑等出土土器 (5) …… 123	第120図	(54) SA001・(54) SD001・(54) SD002 …………… 170
第82図	縄文時代土坑等出土土器 (6) …… 124	第121図	(62) SD001・(62) SK026・(63) SD001・ (63) SD002 …… 171
第83図	縄文時代土坑等出土土器 (7) …… 125	第122図	(63) SD001出土遺物 …… 172
第84図	縄文時代土坑等出土土器 (8) …… 126	第123図	(65) SD001・(65) SD002 …… 173
第85図	縄文時代土坑等出土土器 (9) …… 127	第124図	(66) SD001・(66) SD002・(66) SD003・ (66) SD004 …… 174
第86図	縄文時代土坑等出土土器 (10) …… 128		
第87図	縄文時代土坑等出土土器 (11) …… 129		
第88図	縄文時代土坑等出土土器 (12) …… 130		
第89図	縄文時代土坑等出土土器 (13) …… 131		
第90図	縄文時代土坑等出土土器 (14) …… 132		
第91図	縄文時代土坑等出土土器 (15) …… 133		

第125図	(68) SD001・(68) SD002・(69) SD001・(69) SK001・(69) SK002	175	第143図	出土土器集成図(10)	210
第126図	(70) SD001・(70) SD002・(70) SK001・(70) SK002	176	第144図	出土土器集成図(11)	211
第127図	(71) SD001・(71) SD002・(71) SD003	177	第145図	出土土器集成図(12)	212
第128図	(75) SD001	178	第146図	出土土器参考資料	213
第129図	柳沢牧墨木戸境野馬土手と周辺の近世遺構・文化財	180	第147図	土器片重量分布図	218
第130図	調査範囲と周辺の地形	181	第148図	縄文時代時期別遺構分布図(1)	223・224
第131図	(1) SA001	183	第149図	縄文時代時期別遺構分布図(2)	225・226
第132図	(2) SA001	184	第150図	縄文時代時期別遺構分布図(3)	227・228
第133図	旧石器時代石器群の変遷	188	第151図	縄文時代前1期地区別遺物分布状況	229
第134図	出土土器集成図(1)	196	第152図	縄文時代後V期地区別遺物分布状況	230
第135図	出土土器集成図(2)	197	第153図	奈良・平安時代1期土器	233
第136図	出土土器集成図(3)	198	第154図	奈良・平安時代2期土器	234
第137図	出土土器集成図(4)	199	第155図	奈良・平安時代3期土器	235
第138図	出土土器集成図(5)	200	第156図	奈良・平安時代4期土器	237
第139図	出土土器集成図(6)	206	第157図	奈良・平安時代区画想定図	240
第140図	出土土器集成図(7)	207	第158図	奈良・平安時代時期別遺構分布図	243・244
第141図	出土土器集成図(8)	208			
第142図	出土土器集成図(9)	209			

目 次

第1表	発掘調査面積一覧	2	第12表	第26ブロック石器組成表	62
第2表	飯積上台遺跡地区割り一覧	7	第13表	第27ブロック石器組成表	64
第3表	飯積原山遺跡地区割り一覧	7	第14表	第28ブロック石器組成表	67
第4表	柳沢牧墨木戸境野馬土手地区割り一覧	7	第15表	採集・単独出土資料石器組成表	71
第5表	周辺遺跡一覧	10	第16表	旧石器時代石器組成表(全体)	187
第6表	飯積上台遺跡遺構種別一覧	15	第17表	旧石器時代石器組成表(第1文化層)	189
第7表	第3ブロック石器組成表	17	第18表	旧石器時代石器組成表(第2文化層)	190
第8表	飯積原山遺跡遺構種別一覧	34	第19表	旧石器時代石器組成表(第3文化層)	190
第9表	第23ブロック石器組成表	50			
第10表	第24ブロック石器組成表	53			
第11表	第25ブロック石器組成表	62			

第20表-1	代表遺跡における土器片丹板の 種別集計	216
第20表-2	孔の有無と欠損の関係	216
第20表-3	周縁加工と穿孔の関係	216

第20表-4	表面穿孔と裏面穿孔	216
第21表	縄文時代石器石材別組成表	220
第22表	石器の機能・用途別組成	221
第23表	奈良・平安時代溝状遺構一覽	239

添付CD

附表1	飯積上台遺跡（下層）第3ブロック出土遺物一覽
附表2	飯積上台遺跡遺構一覽
附表3	飯積上台遺跡縄文土器一覽
附表4	飯積上台遺跡縄文時代石器一覽
附表5	飯積原山遺跡（下層）出土遺物一覽

附表6	飯積原山遺跡遺構一覽
附表7	飯積原山遺跡縄文土器一覽
附表8	飯積原山遺跡縄文時代土製品一覽
附表9	飯積原山遺跡縄文時代石器一覽
附表10	飯積原山遺跡奈良・平安時代土器一覽
附表11	柳沢牧墨木戸境野馬上手遺構一覽

図 版 目 次

図版1	遺跡周辺の航空写真
飯積上台遺跡	
図版2	(5) 調査前風景、旧石器第3ブロック (8) S1001、(6) SK001、(6) SK002、 (7) SK001馬歯、(7) SK003、(7) SK004
図版3	(8) SK001、(9) SK001、(6) SD001・ (6) SD002、(7) SD001、 (8) SD001トレンチ3、 (8) SD001トレンチ4、 (8) SD001トレンチ6、(9) SD001
図版4	旧石器時代石器 (1)
図版5	旧石器時代石器 (2)
図版6	旧石器時代石器 (3)
図版7	縄文時代住居跡・土坑出土土器、 遺構外出土縄文土器 (1)
図版8	遺構外出土縄文土器 (2)、 遺構外出土縄文時代石器、中・近世陶 磁器、遺構外出土師器、銭貨

飯積原山遺跡	
図版9	(51) 調査前風景、(52) 調査前風景、 (53) 調査風景、第23ブロック、 第24ブロック、第25ブロック南側、 第26・27ブロック、第28ブロック
図版10	(61) S1001・(61) S1002、(61) S1001・ (61) S1002 遺物出土状況、(61) S1005、 (61) S1005片・遺物出土状況、 (61) S1006、(61) S1006遺物出土状況、 (62) 近景、(62) S1001
図版11	(62) S1001遺物出土状況、(62) S1002、 (62) S1003、(63) S1003、(65) S1001、 (65) S1001遺物出土状況、(68) S1001、 (68) S1001遺物出土状況
図版12	(68) S1002、(68) S1002遺物出土状況、 (71) S1001、(71) S1001片・遺物出土状況、 (62) SK011、(62) SK011遺物出土状況、 (62) SK022、(62) SK022遺物出土状況
図版13	縄文時代土坑等 (1)

- 図版14 縄文時代土坑等 (2)
- 図版15 縄文時代土坑等 (3)
- 図版16 縄文時代土坑等 (4)
- 図版17 縄文時代土坑等 (5)
- 図版18 縄文時代土坑等 (6)
- 図版19 (63) S1001、(63) S1001カマド、
(63) S1002、(64) SB001、(64) S1001、
(64) S1001遺物出土状況、(65) S1002
焼土・炭、(65) S1002遺物出土状況
- 図版20 (65) S1003、(65) S1003カマド、
(66) S1001、(66) S1001カマド遺物出
土状況、(66) S1002、(66) S1002炭化材、
(66) S1002遺物出土状況、(66) S1003
- 図版21 (66) S1004、(66) S1004遺物出土状況、
(66) S1005、(66) S1005遺物出土状況、
(66) S1006、(26) S1006カマド遺物出
土状況、(69) S1001、(69) S1001カマ
ド遺物出土状況
- 図版22 (63) SD001、(63) SD001、(65) SD001・(65)
SD002、(65) SD001、(65) SD002、
(66) SD001、(66) SD004、(71) SD001
- 図版23 中・近世遺構
- 図版24 旧石器時代石器 (1)
- 図版25 旧石器時代石器 (2)
- 図版26 旧石器時代石器 (3)
- 図版27 旧石器時代石器 (4)
- 図版28 旧石器時代石器 (5)
- 図版29 旧石器時代石器 (6)
- 図版30 縄文時代住居跡出土土器 (1)
- 図版31 縄文時代住居跡出土土器 (2)・
土坑等出土土器 (1)
- 図版32 縄文時代土坑等出土土器 (2)
- 図版33 縄文時代土坑等出土土器 (3)
- 図版34 縄文時代土坑等出土土器 (4)
- 図版35 縄文時代土坑等出土土器 (5)・
遺構外出土土器 (1)
- 図版36 縄文時代住居跡出土土器 (3)
- 図版37 縄文時代住居跡出土土器 (4)
- 図版38 縄文時代住居跡出土土器 (5)・
土坑等出土土器 (6)
- 図版39 縄文時代土坑等出土土器 (7)
- 図版40 縄文時代土坑等出土土器 (8)
- 図版41 縄文時代土坑等出土土器 (9)
- 図版42 縄文時代土坑等出土土器 (10)・
遺構外出土土器 (2)
- 図版43 縄文時代遺構外出土土器 (3)
- 図版44 縄文時代土製品
- 図版45 縄文時代石器 (1)
- 図版46 縄文時代石器 (2)、
奈良・平安時代土器 (1)
- 図版47 奈良・平安時代土器 (2)
- 図版48 奈良・平安時代土器 (3)
- 図版49 奈良・平安時代支脚・土製品・鉄製品
- 図版50 奈良・平安時代石製品・墨書・刻書
- 柳沢牧墨木戸境野馬土手**
- 図版51 (1) SA001調査前風景、(1) SA001調査
前風景、(1) SA001トレンチ1・2・3、
(1) SA001トレンチ1、(1) SA001トレンチ2、
(1) SA001トレンチ3、(2) SA001北側、
(2) SA001南側

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

独立行政法人都市再生機構（平成7年1月1日契約時は住宅・都市整備公団、平成11～16年まで都市基盤整備公団）は、千葉県印旛郡酒々井町において、酒々井南部地区土地区画整理事業を計画した。実施に当たり、千葉県教育委員会へ事業予定地内の埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会した結果、予定地内には複数の遺跡が所在する旨、回答があった。千葉県教育委員会は独立行政法人都市再生機構とその取扱いについて協議した結果、記録保存の措置を講ずることとし、発掘調査を公益財団法人千葉県教育振興財団（平成17年8月以前は財団法人千葉県文化財センター、平成17年9月からは財団法人千葉県教育振興財団）に委託した。平成23年度に工事計画の変更に伴い事業範囲内に所在する柳沢牧墨木戸野馬土手の一部が調査対象に追加となった。事業地内に所在する各遺跡の調査対象規模は、飯積上台遺跡は51,041㎡、飯積原山遺跡は482,389㎡、柳沢牧墨木戸野馬土手は1,442㎡で、総面積は534,872㎡である。

本書は、飯積上台遺跡、飯積原山遺跡、柳沢牧墨木戸野馬土手の平成23・24年度に確認・本調査が行われた地点について報告するもので、飯積上台遺跡の平成17～19年度調査地点は『酒々井町飯積上台遺跡1』、飯積原山遺跡の平成6～22年度の調査地点は『酒々井町飯積原山遺跡1・2』において既に報告済みである。

遺跡・調査地点ごとの発掘調査期間・担当者などは以下のとおりで、調査対象面積・確認調査面積・本調査面積は第1表に示した。

飯積上台遺跡

平成24年度 (H2401)	調査期間 調査研究部長 調査1課長 調査担当者	平成24年4月17日～平成24年5月18日 関口達彦 白井久美子 大木正之
平成24年度 (H2402)	調査期間 調査担当者	平成24年11月1日～平成24年11月12日 山崎清美
平成24年度 (H2403)	調査期間 調査担当者	平成25年1月15日～平成25年3月25日 山崎清美
平成24年度 (H2404)	調査期間 調査担当者	平成25年2月4日～平成25年3月18日 山崎清美
平成24年度 (H2405)	調査期間 調査担当者	平成25年2月14日～平成25年3月25日 薮 淳一

飯積原山遺跡

平成22年度 (H2204)	調査期間 調査研究部長 北部調査事務所 所長	平成23年2月16日～平成23年3月28日 及川淳一 野口行雄
-------------------	------------------------------	---------------------------------------

第1表 発掘調査面積一覧

遺跡名	調査年度・ 調査次名称	規模 (㎡)	確認調査 (㎡)				本調査 (㎡)	
			上層	対象	下層	対象	上層	下層
飯積上台 遺跡	H24 H2401	3,415	352	3,415	102	3,415	0	0
	H24 H2402	294	294	294	12	294	294	0
	H24 H2403	2,339	234	2,339	96	2339	0	0
	H24 H2404	1,029	100	1,029	32	1,029	0	0
	H24 H2405	1,668	184	1,668	68	1,668	0	0
	計	8,745	1,164	8,745	310	8,745	294	0
飯積原山 遺跡	H22 H2204	10,230	1,128	10,230	316	10,230	-	-
	H23 H2301	1,208	74	908	-	-	-	300
	H23 H2302	8,682	1,006	8,682	248	8,682	2,000	0
	H23 H2303	2,345	418	2345	48	2,345	1,220	0
	H23 H2304	4,468	503	4,468	160	4,468	210	106
	H23 H2305	329	-	-	12	329	329	0
	H23 H2306	10,617	1,158	10,617	204	10,617	600	0
	H23 H2307	1,896	1,896	1,896	40	1,896	0	0
	H23 H2308	2,725	2,725	2,725	60	2,725	0	0
	H23 H2310	1,390	146	1,390	40	1,390	1,000	0
	H23 H2311	477	477	477	12	477	477	0
	H23 H2312	4,263	-	-	-	-	4,263	-
	H24 H2401	573	573	573	12	573	0	0
	H24 H2402	407	407	407	16	407	0	0
	H24 H2403	2,088	-	-	-	-	2,088	-
	H24 H2404	419	200	419	8	419	0	0
	H24 H2405	480	480	480	16	480	0	0
	H24 H2406	1,067	1,067	1,067	40	1,067	-	-
	H24 H2407	2,089	-	-	-	-	2,089	-
	H24 H2408	852	852	852	16	852	0	0
	H24 H2409	439	439	439	12	439	0	0
	H24 H2411	3,506	350	3,506	112	3,506	579	0
	計	60,550	13,899	51,481	1,372	50,902	14,855	406
柳沢牧 墨木戸境 野馬十手	H23 H2309	519	30	519	-	-	-	-
	H24 H2410	52	8	52	2	52	0	0
	計	571	38	571	2	52	0	0

調査担当者 柴田龍司

平成23年度 調査期間 平成23年4月6日～平成23年5月20日

(H2301) 調査研究部長 及川淳一

北部調査事務所 所長 野口行雄

調査担当者 岸本雅人

平成23年度 調査期間 平成23年4月6日～平成23年5月31日

(H2302) 調査担当者 雨宮龍太郎

平成23年度 調査期間 平成23年5月23日～平成23年7月19日

(H2303) 調査担当者 岸本雅人

平成23年度 調査期間 平成23年6月1日～平成23年6月30日

(H2304) 調査担当者 香取正彦

平成23年度 調査期間 平成23年6月1日～平成23年6月30日

(H2305) 調査担当者 雨宮龍太郎

平成23年度 (H2306)	調査期間 調査担当者	平成23年7月1日～平成23年9月15日 岸本雅人
平成23年度 (H2307)	調査期間 調査担当者	平成23年7月19日～平成23年7月29日 岸本雅人
平成23年度 (H2308)	調査期間 調査担当者	平成23年9月16日～平成23年10月17日 岸本雅人
平成23年度 (H2310)	調査期間 調査担当者	平成23年11月7日～平成23年11月30日 岸本雅人
平成23年度 (H2311)	調査期間 調査担当者	平成23年12月1日～平成23年12月15日 香取正彦
平成23年度 (H2312)	調査期間 調査担当者	平成23年12月16日～平成24年2月17日 池田大助
平成24年度 (H2401)	調査期間 調査研究部長 調査1課長 調査担当者	平成24年4月9日～平成24年4月16日 関口達彦 白井久美子 大木正之
平成24年度 (H2402)	調査期間 調査担当者	平成24年5月21日～平成24年5月29日 大木正之
平成24年度 (H2403)	調査期間 調査担当者	平成24年5月30日～平成24年6月28日 大木正之
平成24年度 (H2404)	調査期間 調査担当者	平成24年6月29日～平成24年7月11日 大木正之
平成24年度 (H2405)	調査期間 調査担当者	平成24年7月17日～平成24年7月30日 大木正之
平成24年度 (H2406)	調査期間 調査担当者	平成24年8月1日～平成24年8月27日 大木正之
平成24年度 (H2407)	調査期間 調査担当者	平成24年8月28日～平成24年10月15日 山崎清美
平成24年度 (H2408)	調査期間 調査担当者	平成24年10月3日～平成24年10月18日 山崎清美
平成24年度 (H2409)	調査期間 調査担当者	平成24年10月15日～平成24年10月31日 山崎清美
平成24年度 (H2411)	調査期間 調査担当者	平成24年11月15日～平成24年12月21日 山崎清美
柳沢牧墨木戸境野馬上手		
平成23年度 (H2309)	調査期間 調査担当者	平成23年10月18日～平成23年11月4日 岸本雅人

平成24年度 調査期間 平成24年10月25日～平成24年10月31日
 (H2410) 調査担当者 山崎清美

整理作業の概要は以下のとおりである。

飯積上台遺跡

平成24年度 調査研究部長 関口達彦
 整理課長 高田 博
 整理期間 平成24年4月1日～平成25年3月31日
 整理内容 水洗

平成25年度 調査研究部長 伊藤智樹
 整理課長 今泉 潔
 整理期間 平成25年12月16日～平成26年3月31日
 整理内容 注記、記録整理、分類、接合・復元、実測、拓本、写真撮影、トレース、挿図作成、図版作成、原稿執筆、編集
 整理担当者 沼澤 豊・橋本勝雄

平成26年度 整理内容 印刷、刊行
 整理期間 平成26年10月1日～平成27年3月31日
 整理担当者 木原高弘

飯積原山遺跡・柳沢牧場木戸境野馬上手

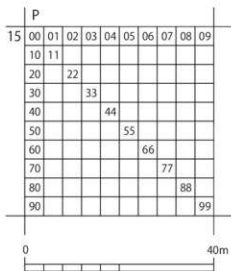
平成24年度 整理期間 平成24年4月1日～平成25年3月31日
 整理内容 水洗

平成25年度 整理期間 平成25年4月1日～平成26年3月31日
 整理内容 注記、記録整理、分類、接合、復元、実測の一部、拓本の一部
 整理担当者 木原高弘・西川博孝・橋本勝雄

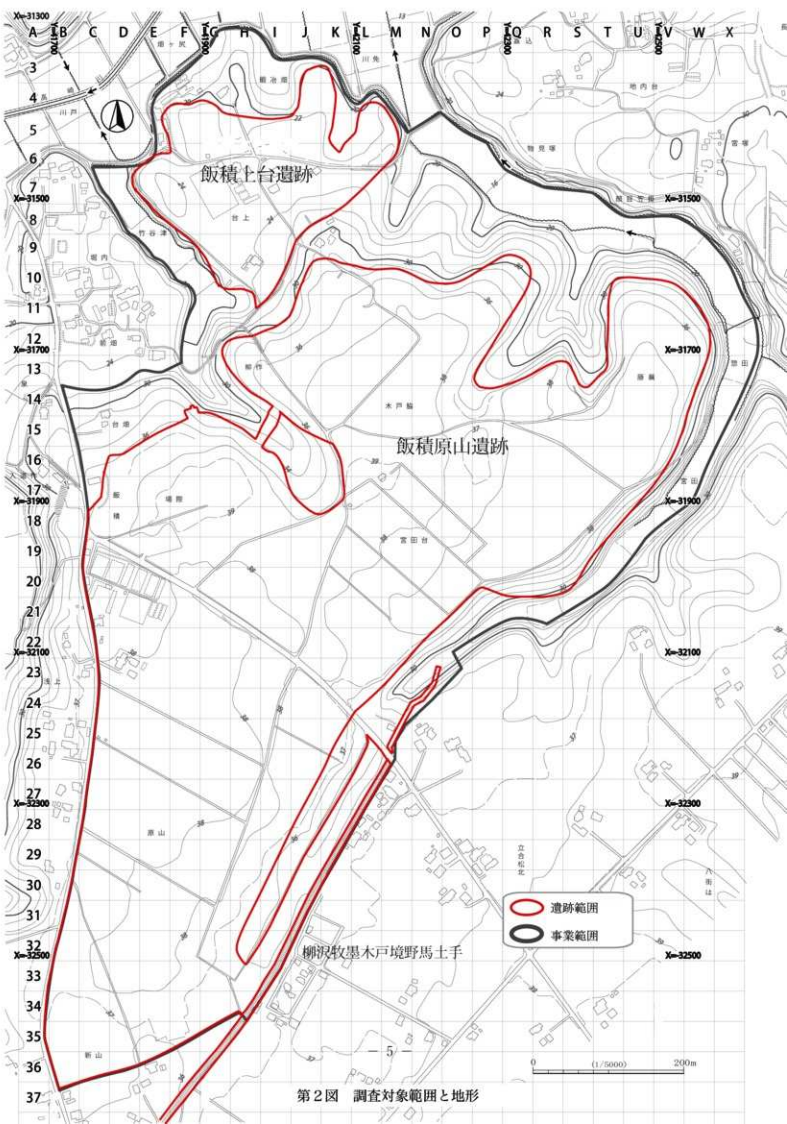
平成26年度 整理内容 実測の一部、拓本の一部、写真撮影、トレース、挿図作成、図版作成、原稿執筆、編集、印刷、刊行
 整理担当者 木原高弘・西川博孝・橋本勝雄

2 調査・整理の方法 (第1～3図)

発掘調査は、酒々井南部地区の事業地の全域を公共座標(旧座標・国家標準直角座標第IX系)に基づく方眼網で覆って実施した。方眼は40m×40mの区画を大グリッドとし、起点から南へ1・2…、東へA・B…と振っている。その内部を100分割した4m×4mが小グリッドである。大グリッド内は北西隅の小グリッドを00とし、00を起点に東へ01・02…、南へ10・20…と振っており、南東隅が99である。小グリッド名は大グリッ



第1図 グリッド名称例



第2図 調査対象範囲と地形

ドと組み合わせて15P-55のように表記した。大グリッドの交点の一つである18L-00は、旧座標でX=-31,900.0000、Y=42,100.0000である。JGD2000系変換値ではX=-31,544.7849、Y=41,806.2120、北緯35°42'53"、東経140°17'43"である¹⁾。

上層の確認調査は、対象面積の10%を原則としてトレンチを設定し、遺構及び遺物の分布状況を調べた上で、本調査範囲を決定して本調査を実施した。下層の確認調査は、対象面積の4%を原則にグリッドを設定して実施した。その結果、一定の石器の分布状況が認められたところについては、本調査範囲の確認後に本調査を実施した。野馬土手の調査は、地形測量を行い、横断トレンチを設定して掘り下げ構築状況を確認した。いずれも確認調査及び本調査のための表土除去等については、重機を使用した。遺構・遺物集中地点の調査は、平面図・土層断面図、遺物出土分布図などの実測図の作成、写真撮影、遺物の取り上げを行った。

整理作業は、まず遺物の水洗、注記、記録類の整理を行った。注記は、遺跡コード、遺構番号、遺物台帳に記載された遺物番号を順に書き込んだ。遺構外出土遺物については、上記の遺構番号がグリッド名に替わる。注記後、遺物を遺構ごとに種別分類し、接合作業等を実施した。その後、遺物出土状況図・遺物台帳に記載された位置と高さをもとに、接合関係等の遺物出土状況図を平面と断面で作成した。土器・土製品・石器の実測は写真及び手計測による。遺物の拓本、遺構及び遺物実測図等のトレース、挿図作成、写真撮影、写真図版作成、原稿執筆、編集、校正を行い、本報告書の刊行となった。

今回報告するのは、飯積上台遺跡5地点、飯積原山遺跡9地点、柳沢牧墨木戸境野馬土手2地点である。簡明に報告するため、調査区の名称に飯積上台遺跡は(5)～(9)区、飯積原山遺跡は(51)～(77)区の地区番号を既報告に連続して付与した。柳沢牧墨木戸境野馬土手は北側から(1)・(2)区とした。この番号は本調査時の調査区を基本に、それ以外の確認調査のみで終了した調査区についても付与した。調査年度・調査区と地区番号の関係は第2～4表に記した。また、地区番号を振った遺構分布図を第3図に示した。

調査段階での遺構番号は、遺構種別を表すSI等の略号と3桁の数字を組み合わせてSI001のように呼称しているが、調査区ごとに001から番号が付けられているため、同一の遺構番号が複数存在する。そこで既報告と同様に本報告でも、遺構番号を地区割り番号+略号+数字で表記することとした。一例を示すと、(61)SI001であり、これにより略号+3桁の数字が同じであっても一つだけのものとして、他と区別できる。なお下3桁または2桁の数字については基本的に調査時のものを踏襲しているが、これは遺物に注記された遺構番号と本報告の遺構番号の対比が容易であることを考慮したためである。

本書で報告する遺構の略号を記すと、堅穴住居跡はSI、掘立柱建物跡はSB、土坑・小堅穴・炉穴・陥穴がSK、ピット・柱穴と思われる小規模な土坑はSH、溝・野馬堀SD、野馬土手・土坑列はSAとしている。整理時に遺構種別及び番号を変更したのものについては、添付CD所収の遺構一覧表にその旨を記載した。また、整理時に重複等により複数の遺構に分かれることが判明したものについては、遺構番号の後ろにA、B、Cなどのアルファベットを付すことで区別することとし、(62)SK014B、(71)SK003Aなどと呼称することとした(第6・8表)。なお、遺物の注記に記載された遺構番号は、すべて発掘調査時に付された番号のままである。

注1 変換値はWeb版TKY2JGD Ver.1.3.79 パラメータ Ver.2.1.1による。

第2表 飯積上台遺跡地区割り一覧

地区	調査年度・調査区	地区	調査年度・調査区	地区	調査年度・調査区
1	H17	4	H19	7	H2403
2	H18	5	H2401	8	H2404
3	H18	6	H2402	9	H2405

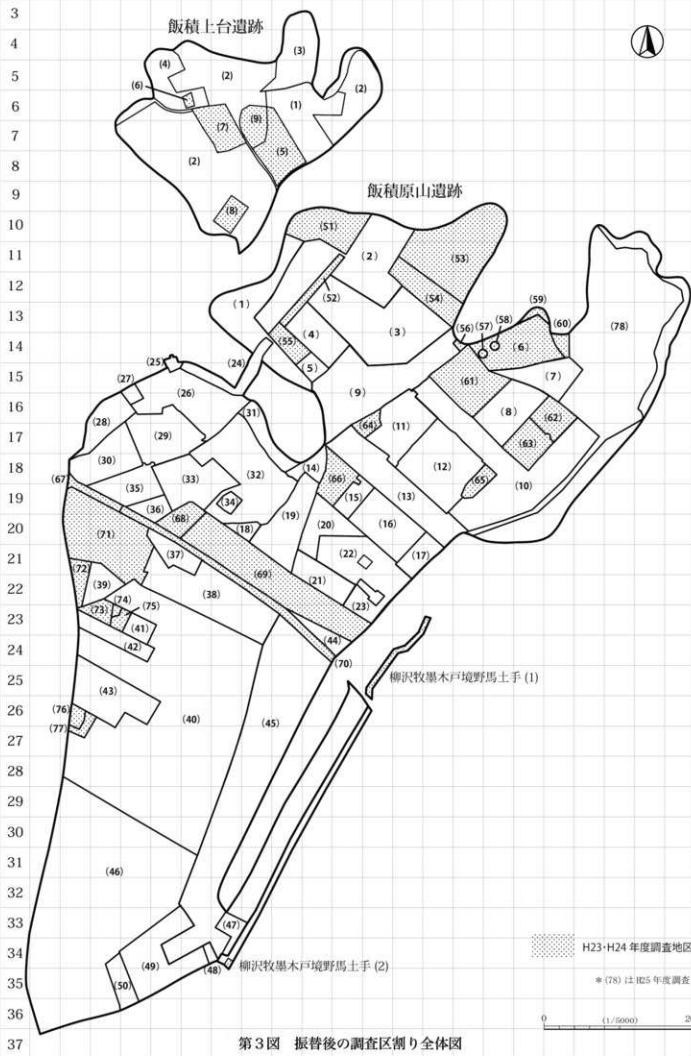
第3表 飯積原山遺跡地区割り一覧

地区	調査年度・調査区	地区	調査年度・調査区	地区	調査年度・調査区
1	H1904	27	H2006・H2101	53	H2204・H2301
2	H10確認調査	28	H2104A	54	H2304
3	H9確認調査G区	29	H13G区 (H8確認調査)	55	H2304
4	H11A地点	30	H2103	56	H2401
5	H10確認調査	31	H2001	57	H2401
6	H1906	32	H8 確認調査	58	H2401
7	H12仮2区 (H10確認調査)	33	H11B地点	59	H2401
8	H2002	34	H12仮1 b 区	60	H2404
9	H12仮1d区 (H9確認調査A・B・F・G区)	35	H2104B	61	H2312 (H9確認調査J区)
10	H12仮3区 (H9確認調査E・M・N区)	36	H10確認調査	62	H2407 (H9確認調査K区)
11	H13A区 (H9確認調査C・D区)	37	H11C地点 (H10確認調査)	63	H2403 (H9確認調査K区)
12	H1905 (H9確認調査C・D区)	38	H8確認調査	64	H2311 (H9確認調査C区)
13	H12仮4区 (H7確認調査)	39	H1902	65	H2305
14	H12仮1 c 区 (H8確認調査)	40	H7確認調査	66	H2303
15	H2004	41	H2105	67	H2307
16	H2003	42	H13D区確認調査	68	H2310 (H8確認調査)
17	H2005	43	H2202	69	H2306
18	H12仮1a区 (H8確認調査)	44	H8確認調査	70	H2308
19	H13C区	45	H10確認調査	71	H2302
20	H13B区 (H8確認調査)	46	H6確認調査	72	H2406
21	H13H区	47	H1901	73	H2408
22	H13B2区 (H8確認調査)	48	H1901	74	H2406
23	H13B3区 (H8確認調査)	49	H13F区確認調査	75	H2405
24	H2203	50	H10確認調査	76	H2409
25	H2201	51	H2411	77	H2402
26	H2101	52	H2301	78	H2501 (H9確認調査L区)

第4表 柳沢牧黒木戸境野馬土手地区割り一覧

地区	調査年度・調査区	地区	調査年度・調査区
1	H2309	2	H2410

A B C D E F G H I J K L M N O P Q R S T U V W



第3図 振替後の調査区割り全体図

第2節 遺跡の位置と環境（第4図、図版1）

飯積上台遺跡・飯積原山遺跡・柳沢牧墨木戸境野馬土手は千葉県北部、下総台地の中央に位置する印旛沼の南東側に立地する。行政域では印旛郡酒々井町の南東端に所在し、北東は富里市、南東は八街市に近接する。

飯積上台遺跡、飯積原山遺跡、柳沢牧墨木戸境野馬土手は、北側を流れる高崎川によって開析された台地上に立地する。高崎川は約6km 南西側の富里市・八街市付近を水源とし、西流した後、約6.5km 西方の佐倉市寺崎付近で西印旛沼の南西部に注ぐ鹿島川に合流する。遺跡周辺の高崎川低地の標高は約12mである。飯積上台遺跡は低地に面する北端の標高15m～24mのテラス状の河岸段丘上に立地する。飯積原山遺跡は、その南側に隣接する標高36m～38mの台地上に立地する。遺跡の北半は高崎川から入り込んだ谷に挟まれ、南端は南部川支谷の谷頭部に接する。柳沢牧墨木戸境野馬土手は、飯積原山遺跡の東側に接し、北東から南西方向にかけて延びる野馬土手である。北端は飯積原山遺跡の北東側の谷、南端は南部川の支谷に接し、全長は約850mである。高崎川の南岸は同様な比較の広い台地が南部川側を付け根に東西に連なり、高崎川を挟んで本遺跡の対岸台地は、北側に広大な印旛沼の低地が接している。

周辺遺跡は、第5表、第4図に主なものを示した。旧石器時代¹⁾、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代²⁾、縄文時代中期³⁾については刊行済みの報告書で概説しており、それらを参照していただきたい。

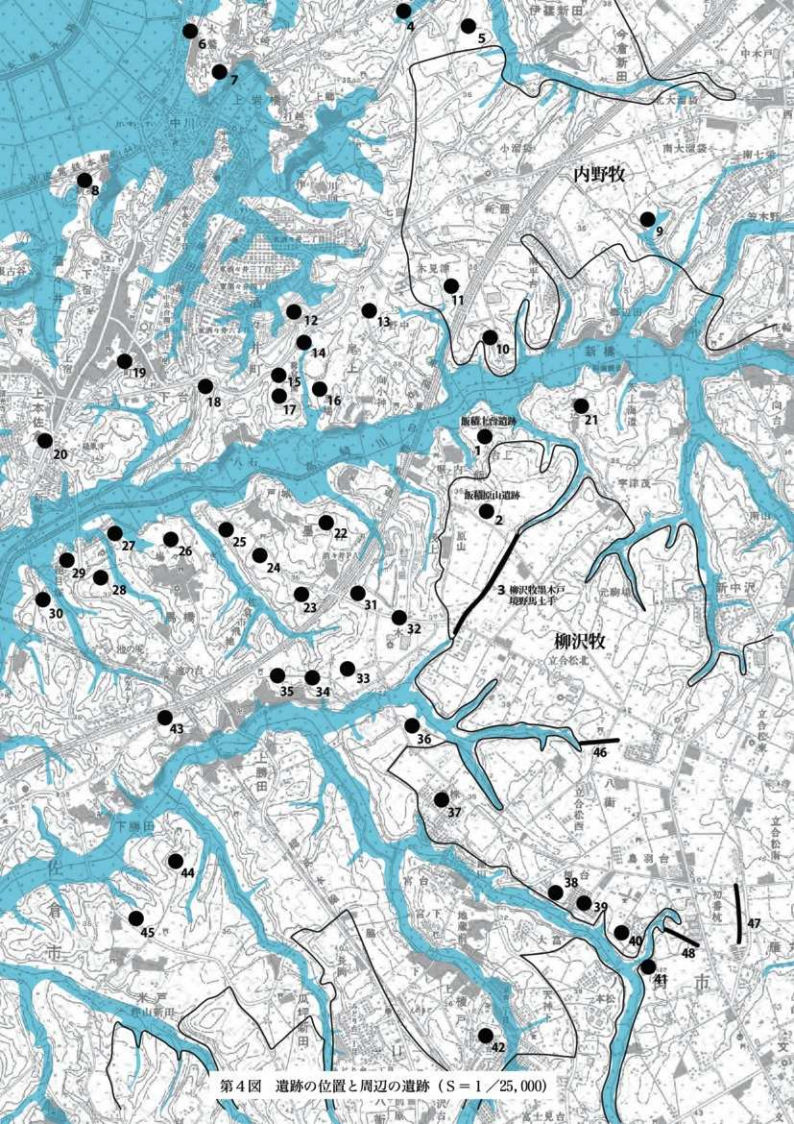
注1（公財）千葉県教育振興財団 2014『酒々井町飯積原山遺跡1－酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書2－』

2（公財）千葉県教育振興財団 2013『酒々井町飯積上台遺跡1－酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書1－』

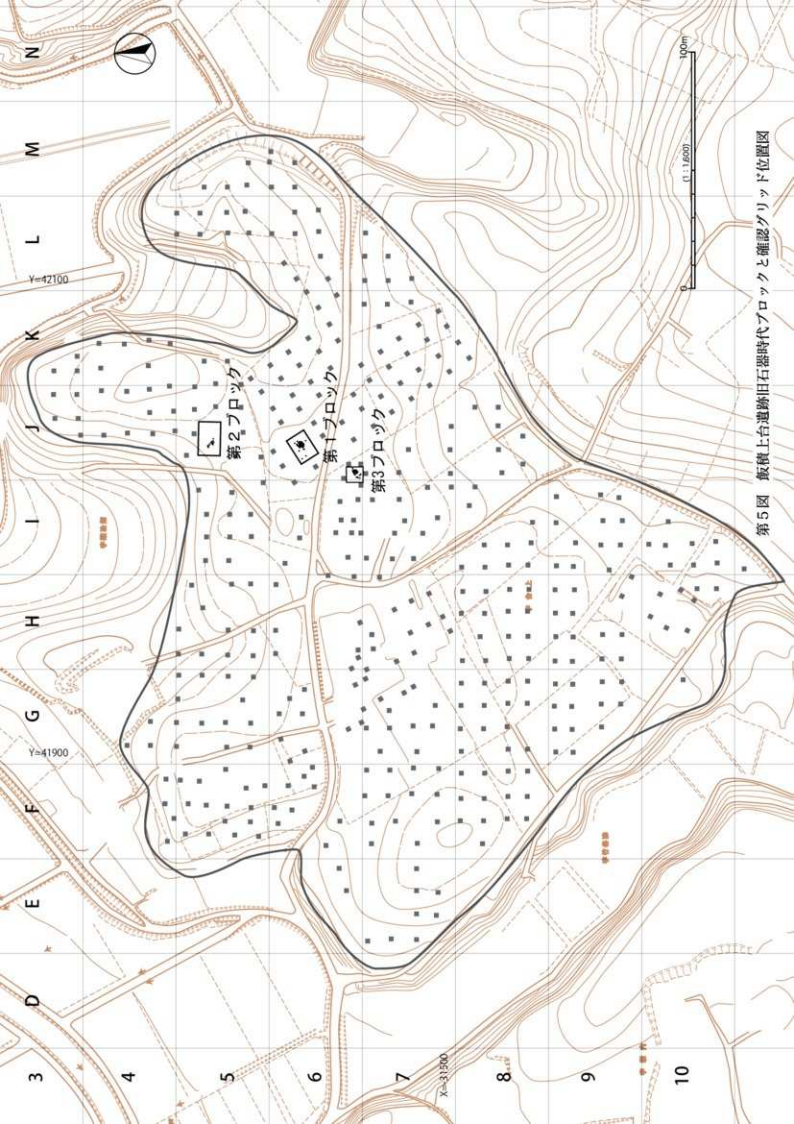
3（公財）千葉県教育振興財団 2014『酒々井町飯積原山遺跡2－酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書3－』

第5表 周辺遺跡一覧

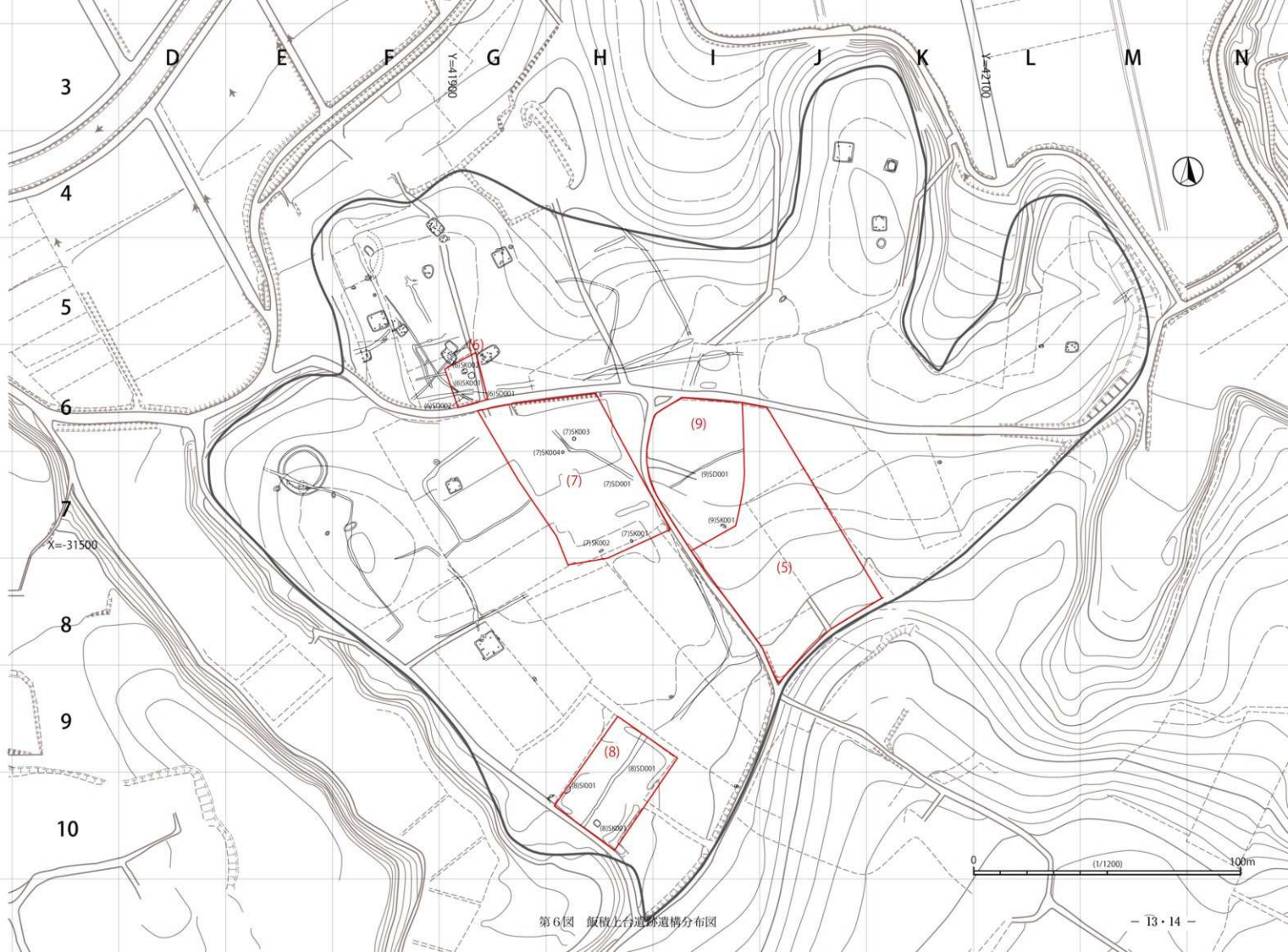
No.	遺跡名	種別	主な時代(時期)
1	飯積上台遺跡	包蔵地・集落跡 古墳	旧石器、縄文(茅山、関山、栗島台、黒浜、加曾利E、称名寺)、古墳、奈良・平安
2	飯積原山遺跡	包蔵地・集落跡	旧石器、縄文(阿玉台1b~4、加曾利E1~4、称名寺1)、奈良・平安、中・近世
3	柳沢牧墨木戸境野馬土手	牧跡	近世
4	伊藤越徳遺跡	包蔵地	縄文(加曾利E3)、古墳、奈良・平安
5	伊藤白幡遺跡	包蔵地	阿玉台直前~3、加曾利E1~3
6	上岩橋大鷲神社古墳	古墳	古墳
7	上岩橋岩崎遺跡	古墳・集落跡	縄文(阿玉台)、弥生、古墳、奈良・平安
8	カンカンムロ横穴群	横穴	古墳
9	南大部袋遺跡	包蔵地	旧石器、縄文
10	尾上木見津遺跡・駒訪遺跡	包蔵地・集落跡	旧石器、縄文、古墳、奈良・平安、中・近世
11	尾上平台南遺跡	包蔵地・集落跡	縄文(黒浜、浮島2)、平安
12	尾上藤木遺跡	包蔵地・集落跡	縄文(加曾利E、称名寺)、古墳、奈良
13	尾上戸遺跡	包蔵地・集落跡	縄文(茅山下層、関山、黒浜、栗島台、加曾利E3)、古墳、奈良・平安
14	尾上柳作遺跡	集落跡	縄文(茅山、興津、加曾利B2、五頭ヶ台、加曾利E4)、古墳、平安、中・近世
15	墨総合公園内遺跡	包蔵地	縄文(稲荷台、田戸下層、茅山上層、花積下層、諸磯b、浮島1・2、興津、五頭ヶ台、阿玉台2・3、加曾利E3、称名寺、加曾利B1~3、安行1~3、荒海)
16	尾上広畑遺跡	包蔵地	縄文(加曾利E、称名寺)、古墳、平安
17	墨小盛田古墳	古墳	古墳
18	下台遺跡	包蔵地	縄文(稲荷台、花輪台、三戸、子母口、鶴ヶ島台、黒浜、浮島、前期末、加曾利E2・3)、古墳、奈良・平安
19	狐塚古墳	古墳	古墳
20	木佐倉外宿遺跡	包蔵地	縄文、古墳、平安
21	新橋遺跡	集落跡	旧石器、縄文(阿玉台1a~4、加曾利E1・3)、古墳
22	墨古沢遺跡	包蔵地・集落跡	縄文(阿玉台1b~4、加曾利E1~3・4、加曾利B1・2、堀之内1、安行)
23	墨古沢南Ⅱ遺跡	包蔵地・集落跡	縄文(加曾利E、称名寺)、平安
24	墨広畑遺跡	包蔵地・集落跡	縄文(阿玉台1、加曾利E1~3、加曾利B1・2、堀之内1、安行)
25	墨馬場遺跡	包蔵地	縄文(加曾利E1)、弥生、古墳、平安
26	墨大広台遺跡	包蔵地	縄文(加曾利E)、弥生、古墳、平安
27	馬橋鷺尾Ⅱ遺跡	包蔵地・集落跡	縄文(茅山、鶴ヶ島台)、弥生、古墳、平安
28	馬橋鷺尾Ⅰ遺跡	包蔵地・集落跡	弥生、古墳、平安
29	馬橋鷺田遺跡	包蔵地	縄文(田戸下層、浮島1、阿玉台直前、加曾利E)
30	八木亀井台遺跡	包蔵地	縄文(子母口、茅山、関山、阿玉台、加曾利E)、弥生
31	墨古沢南Ⅰ遺跡	包蔵地・集落跡	縄文(浮島2、阿玉台1b、加曾利E2~4、称名寺1、堀之内2、加曾利B1~3、安行1~3a、前浦、千瀬)
32	墨木戸遺跡	集落跡	縄文(井草、夏島、三戸、田戸下層、鶴ヶ島台、関山、黒浜、諸磯、浮島、前期末、五頭ヶ台、加曾利E1~4、阿玉台2、加曾利B、安行)、奈良・平安
33	墨新山遺跡	包蔵地・集落跡	旧石器、縄文(夏島、稲荷台、花輪台、黒浜、浮島2・3、興津、十三善砲、前期末~中期初頭、五頭ヶ台、阿玉台1b、加曾利E1・3、加曾利B2、称名寺、安行1・3a)
34	上勝田大谷台遺跡	包蔵地	縄文(茅山、関山、浮島)、古墳、平安
35	上勝田鎌田遺跡	包蔵地	縄文(阿玉台、加曾利E)、平安
36	上勝田龍向遺跡	包蔵地	縄文(中期後葉)
37	藤株Ⅳ遺跡	包蔵地	縄文
38	鉄砲作遺跡	包蔵地・集落跡	縄文(加曾利E2・3)
39	一之綱Ⅰ遺跡	包蔵地・集落跡	旧石器、縄文(阿玉台、加曾利E1~3)
40	一之綱Ⅱ遺跡	集落跡	縄文(中期初)、奈良・平安
41	一之綱Ⅲ遺跡	包蔵地・集落跡	旧石器、縄文、奈良・平安
42	榎台第Ⅰ遺跡	包蔵地・集落跡	縄文(加曾利E2・3)
43	上勝田市ノ坪遺跡	包蔵地	縄文(茅山、加曾利E)
44	下勝田天神台遺跡	包蔵地	縄文(加曾利E)、弥生、古墳、平安
45	下勝田殿台東遺跡	包蔵地・集落跡	縄文(阿玉台1b~4、加曾利E1~3)
46	野馬土手	牧跡	近世
47	野馬土手	牧跡	近世
48	野馬土手	牧跡	近世



第4図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1/25,000)



第5図 飯積上台遺跡旧石器時代ブロックと確認グリッド位置図



第 6 圖 飯碗上台遺跡遺構分布圖

第2章 飯積上台遺跡

第1節 概要 (第5・6図)

既報告の平成17年から19年調査の(1)～(4)区では、高崎川に面した台地北西部で、旧石器時代の石器集中地点2か所、縄文時代の竪穴住居跡が8軒検出され、5軒が前期黒浜式、3軒が中期加曾利E式期のものであった。ほかに黒浜期の住居跡が1軒のみ、遠く離れた台地南東端部に位置していたが、台地縁辺部ということでは共通した立地を示している。古墳時代の竪穴住居跡9軒、奈良・平安時代の竪穴住居跡2軒は、台地の南西辺と北西辺の縁辺部を中心に分布し、5世紀後半から6世紀前半頃の円墳2基は、台地北西端部に位置していた。北側に位置する1号墳の主体部から蛇行剣が一振出土した。

今回報告する調査区は、平成24年4月から25年3月にかけて、H2401～H2405までの5次に分けて断続的に実施された。地点は台地中央部にあり互いに接している。

旧石器時代は、H2401調査区の北側から石器集中地点1か所が検出された。上層については、既報告の(1)～(4)区から通算して、(5)～(9)区として報告した。各地区から検出された遺構は第6表のとおりである。遺構は全般に希薄であるが、今回の調査区のうち(8)区のみ台地の南西端部に離れて位置し、狭い範囲であったが縄文時代前期の竪穴住居跡1軒が検出されている。本遺跡における居住遺構の占地傾向に沿うものであるが、台地北西部の縄文時代遺構集中地点からは100mほど離れている。縄文時代以外の遺構としては、溝状遺構が3条あるのみで、用途、時期ともに不明だが近世以降に掘られた可能性が高いと考えている。

第6表 飯積上台遺跡遺構種別一覧

時代	遺構名	地区	遺構番号
縄文時代	竪穴住居跡 土坑等	(8)	S1001
		(6)	SK001, SK002
		(7)	SK003, SK004
		(9)	SK001
中・近世	土坑	(7)	SK001, SK002
		(8)	SK001
	溝状遺構	(6)	SD001, SD002
		(7)	SD001
		(8)	SD001
		(9)	SD001

第2節 旧石器時代 (第5図)

(5) 区の北側から遺物集中地点(ブロック)が1か所検出され、第3ブロックとした。既に報告された第2ブロックは本ブロックの北東約40mに位置している。

1 第3ブロック (第7～13図、図版2・4～6)

分 布 北西に向かって突出する台地の緩斜面に立地する。標高は約23m、比較的小規模で遺物も少量であるが密集度が非常に高い。

平面分布は長径約6.5m、短径約3.2mの楕円形を呈し、特に北側の径約2mの範囲に密集している。この範囲には石核のほか同一石材の剥片類が多数分布しており、中には接合資料も11例中9例ある。剥片生産から二次加工に至る一連の製作工程を色濃くとどめている。これに対して分布が散漫な南側には、完成品が比較的多い。

出土層位 立川ロームVI層下部からVII層上部にかけて出土した。特に両者の境界付近に遺物が密集する。遺物出土の高低差は最大約0.8m、最も密集度高い層準で約0.2mとなっている。

器 種 合計109点の石器が出土した。内訳は、ナイフ形石器4点、削器4点、彫刻刀形石器1点、二次加工ある剥片1点、使用痕ある剥片1点、石刃5点、剥片40点、砕片46点、石核4点のほかに、敲石・磨石類・礫器各1点となっている(第7表)。

第9図1～4はナイフ形石器である。いずれも完形品である。1が側縁加工、2が二側縁加工、3が部分加工(先端部右側縁)、4aが基部二側縁加工となっている。素材は1・2が石刃、3・4aが剥片である。1は単独母岩の可能性が高い。4b、6～8は削器であり、4bと7は接合資料である。4bは4aとの接合資料(「接合資料7」)であり石核とみなすことも可能であるが、右側縁の二次加工の存在を重視して削器とした。複合石器としたほうが良いのかも知れない。6は剥片の左側縁と下縁に二次加工(錯向剥離)が施されている。右側縁には長軸方向の細長い剥離面が3条みられるが、遺存状況が部分的であるため詳細は不明であるが、「下総型石刃再生技法」により小石刃が生産された可能性がある。7(「接合資料2」)は先端が主要剥離面側に内湾した剥片を素材にしており、右側縁の上部付近に急角度な二次加工が部分的に施されている。8は大型石刃を素材としており左側縁の一部に連続的な二次加工が施されている。5は寸詰まりの石刃を素材とした彫刻刀形石器である。尖鋭な先端部左肩に彫刻刀面、左下の側縁には二次加工がみとめられる。彫刻刀面は長さ0.4cm、幅0.2cmであり主要剥離面とのなす角度は約90°である。9は石刃を素材とした二次加工ある剥片である。下端部と右側縁中央部に部分加工が施されている。単独母岩の可能性が高い。

第10図10～13は石刃である。10は技術形態学的に「削片」への言い換えも可能であり、6の右側縁にみられる細長い剥離面との関連性が指摘される。11は稜付石刃の接合資料(「接合資料9」)である。被熱により破砕されている。12は完形の石刃であり打面調整が著しい。13も完形の石刃である。単独母岩の可能性が高い。17は使用痕ある剥片である。横長剥片の二側縁に部分的な刃こぼれが認められる。14～16、18・19は剥片である。このうち15は稜付である。

第11図20・21は石核である。明確な石刃石核はなく、石核は打面転移が頻繁ないわゆるサイコロ状石核である。不定形ないしは横長の剥片を生産した痕跡をとどめる。石刃石核の小型化に伴い石刃生産から横長剥片生産にシフトした可能性が高い。22は磨石類である。断片資料のため詳細は不明である。23は敲石

である。周縁部には部分的に被熱によるクレーター状の破砕痕跡がみられる。

第12図24は礫器 (a) と調整剥片 (b) の接合資料 (「接合資料 8」) である。上端部は横方向の一枚の剥離面で構成され、表裏とも上端部には小剥離面が連続している。石材は比較的粒子の粗い安山岩である。

13図25と26はともに剥片と石核の接合資料である。

25 (「接合資料 5」) は剥片 3 点 (a ~ c) と扁平な円盤状石核 1 点 (d) からなる資料であり、求心的な打撃により横長剥片を連続的に生産している。石核の一部には第一次剥離面が残されており、剥片を素材にした石核であることが理解される。26 (「接合資料 1」) は第11図20・21と同様のサイコロ状石核である。剥片は剥離の際に偶発的な縦割れが生じたため左右に分割されている。

石材 メノウ105点のほかに、安山岩・ホルンフェルス各2点で構成される。メノウはもっぱら剥片石器、メノウ以外は礫石器の製作に供されている。

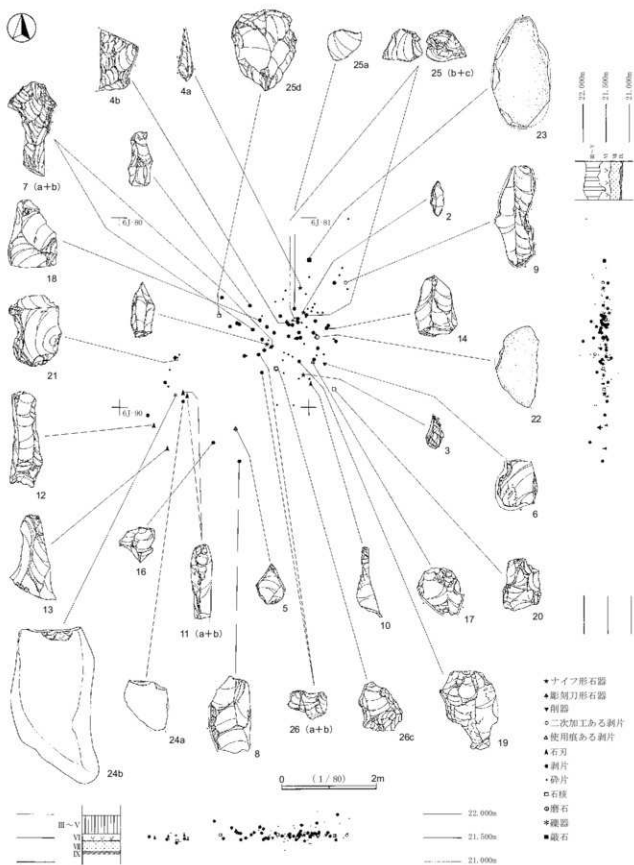
母岩別資料と接合資料 石材の大部分を占めるメノウに関しては、同一母岩であっても部位ごとの変異が著しく母岩別資料の分類は困難を極めた。ここでは母岩別資料の数量を10種程度としておき、必ずしも信頼に足るものではない。ただし、他の遺跡でもよくみられるように、単独母岩が剥片類に比べ利器に多い点は指摘できそうである。ちなみに、単独母岩が確実視されるものとしては、ナイフ形石器 (第9図1)、彫刻刀形石器 (第9図5)、削器 (第9図6~8)、二次加工ある剥片 (第9図9)、石刃 (第10図10・12・13)、石核 (第11図20) がある。

接合資料は11例確認した。このうち接合資料1・2・5・7~9を図化した。接合資料3・4、10は同一母岩である。

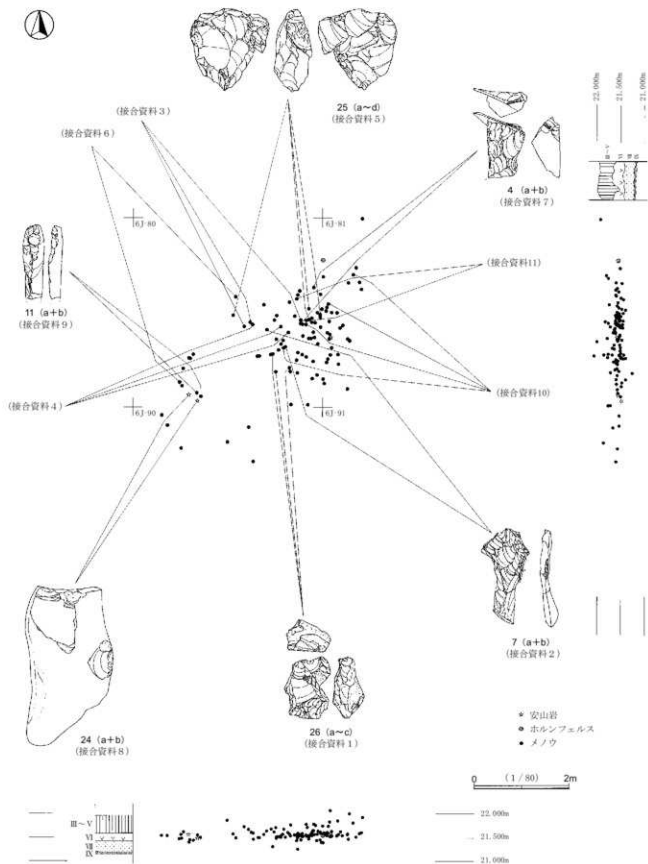
内容的には剥片生産にかかわる資料と破損した石器の接合例に大別され、前者は接合資料1 (剥片3・石核1)、接合資料3 (剥片2・砕片1)、接合資料4 (剥片3)、接合資料5 (剥片3・石核1)、接合資料6 (剥片2)、接合資料7 (ナイフ形石器・削器各1)、接合資料10 (剥片1・砕片3)、及び接合資料11 (剥片・砕片各1)、後者は接合資料2 (削器・剥片各1)、接合資料8 (礫器・剥片各1)、及び接合資料9 (石刃2) が、それぞれ該当する。接合資料8のみ安山岩で、そのほかはメノウである。メノウの接合資料3・4、10はおそらく同一母岩であろう。

第7表 第3ブロック石器組成表

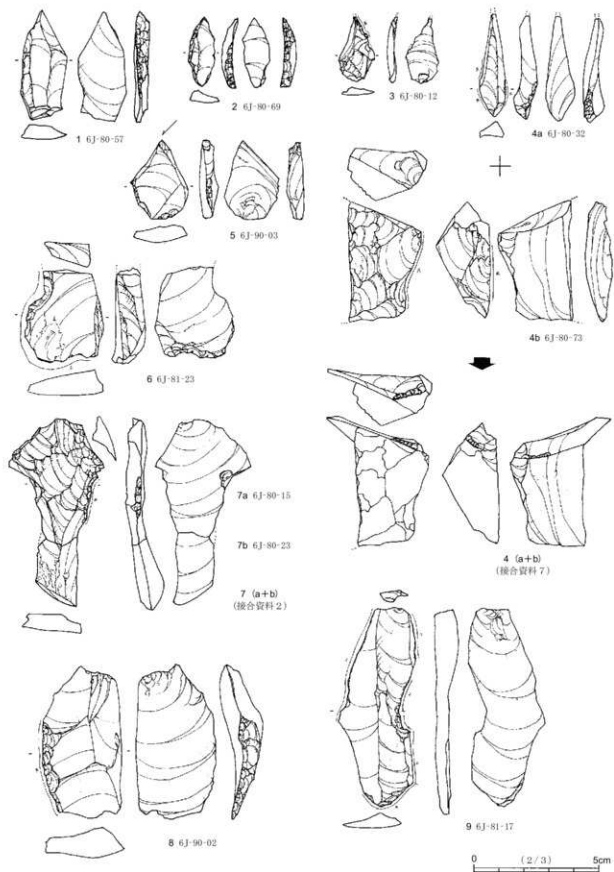
器種・石材	ナイフ形石器	削器	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	石刃	剥片	砕片	石核	礫石	磨石類	礫器	計
メノウ	4	4	1	1	1	5	39	46	4				105
安山岩											1	1	2
ホルンフェルス							1			1			2
合計	4	4	1	1	1	5	40	46	4	1	1	1	109



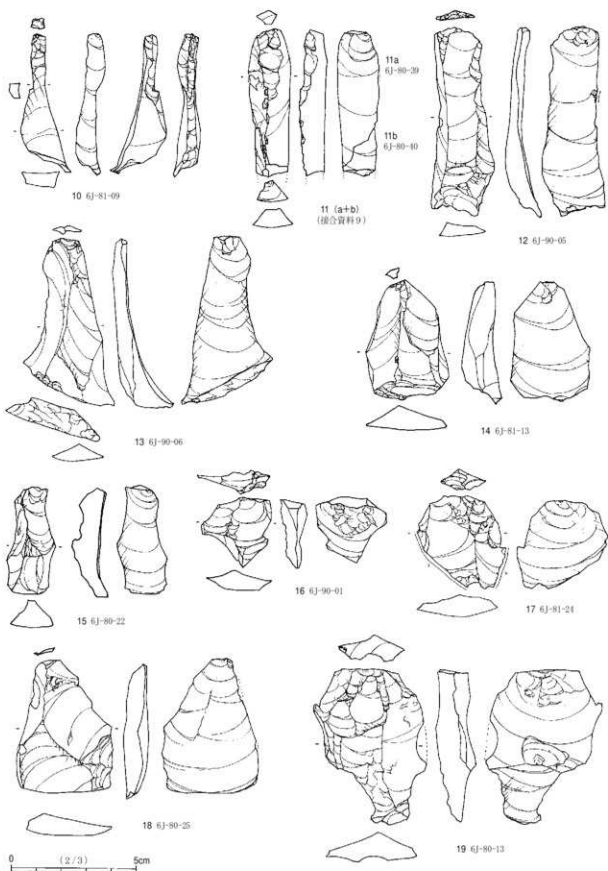
第7図 第3ブロック出土遺物分布図(1)



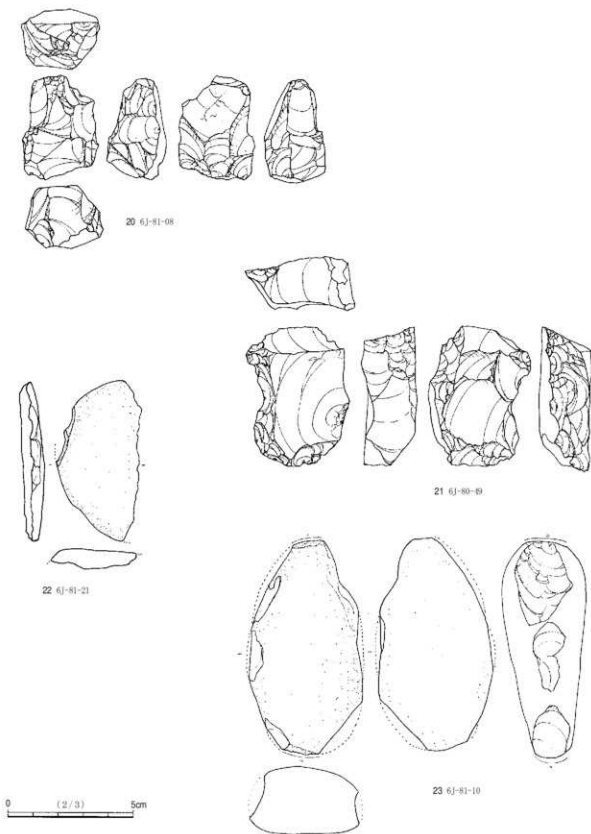
第8図 第3ブロック出土遺物分布図(2)



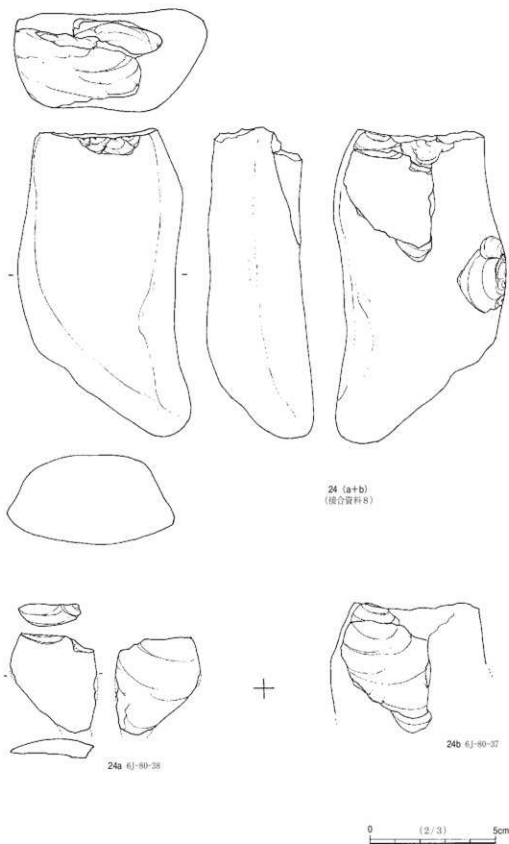
第9図 第3ブロック出土遺物実測図(1)



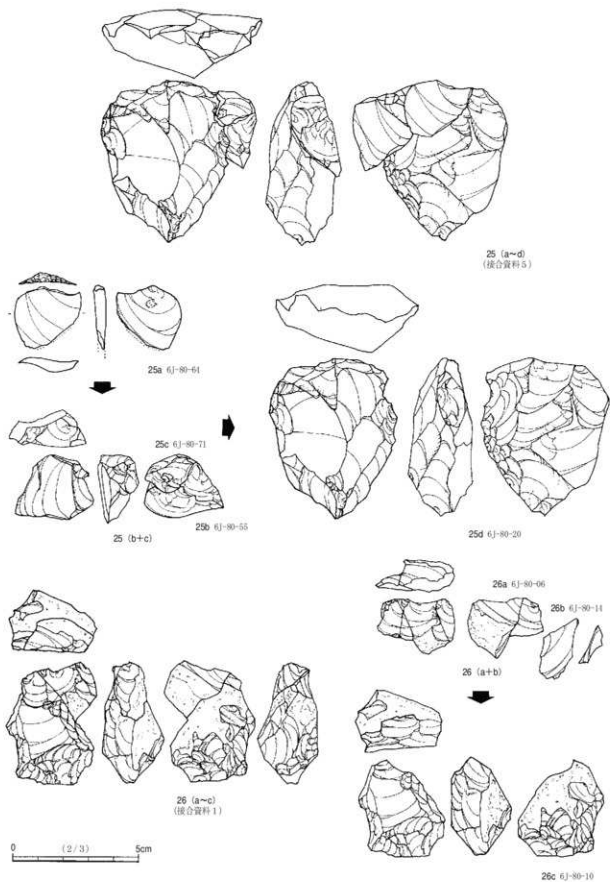
第10図 第3ブロック出土遺物実測図(2)



第11図 第3ブロック出土遺物実測図(3)



第12図 第3ブロック出土遺物実測図(4)



第13図 第3ブロック出土遺物実測図(5)

第3節 縄文時代

1 竪穴住居跡

今回の調査区で検出された竪穴住居跡は南西部(8)区の1軒のみである。

(8) S1001 (第14図、図版2)

調査区の南西部10H-12グリッドに位置し南東部半分を検出したが、既報告分の北西部の調査区では縄文時代の住居跡は確認されていない。残存する南東部分の規模は3.0m×(1.0m)で確認面からの深さは15cm～26cmである。床面はほぼ平坦で、柱穴及びび炬は検出されなかった。

遺物は、覆土中から縄文土器片が19点出土した。

土器 (第14図、図版7)

6点を図化した。1は大きく外反する深鉢の口縁部で丸頭状の口唇部に半截竹管による刺突列を施す。内外面に横方向のナデを施し、胎土に繊維を含む。2～4は内外面にナデを施す無文の胴部破片で、1と似た胎土である。5は胎土に繊維を含む口縁部破片で、尖頭状を呈し、やや外反する。6は半截竹管による有節沈線を横位に施す口縁部破片である。いずれも縄文時代早期子母口式に比定されよう。

以上の出土土器から本住居跡の時期は早期子母口式期と考えられる。

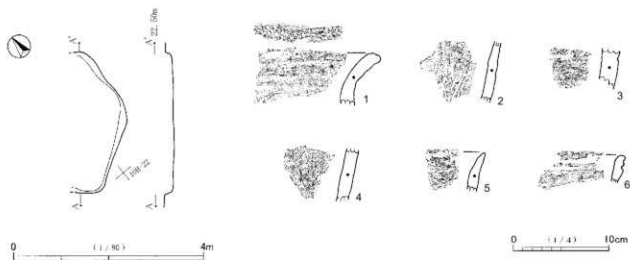
2 土坑等

(6) SK001 (第15図、図版2)

(6)区は調査範囲の中では最も北に位置し、(1)区において縄文時代の住居跡がまとまって検出された地点に接している。(6)SK001は不整形形ないし胴張・胴丸の強い台形といった平面プランをもつ。東西主軸長2.4m、南北2.3m、深さは20cm～30cm、壁は垂直に近く立ち上がる。床面は平坦で、柱穴その他の掘り込みはない。覆土は自然堆積である。遺物は、覆土中から縄文土器が2点出土した。

土器 (第15図、図版7)

1は無文の口縁部破片で胎土に繊維を含み、内外面に横方向のナデを施す。2は胴部破片でRL斜縄文を縦位に施し、胎土に繊維は含まない。1は縄文時代前期、2は中期初頭に比定されよう。



第14図 (8)S1001

(6) SK002 (第15図、図版2)

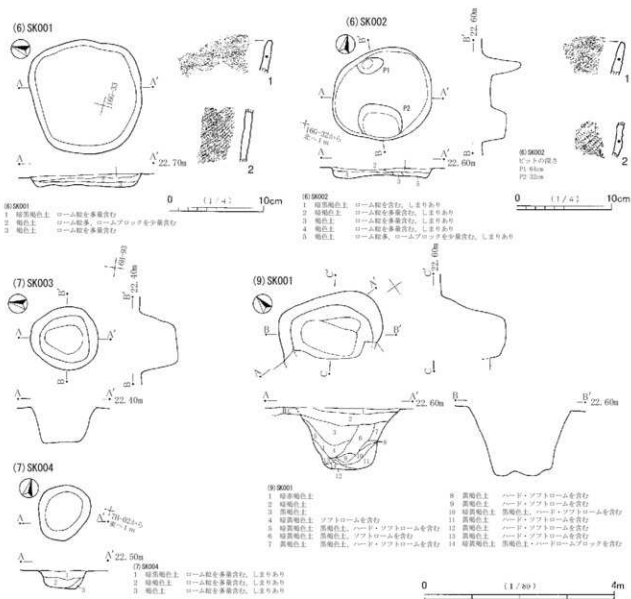
(6) SK001の西側至近の位置にあり、壁間の距離は80cmほどしかない。不整な楕円形プランをもつ。長軸を南西-北東方向にとり、長軸長2.3m、短軸は1.9mである。深さは最大20cmほどと浅い。壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は自然堆積の状況を示す。床面の南端に東西0.9m、南北0.7m、深さ32cmの隅丸方形のピットが、北端には0.5m×0.3m、深さ64cmの長円形のピットが認められた。後者は柱穴の可能性も考えられるが、どちらも性格不明としておくのが穏当であろう。遺物は、縄文土器の破片2点が出土した。

土器 (第15図、図版7)

1は胎土に繊維を含む口縁部破片で、LR縄文を横位に施す。2もLR縄文を施す胴部破片である。

(7) SK003 (第15図、図版2)

(7) 区北半部で、溝 (7) SD001を挟んで東西に各1基の土坑が検出された。(7) SK003は東側にあった



第15図 縄文時代土坑等

土坑である。東西に長い、押しつぶされたような卵形のプランをもつ。東西1.4m、南北1.3m、深さは最大で75cmとかなり深い土坑である。壁の掘り込みはしっかりしており、底面は平坦である。覆土の状態は不明で、出土遺物はない。

(7) SK004 (第15図、図版2)

南北に長い長円形プランをもち、軸長1.2m×1.0m、深さは30cm～35cm、底面は平坦で、壁の立ち上がりは垂直に近い。覆土は自然堆積である。出土遺物は皆無であった。

(9) SK001 (第15図、図版3)

非常に深く、陥穴と考えられる土坑である。下層確認調査に伴って検出されたため、南側の壁の一部が損壊されている。西北-南東方向に長い長円形プランをもち、長軸2.2m、最大幅1.5m、深さは1.5mである。底面には凹凸がある。壁面も凸凹して、平滑に整えられていない。覆土の堆積は複雑で、ロームブロック土を多く含むため、掘り上げた土がそのまま埋め戻されているのかもしれない。出土遺物は皆無であった。

3 遺構外出土遺物

既報告の(1)～(4)区では、土器は早期前半撫系文系土器から後期前半堀之内式土器までの土器群が出土したが、24年度の調査区では早期沈線文系土器から後期加曾利B式土器までが出土した。

(1) 土器 (第16図、図版7・8)

第1群1類 早期沈線文系土器 (1～4)

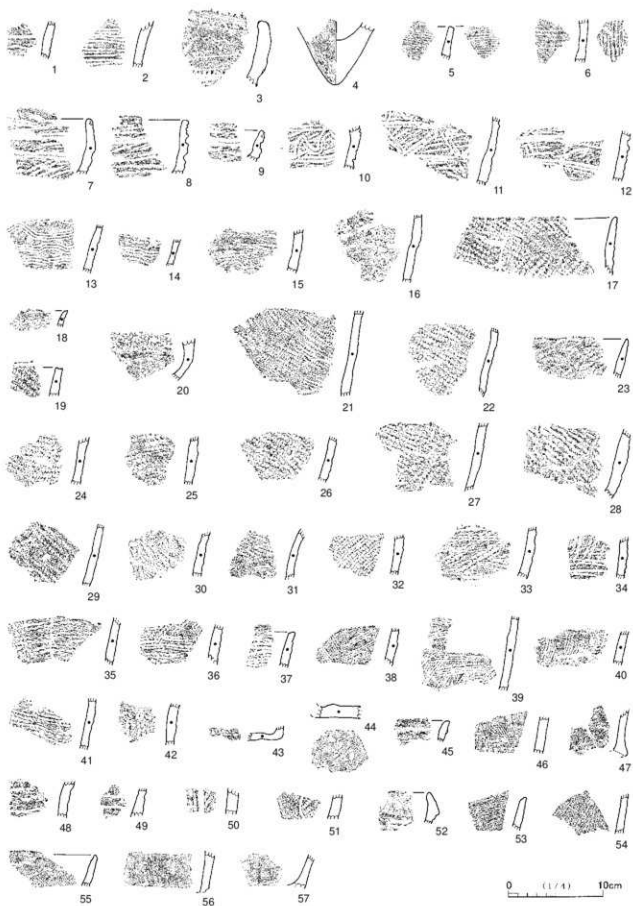
1は貝殻腹縁文と横位の太沈線、下位に横位の蛇形沈線を施す胴部破片である。遺跡の中央部、6J-80より出土した。2は横位の沈線文を施す胴部破片で、(7)区の6Hグリッドの南西部より出土した。3はやや内湾する波状の口縁部破片で、角頭状を呈し口唇部内外面の角と口縁部下位に細紐上に押捺を施す。口縁外面には浅い横位の沈線と波状文を施す。4は無文の尖底部分である。3、4は(9)区の6Iグリッドより出土した。2、4は田戸下層式土器、1、3は田戸上層式土器に比定される。

第1群2類 早期条痕文系土器 (5・6)

表裏に条痕文を施す土器である。5は角頭状を呈する口縁部破片で、6は胴部破片である。5は外面横位から斜位、内面は横位の条痕文、6は外面横位から斜位、内面は縦位の条痕文を施す。共に胎土に繊維を含む。子母口式であろう。

第2群1類 前期黒浜式土器 (7～44)

7～12はL縄文を地文に半截竹管による平行沈線文を施す深鉢で、おそらく同一個体と考えられる。7～9は口縁部破片で口縁部外面に半截竹管による刺突文と、横位の平行沈線文を施す。10～12は胴部破片である。10は平行沈線間に波状の平行沈線文、11は横位の平行沈線文と波状文、鋸歯状文、12は横位の平行沈線文が施される。13、14は3条の横位の平行沈線を波状に施す胴部破片である。15は下半に結節縄文を施す。16は燃りの雑な縄文と思われる。17はRLとLRによる羽状縄文の口縁部破片で、口唇部はやや外反する。18はLR縄文を施す口縁部破片で、口唇部はやや外反する。19はRL縄文を施す口縁部破片で、口唇部は押捺により凹む。20はやや内湾する器形を持つ胴部破片で、RL縄文を横位に施す。21はほぼ直線的に開く器形を持つ胴部破片でRL斜縄文を施す。22はやや屈曲する器形を持つ胴部破片で、RL斜縄文を施す。23は尖頭状を呈する口縁部破片で、LR斜縄文を施す。24・26はRLの、25はLRの斜縄文を施す胴部破片である。27はRL斜縄文を縦・横に施し羽状縄文とした胴部破片である。28、29、31はRL



第16図 遺構外出土縄文土器

斜縄文を施す胴部破片である。30はLの斜縄文を施す。32は附加条縄文を施す胴部破片である。軸縄Rに附加縄R2本を絡げた附加条第2種である。33～36は2本組の撚糸文Lを施す胴部破片、37は同一の口縁部破片である。口唇部は角頭状を呈し、ほぼ直線的に開く器形である。38、39は3本組の撚糸文Lを羽状に施したもので、38はL、39はRの縄文である。40は5本組のRの撚糸文である。41・42は2本組Lの撚糸文である。43・44は底部破片である。

第2群2類 前期～中期初頭の土器 (45～47)

45は諸磯式か、紐状の粘土を貼りつけ爪形文を施す口縁部破片である。46はR L 結節縄文を横位に施す胴部破片である。47は底部付近の破片で、胴部外面にR L 縄文を縦に施す。平底であろう。

前期の土器のほとんどが(9)区の61・71グリッドから出土しており、わずかに(6)・(7)区出土の土器が混じる。既報告で、前期黒浜の住居跡が遺跡の北西部、4F～6Gグリッドに集中して分布していたことは異なる様相を呈する。

第3群1類 中期の土器 (48・49)

同一の胴部破片で沈線文を施す。阿玉台式であろうか。

第3群2類 中期加曾利E式土器 (50)

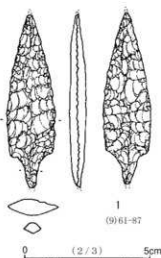
加曾利EⅡ式土器深鉢の胴部破片である。R L 縄文を縦位に施し、縦沈線を垂下し無文帯を有する。1類土器の2点と共に(9)区の61グリッドの南東付近より出土した。

第4群土器 後期の土器 (51～57)

51は後期堀之内Ⅰ式であろう。R L 縄文と弧状の沈線文を施す胴部破片である。52は堀之内Ⅰ式土器の口縁部破片である。口縁部外面に稜を持ち、下位に沈線文を施す。(7)SD001の覆土中より出土した。53～55は加曾利B式土器に比定されよう。53・54は同一の深鉢の波状口縁と胴部破片で、外面に条縄文を施す粗製土器である。55は細かいR L 縄文を施す口縁部破片で、口唇部内面に浅い沈線を廻らす。56・57は底部付近の破片で、平底より直線的に立ち上がる器形を持つ。共に外面に磨きを施す。

(2) 石器 (第17図、図版8)

(9)区から有舌尖頭器1点、(7)区から礫片1点が出土した。出土層位は立川ロームⅢ層上面である。1は有舌尖頭器で、長さ6.8cm、幅1.9cm、厚さ0.7cm、重量8.6gを測る。石材は黒色頁岩である。先端部(ガジリ)と基部の一部が欠損している。表裏は平坦な剥離面而被われ、縁辺部は鋸歯状を呈している。形態的にはいわゆる「小瀬ヶ沢型」の範疇に属する。



第17図 遺構外出土石器

第4節 古墳時代以降

1 土坑

土坑が(7)区で2基、(8)区で1基確認された。(7)SK001で馬歯が出土した以外、いずれも出土遺物はなく、中・近世の遺構と捉えておくのが穏当であろう。

(7) SK001 (第18図、図版2)

(7)区の南端部で東西に10mほど離れて2基の土坑が確認されたが、そのうち東側にあった土坑である。南北に長い長円形プランをもち、南北1.2m、東西0.9m、深さは20cmほどである。床面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土の上部で馬歯が十数点出土している。南北0.4m、東西0.3mほどの範囲に散乱していた。馬の埋葬用の土坑にしては小さく、しかも浅いので、馬歯がここにあった理由は不明とするしかない。

(7) SK002 (第18図)

整った長方形プランの土坑である。長軸をほぼ東西方向にとる。長軸長1.7m、幅は0.7m、深さは10cm～20cmと浅い。覆土の状態は不明である。出土遺物はない。

(8) SK001 (第18図、図版3)

比較的整った隅丸方形プランをもつ。長軸2.4m、短軸2.1mとかなり大型の土坑である。壁は急角度で掘り込まれるが、鍋底状の底面へなだらかに移行する。深さは最大40cm、覆土は自然堆積のようである。柱穴その他の造作はなく、出土遺物もないため遺構の性格は不明である。

2 溝状遺構

(6) SD001・(6) SD002 (第18図、図版3)

斜めに交叉した2条の溝の交叉部分が発掘された。両者の切り合い関係は把握されていない。

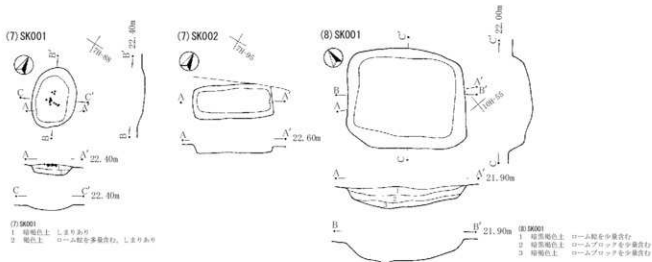
(6)SD001はほぼ東西方向に延びる幅1.1m～1.7mの溝である。調査範囲が294㎡と狭かったため、延長8.5mしか発掘できなかったが、東に延びて(2)SD-004に続いていたものと思われる。調査時まで使われていた農道の脇を、これと平行して延びているので、側溝として掘られたものであろうか。あるいは古い段階での道路跡かもしれないが、硬化面は見出されていない。溝の深さは60cmほどで、断面形は緩い傾斜のV字形である。溝底に柱列は認められなかった。覆土は自然に堆積した状況を示す。

(6)SD002は(6)SD001に斜めに交叉し、北西-南東方向に延びる溝である。延長8.5m発掘された。この溝は北西方向に延びて(2)SD004に続いていたと考えられる。また、南東方向は(7)SD001に続く可能性は考えられるが、途中30mほどのブランクがあり、方向もかなりずれていて断定し難い。溝の幅は60cm～1.0m、深さは最大で35cmほど、覆土は自然堆積である。現況の農道と交叉しているため、農道と平行する(6)SD001よりは古い時期のものかもしれない。

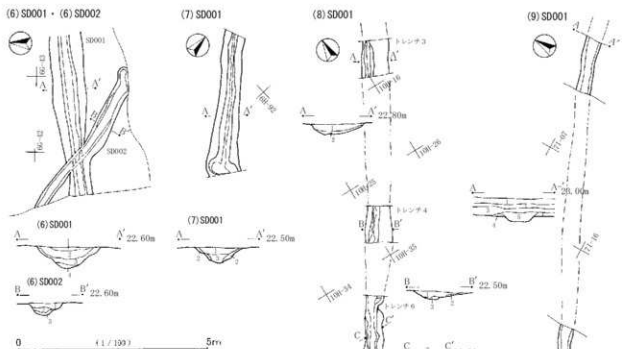
遺物は、どちらの溝も覆土中から縄文土器や土師器の細片が出土しているが、いずれも溝の埋没過程での混入品であろう。宝永火山灰は確認されず、溝の時期を推測する手がかりは得られていないが、近世以降に掘られた溝と捉えておくのが妥当だろう。

(7) SD001 (第18図、図版3)

(6)SD002の南東30mの位置で確認された溝で、一連のものだった可能性もあるが、方向はかなりずれている。北北西-南南東方向に延び、延長7.5m発掘された。幅は南に行くほど広く、南端で1.8m、北端



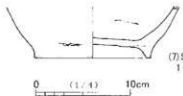
0 (1/40) 4m



0 (1/100) 5m

- (6) SD001
1 埴埴土上 ローム配合少量含む、しまりあり
2 埴埴土上 ロームブロック少量含む、しまりあり
3 埴土上 ローム配合多量、埴埴土を少量含む、しまりあり
4 埴埴土上 ロームブロック少量含む、しまりあり
- (6) SD002
1 埴埴土上 ローム配合多量含む、しまりあり
2 埴土上 ローム配合多量、埴埴土を少量含む、しまりあり
3 埴土上 ローム配合多量含む、しまりあり
- (7) SD001
1 埴埴土上 ローム配合多量、埴埴土を少量含む、しまりあり
2 埴埴土上 ローム配合多量、ロームブロック少量含む、しまりあり
3 埴埴土上 ローム配合少量、ロームブロックを含む、しまりあり

- (8) SD001
1 埴埴土上 ローム配合多量含む、しまりあり
2 埴土上 ローム配合・ブロックを含む、しまりあり
3 埴土上 ローム配合・ブロック少量含む、しまりあり
- (9) SD001
1 埴土上 ローム埴埴土
2 埴埴土上 団化跡含む
3 埴土上 炭化跡含む
4 埴埴土上 (腐植アース)
5 埴土上



0 (1/200) 10m

第18図 土坑・溝状遺構

で1.1mである。深さは40cm前後で、覆土は自然堆積である。遺物は、覆土中から常滑窯産陶器の破片が1点出土した。

遺物（第18図、図版8）

1は常滑窯産陶器片口鉢の底部から体部下部1/4周ほどの破片である。高台を貼り付けた後、丹念に横ナデして密着させている。底径は12.0cmを測る。胎土に長石の細かい粒を含む。胴部は内外面とも丁寧にナデ調整され、内面はかなり平滑に仕上がる。内面には降灰軸が掛かる。12世紀末から13世紀初頭の所産である。

(8) SD001（第18図、図版3）

台地の南西端部で確認された溝である。トレンチ3か所での確認で、延長17.5mが発掘された。北北東-南南西方向、台地の南西辺に直交する方向に延びる。溝を北北東方向に伸ばすと、同じ方向に延びる農道に一致するので、この溝は道路あるいはその側溝だったものと思われる。幅は1.0m～1.5m、深さは15cm～30cmほど、西側の壁にくらべ東側は立ち上がりか緩やかである。土器の細片が少量出土したが、埋没過程での混入品とみられる。溝の時期を示す資料は見出せない。

(9) SD001（第18図、図版3）

トレンチ3か所での確認された一連の溝で、延長30mまで確認された。ほぼ南西-北東方向をとる。幅は60cm～70cmとほぼ一定し、深さは最大で50cmほどである。浅く、直線的な溝なので、畑の境界扱いに掘られた地目境の溝であろう。少量の土器片が出土したが、すべて混入品であろう。

3 遺構外出土遺物

(1) 土師器（第19図、図版8）

(9) 区の北半部、61-61・62グリッドでほぼ同一時期の土師器破片が40点ほど出土した。遺構には伴わず、表土中からの出土なので、住居跡や古墳周溝内などにあった遺物が、土採りその他によって二次的に移動してきたものと思われる。細片ばかりだが、いずれも坏、椀、高坏などの赤彩された破片なので、古墳に供献された遺物なのかもしれない。ほとんど接合せず、個体数は不明である。このうち図示した1・2はかなり遺存度のよいものであった。

1は高坏の坏部1/3周の破片、2は高坏脚部で、柱状部1周、裾部1/3周が遺存する破片である。口径14.7cmを測る。胎土・焼色などよく似ているが接合せず、赤色の発色も異なるので別個体であろう。1は内湾しつつ立ち上がる椀形の坏部で、外面全体と内面は口縁部下2.5cmほどの範囲が赤彩される。内面は丁寧にナデ、外面は細かいヘラケズリののち軽くヘラミガキする。2は、筒状の柱状部からハの字状に裾部が広がる。柱状部外面は縦方向のヘラミガキ、内面にはしぼり目が残る。裾部は丹念に横ナデされる。外面全体が赤彩される。わずかに残る坏部の外面も赤彩され、坏部内面は器面の剥落が甚だしいが、わずかに残る器表面は赤彩の痕跡をとどめる。径12.6cmを測る。5も1・2などと同じグリッドで採集された土師器で、椀ないし小型甕の底部細片である。手づくね風の作りだが、体部外面は細かくヘラケズリされている。底径5.9cmを測る。

3、4は上記の土器からは多少離れた位置で単独で出土したものである。3は高台にしては径が小さいので、高坏の脚上部の破片と考えておきたい。脚部内面、坏部内面とも平滑に仕上げられる。胎土に細かい黒色粒を多く含む。時期不明である。4は壺形土器の底部細片である。外面は丁寧にナデ調整、内面は

剥落が著しい。1・2の高坏に近い時期の遺物であろう。

(2) 銭貨 (図版8)

(9) 区北半部の表土中から銅銭3点が出土している。1は「洪武通寶」(始鑄:明・1368年)、2・3は寛永通寶である。2は寛永波銭で、明和5(1768)年鑄造の21波の四文銭である。3は古寛永の可能性もあるが、摩滅が著しく確定できない。



第19図 遺構外出土土師器

第3章 飯積原山遺跡

第1節 概要 (第20～31図)

既報告の平成6年から22年調査の(1)～(50)区では、遺跡北西側を中心に旧石器時代の石器集中地点22か所、縄文時代の竪穴住居跡134軒、掘立柱建物跡2棟、土坑等773基、ピット(群)、奈良・平安時代の竪穴住居跡66軒、掘立柱建物跡42棟、土坑、溝状遺構、中・近世の野馬土手、野馬堀、土坑列、道路状遺構、塚などが検出された。

今回報告する調査区は、平成23年2月から24年12月にかけて、H2204・H2301～H2308・H2310～H2312・H2401～H2409・H2411まで断続的に実施された。調査地点は前回報告の虫食い状に残った箇所である。旧石器時代は、台地北端からIX層上部、IV層下部～V層のブロックが6か所検出され、槍先形尖頭器、ナイフ形石器、角錐状石器などの遺物が出土した。

上層は、既報告の(1)～(50)区から通算して、(51)～(77)区とした。各地区から検出された遺構は第8表のとおりである。本遺跡は遺構数が多く、重複も激しいことから、遺存状態が不良なものも多く存在した。出土遺物の実測図・拓影・写真を掲載しなかった遺構については、基本的に個別の遺構図の掲載、事実記載を割愛した。掲載しなかった遺構の平面形・規模等については、第21～31図、附表6を参照されたい。

成果の概要は報告済みの地点も含めて述べる。縄文時代は、中期中葉から後期初頭を中心とした時期で、フラスコ状土坑、円形土坑を伴う住居跡群が展開する。加曽利E1式期からE2式期の集落は、台地縁辺に近い北東側に分布する。加曽利E2-3式からE3式古段階期の遺構は地区内からほとんど見られない。加曽利E3式中段階期になると集落が復活し、広範囲に住居跡、土坑が分散する。その範囲は大きく2か所に分かれるが、東側は加曽利E4式古段階期で終わるのに対して、西側は称名寺式期まで継続する。なお、今回の報告における遺構の時期区分と土器の分類は、前回の報告で行ったものを踏襲している¹⁾。

奈良・平安時代は、8世紀末から9世紀第3四半期の時期で、溝状遺構に区画された内外に掘立柱建物跡群主体で構成される建物群3か所と周辺に竪穴住居跡群が展開する。集落全域から「三」「三倉」などの墨書土器が多数出土した。

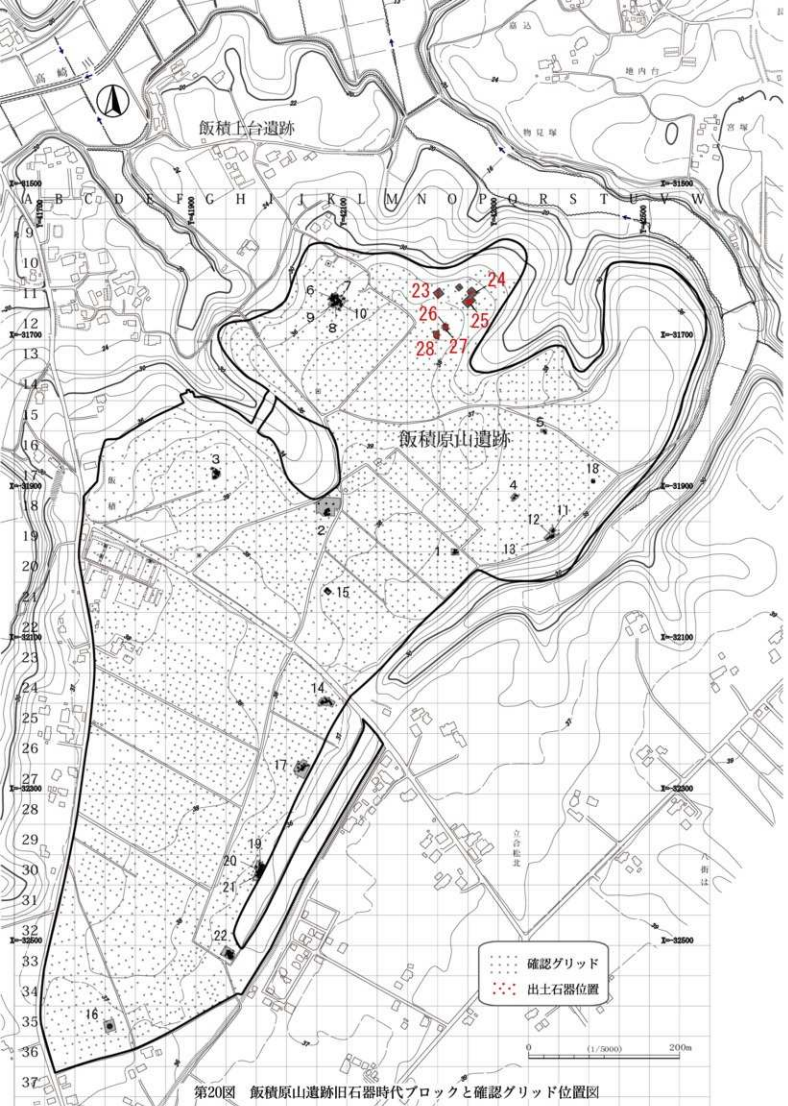
注1 (公財)千葉県教育振興財団 2014『酒々井町飯積原山遺跡2-酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書3-』第1章第3節2

第8表 飯積原山遺構種別一覧

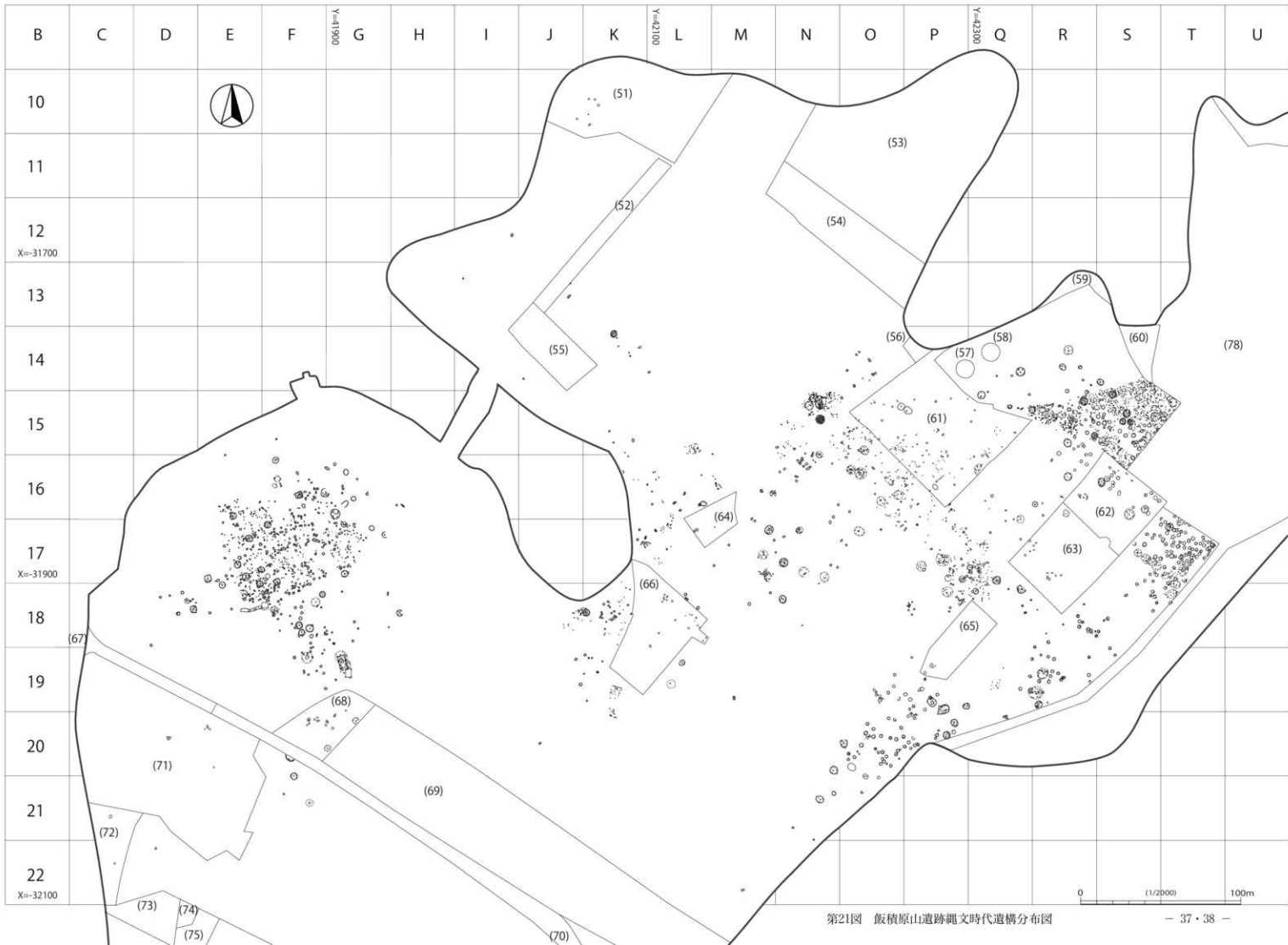
太字は遺構図掲載

時代	遺構名	地区	遺構番号
縄文時代	竪穴住居跡	(61)	SI001, SI002, SI003, SI005, SI006
		(62)	SI001, SI002, SI003
		(63)	SI003
		(65)	SI001
		(68)	SI001, SI002
		(71)	SI001
	土坑等	(51)	SK001, SK002, SK004, SK005, SK006, SK007, SK008
		(61)	SK001, SK002, SK003, SK005, SK006, SK007, SK008, SK009, SK010, SK013, SK017, SK018, SK023, SK038, SK040, SK044, SK047, SK051, SK057, SK059, SK062, SK065, SK074, SK075, SK076, SK082, SK118, SK120

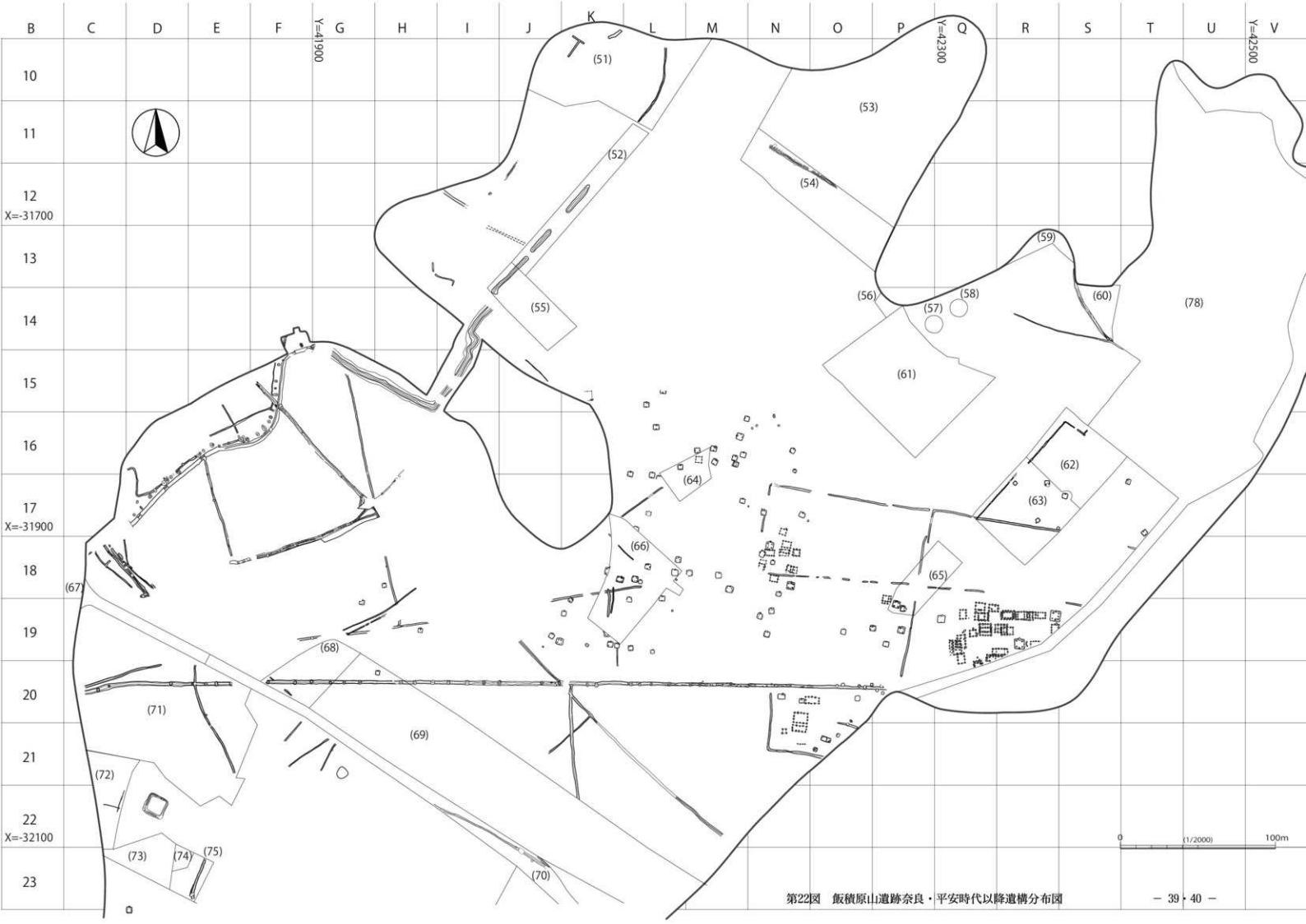
時代	遺構名	地区	遺構番号		
縄文時代	土坑等	(62)	SK001, SK002, SK003, SK004, SK005 , SK006, SK007 , SK008, SK009 , SK010, SK011 , SK012 , SK013 , SK014A , SK014B , SK015 , SK016 , SK017, SK018 , SK019 , SK020 , SK021, SK022 , SK023, SK024 , SK025		
		(63)	SK001, SK002 , SK003, SK004, SK005 , SK006, SK007, SK008, SK009, SK010, SK011, SK012, SK013		
		(64)	SK001 , SK002, SK003		
		(65)	SK001		
		(66)	SK001 , SK002, SK003, SK004, SK006, SK007 , SK008 , SK009 , SK010, SK011, SK012, SK013, SK014 , SK015, SK016 , SK017		
		(68)	SK001, SK002, SK003 , SK004 , SK005 , SK006 , SK007 , SK008 , SK009, SK010 , SK011 , SK012, SK013, SK014		
		(71)	SK001, SK002, SK003A, SK003B, SK003C		
		(72)	SK001, SK002		
		ピット	(61)	SH001, SH002, SH003, SH004A, SH004B, SH005, SH006, SH007 , SH008 , SH009, SH011, SH012, SH014, SH019, SH020, SH021, SH022, SH024, SH026, SH027, SH028, SH029, SH030, SH031, SH032, SH033, SH034, SH035, SH036, SH037, SH039, SH041, SH042, SH043, SH045, SH046, SH048, SH049, SH050, SH052, SH055, SH056A , SH056B , SH058 , SH064, SH077, SH078, SH079, SH080, SH081, SH084, SH085, SH086, SH087, SH088, SH089, SH090, SH091, SH092, SH093, SH094, SH095, SH096, SH097, SH098, SH099, SH100, SH101, SH102, SH104, SH105, SH106, SH107, SH108, SH109, SH110, SH112, SH113 , SH114, SH115, SH116, SH117A, SH117B, SH119	
				(62)	SH001
				(66)	SH001 , SH002, SH003, SH004 , SH005
				奈良・平安時代	竪穴住居跡
(64)	SI001				
(65)	SI002 , SI003				
(66)	SI001 , SI002 , SI003 , SI004 , SI005 , SI006				
(69)	SI001				
掘立柱建物跡 溝状遺構	(64)	SB001			
		SD001			
		SD001 , SD002			
		SD001 , SD004			
		SD001			
中・近世	土坑	(51)	SK003		
		(62)	SK026		
		(68)	SK015, SK016, SK017, SK018		
		(69)	SK001, SK002, SK003, SK004		
		(70)	SK001 , SK002		
		(76)	SK001		
		野馬土手・ 柵列	(52)	SA001	
				SA001	
				SA001	
				SA001	
	溝状遺構・ 野馬堀	(51)	SD001 , SD002 , SD003		
			SD002 , SD001		
			SD001 , SD002		
			SD001 , SD002		
			SD001		
			SD001		
			SD002		
			SD002 , SD003		
			SD001 , SD002		
			SD001		
炭窯	(63)	S0001 , S0002 , S0003			



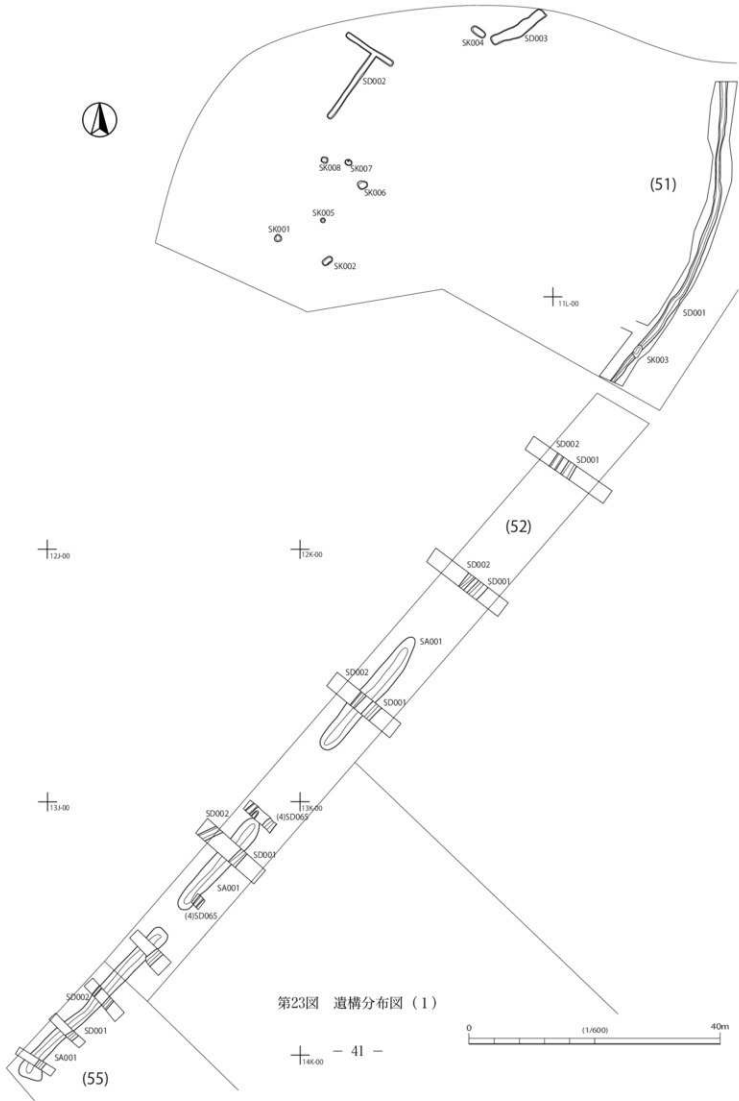
第20図 飯積原山遺跡旧石器時代ブロックと確認グリッド位置図



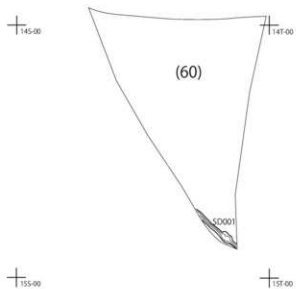
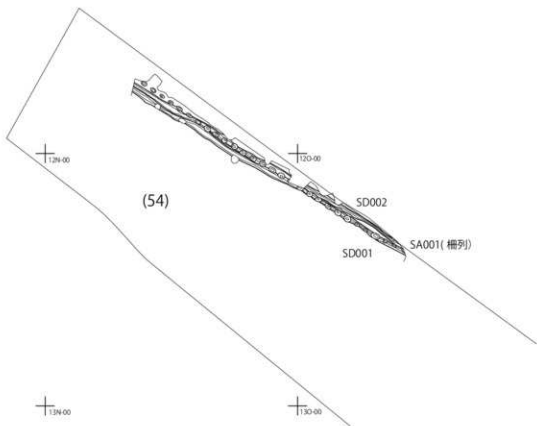
第21図 飯植原山遺跡縄文時代遺構分布図



第22図 飯積原山遺跡奈良・平安時代以降遺構分布図

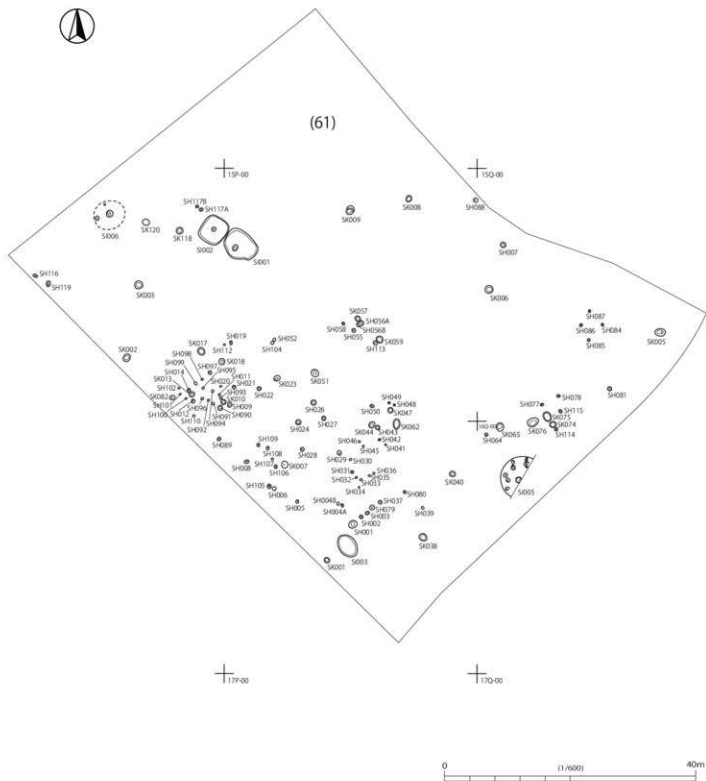


第23図 遺構分布図 (1)

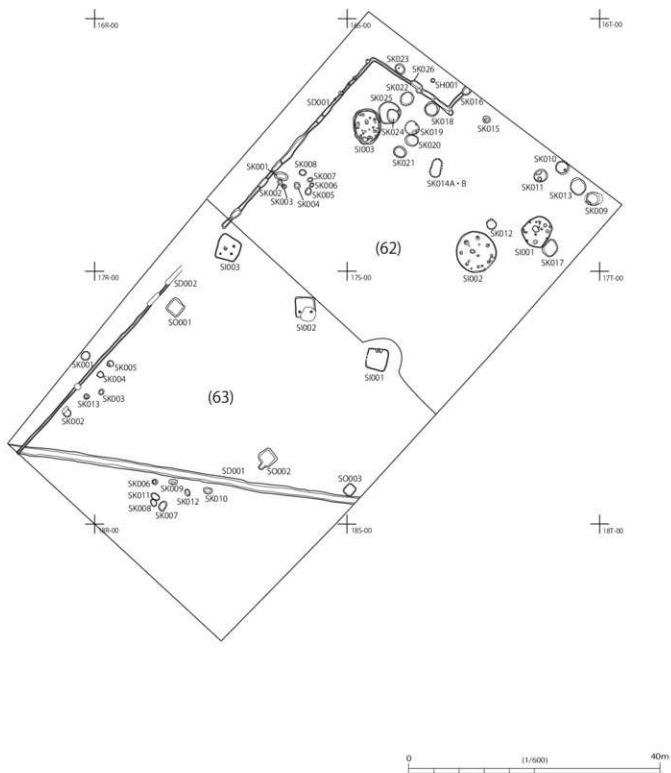


第24図 遺構分布図(2)





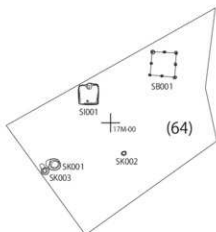
第25図 遺構分布図(3)



第26図 遺構分布図(4)



117L-00



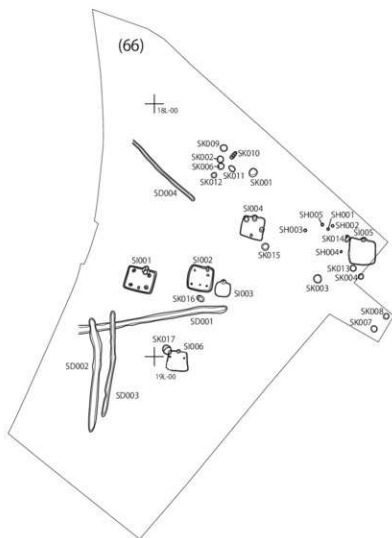
(64)

118K-00

118L-00

118M-00

119K-00



(66)

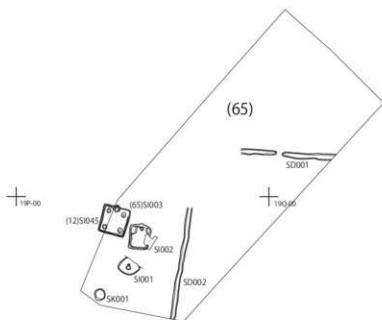


第27図 遺構分布図(5)

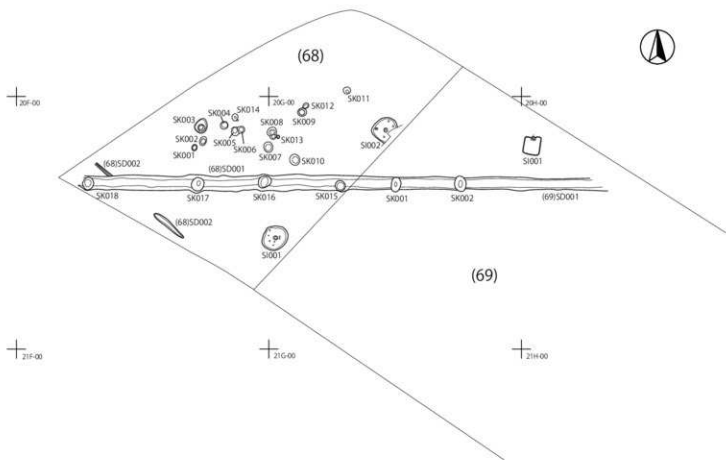


18P-00

18Q-00

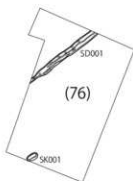


第28図 遺構分布図(6)



26C-00

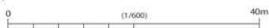
26D-00

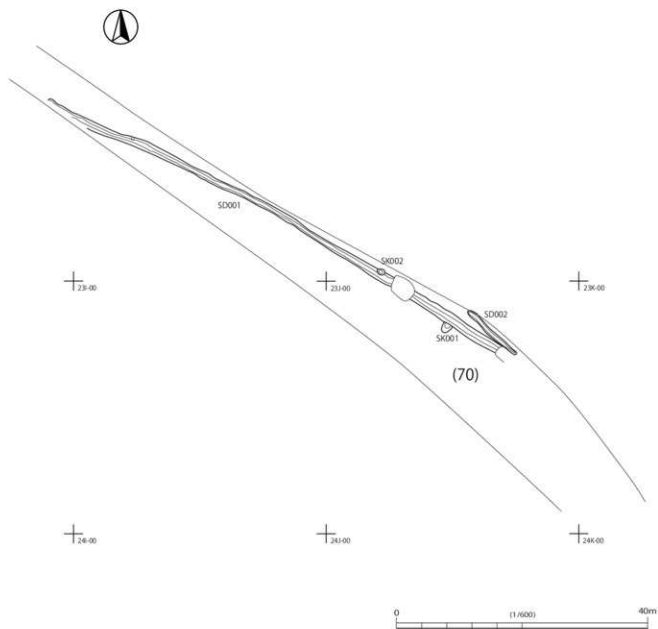


27C-00

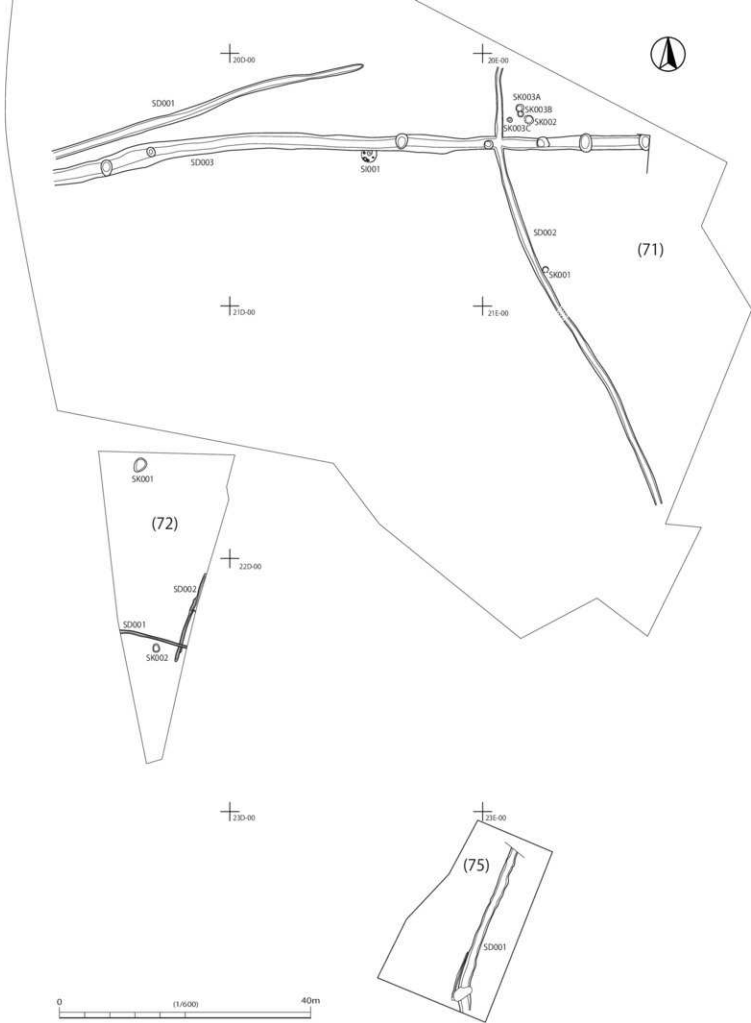
27D-00

第29図 遺構分布図 (7)





第30図 遺構分布図(8)



第31図 遺構分布図 (9)

第2節 旧石器時代 (第20図)

旧石器時代の遺物が検出された調査区は、遺跡の北端に位置する。谷津に向かって突出した標高36～38mの緩斜面部にあり、東に小さな開析谷を臨む。今回の調査では、50m×100mの範囲から6か所の遺物集中地点(ブロック)が検出された。ここでは、これらのブロック(第23～28ブロック)を中心として調査成果を順次記述する。

1 第23ブロック (第32～34図、図版9・24・27)

分 布 調査区の北西に孤立している。標高は約36mである。平面分布は東西約1.2m、南北約6.7mの帯状を呈し、全体的に散漫な分布状況である。

出土層位 ソフトローム(立川ロームⅢ層)下部から第2黒色帯上部にかけて出土し、特にIX層上部に集中している。遺物出土の高低差は約0.6mである。

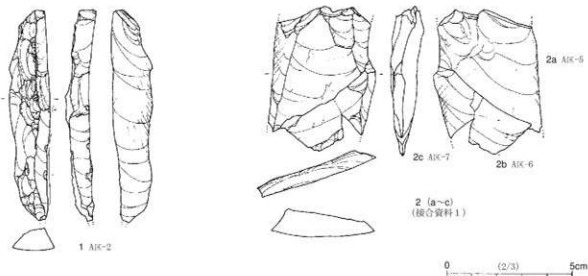
器 種 石刃1点と剥片6点が出土した(第9表)。第32図1は石刃である。いわゆる稜付石刃であり、背面側に横方向の作業面調整の痕跡(片面加工)をとどめる。石材は黒色頁岩である。2はガラス質黒色安山岩製の剥片である。同一個体の接合資料である。

第9表 第23ブロック石器組成表

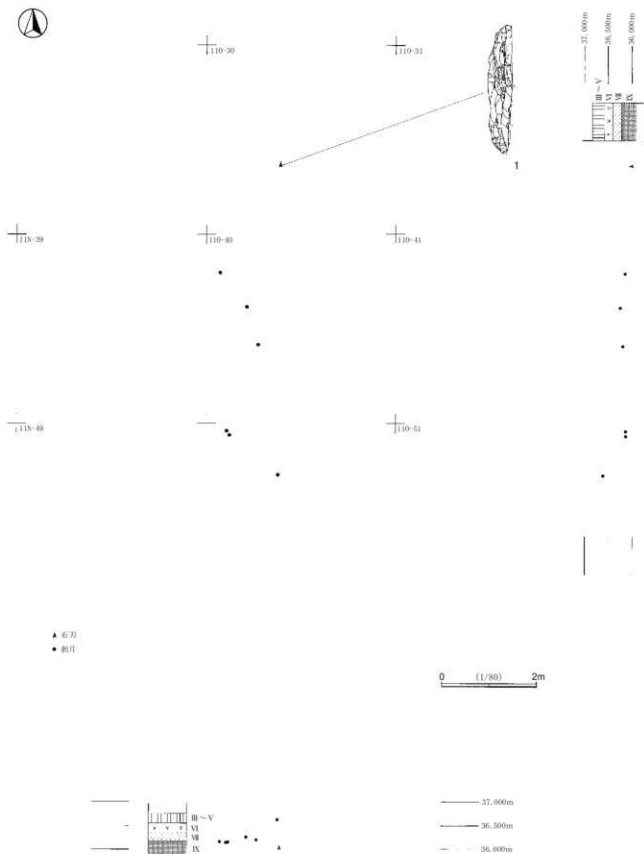
器種・石材	石刃	剥片	計
黒色頁岩	1		1
ガラス質黒色安山岩		6	6
合計	1	6	7

石 材 黒色頁岩1点とガラス質黒色安山岩6点で構成される。産地はいずれも群馬方面と考えられる。

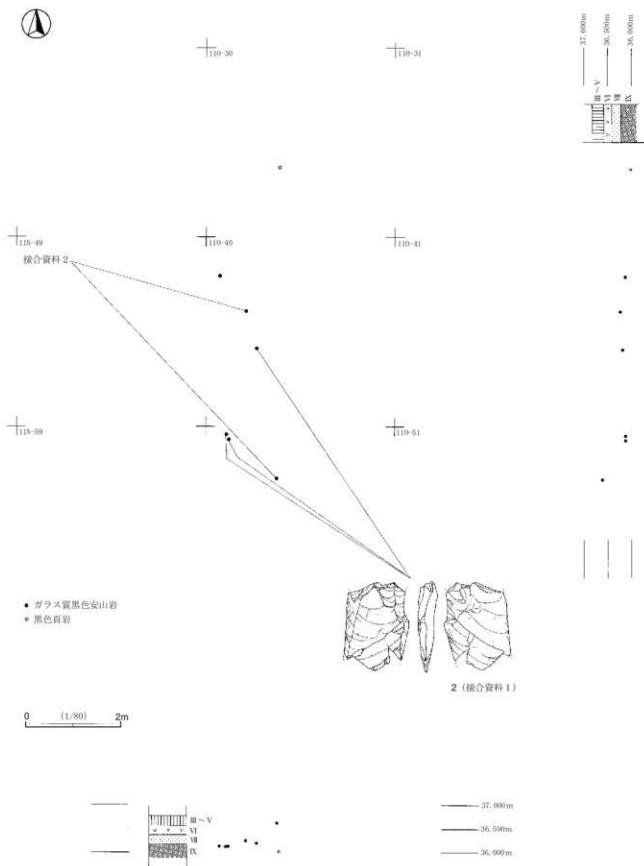
母岩別資料と接合資料 ガラス質黒色安山岩6点は、同一母岩の可能性が高い。剥片の破損例と剥片相互の接合例が各1例ある。



第32図 第23ブロック出土遺物実測図



第33図 第23ブロック出土遺物分布図(1) -石器別分布図-



第34図 第23ブロック出土遺物分布図(2) -石材別分布図-

2 第24ブロック (第35～38図、図版9・24・27)

分 布 北に突出する台地の緩斜面に立地する。標高は約36mである。南側に第25ブロックが隣接する。

平面分布は東西約5.4m、南北約2.4mの帯状を呈し、特に西側の径約2mの範囲に密集している。このほかの遺物は剥片1点(東に約2.5m)が出土しているに過ぎず、分布状況は非常にコンパクトである。

出土層位 立川ロームⅢ層からⅣ層にかけて出土した。特に両者の境界付近に遺物が密集する。遺物出土の高低差は最大約0.5m、最も密集度の高い層準で約0.3mとなっている。

器 種 計39点の石器が出土した。内訳は、角錐状石器4点、二次加工ある剥片5点、石核1点、剥片25点、砕片4点となっている(第10表)。

第37図1～3はガラス質黒色安山岩製の角錐状石器である。1は先端部の断片である。2・3は部分的な加工に留まり、未成品と考えられる。3は接合資料であり、加工の途上で偶発的な縦割れが生じたようである。4～7は二次加工ある剥片である。いずれも破損資料であり、石材は4、6がガラス質黒色安山岩、5、7が斑晶の多い(伊豆・柏峠産?)黒曜石である。なお、6については角錐状石器の製作を意図した可能性がある。第38図8は石核である。横長剥片の生産に供された可能性が高い。箱根・畑宿産の黒曜石と推定される。9・10はガラス質黒色安山岩製の横長剥片である。

石 材 ガラス質黒色安山岩29点と黒曜石10点からなる。黒曜石については、肉眼観察であるが、産地が伊豆・箱根方面(柏峠・畑宿)に求められる公算が大きい。

母岩別資料と接合資料 石材の多くを占めるガラス質黒色安山岩に関しては、特徴に乏しく、母岩別類に堪えなかった。黒曜石については漆黒(A)と斑晶が多く灰色の縞模様があるもの(B)の二種に分離し得た。あるいは産地を異にしているのかもしれない。

一方、接合資料は剥片生産にかかわる資料と加工途上の破損資料に大別され、前者は接合資料4(剥片2点)、接合資料5(剥片3)、接合資料6(剥片2)、接合資料7(剥片3点)、後者は接合資料1(角錐状石器1個体)、接合資料2(二次加工ある剥片1個体)、接合資料3(二次加工ある剥片・剥片各1点)が該当する。

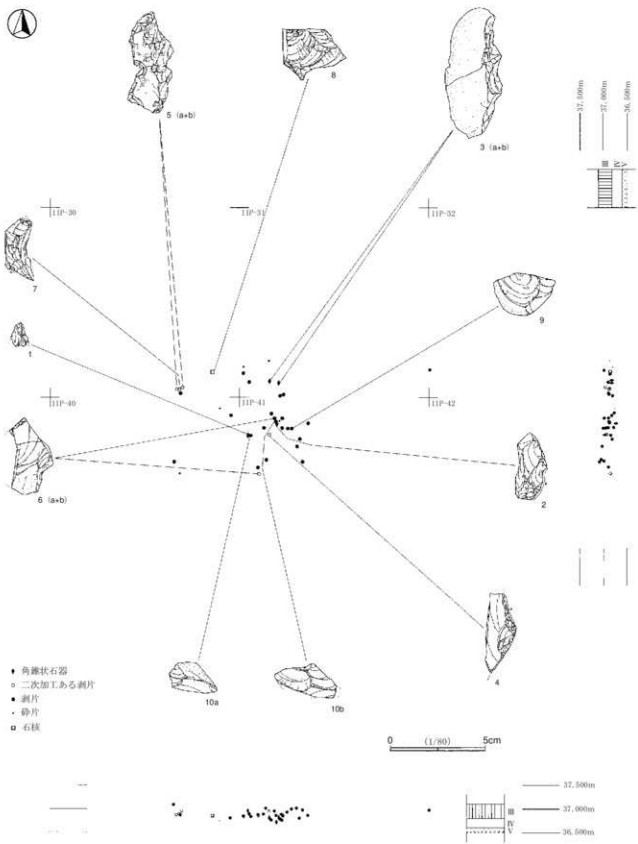
第10表 第24ブロック石器組成表

器種・石材	角錐状石器	二次加工ある剥片	石核	剥片	砕片	計
ガラス質黒色安山岩	4	2		21	2	29
黒曜石		3	1	4	2	10
合計	4	5	1	25	4	39

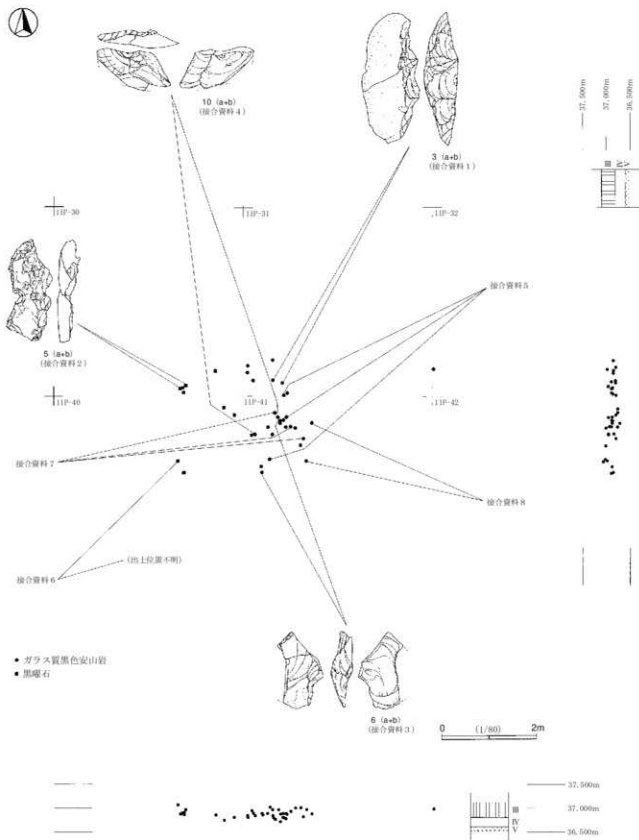
3 第25ブロック (第39～42図、図版9・24・25・27)

分 布 本ブロックは、約5mの距離を隔てて第24ブロックの南に隣接する。

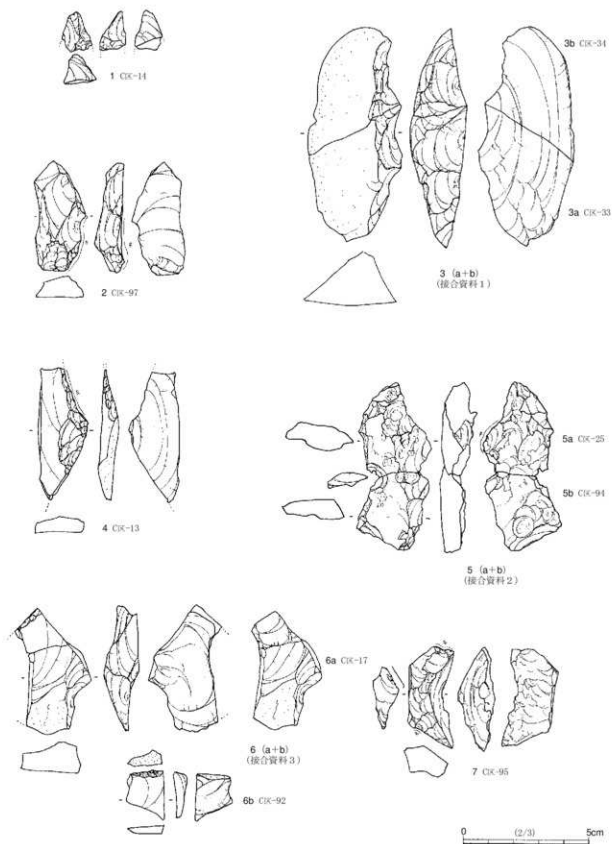
平面分布は東西約8.3m、南北約5.2mの楕円形を呈するが、分布密度によってさらに東西に二分される。西側は4m四方で比較的高密度である。この範囲には石核のほか同一石材の剥片類が多数分布しており、接合資料も4例中3例ある。さらに内容的にも剥片生産から二次加工に至る一連の製作工程を色濃くとどめている。これに対して分布が散漫な東側には完成品が比較的多い。



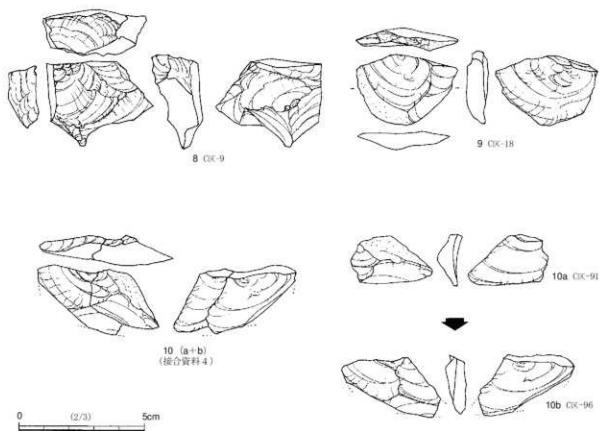
第35図 第24ブロック出土遺物分布図(1) -石器別分布図-



第36図 第24ブロック出土遺物分布図(2) -石材別分布図-



第37図 第24ブロック出土遺物実測図(1)



第38図 第24ブロック出土遺物実測図(2)

出土層位 立川ロームⅢ層からⅣ層にかけて出土した。特に両者の境界付近に遺物が密集する。遺物出土の高低差は最大約0.6m、最も集中度の高い層準で約0.3mとなっている。

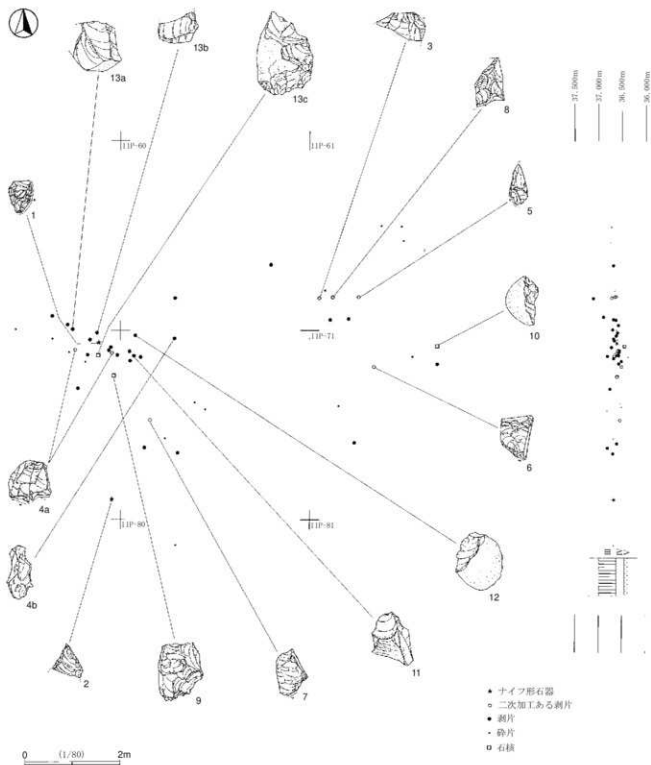
器種 計50点の石器が出土した。内訳は、ナイフ形石器2点、二次加工ある剥片7点、石核3点、剥片24点、砕片14となっている(第11表)。

第41図1・2はメノウ製のナイフ形石器である。1は完形である。2は先端部の断片である。3、4a、5～8は二次加工ある剥片である。いずれも縁辺部に部分的な二次加工が施されている。石材はガラス質黒色安山岩(3)、メノウ(4a、6)、黒曜石(5、7、8)である。第41図9・第42図10は石核である。9はメノウ製で打面転移が頻繁な多面体の石核、10はガラス質黒色安山岩の小礫を素材として一側縁に打撃を加えている。11は東北頁岩製、12はガラス質黒色安山岩製の剥片である。13は石核と横長剥片2点の接合資料である。ガラス質黒色安山岩の礫を素材として上下・左側縁に打撃を加え横長剥片を生産している。

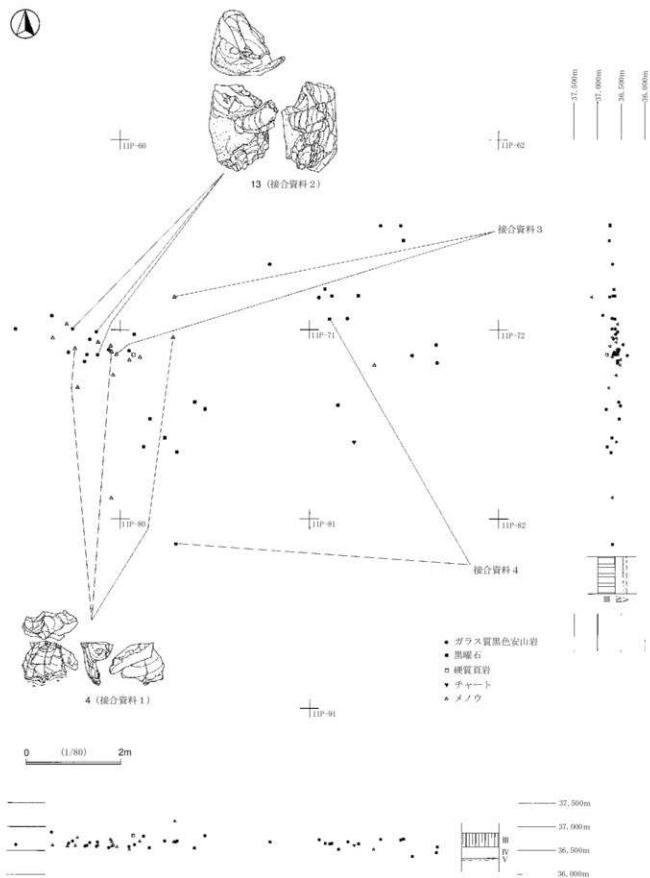
石材 ガラス質黒色安山岩20点、メノウ15点、黒曜石13点、チャート・東北頁岩各1点で構成される。黒曜石については、いずれも高原山産と推定される。

母岩別資料と接合資料 複数点の資料のうち、黒曜石については同一母岩の可能性が高い。メノウについては二次加工ある剥片1点(第41図6)を分離し得たのみである。この他のメノウやガラス質黒色安山岩全点については、明確な母岩別分類に堪えなかった。

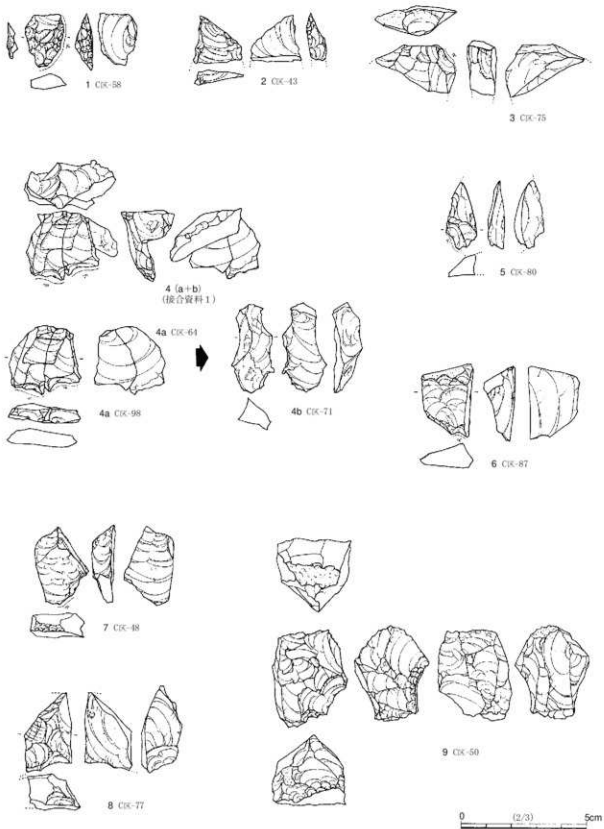
接合資料は4例あり、そのうち2例を図化した(接合資料1(第41図4)、接合資料2(第42図13))。この他、剥片どうしの接合例として、接合資料3(剥片2)、接合資料4(剥片・砕片各1)がある。



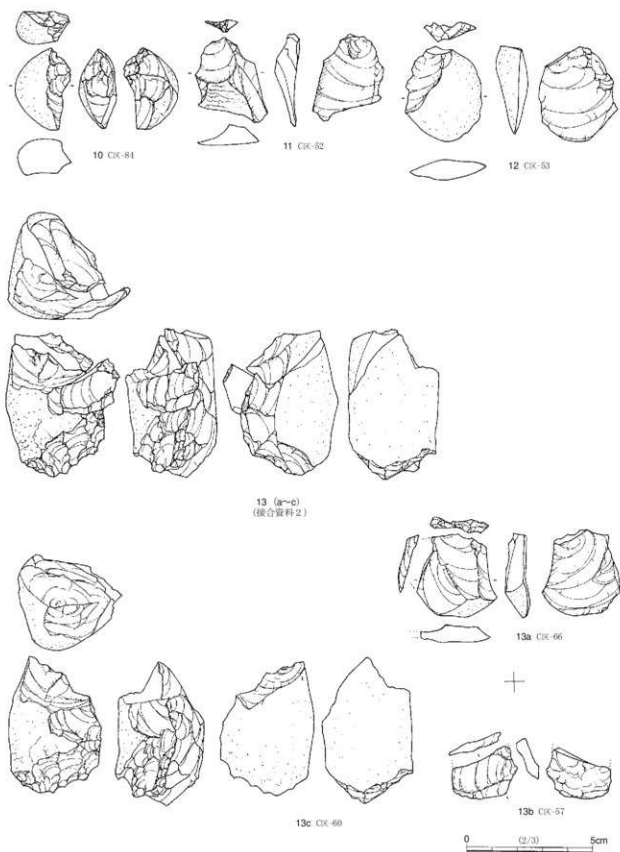
第39図 第25ブロック出土遺物分布図(1) -石器別分布図-



第40図 第25ブロック出土遺物分布図(2) -石材別分布図-



第41図 第25ブロック出土遺物実測図(1)



第42図 第25ブロック出土遺物実測図(2)

第11表 第25ブロック石器組成表

器種・石材	ナイフ形石器	二次加工ある剥片	石核	剥片	砕片	計
ガラス質黒色安山岩		1	2	11	6	20
メノウ	2	3	1	8	1	15
黒曜石		3		3	7	13
チャート				1		1
東北頁岩				1		1
合計	2	7	3	24	14	50

4 第26ブロック (第43~45図、図版9・25・28)

分 布 細長く突出した台地の付け根付近に立地する。標高は約38mである。南に第27ブロックが隣接し、南西約6.3mに第28ブロックが存在する。後述するようにこれらのブロック群は同時性が高く、本ブロックは、その一角をなす。小規模であり、平面分布が径約2.4mの円形を呈する。

出土層位 立川ローム第2黒色帯から出土しており、特にその上部に集中する。遺物出土の高低差は約0.3mである。

第12表 第26ブロック石器組成表

器種・石材	ナイフ形石器	剥片	砕片	計
ガラス質黒色安山岩	1			1
メノウ		1		1
緑色凝灰岩		2	6	8
赤玉石		1		1
ホルンフェルス		1		1
合計	1	5	6	12

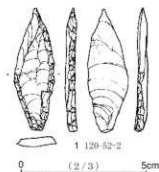
器 種 計12点の石器が出土した。内訳は、ナイフ形石器1点のほか、剥片5点、砕片6となっている (第12表)。

第43図1は完形のナイフ形石器である。石刃を素材としており二側縁加工である。石材はガラス質黒色安山岩であるが、群馬方面の「黒色安山岩」との言い

換えが可能である。

石 材 ガラス質黒色安山岩・メノウ・赤玉石・ホルンフェルス各1点と緑色凝灰岩6点で構成されている。緑色凝灰岩とホルンフェルスは、形状と材質から石斧の調整剥片の公算が大きい。

母岩別資料と接合資料 複数点の資料は緑色凝灰岩のみであり、同一母岩と考えられる。したがって母岩別資料は5種ということになる。接合資料は確認されなかった。



第43図 第26ブロック出土遺物実測図

5 第27ブロック (第46~48図、図版9・25・28)

分 布 第26ブロックの南側に近接している。標高は約38mである。

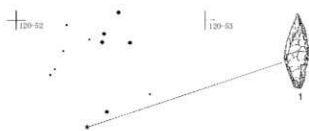
平面分布は長径約3.0m、短径約2.0mの楕円形を呈し、遺物分布に特に疎密の差はない。

出土層位 第26ブロックと同様に、立川ローム第2黒色帯から出土しており、特にその上部に集中する。遺物出土の高低差は約0.5mである。



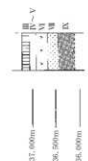
- ナイフ形石器
- 剣片
- 碎片

37,000m
36,500m
36,000m



120-63

0 (1/80) 2m



第44図 第26ブロック出土遺物分布図(1) -石器別分布図-



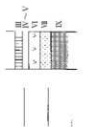
- ガラス質黒色安山岩
- 緑色凝灰岩
- ホルンフェルス
- ▲ メノウ
- 赤玉石

37,000m
36,500m
36,000m



120-63

0 (1/80) 2m



第45図 第26ブロック出土遺物分布図(2) -石材別分布図-

器種 二次加工ある剥片1点、使用痕ある剥片2点、剥片3点、砕片28点の合計34点が出土した（第13表）。

第46図1は稜付石刃を素材した二次加工ある剥片である。主要剥離面側右下に部分的な二次加工が見られる。2は黒色頁岩製、3はガラス質黒色安山岩製の使用痕ある剥片（石刃）である。2の先端部は主要剥離面側に巻き上がっており、いわゆる「ウートラパッセ」の状態である。

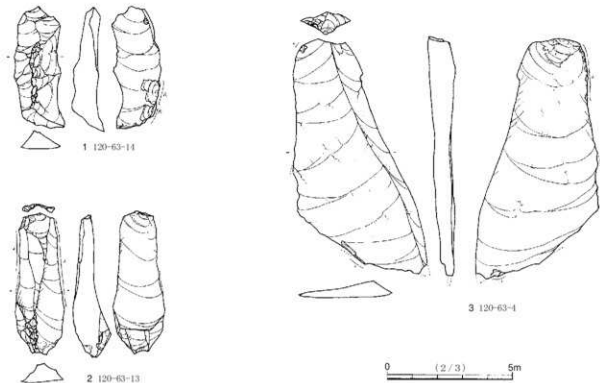
石材 石器石材は、ホルンフェルス29点、メノウ2点、ガラス質黒色安山岩・黒色頁岩・流紋岩各1点である。石核がなく、石器群も搬入品である。黒色頁岩とガラス質黒色安山岩の産地は群馬方面に求めることが可能である。ホルンフェルスについては、石斧の再加工時に生じた横長の剥片類であり、北に隣接する第26ブロックとの密接な関連が想定される。

母岩別資料と接合資料 母岩別資料は5種識別し得た。このなかで複数点の資料はホルンフェルスとメノウであり、いずれも同一母岩と考えられる。

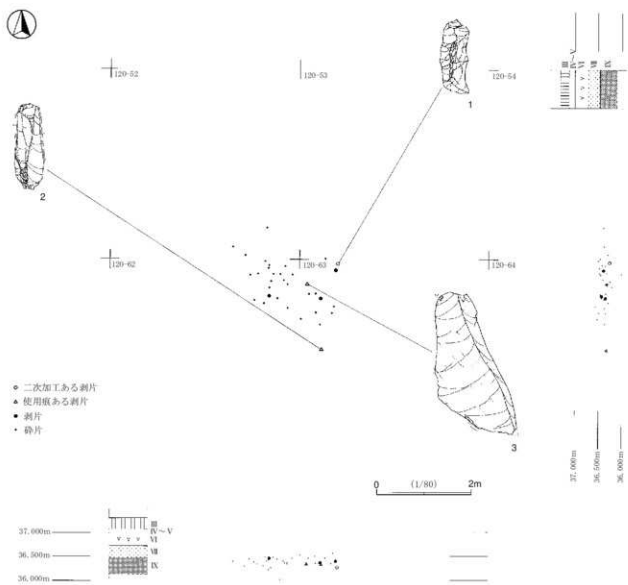
接合資料は4例確認した。すべてホルンフェルスである。接合資料1のみ剥片類相互の接合例であり、他は同一個体の剥片類の折損資料である。

第13表 第27ブロック石器組成表

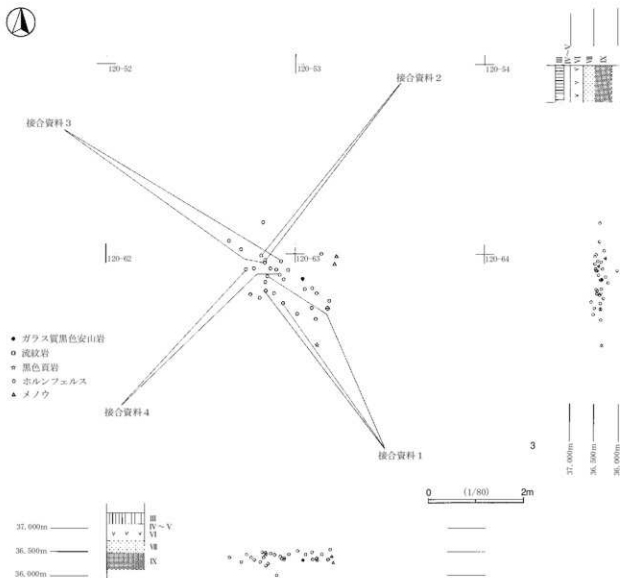
器種・石材	二次加工ある剥片	使用痕ある剥片	剥片	砕片	計
ガラス質黒色安山岩		1			1
メノウ	1		1		2
黒色頁岩		1			1
ホルンフェルス			2	27	29
流紋岩				1	1
合計	1	2	3	28	34



第46図 第27ブロック出土遺物実測図



第47図 第27ブロック出土遺物分布図(1) -石器別分布図-



第48図 第27ブロック出土遺物分布図(2) -石材別分布図-

6 第28ブロック (第49～51図、図版9・25・29)

分 布 第26・第27ブロックの南西側に位置することは既に記した。標高は約38mである。

平面分布は南北約8.5m、東西径約4mの楕円形を呈する。遺物分布には特に疎密の差はなく散漫である。

出土層位 立川ルーム第2黒色帯 (IX層) 上部に集中する。遺物出土の高低差は約0.3mである。

器 種 打製石斧1点、使用痕ある剥片4点、石刃2点、剥片7点、砕片2点の合計16点が出土した (第14表)。

第49図1・5は石刃である。1は先端部の一部で、石材は信州系 (八ヶ岳) 黒曜石である。5は黒色頁岩製の完形品である。2・3、6・7は使用痕ある剥片 (石刃) である。2・3、7は部分的であるが、6についてはほぼ全周にわたって刃こぼれがみられる。石材は、黒色頁岩 (2)、チャート (3、7)、メノウ (6) が用いられている。4は石刃石核の打面再生剥片の可能性が高い。黒色頁岩製である。8は片刃の打製石斧である。石材はホルンフェルスである。

石 材 石器石材は、黒色頁岩6点、メノウ4点、チャート・黒曜石各2点、ホルンフェルス・流紋岩各1点となっている。隣接する第26・第27ブロックと同様に、石核がなく、石器群も搬入品である。黒色頁岩も群馬方面に求めることが可能である。

母岩別資料と接合資料 母岩別資料は7種識別し得た。このなかで複数点の資料は黒曜石とメノウである。

その他、黒色頁岩については識別不能であった。接合資料は確認されなかった。

第14表 第28ブロック石器組成表

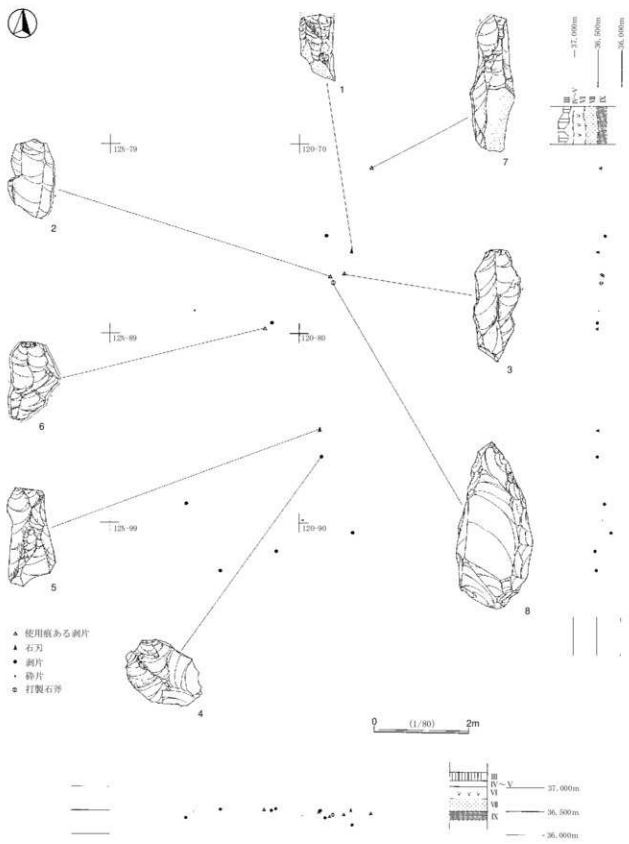
器種・石材	打製石斧	使用痕ある剥片 (石刃)	石刃	剥片	砕片	計
ホルンフェルス	1					1
チャート		2				2
黒色頁岩		1	1	3	1	6
黒曜石			1	1		2
メノウ		1		2	1	4
流紋岩				1		1
合計	1	4	2	7	2	16

7 採集・単独出土資料 (第52・53図、図版26・29)

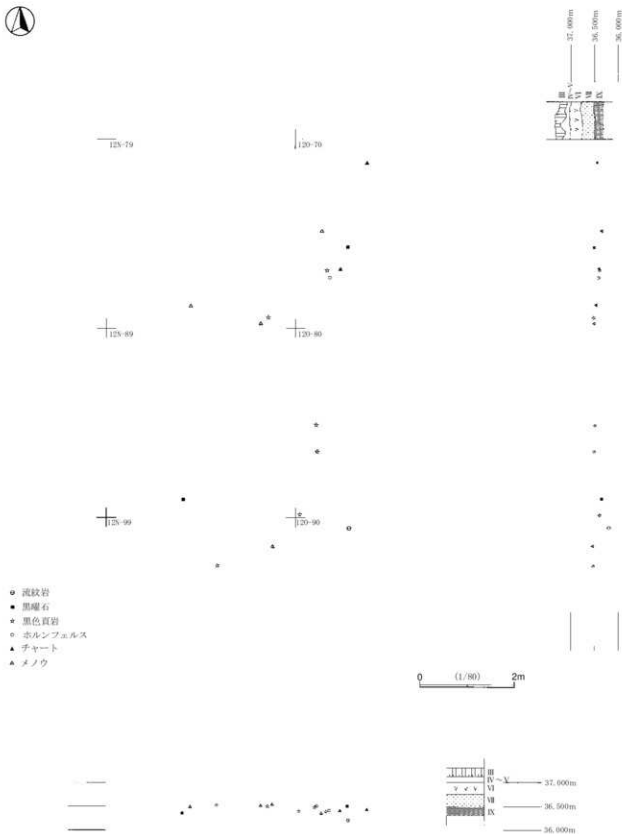
採集・単独出土資料を一括した。遺物総数は、平成22年度以前の調査で先の報告書の未収録分も併せ計34点である。

内訳は、槍先形尖頭器4点、ナイフ形石器7点、角錐状石器1点、搔器2点、二次加工ある剥片4点、局部磨製石斧1点、石核4点、剥片9点、砕片2点となっている。

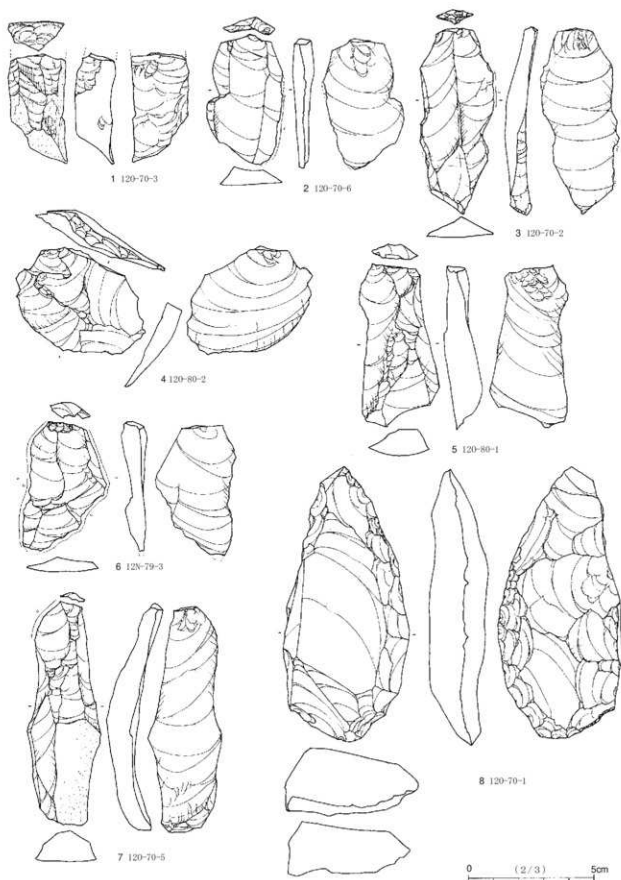
このうち出土層位が明確な資料としては、立川ルームIX層から二次加工ある剥片 (第52図2)、立川ルームII～III層の剥片3点であり、他は後世の遺構覆土や表面採集によるものである。



第49図 第28ブロック出土遺物分布図(1) -石器別分布図-



第50図 第28ブロック出土遺物分布図(2) -石材別分布図-

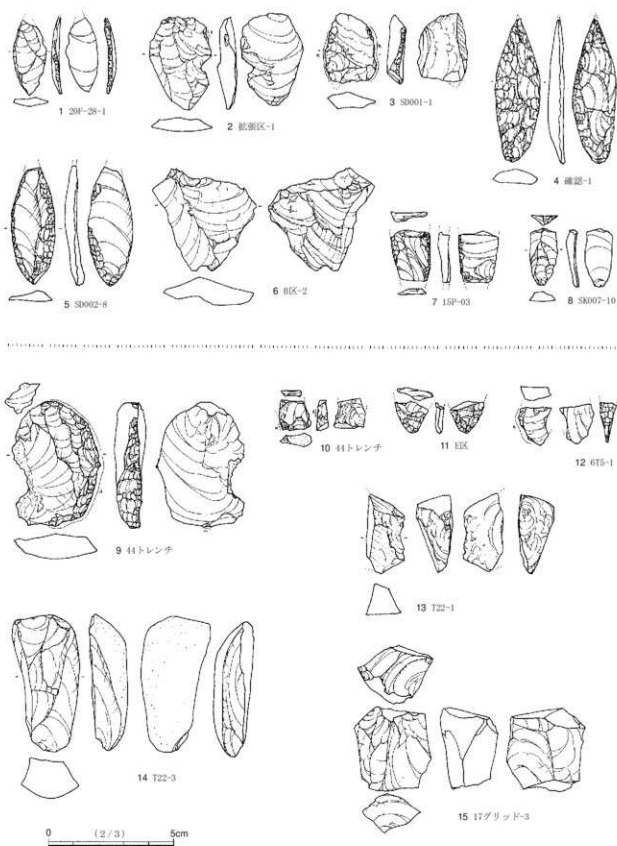


第51図 第28ブロック出土遺物実測図

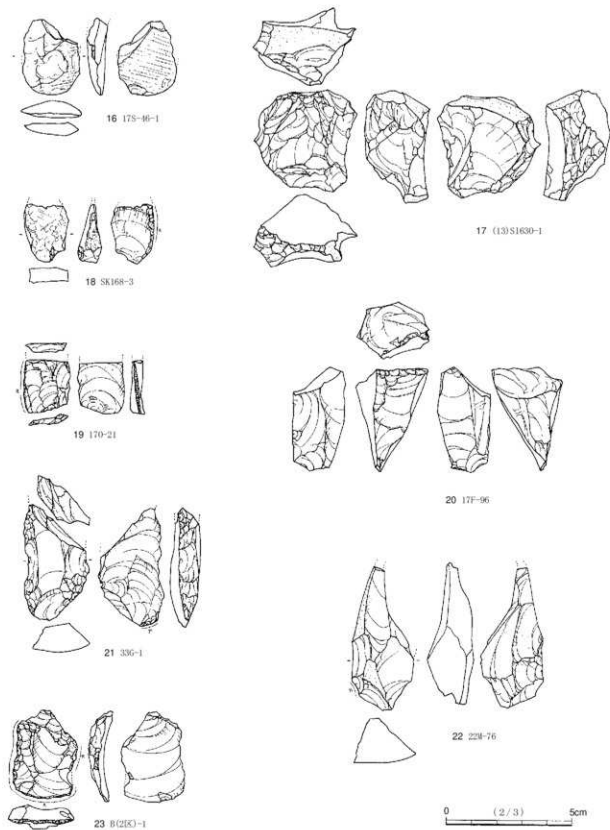
第52図4・5、7、11は槍先形尖頭器である。4・11は信州系黒曜石を素材とした両面加工の資料、5、7は東北頁岩の縦長剥片を素材とした周辺加工の資料である。欠損資料のうち5には先端部に刺突具に特有の衝撃剥離（折れ+彫器状剥離）が観察される。第52図1、3、8、10、12、第53図18・19はナイフ形石器である。1はガラス質黒色安山岩製のナイフ形石器である。石刃を素材とした二側縁加工で、先端部が欠損している。3・10・12・18・19は横長剥片を素材としており切出形を呈する。欠損品であり高原山産黒曜石を使用している。8は小型の石刃を素材として頂部を截断した截頂石刃で石材は東北頁岩である。第53図21は角錐状石器である。先端部が欠損する。石材はガラス質黒色安山岩である。第52図9、第53図23は搔器である。9はメノウ製、23は東北頁岩製である。23の右側縁には部分的にガジリがみられる。第52図2・13・第53図22は二次加工ある剥片である。2はメノウ製で寸詰りの縦長剥片の打面付近に部分的に二次加工がみられる。13・22は断片的な資料であり、角錐状石器又は搔器の可能性がある。用材は13が高原山産黒曜石、22がガラス質黒色安山岩である。第53図16は局部磨製石斧である。上部部がやや欠損している。両面が研磨されており、刃部は片刃を呈する。背面中央部には被熱によりはじけ飛んだクレーター状の損傷が見られる。石材はホルンフェルスである。第52図14・15、第53図17、20は石核である。14、17はガラス質黒色安山岩の円礫を素材とした横長剥片石核、15はいわゆる「白滝頁岩」製、20は流紋岩製の縦長剥片石核、第52図6は大型の横長剥片である。箱根・畑宿産の可能性が高い。

第15表 採集・単独出土資料石器組成表

器種・石材	槍先形尖頭器	ナイフ形石器	角錐状石器	搔器	二次加工ある剥片	局部磨製石斧	石核	剥片	砕片	計
ガラス質黒色安山岩	2	1	1		1		2	7	1	15
黒曜石		5			2			1		8
メノウ				1	1					2
トロトロ石								1		
東北頁岩	2	1		1						4
白滝頁岩							1		1	2
ホルンフェルス						1				1
流紋岩							1			1
合計	4	7	1	2	4	1	4	9	2	34



第52図 採集単独出土遺物実測図(1)



第53图 采集单独出土遗物实测图(2)

第3節 縄文時代

1 竪穴住居跡

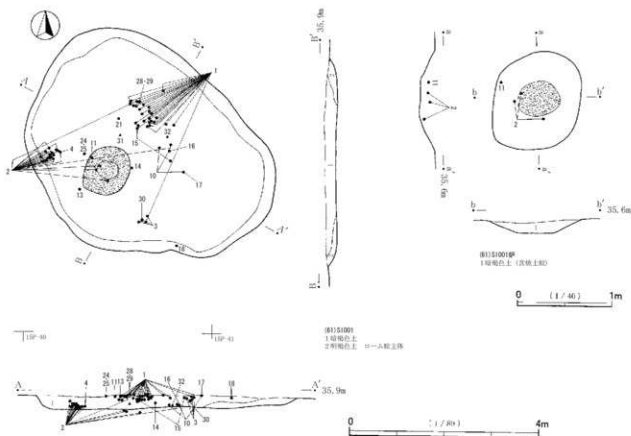
(61) S1001 (第54図、図版10)

遺跡北部、15P-20・21・30・31グリッドに位置する。北西側に(61) S1002が近接する。東西方向に長い卵円形を呈する。長軸5.50m、短軸4.25m、深さ32cmを測る。覆土は黒褐色土が主体である。ピットは検出されなかった。炉は床面中央より南東側に偏って位置する。南北方向に長い楕円形を呈する。長軸1.15m、短軸95cm、深さ17cmを測る。覆土は黒褐色土が主体で、焼土を含む。

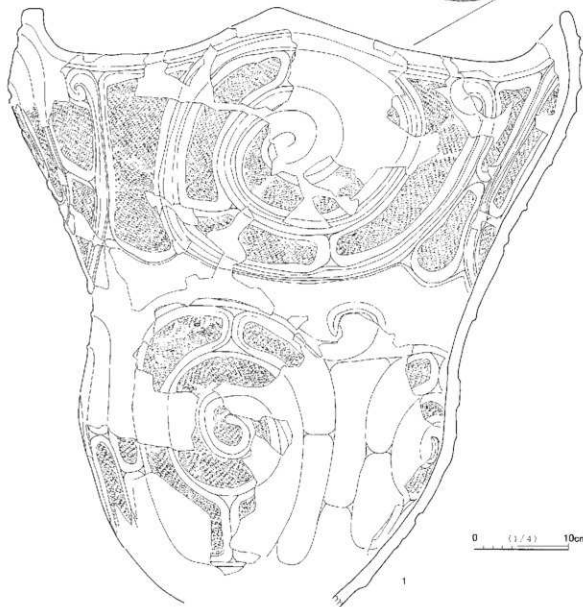
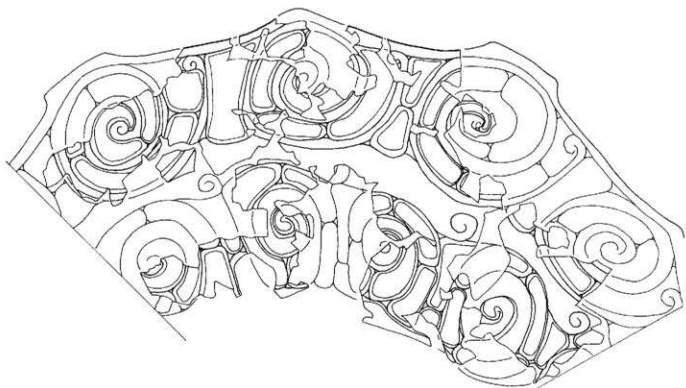
遺物は土器・土製品・石器が出土した。図示した土器のうち2以外は覆土上層から出土したことが多い。時期は3c期であろう。

土器 (第55～57図、図版30・36)

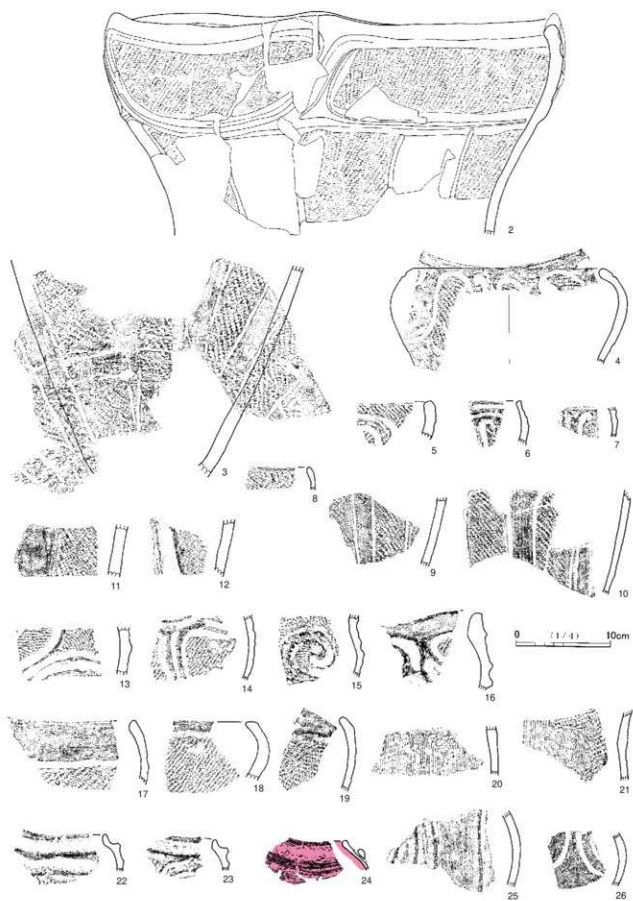
1は推定口径58cm、現存高63cmを測る大型土器である。口縁部、胴部とも約1/2が遺存する。口縁に4単位の波状突起が乗るが、口縁部文様から見て単純な波状突起と台状の突起が交互に配されるらしい。文様は各波状突起下に2条の隆線による大振りの渦巻文を施し、その末端は波状突起の底の位置で小型渦巻文となる。くびれた無文の胴部を扶んで胴下部にも同様の渦巻文を施すが、その位置は上段とずれている。いわゆる梶山類である。2は口径46.8cmを測り、口縁部はほぼ完存する。4単位の小型波状突起を持つ。口縁部文様は突起と突起の間を各1単位とする低い隆線による杵状文で、胴部文様は幅の広い7単位の磨消懸垂文である。3は胴下部の大型破片で、磨消懸垂文を施す。4は推定口径20cmを測る。内湾する口



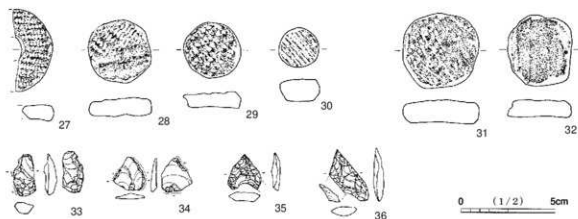
第54図 (61)S1001 (1)



第55圖 (61)S1001 (2)



第56图 (61)SI001 (3)



第57図 (61)SI001 (4)

緑部にための沈線で波状入組文や蕨手文を施す。いわゆる吉井城山類である。5～8も同様の波状入組文や蕨手文を施す。6・7は同一個体で、口縁直下に無文帯を置く。9・10も同一個体で、縄文を充填した逆U字状文を施す。11は幅広の磨消懸垂文である。12～15はいわゆる梶山類である。16は低い山形突起を持つ口縁部破片で、突起下に杵状区画文らしきものを配するが、左横の隆線文様は胴部まで垂れ下がることからこれも梶山類であろう。17は広い口縁部無文帯を太い沈線で画する。18は口縁部が内湾していて、口縁直下の無文帯と縄文帯との間に段を設けている。19は波状口縁で、口縁直下の無文帯を水平に不明瞭な隆線で画している。20は歯歯条線文で、拓影上端に口縁部を区画するのための沈線が認められる。21は歯歯条線文と縄文を施す。22～26は無文地に微隆起線や沈線文様を施す。24・25は同一個体で、赤彩された有孔罅付土器である。同一個体の22・23及び26は瓢箪型土器ないしは有孔罅付土器であろう。4～7は加曽利E3式中段階、18・19は同3-4式、他は同E3式新段階であろう。

土製品 (第57図、図版44)

27～32は土製円板である。27は有孔で両面穿孔であるが、裏面の孔の方が大きい。周縁の磨りは27・30が深い。28・31はやや浅く、29は浅い。32は打ち欠きのみである。

石器 (第57図、図版45)

33・34はチャート製の石鉄未成品である。33は楔形石器の素材を加工したものである。35・36は凹基無茎鉄である。石材は35が信州系の黒曜石、36がチャートである。36は片脚が欠損している。図示した以外では、チャート製の石鉄1点・二次加工ある剥片1点・砕片4点、黒曜石製の7点が出土した。

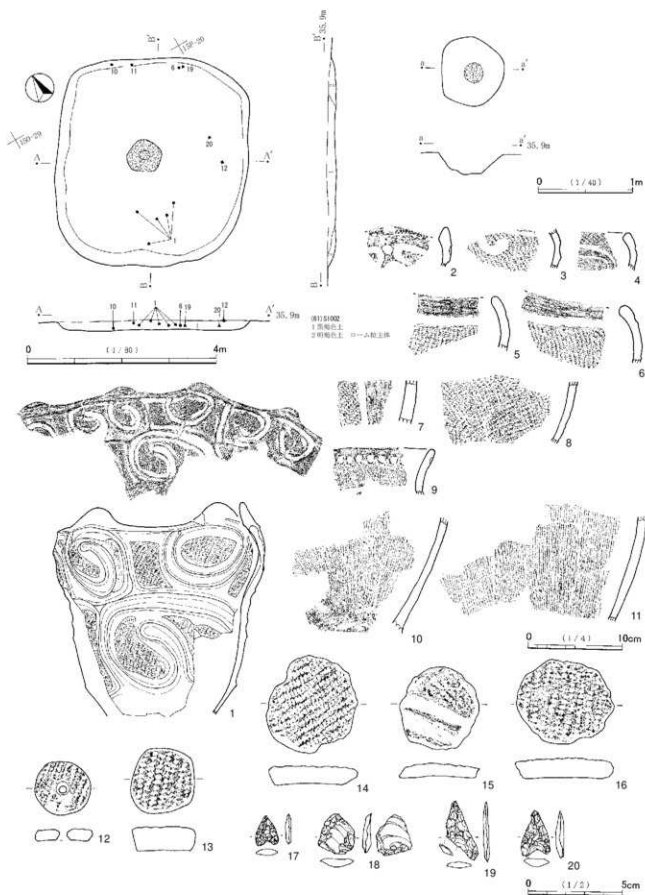
(61) SI002 (第58図、図版10)

遺跡北部、150-19・28・29・39、15P-20グリッドに位置し、南北方向に長い隅丸方形を呈する。コーナーは北側の方が南側より角張っている。長軸4.35m、短軸3.95m、深さ28cmを測る。覆土は黒褐色土が主体である。ピットは検出されなかった。炉は床面中央に位置し、やや東西方向に長い楕円形を呈する。長軸75cm、短軸70cm、深さ18cmを測る。覆土・底面の状況は不明である。

遺物は、覆土上層を中心に土器・土製品・石器が出土した。時期は3c期であろう。

土器 (第58図、図版30・36)

1は口径21.4cm、現存高22.5cmを測る。口縁部はほとんど全周し、胴部は約1/4が遺存する。4単位 of



第58图 (61)S1002

低い山形突起が付き、口縁部と胴部に2条の低い不明瞭な隆線による渦巻文ないしは楕円文を施す。口縁部文様は6単位で、楕円文が1単位、右に巻き込む渦巻文が2単位、左に巻き込む渦巻文が3単位である。胴部文様は大型の渦巻文が1単位残るが、おそらく2単位配したものと思われる。梶山類であるが、前掲(61) S1001の1に比べて文様の退化傾向が認められる。2・3も梶山類であろう。4は2重沈線による逆U字状文を施す。5・6は同一個体で口縁直下の無文帯を指頭状の凹線で画する。波状突起を持つらしい。7は幅広の磨消懸垂文を施す。8は多方向の縄文を施した小型土器の胴下破片である。9は櫛歯条線を地文として口縁下に円形刺突文を施す。拓影下端には横位の沈線区画が認められる。10・11は同一個体で、櫛歯条線文を施す。いずれも加曾利E3式新段階であろう。

土製品 (第58図、図版44)

12~16は土製円板である。12は小型の孔が開くが、裏面からの穿孔が勝る。周縁の磨りは13が深い。12はやや浅く、16は浅い。14・15は打ち欠きのみである。

石器 (第58図、図版45)

出土した剥片石器の石材は全てチャートである。17・19・20は凹基無茎鏃で、19は片脚が欠損している。18は石鏃未成品である。図示した以外では、石鏃未成品1点、剥片4点、碎片1点が出土した。

(61) S1005 (第59図、図版10)

遺跡北部、16Q-11・12・21・22グリッドに位置する。南東側は確認トレンチにより削平されていた。東側も壁の掘り込みは確認できなかった。ピットの配列から、炉を中心とした円形で、長軸6.9m以上の住居跡と推測される。ピットは8か所検出された。調査時には(61) S1005のピットと認識されず、P066~P073と呼称されたものである。P6 (P071) は浅いが、それ以外は深さ53cm~86cmを測り、支柱穴と捉えられるものである。炉は南北方向に長い楕円形を呈する。南側の側面は擾乱により失われており、長軸約95cm、短軸78cm、深さ37cmを測る。底面は火熱により硬化していた。覆土は焼土を多量に含む。底面の東側には深さ15cmのピットがある。西側の側面中央付近には、土器の胴部を切り取ったものを斜めの状態で埋設していた。土器内の堆積土は粒子の細かい軟質の暗褐色土である。

遺物は、炉内から土器・土製品・石器が出土した。時期は3a期であろう。

土器 (第59図、図版30・36)

1は炉体土器である。胴部の3/4が遺存する。内面全体及び外面上端の破損部は二次的の火熱を受けて荒れている。磨消懸垂文の幅はやや広い。2は口縁部破片で、杵状文ないしは渦巻文を配する。3・4は磨消懸垂文で1と同様幅がやや広い。いずれも加曾利E3式古段階であろう。

土製品 (第59図、図版44)

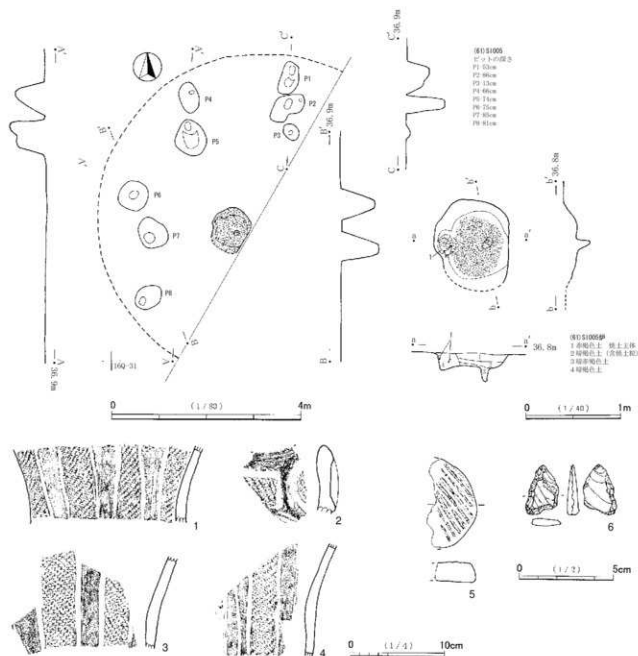
5は土製円板の欠損品である。

石器 (第59図、図版45)

6はチャート製の石鏃未成品である。図示した以外ではチャートの剥片1点・削片1点、黒曜石の剥片1点、ガラス質黒色安山岩の碎片が出土した。

(61) S1006 (第60図、図版10)

遺跡北部、15Q-14・15・24・25グリッドに位置する。調査時は住居跡と認識されなかったが、炉(SD004)、ピット2基(P16・P83)が近接するため住居跡と判断した。平面形は楕円ないし卵円形と想定される。ピットのうち、北側のP1 (P083) は、径約30cm、深さ23cmを測り、土器の胴部が正位で埋設されていた。南



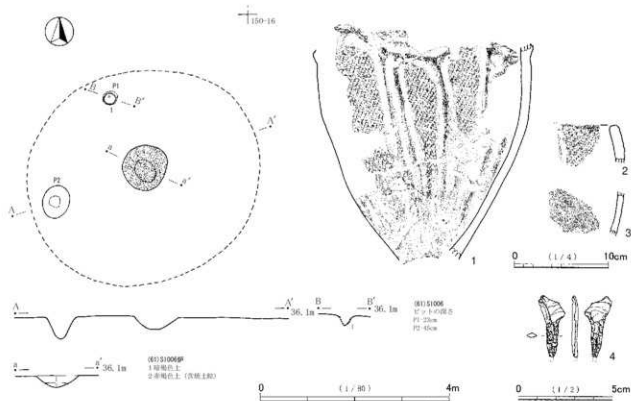
第59図 (61)S1005

側のP2 (P016) は楕円形を呈し、長軸68cm、短軸58cm、深さ45cmを測る。炉 (S0004) はほぼ円形を呈し、径約95cm、深さ27cmを測る。底面から北側の側面は火熱により硬化していた。

遺物は、P1から土器、炉内から土器・石器が出土した。時期は3c期であろう。

土器 (第60図、図版30・36)

1は埋壺と思われる、胴下部はほぼ完存するが底部が抜けている。内面は二次的火熱を受け、荒れが著しい。現存高22.5cmを測る。文様は隆線による逆U字状文が接続する甌山類である。2・3は炉内からの出土である。2は太い沈線による逆U字状区画文を施す。3は飾菌条線文である。2は加曾利E3式中段階、



第60図 (61)S1006

1は加曾利E3式新段階であろう。

石器 (第60図、図版45)

石器は全て炉内から出土した。4はチャート製の石錐で、つまみ部が一部欠損している。図示した以外では、チャート製の剥片3点・砕片2点、ガラス質黒色安山岩の剥片1点・砕片1点、黒色頁岩の砕片15点、硬質頁岩の砕片1点が出土した。

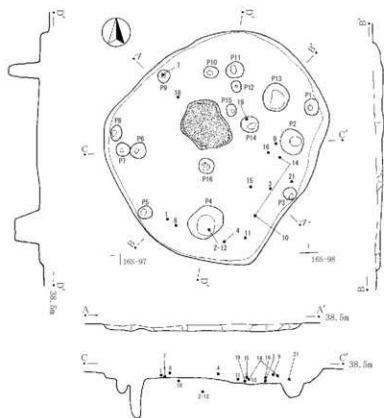
(62) S1001 (第61図、図版10・11)

遺跡北東部、16S-77・86・87・88グリッドに位置する。南北方向に長い卵円形を呈し、長軸4.90m、短軸4.37m、深さ32cmを測る。ピットは16か所検出された。深さは9cm～82cmで、50cm以上のものは、西側の壁付近に配列される。覆土は暗褐色土が主体である。炉は床面中央の北寄りに位置する。不整な卵円形を呈し、長軸1.34m、短軸95cm、深さ18cmを測る。底面の北寄りに火熱による硬化面がみられた。

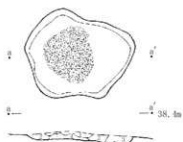
遺物は、南東側を中心に覆土下層中から多量の土器・石器が出土した。2・12はP4内から出土した。時期は1a期であろう。

土器 (第61・62図、図版30・36)

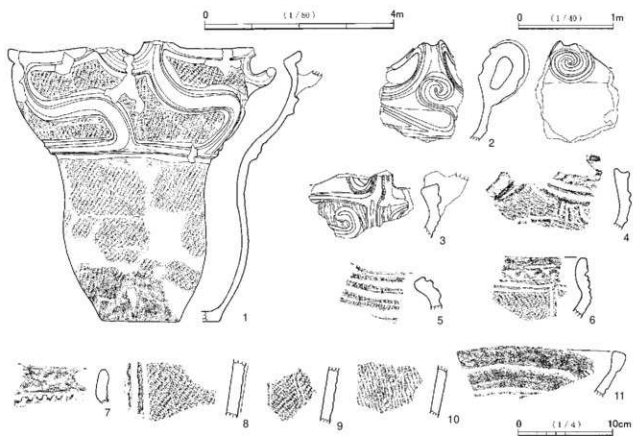
1は口縁部から底部まで約1/2が遺存するが、口縁突起と底面を欠く。口縁部文様帯に幅広の背割れ隆帯でクランク文を施す。胴部は縄文のみである。2は橋状突起を持つ口縁部破片で、口縁部文様帯に巡る隆線が突起部で立ち上がって渦巻文となる。突起裏面にも隆線による渦巻文が付く。3も欠損した眼鏡状突起を持つ。突起の孔に沿って尖頭の棒状工具による押し引き文を施す。突起下の口縁部文様は集合沈線を地文として背割れ隆帯による半渦巻文である。4も突起を欠く口縁部破片で、背割れ隆帯と細隆線で口



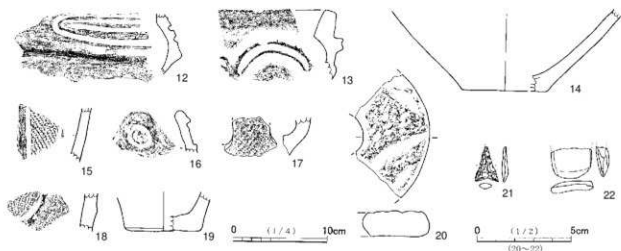
- | | |
|--|--|
| <p>(62)S1001</p> <p>1 塚台上 (C-ト-山形溝)</p> <p>2 塚台上 (C-ト-山形溝)</p> <p>3 塚台上 (C-ト-山形溝)</p> <p>4 塚台上 (C-ト-山形溝)</p> | <p>(62)S1001</p> <p>C-ト-山形溝</p> <p>P1 25cm</p> <p>P2 23cm</p> <p>P3 21cm</p> <p>P4 21cm</p> <p>P5 23cm</p> <p>P6 20cm</p> <p>P7 20cm</p> <p>P8 23cm</p> <p>P9 24cm</p> <p>P10 11cm</p> <p>P11 16cm</p> <p>P12 22cm</p> <p>P13 18cm</p> <p>P14 18cm</p> <p>P15 12cm</p> <p>P16 22cm</p> |
|--|--|



- (62)S1001 塚
- 1 塚台上 (土物上層)
- 2 塚台上 (C-ト-山形溝上層)
- 3 塚台上 (C-ト-山形溝上層)
- 4 塚台上 (土物上層)



第61図 (62)S1001 (1)



第62図 (62)SI001 (2)

緑部文様を施す。5は多条の隆線上に細かな刻目を付ける。6・7は口縁下に交互刺突文を配する。6にはその下に沈線による区画文を施す。8・9は胴部破片で、8には隆線の懸垂文を、9には半截竹管内側による平行沈線で蛇行文と懸垂文を施す。10には結節縄文が認められる。11~14は浅鉢である。11・12は沈線による文様を、13には背割れ隆帯による文様を施す。14は推定底径9cm、現存高8.2cmを測る大型破片である。15は磨消懸垂文を施す。16は舌状の突起片で、突起の中央に凹文を配する。17は縄文のかかった橋状突起片である。18は微隆起線による区画文が認められる。19は底部で内面には炭化物が付着している。底部縁辺には使用による荒れが残る。1~14は加曾利E1式古段階、15・16は同3式、18は同4式であろう。

土製品 (第62図、図版44)

20は土製円板である。大型の欠損品で、表裏両面から均等に孔が開く。周縁の磨りは深い。

石器 (第62図、図版45)

21は黒曜石製の凹基無茎鎌である。22は粗粒玄武岩製の定角式磨製石斧の刃部片である。図示した以外では、黒曜石製の石鏃1点・剥片1点・砕片14点、安山岩の磨石類の破片3点、石英斑岩製の磨石類の破片1点が出土した。

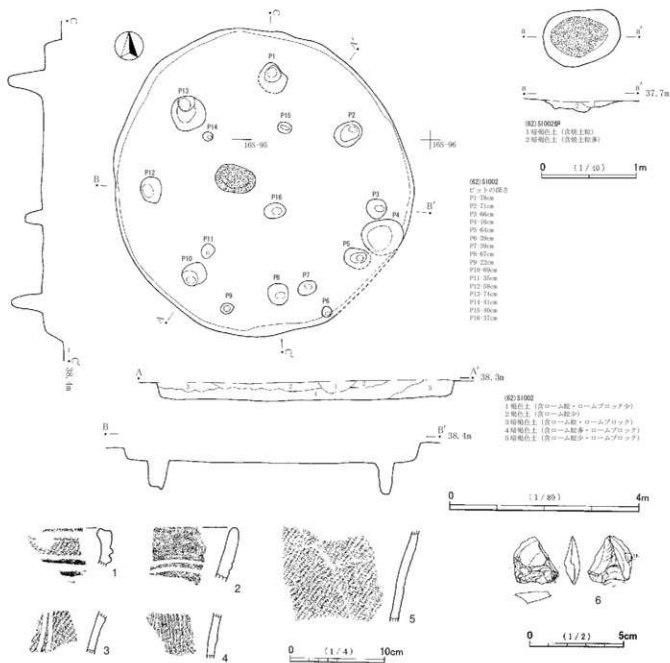
(62) SI002 (第63図、図版11)

遺跡北東部、16S-84・85・94・95グリッドに位置する。円形を呈し、長軸6.33m、短軸6.20m、深さ49cmを測る。ピットは16か所検出された。深さ16cm~71cmを測る。深さ60cm以上のものは、P1~P3・P5・P8・P10・P12・P13の8か所あり、70cm~1.40m間隔で円形に配置され、主柱穴と考えられる。覆土は、上層は褐色土、下層は暗褐色土を主体とし、ロームブロックを含む。炉は楕円形を呈し、長軸70cm、短軸85cm、深さ16cmを測る。底面は火熱により硬化していた。

遺物は土器・石器が少量出土した。全て一括で取り上げられているため出土状況は不明である。時期は1期であろう。

土器 (第63図、図版36)

1は口縁直下に隆線の縁取りがない。口縁部には背割れ隆帯が認められる。2は口縁直下に幅広の無文帯を持つ。3は懸垂文を施す。4は燃糸文、5は縄文のみ施す。1は加曾利E1式、2・3は加曾利E式



第63図 (62) S1002

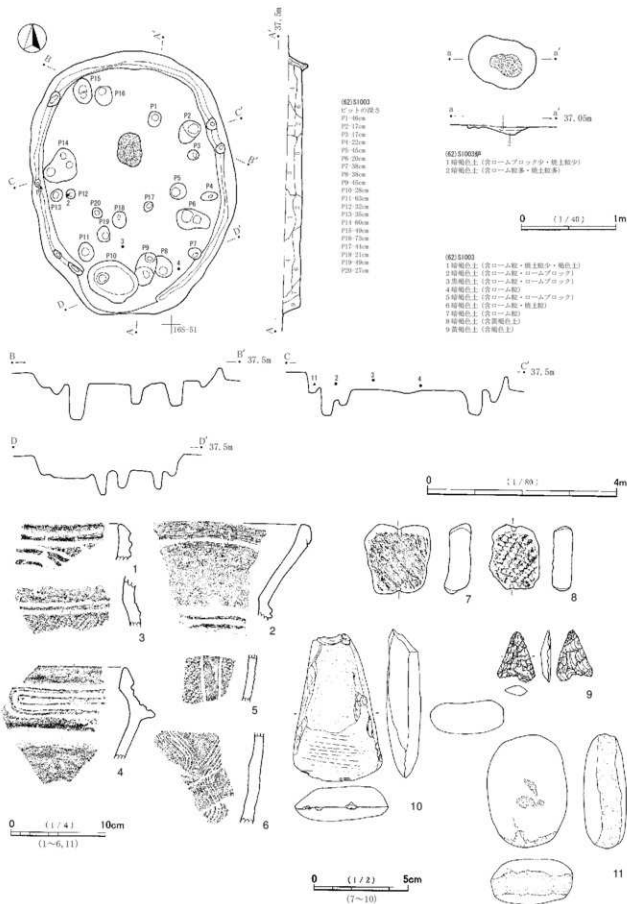
前半であろう。

石器 (第63図、図版45)

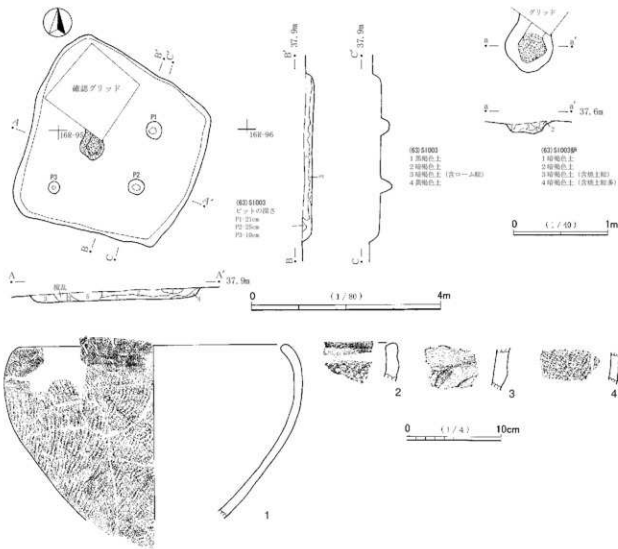
6はガラス質黒色安山岩製の石鏃未成品である。

(62) S1003 (第64図、図版11)

遺跡北東部、16S-30・31・40・41グリッドに位置する。楕円形を呈し、長軸5.54m、短軸4.35m、深さ32cmを測る。壁下には南側を除いて深さ5cm～20cmの周溝が掘り込まれるしっかりとした住居跡である。周溝内のピットは6か所あり、深さ約10cmを測る。床面のピットは20か所検出された。配列は不規則で



第64図 (62)S1003



第65図 (63)S1003

あるが、壁付近には比較的径の大きなものが配置されている。深さ17cm～73cmを測る。深さ38cm以上のものは支柱穴の可能性が高い。土坑状のP10は長軸1.10m、短軸83cmを測り、内部にはピットが1か所ある。覆土は暗褐色土を主体とする。炉は床面中央北寄りに位置し、楕円形を呈する。規模は長軸70cm、短軸50cm、深さ18cmを測る。底面は火熱により硬化していた。

遺物は土器・土製品・石器が出土した。図示したものは覆土中から出土したものが多く、時期は1期であろう。

土器 (第64図、図版36・37)

1は口縁部に隆線文様を施す。2は折り返し口縁で、頸部に背割れ隆帯を配する。3は同じく頸部に浅い2条の沈線を配する。4は口縁部に沈線文様を施した浅鉢である。5は磨消懸垂文、6は髷歯条線文である。1～4は加曾利E1式、5は加曾利E3式であろう。

土製品 (第64図、図版44)

7・8は土器片鏝である。いずれも長軸に擦り切りによる糸掛けが認められる。周縁は7には磨りが入

り、8は打ち欠きのみである。

石器 (第64図、図版45・46)

9は黒曜石製の石鏃未成品である。10は緑色岩製の磨製石斧である。刃部及び基部の一部が欠損している。11は安山岩製の磨石類である。表裏の中央に凹み痕があり、被熱している。図示した以外では、黒曜石の剥片3点、砂岩製の石皿1点、磨石類1点、チャート製の二次加工ある剥片1点が出土した。

(63) S1003 (第65図、図版11)

遺跡北東部、16R-84・85・94・95グリッドに位置する。逆台形を呈する。規模は長軸4.05m、短軸3.75m、深さ20cmを測る。覆土は暗褐色土を主とし、下層は黄褐色土を混入する。ピットは3か所検出された。北西側の下層確認グリッドの位置にもう1か所あったと推測され、4か所で主柱穴を構成していたものと思われる。深さは10cm～25cmを測る。炉は、床面中央の西寄りに位置する。北側の側面は確認グリッド方向に続いている。東西方向の規模は53cm、深さ22cmを測る。底面は中央付近が火熱により硬化していた。底面近くの覆土は大粒の焼土粒を多量に含んでいた。

遺物は、炉の東側を中心に土器が出土した。時期は3c期～4a期であろう。

土器 (第65図、図版37)

1は鉢で、口縁から胴下部の約1/4が遺存する。推定口径28cm、現存高18.3cmを測る。口縁直下を無文帯とし、以下の縄文施文部との境は不明瞭な沈線が巡る。2は太い沈線による杵状区画文を施す。3は2条の平行する隆起線区画が、4は磨消懸垂文が認められる。1は加曽利E3-4式、他は同3式であろう。

(65) S1001 (第66図、図版11)

遺跡北東部、19P-14・24グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形を呈する。北東側壁付近は掘乱により失われていた。規模は長軸3.42m、短軸2.75m、深さ28cmを測る。覆土は、上層は黒色土、下層はローム粒を多く含む黄褐色土が主体であった。ピットは中央北寄り、炉の北側に接して1か所検出された。径約40cm、深さ12cmを測る。炉は楕円形を呈し、長軸97cm、短軸76cm、深さ5cmを測る。覆土上層中に焼土が多く含まれていた。

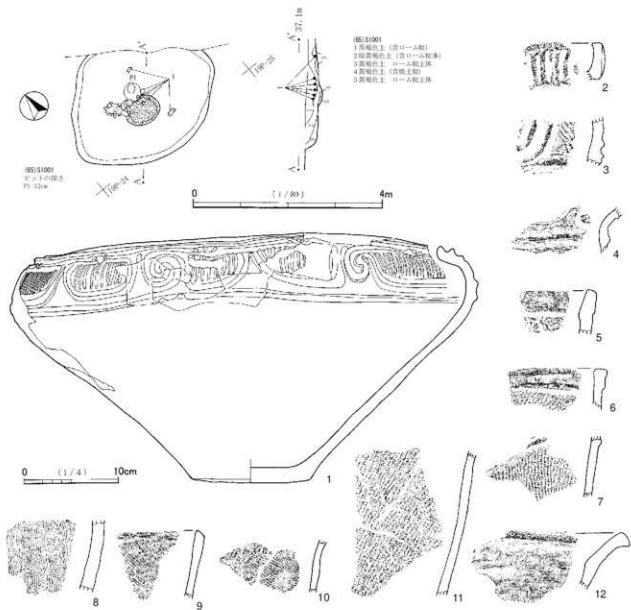
遺物は、覆土中から土器・石器が出土した。1の浅鉢は炉の北側からつぶれたような状態で出土した。時期は1a期であろう。

土器 (第66図、図版30・37)

1は口縁から底部までほぼ完存する浅鉢である。口径42.2cm、器高26.1cm、底径12.6cmを測る。底面は使用によりやや荒れている。口縁部文様は背割れ隆帯による杵状文の一端が半渦巻文となる文様を一単位として繰り返されるが、各単位は幅が一定ではなく一部は弧線文様となる。なお、杵状文の上部隆帯の中央には短い交互刺突文を配している。2～6は口縁部及び口縁部付近の破片である。2は深く深い沈線を多条に施し、一部は渦巻状になるかもしれない。いわゆる縦帯隆帯貼付土器の末期の類であろう。3は背割れ隆帯、4は深い沈線による文様を施す。5は肥厚した口縁部無文帯の下に懸垂文を施す。6も口縁部無文帯が肥厚する。7は口縁部文様帯の区画隆線が認められる。8は櫛歯条線文を施す。9・10は同一個体で、11とともに縄文のみを施す。12は浅鉢である。1は加曽利E1式古段階、他は加曽利E式前半であろう。

石器

図示できなかったが、黒曜石の砕片が2点出土した。



第66図 (65)S1001

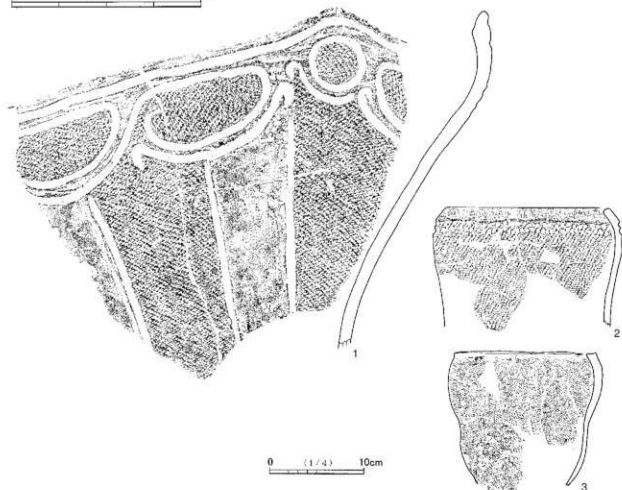
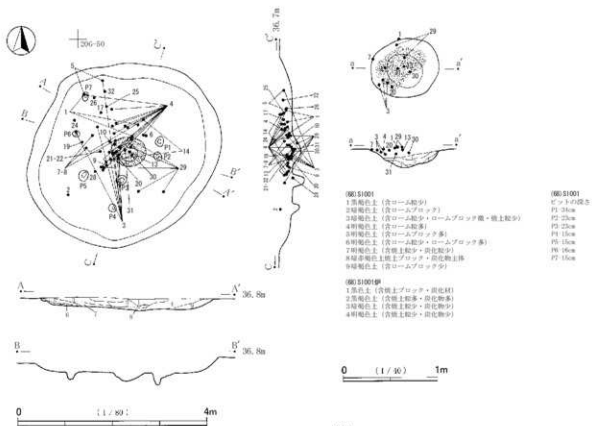
(68) S1001 (第67図、図版 11)

遺跡北西部、20F-59・69、20G-50・60グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長軸4.25m、短軸3.80m、深さ24cmを測る。覆土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土を主体とする。床面は硬く締まっており、P1の東側は窪んでいた。ピットは7か所検出された。配列は不規則である。炬に近い東側のP1～P3の3か所は深さ24cmを測る。炬は床面の中央付近に位置する。楕円形を呈し、長軸75cm、長軸65cm、深さ20cmを測る。底面は北西側が火熱により硬化していた。覆土は焼土・炭化物を含む。

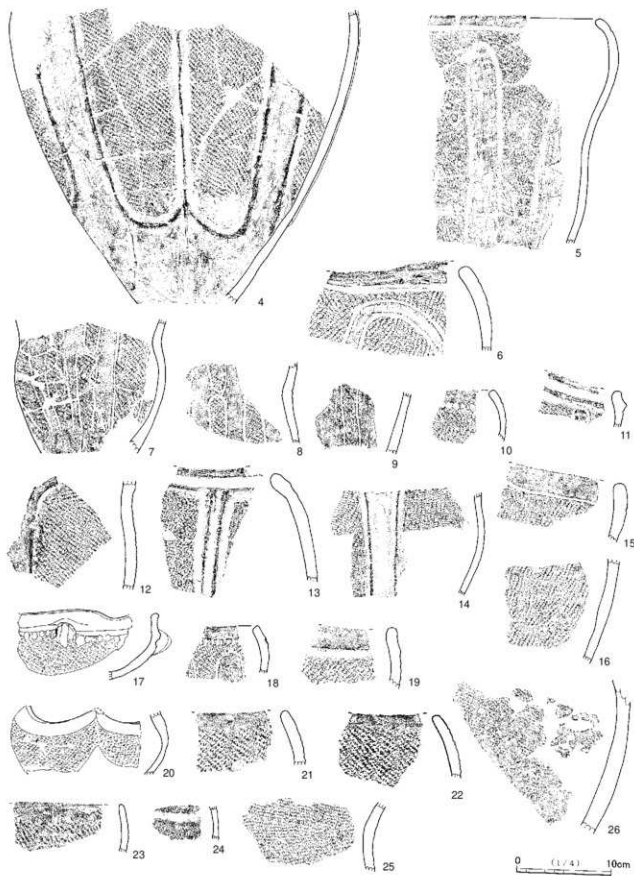
遺物は、北西側の覆土中を中心に土器・石器が出土した。時期は3c期と考えたい。

土器 (第67～69図、図版31・37)

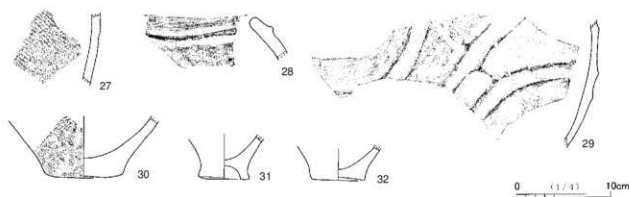
1は推定口径68.6cmを測る大型土器である。現存高は35.8cmである。口縁部文様帯は指頭による太い



第67図 (68)SI001 (1)



第68图 (68)SI001 (2)



第69図 (68)SI001 (3)

沈線で山形突起下に円文を配し、突起間は楕円状区画文となる。円文、楕円状区画文ともに蕨手文がからむ。胴部文様帯は幅のきわめて広い磨消懸垂文である。2は口縁から胴部にかけて約1/3が遺存する。推定口径17cm、現存高12.6cmを測る。口縁直下を無文帯として以下の縄文施文部との境に段を作り出し、円頭棒状の工具で刺突列を2段施す。3は口縁から胴下部にかけて約2/3が遺存する。口径15cm、現存高14.2cmを測る小型土器である。平坦な口縁端部に指頭で凹線を施すことによって、口縁直下との間に段を設ける。以下の縄文は条が細い。4は胴部から底部直上にかけて約1/3が遺存する。現存高31cmを測る。断面三角形の隆線でU字状文を連続して施す。いわゆる髷山類である。5は口縁から胴下部にかけての破片である。狭い口縁直下の無文帯を指頭による凹線で画し、以下はやはり凹線で逆U字状区画文を描いてその中を磨り消している。6は低い山形突起を持つ。口縁直下の無文帯を凹線で画し、その下に二重の太めの沈線で逆U字状区画文を施す。線描は稚拙である。

7・8は同一個体である。胴のくびれ部を境に対向するU字状、逆U字状区画文を2単位と、帯状区画文をくりかえし施す。区画沈線の線描は稚拙で、上下の区画文の対向位置も不揃いである。9も同類であるが、別個体である。10・11も稚拙な線描による逆U字状区画文を施し、区画文の外側に縄文を充填する。10は口縁直下の無文帯を凹線と縦長の刺突文で画する。11は同じく微隆起線で画するが、微隆起線は断面蒲鉾形である。12～14は隆起線による区画文様を施す。13はゆるい波状口縁で、14とともに区画文様は直線状である。いずれもいわゆる髷山類である。15は口縁直下の無文帯を細い沈線で画する。16は15と同一個体である。17は雑で低い山形突起を持つ。口縁直下の無文帯を沈線と棒状工具による円形刺突列で画し、口縁突起下には小さい橋状突起が付く。18も低い口縁突起を持つ。口縁直下の無文帯を太い沈線と円形刺突列で画する。19は波状口縁で、口縁直下の無文帯を凹帯状に調整し、その下を凹線で画する。20も波状口縁で、19と同様に口縁直下を凹帯状に調整している。21・22は同一個体で波状口縁を持ち、口縁直下を無文帯としている。23も同様である。24は口縁直下の無文帯を凹線で画し、その下に歯条線文を施す。25・26は縄文のみ、27は縄文の下に歯条線文を施す。26は器壁が厚く、大型土器であったと思われる。28・29は無文地に微隆起線で文様を施す。29の文様は大振りな渦巻文と思われる。30～32は底部で、内面に二次的熱による荒れが認められ、底面縁辺は使用による擦れが顕著に残る。31は高台付きの底部で、底面縁辺は欠けが多数残る。1・4・5・12は加曾利E3式新段階、2・3・6～11・15～23は同3-4式であろう。13・14も3-4式と考えたい。

石器

図示できなかったが、メノウ製の剥片1点、閃緑斑岩製の磨石類1点が出土した。

(68) S1002 (第70図、図版12)

遺跡北西部、20G-04・14グリッドに位置する。平面形は楕円形を呈する。南東側は掘乱石により失われていた。規模は長軸3.95m、深さ24cmを測る。覆土は焼土粒・炭化物を含む暗褐色土・明褐色土が主体であった。ピットは4か所検出された。深さ21cm～35cmを測り、支柱穴と捉えられる。炉はほぼ床面の中央に位置する。卵円形を呈し、長軸70cm、短軸60cm、深さ23cmを測る。底面は火熱によりやや硬化していた。覆土は上層は炭化物主体、中層は焼土主体、下層はロームブロックを含む暗褐色土が堆積していた。炉の周囲には北東側を中心に焼土と炭化物の分布がみられた。

遺物は、覆土中を中心に土器・土製品・石器が出土した。石器は石鏃のほか、剥片・砕片が多数出土した。時期は4a期であろう。

土器 (第70・71図、図版31・37・38)

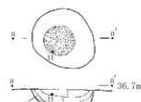
1は口縁から胴部にかけてほぼ全周する。口径17.6cm、現存高15cmを測る。口縁直下の幅の狭い無文帯を浅い沈線で画する。2も同様に口縁直下の幅の狭い無文帯を浅い沈線で画し、その下に櫛歯条線文を施す。口縁部が全周する。小型の土器で口径11.9cm、現存高6.9cmを測る。3は口縁直下につまみ状突起を持つ。縄文がかかる。突起の左右には内部が無文の杵状文を、突起下にはやはり内部が無文の逆U字状文を配する。4は報告済みの(29) S1710-3と同一個体と思われる。ゆるい波状口縁で、狭い口縁直下の無文帯を凹線と凹線からはみ出す円形刺突文で画する。その下には2条の沈線帯で内部無文の区画文様を描いている。渦巻ないしはJ字状の文様であったと思われる。線描は稚拙である。5・6は同一個体で、胴のくびれ部を境として上部にU字状、下部に逆U字状区画文を対向させ、縄文を充填している。7は5・6と縄文の充填が逆転している。8～10は隆線で文様を施すもので、いわゆる梶山類である。8は隆線が明瞭だが、9・10は細く直線的で文様も簡素である。11は口縁直下の無文帯が突起部でせり上がりつまみ状に盛り上がっている。無文帯は稚拙な沈線で画するが、沈線は突起下もそのまま直線的に引かれたため、突起との間に三角形の無文帯が形成されている。12～15は口縁直下の無文帯を指頭による凹線ないしは太い沈線で画する。12は凹線の上に細かい刺突列を配する。13は沈線の施文個所に段が付く。15の沈線以下は櫛歯条線文である。16は口縁直下の無文帯と以下の縄文施文部との境に不明瞭な段が付く。17～19は口縁直下に単に無文帯を設けるのみである。20・21は縄文のみ、22は櫛歯条線文のみ施す。23は微隆起線による逆U字状文が認められる。24・25は底部で、24は底面に使用による荒れが、破損部及び内面には二次的加熱による荒れが認められる。8は加曾利E3式新段階、23は同4式、他は3-4式であろう。

土製品 (第71図、図版44)

26は土製円板である。裏面からのみの穿孔で、周縁の磨りはやや浅い。

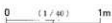
石器 (第71図、図版45・46)

27はチャート製の凹基無茎鏃である。28は黒曜石製の石鏃であり、未成品の可能性が。29は緑泥片岩製の台石である。表裏に凹み痕がある。30は安山岩製の石皿の破片である。表裏に凹面がある。図示した以外ではガラス質黒色安山岩製の楔形石器1点・剥片1点・砕片6点、チャート製の剥片1点・砕片3点、メノウ製の剥片・砕片各1点、黒曜石製の剥片1点、砂岩製の磨石類の破片1点が出土した。

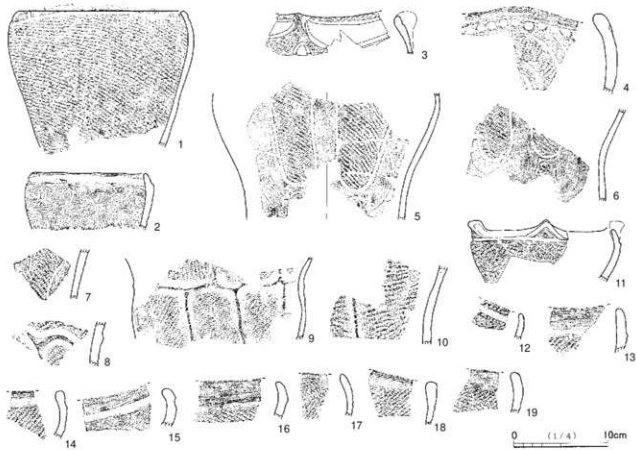
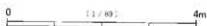


(88)SI000SP
 1 黒色土 (炭化物土床 (古墳上フットング))
 2 黒褐色土 (黒土層・黒土フットング土層 (古炭化物少))
 3 暗褐色土 (ロームブロック土層 (古墳土部少))

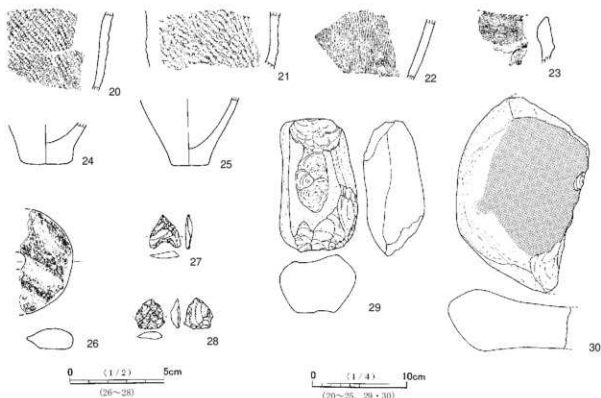
(88)SI002
 1 フットング部
 P1 25cm
 P2 25cm
 P3 35cm
 P4 25cm



(88)SI002
 1 黒褐色土 (古炭化物多)
 2 黒褐色土 (古墳土部多)
 3 暗褐色土 (古ローム部・黒土層・炭化物)
 4 明褐色土 (古ローム部多・黒土部少・炭化物少)
 5 明褐色土 (古ローム部多・砂粒・黒土部少・炭化物少)



第70図 (88)SI002 (1)



第71図 (68)SI002 (2)

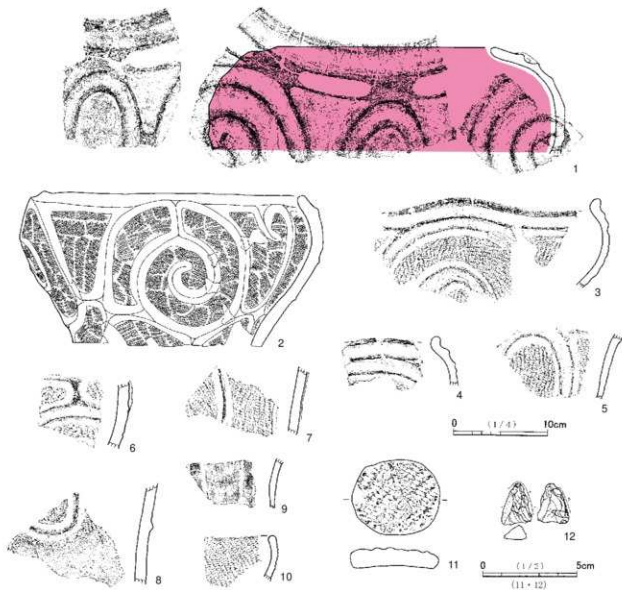
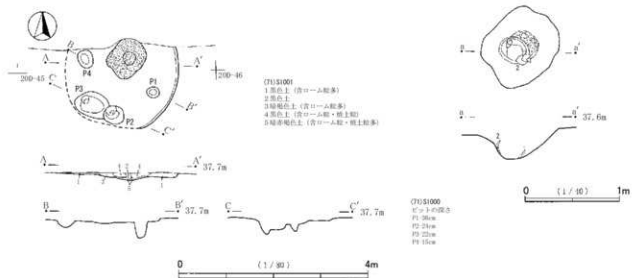
(71) SI001 (第72図、図版12)

遺跡北東部、20D-35・45グリッドに位置する。北側は近世の溝(71)SD003に切られていた。南東側も削平により壁をほとんど確認できなかった。平面形は円形と推測され、規模は径2.39m、深さ10cmを測る。覆土はローム粒を含む黒褐色土が主体で、中央の炉付近は焼土粒を含む。ピットは4カ所検出された。深さは15cm～36cmを測る。いずれも主柱穴となる可能性が高い。炉は床面のやや北側に位置すると思われる。楕円形を呈し、長軸80cm、短軸70cm、深さ30cmを測る。底面の中央やや南西よりに胴部以下を切り取った2カ所の長軸方向に傾かせた状態で埋設されていた。炉底面は火熱によって硬化していた。覆土は焼土をやや多く含む。

遺物は土器・土製品・石器が出土した。2以外は、出土状況は不明である。時期は3c期であろう。

土器(第72図、図版31・38)

1は有孔鈔付土器である。口縁部の約1/4が遺存する。推定口径22.6cmを測る。口縁直下の無文帯下に2条の隆起線を施し、ここに橋状突起風に幅広く低い隆帯を渡している。孔は串状の工具でこの隆帯に左右両方向から開けている。文様は無文地に微隆起線による大振りの渦巻文を施す。剥落部分が多いが、外面全体が赤彩されていたと思われる。2は口縁から胴部までほぼ完存する。口径27.4cm、現存高16.1cmを測る。口縁は二次的加熱によりやや荒れている。単隆線で大振りの渦巻文を4単位施す。各渦巻文は要所で連結し、渦巻文同士も連結しているが、1個所だけ間隔が開いたため小型の渦巻文を配している。いわゆる崑山類である。3～5は同一個体である。2条1単位の隆起線で2と同様の大振りの渦巻文を施す。6～8も同種の破片で、8は渦巻文の下端文様であろう。9は幅広い磨消懸垂文であるが、縄文帯が見え



第72図 (71)S1001

ない。10は縄文のみを施す。いずれも加曾利E3式新段階であろう。

土製品（第72図、図版44）

11は土製円板である。完存品で、周縁の磨りはやや浅い。

石器（第72図、図版46）

12はチャート製の石鏃未成品で、楔形石器素材を利用しており、同様のものがもう1点出土している。図示した以外では、チャート製の二次加工ある剥片1点、黒曜石製の剥片・碎片各2点、ガラス質黒色安山岩製の碎片1点が出土した。

2 土坑等

(61) SK001（第73図、図版13）

遺跡北部、16P-53・64グリッド付近に位置する。平面形は南北方向に長い不整な楕円形を呈する。長軸81cm、短軸60cm、深さ10cmを測る。覆土は記録を欠くが、1の土器の内面が火熱を受けていることから単独の炉跡と判断される。遺物は、覆土上層を中心に土器が出土した。1の土器は破片が散らばった状態で出土した。時期は3b期であろう。

土器（第77図、図版31）

1は口縁から胴部まで約1/2が遺存する。口縁及び内面の全体に二次的加熱によるあばた状の荒れが認められる。文様は口縁部文様帯に太い沈線による杵状文と上下に並ぶ凹点を施し、胴部は低い2条1単位の隆線で大振りの渦巻文を施す。加曾利E3式中段階であろう。

(61) SK002（第73図、図版13）

遺跡北部、150-76グリッドに位置する。平面形は不整な円形で、規模は長軸1.13m、短軸1.08m、深さ15cmを測る。遺物は、覆土中から土器・石器が出土した。時期は4a期と考えたい。

土器（第77図、図版38）

1は隆起線による大振りの渦巻文様を施すものであろう。器壁が厚く、大型の土器であったと思われる。2は底部が輪積み部分で脱落している。二次的加熱は弱い。細い隆線が垂下している。1とともにいわゆる甌山類であろう。3～6は同一個体である。口縁直下を無文帯とし、以下の縄文施文部との境は不明瞭である。胴下半部が櫛歯条線文となるらしい。7も口縁直下が無文帯となるが、縄文施文部との境に軽い段が付く。8は底部片である。1・2は加曾利E3式新段階、他は同3-4式であろう。

石器（第93図、図版45）

1は流紋岩製の凹基無茎鏃である。2・3はチャート製の石鏃未成品で、2は片脚が欠損している。図示した以外では、チャート製の剥片4点・碎片10点、黒曜石・流紋岩・ガラス質黒色安山岩の碎片が各1点出土した。

(61) SK003（第73図、図版13）

遺跡北部、150-46グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は、長軸1.30m、短軸1.20m、深さ55cmを測る。遺物は土器・石器が出土した。出土状況は不明である。時期は3c期であろう。

土器（第77図、図版38）

1は口縁直下の無文帯を沈線で画する。無文帯には磨り消された縄文が認められる。2は磨消懸垂文で

その幅は狭い。3はミニチュア土器で全体の1/3ほどが遺存する。推定口径5.5cm、器高5.4cmを測る。1は加曾利E3式新段階、2は同古段階であろう。

石器 (第93図、図版45)

4はガラス質黒色安山岩製の凹基無茎鏃で、両脚が欠損している。5～10はチャート製の石鏃未成品である。図示した以外では、チャート製の石鏃3点・石鏃未成品6点・剥片1点・砕片1点、黒曜石製の石鏃1点・石鏃未成品1点・砕片1点、ガラス質黒色安山岩製の石鏃1点・石鏃未成品2点・砕片1点、ホルンフェルス製の石鏃未成品1点・剥片1点・砕片1点、黒色頁岩の石鏃未成品1点が出土した。石鏃は片脚が欠損しているものが多い。

(61) SK006 (第73図、図版13)

遺跡北部、15Q-40グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、断面形はたらい状である。規模は、長軸1.15m、短軸1.08m、深さ47cmを測る。遺物は土器・石器が出土した。出土状況は不明である。時期は3期であろう。

土器 (第77図、図版38)

1は杵状区画の口縁部文様帯が認められる。加曾利E3式であろう。

石器 (第93図、図版45)

出土した石器の石材は全てチャートである。11は凹基無茎鏃である。先端部には刺突具に特有の縦溝状剥離がみられる。図示した以外ではチャートの砕片が1点出土した。

(61) SH007 (第73図、図版13)

遺跡北部、15Q-20・30グリッドに位置する。規模は、長軸91cm、短軸81cm、深さ43cmである。覆土は、茶褐色土の単一層であった。全体にローム粒・ロームブロックを含み、中層の7層は焼土・炭化物を含んでいる。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。時期は3c期～4a期であろう。

土器 (第77図、図版38)

1・2は同一個体である。幅広の口縁直下の無文帯を太い沈線で画し、以下に細かな飾歯条線文を施す。加曾利E3式新段階または3-4式であろう。

(61) SK009 (第73図、図版13)

遺跡北部、15P-14・15グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。側面はやや外反しながら立ち上がる。規模は、長軸1.45m、短軸1.30m、深さ75cmを測る。遺物はローム粒を含む褐色土を主体とする。遺物は覆土上層から土器が出土した。時期は3c期であろう。

土器 (第77・78図、図版31・38)

1は口縁部が約1/2、胴部が約3/4遺存する。推定口径41.5cm、現存高38cmを測る。口縁部の欠失部分は強い二次的加熱により滅失したと思われる。文様はいわゆる懸華状連接区画文で、4単位のゆるやかな山形突起下に円文を配し、その左右に杵状区画文を施す。胴部文様帯はきわめて広い磨消懸垂文である。2は山形の口縁突起破片である。両側縁に凹線を配し、正面には中央に垂下する太い沈線を左右にJ字状、逆J字状に分岐して施す。3は磨消懸垂文である。4は口縁部から胴部にかけて約1/3が遺存する。推定口径39.8cm、現存高26.8cmを測る。ゆるやかな山形の口縁突起は4単位と思われ、突起下には楕円区画文を配し、突起間の口縁部文様も楕円区画文になるようである。胴部文様帯は幅広の磨消懸垂文である。1・4は加曾利E3式新段階であろう。

(61) SH008 (第73図、図版13)

遺跡北部、16P-10グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸80m、短軸70cm、深さ17cmを測る。覆土はローム粒を含む黒褐色土である。遺物は底面上から石皿片が出土した。

石器 (第93図、図版46)

12は安山岩製の石皿の断片である。両面に凹みが多数みられる。

(61) SK038 (第73図、図版14)

遺跡北部、16P-47グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.25m、短軸1.15m、深さ40cmを測る。覆土はローム粒・ロームブロックを含む褐色土である。遺物は、土器が出土した。出土状況は不明である。時期は3c期～4a期であろう。

土器 (第78図、図版38)

1は幅広の口縁直下の無文帯を凹線で画し、以下に櫛歯条線文を施す。加曾利E3式新段階または3-4式であろう。

(61) SK040 (第73図)

遺跡北部、16P-18・19・28・29グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸93cm、短軸89cm、深さ30cmを測る。遺物は土器・土製品が出土した。出土状況は不明である。

土製品 (第92図、図版44)

1は土製円板である。裏面は剥落している。孔は両面から均等に開けられ、周縁の磨りは深い。

(61) SK044 (第73図、図版14)

遺跡北部、16P-05グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸93cm、短軸87cm、深さ27cmを測る。北西側の側面下には深さ40cmのピットがある。遺物は、覆土中から土器・石器が出土した。時期は3期であろう。

土器 (第78図、図版38)

1・2とも磨消懸垂文を施す。加曾利E3式であろう。

石器

図示できなかったが、チャートの砕片が3点出土した。

(61) SK047 (第73図)

遺跡北部、15P-96グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸95cm、短軸87cm、深さ41cmを測る。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。時期は3期であろう。

土器 (第78図、図版38)

1は磨消懸垂文を施す。地文は1Rの撚糸文である。加曾利E3式であろう。

(61) SH056 (第73図)

遺跡北部、15P-65グリッドに位置する。2基の土坑が重複するもので、東側をA、西側をBと呼称した。新旧関係は不明である。A・Bともほぼ円形で、規模は、Aは長軸75cm、短軸71cm、深さ26cmを測る。Bは長軸60cm、短軸59cm、深さ14cmを測る。平面形は楕円形で、規模は長軸1.49m、短軸1.29m、深さ58cmを測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器 (第78図、図版38)

1は口縁部文様帯に杵状区画文を施す。2は縄文と櫛歯条線文を並列して施す。加曾利E3式であろう。

(61) SH058 (第73図)

遺跡北部、15P-64グリッドに位置する小ピットである。平面形はほぼ円形で、径39cm、深さ23cmを測る。遺物は、土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器 (第78図、図版38)

1は胴下部の破片で、磨消懸垂文が不明瞭となっている。

(61) SK059 (第73図、図版14)

遺跡北部、15P-66グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.07m、短軸97cm、深さ21cmを測る。遺物は土器・石器が少量出土した。出土状況は不明である。時期は3c期～4a期であろう。

土器 (第78図、図版38)

1は波状口縁で、幅広い口縁直下の無文帯を浅い沈線で画し、以下に櫛歯条線文を施す。加曾利E3式新段階または3-4式であろう。

石器

図示できなかったが、チャートの破片が1点出土した。

(61) SK062 (第73図、図版14)

遺跡北部、15P-96・16P-06グリッドに位置する。平面形は南北に長い不整な楕円形で、規模は長軸1.57m、短軸1.00m、深さ36cmを測る。覆土は暗褐色土である。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。時期は3c期～4a期であろう。

土器 (第78図、図版38)

1は口縁部文様帯の杵状区画文がわずかに認められる。胴部は櫛歯条線文である。2は幅広い口縁直下無文帯を太い沈線で画し、以下に櫛歯条線文を施す。1は加曾利E3式でも新段階と思われる。2は加曾利E3式新段階または3-4式であろう。

(61) SK075 (第73図、図版14)

遺跡北部、16Q-92グリッドに位置する。平面形は南北方向に長い卵円形で、規模は長軸1.55m、短軸1.15m、深さ33cmを測る。遺物は土器が少量出土した。時期は3期であろう。

土器 (第78図、図版38)

1は磨消懸垂文を施す。加曾利E3式であろう。

(61) SK082 (第73図、図版14)

遺跡北部、15Q-87・97グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸76cm、短軸72cm、深さ25cmを測る。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。時期は3期であろう。

土器 (第78図、図版38)

1は磨消懸垂文を施す。加曾利E3式であろう。

(61) SH113 (第73図、図版14)

遺跡北部、16P-65・66・75・76グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸76cm、短軸64cm、深さ71cmを測る。遺物は土器・土製品・石器が出土した。出土状況は不明である。時期は3期であろう。

土器 (第78図、図版38)

1は胴下部の破片で、磨消懸垂文が不明瞭となっている。器壁の厚さが20mmあり、きわめて大型の土器であったと思われる。加曾利E3式であろう。

土製品 (第92図、図版44)

2・3は土製円板である。周縁の磨りは2は浅く、3は深い。いずれも磨消懸垂文が認められる。

石器

図示できなかったが、チャートの剥片が1点出土した。

(62) SK005 (第73図、図版14)

遺跡北東部、16R-68グリッドに位置する。平面形は卵円形である。規模は、長軸1.25m、短軸93cm、深さ33cmを測る。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。

土器 (第78図、図版38)

1は縦位施文の縄文を施す。

(62) SK007 (第73図、図版14)

遺跡北東部、16R-68グリッドに位置する。平面形は卵円形である。規模は、長軸95cm、短軸70cm、深さ38cmを測る。底面はやや凹凸がある。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。時期は1期であろう。

土器 (第78図、図版38)

1は不明瞭な青割れ隆帯が認められる。加曾利E1式であろう。

(62) SK009 (第74図、図版15)

遺跡北東部、16S-69・79グリッドに位置する。平面形は東西方向に長い楕円形である。断面形は袋状で、側面中位から大きくオーバーハングする。開口部の東側は崩落したものとみられるが、本来の底面は西側に偏在したと思われる。規模は、開口部の長軸2.60m、短軸2.10m、底部の長軸2.42m、短軸2.00m、深さ1.33mを測る。南西側側面下に長軸1.00m、短軸52cm、深さ8cmのビツが掘り込まれている。覆土は、上・中層はローム粒を含む褐色土、下層はロームブロック主体の黄褐色土が堆積していた。遺物は、覆土中層を中心に土器・石器が出土した。1・17・20は東側の底面上から出土した。時期は1a期であろう。

土器 (第78・79図、図版32・38・39)

1は口縁から胴部にかけて約1/4が遺存する。推定口径19.6cm、現存高15cmを測る。表裏面とも二次的加熱によりあばた状の荒れが残る。外反する口縁下に無文帯を置き、胴部は縄文地に雑な沈線による文様を施す。2は断面三角形の隆起線の下にフネガイ科の貝殻腹縁による刺突文を施す。3は胴下部の文様帯下端の破片で刻み付きの曲線区画隆帯と沈線による文様が認められる。4・5は口縁突起で、4は頂部が平坦な山形突起の中央に隆線が垂下し、沈線を充填している。5は舌状の突起で、沈線が太い沈線が突起の縁に沿って施し、縄文が突起縁に巡る。突起側縁にも沈線を施す。6は胴下部の文様帯下端の破片で、文様帯区画沈線の上に三角形の沈線が認められる。7は立体的な大型突起である。隆帯により外面は8字状、内面は眼鏡状に作る。8は浅鉢で口縁下をくびらせて、くびれの下に交互刺突文を施す。上の交互刺突文は斜めに刺突しているため、楔状の文様に見える。下の交互刺突文は沈線を伴っており、左端欠損部近くで沈線が上向きに回り込んでいる。9も屈曲した口縁部を持つ。屈曲部には青割れ隆帯を貼り付け、その上縁には短沈線を施し、外反した口縁との間には交互刺突文を入れている。10は低い山形の口縁突起下に隆線を貼り付け、その下には波状の沈線文様を施す。11は口縁部文様帯に低い隆線で弧状の区画文様を施し、胴部には幅広い磨消懸垂文を施す。12は磨消懸垂文である。13は口縁部から胴部にかけての破片と思われ、上端には横位施文の縄文を施す。胴部は荒れて分かりにくい、無文と思われる。14は縄文のみ、15は結節縄文が2列見える。16は大型の浅鉢で、口縁から内面の段にかけて赤彩が残る。17～20

は底部である。17は底径10cmを測る大型土器の底部である。底面、外面の胴下部、内面のほぼ全体に二次的加熱によるあばた状の荒れが顕著に残る。文様は遺存部の上端に磨消されない懸垂文が認められる。19は欠損部付近に二次的加熱による荒れが見える。文様は半截竹管による3条1単位の懸垂文を10単位以上狭い間隔で施す。18はほぼ全体に二次的加熱を強く受け、脆くなっている。20は底面の一部から破損部にかけて二次的加熱を受ける。2は阿玉台2式、1・3～5・7は勝坂式末期、8～10はいわゆる中峠式ないしは加曾利E1式古段階、11～13は加曾利E3式であろう。

石器

図示できなかったが、安山岩・砂岩製の磨石類の断片3点、黒曜石の剥片1点が出土した。

(62) SK010 (第74図、図版15)

遺跡北東部、16S-58・68グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は袋状で、側面中位付近よりオーバーハングする。規模は、開口部の長軸1.92m、短軸1.88m、底部の長軸2.23m、短軸2.08m、深さ98cmを測る。底部の南東側には深さ50cmのピットが1か所掘り込まれている。覆土は、上層はローム粒を含む褐色土・暗褐色土、下層はロームブロックを多量に含む黄褐色土が主体であった。遺物は、覆土中から土器・石器が出土した。時期は1a期と考えたい。

土器 (第79図、図版32・39)

1は隆線の両脇に2条の沈線が添う。隆線上にも縄文が付く。拓影右端には小刻みな蛇形沈線が見える。2は縄文地に垂下する2条の押引文が認められる。押引文は先端が丸みを持つ工具をロッキングしながら施文している。3は縄文地に蛇形沈線が垂下する。4は口縁部文様帯の枠状区画文の一部であろう。5は底部が完存する。底径10.4cmを測る。底面、内面とも二次的加熱により荒れている。1は阿玉台4式、2はいわゆる中峠式、3・4は加曾利E式であろう。

石器

図示できなかったが、斑巖製の水皿の断片が1点出土した。

(62) SK011 (第74図、図版12)

遺跡北東部、16S-57・67グリッドに位置する。平面形は楕円形である。規模は、長軸2.15m、短軸1.93m、深さ25cmを測る。北側の側面下は幅約1m、高さ25cmほどテラス状に掘り残されている。南側の側面下には径約75cm、深さ25cmのピットが掘り込まれている。覆土は暗褐色土・暗褐色土を主体とし、ローム粒・ロームブロックを多く含む。遺物は土器・石器が出土した。1の土器は南側の床面上から横位でつぶれた状態で出土した。時期は1a期であろう。

土器 (第80図、図版32・39)

1は口縁部の1/4弱を欠くほか、ほぼ完存する。口径46cm、器高46.8cm、底径8.8cmを測る。口縁の一部及び欠損部周辺に二次的加熱による荒れが認められる一方、底面には使用による荒れはほとんど認められない。口縁突起は4単位で、対向する突起同士が同一形態となる。一方の突起は幅広で平坦な口縁端部から鏡り上がった2尖の突起で、もう一方は上方に貫通する管状突起となる。どちらの突起も基部に貫通孔を開けている。文様は2条の隆線が突起間を弧状に結び、これと胴上部の横位区画隆線とを2条の縦位隆線が結んでいる。どちらの隆線にも沈線を両脇に伴う。2条の弧状隆線のうち上位の隆線は突起下の貫通孔の上を巡り、最も垂れ下がった所で口縁に向かって枠状に分岐しており、こうしてできた空間には集合沈線を充填している。下方の隆線は突起下で半渦巻文となる。隆線は各所で剥落し、その下には地文の縄

文が残っている。2は杵状の区画隆線の両脇に2条の沈線が添う。隆線上にも縄文が付く。3は欠損した眼鏡状突起部分の破片である。沈線及び刻み目で縁取りしている。4は口縁部文様帯を2条の隆線で区画し、文様帯内を集合沈線で充填している。5はくびれ部に指頭圧痕の付いた隆帯を貼り付け、口縁部には櫛歯条線文を施す。口縁直下は荒れていて不明確であるが、縄文の付いた低い隆帯があるらしい。6は口縁直下に交互刺突文を施す。7は口縁部の縄文帯の下を沈線で区画した後、細い背割れ隆帯でフック状の文様を施す。胴部には縦走する縄文地に沈線文様が認められる。8は背割れ隆帯による口縁部区画文と区画内に渦巻文を施す。9は口縁部文様帯に背割れ隆帯でクランク文を施す。10も同様で、集合沈線を充填している。11は縄文のみの胴部破片、12は櫛歯条線文の胴下部破片である。13は無文の浅鉢で、推定口径39.2cmを測る。外反した口縁下に帯状に赤彩を施し、その下の内折部では赤彩で楕円文を描く。内面にも赤彩が残る。14は橋状突起の上部が欠損している。縄文地に細く鋭い沈線が口縁直下の狭い無文帯を画した後、橋状突起を縁取り、さらに胴上部で抱球文を描く。1・3は在地の勝坂式、2は阿玉台4式、4～6はいわゆる中峠式、7～10は加曾利E1式古段階であろう。14は明らかに混在で、加曾利E3-4式であろう。

石器

図示できなかったが、黒曜石製の二次加工ある剥片1点、チャート製の剥片1点が出土した。

(62) SK012 (第74図、図版15)

遺跡北東部、16S-75・85グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部の長軸1.60m、短軸1.48m、底部の長軸1.67m、短軸1.38m、深さ93cmを測る。側面は北側にやや偏ってオーバーハングする。覆土は、上層はローム粒を含む褐色土、中層はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土、下層はロームブロックを含む黄褐色土に分けられる。遺物は、覆土上・中層を中心に土器・石器が出土した。時期は1a期であろう。

土器 (第81図、図版32・39)

1は口縁の一部と胴下部を欠くほかは完存する。口径20.4cm、現存高26cmを測る。大小2個の突起が対向する。大型の突起は眼鏡状突起が欠損していると思われ、小型の突起は基部に孔が開く。文様は口縁部と胴部の境を隆帯で区画し、口縁部には2条1単位の押引文が各突起下及び突起間では2個所、合計6単位垂下している。胴部も同様の押引文を施すが口縁部と対応しておらず、合計5単位である。押引文の施工具は半截竹管で、下から上に向かって押し引きしている。2～5は突起片である。2は左右で大きさの異なる耳状の突起を貼り合わせている。縄文のかかった隆帯による楕円区画文が一部に残る。区画文内には集合沈線を施す。3は橋状突起で、上部には欠失しているがさらに突起が続く。4も橋状突起で、突起の付け根には上下とも貫通孔が開く。突起の左右には交互刺突文と集合沈線を施す。5は2尖の突起である。6は縄文地に十字状の磨り消し文様を施す。(62) SK013-27と同一個体である。7は蛇行沈線と懸垂文を施す。1は在地の勝坂式、2・3・6も勝坂式、4はいわゆる中峠式であろう。

石器

図示できなかったが、黒曜石製二次加工のある剥片1点が出土した。

(62) SK013 (第74図、図版15)

遺跡北東部、15S-68・69グリッドに位置する。平面形は南北方向に長い楕円形である。規模は、長軸2.85m、短軸2.45m、深さ99cmを測る。覆土は、上層の1・2層はローム粒・ロームブロック・炭化物を含む暗褐色土、

下層の3・4層は黄褐色土が主体であった。遺物は、覆土上層の2層を中心に遺存状態の良好な多くの土器・石器が出土した。時期は1a期であろう。

土器 (第81・82図、図版32・39・40)

1は内折した口縁を持つ円筒型の器形である。推定口径17cm、現存高12.8cmを測る。口縁からU字状の区画沈線と渦巻文を垂らし、胴部に横位区画沈線を施してその間を磨り消している。(10) SK305-1と接合した。2は4単位の波状突起を持つ。胴部以下を欠損するほかはほぼ完存する。口径27.8cm、現存高27.6cmを測る。文様は口縁部に刻みの付いた隆帯で杵状文を施し、中を集合沈線で充填している。隆帯には沈線が添う。胴部は縄文のみである。3は胴下部以下を欠くほかは完存する。欠損部付近は二次的加熱を受けて荒れている。粗雑な造りで、口縁に厚みを持たせ、口縁直下には輪積み痕跡を残す。縄文のみ施す。4は外削ぎの口縁を持ち、その下の縄文を指頭で縦に磨り消している。(62) SK012-6と同一個体である。5は眼鏡状突起を口縁に乗せる。口縁部文様は隆線による杵状文内に交互刺突文と集合沈線を施す。頸部には横位区画隆線下に歯条線文を施す。6は眼鏡状突起を持つ口縁部である。内面には隆帯で縁取った孔が貫通し、頂部にも貫通した小孔が開く。突起下から派生した背割れ隆帯が口縁下の短刻沈線帯を画している。7は背割れ隆帯で渦巻文と交互刺突文を組み合わせている。8は山形文様が展開する。隆帯による半渦巻文が付き、口縁部文様帯にはこれと連結したクランク状の背割れ隆帯文様が展開する。9～11も口縁部文様帯に背割れ隆帯によるクランク文と集合沈線を施す。12・13も背割れ隆帯を口縁部文様帯に施す。14は単隆線による半渦巻文を口縁部文様帯に施す。欠損した口縁直下の隆帯下には押引文が沿う。15・16は懸垂文と蛇形沈線を施す。15は懸垂文から渦巻文が派生している。17は小型土器で、口縁端部に背割れ隆帯による半渦巻文を配し、口縁部には平行沈線の間を開けて2段施す。18・19は縄文のみ、20・21は歯条線文を施す。22は浅鉢の口縁部破片である。約1/2が遺存する。推定口径44cmを測る。口縁部は内湾し、口縁の内側に稜を持つ。23～25も浅鉢で、23・24は同一個体である。23は内面の稜の部分に赤彩の痕跡が残る。25は2尖の突起が付くと思われる。口縁端部から内面の稜にかけて赤彩の痕跡が残る。26～28は底部である。27は内面に、28は底面に二次的加熱による荒れが残る。1・4は勝坂式末期、2は在地の勝坂式、5・7はいわゆる中峠式、6・8～12は加曽利E1式古段階であろう。

石器 (第93図、図版46)

13は砂岩製の定角式磨石斧弁である。刃部が欠損している。14は信州系の黒曜石製の石鏃未成品である。脚部が欠損している。15はホルンフェルス製の磨石類である。図示した以外では黒曜石製の剥片2点、石核1点、砂岩製の磨石類1点、石英の剥片1点が出土した。

(62) SK014 (第74図、図版15)

遺跡北東部、15S-53・63グリッドに位置する。2基の土坑が重複したもので、北側をA、南側をBと呼称した。北側が南側より新しい。いずれも平面形はほぼ円形で、断面形は袋状を呈する。規模は、(62) SK014Aは開口部の最大径1.54m、底面の最大径1.67m、深さ83cm、(62) SK014Bは開口部の最大径1.70m、底面の最大径1.80m、深さ85cmを測る。覆土は、北側の(62) SK014Aはローム粒・炭化物を含む暗褐色土が主体である。遺物は土器・石器が少量出土した。一括で取り上げられたため、A、Bいずれに帰属するのは不明である。時期は1a期と考えたい。

土器 (第82図、図版40)

1は背割れ隆帯と集合沈線が認められる。隆帯の両脇には先端が丸みを持つ工具による押引文が沿う。

2・3は同一個体で、2は口縁直下、3は頸部の破片である。どちらも沈線区画を施す。4は浅鉢である。1～3は加曾利E1式で、1は古段階であろう。

(62) SK015 (第74図、図版15)

遺跡北東部、16S-35・45グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸2.40m、短軸2.20m、深さ49cmを測る。ピットは底面中央付近に1か所ある。深さ35cmを測る。遺物は、覆土中から土器が出土した。時期は1a期であろう。

土器 (第83図、図版40)

1は口縁部の下部から胴下部にかけての大型破片である。口縁部には斜位の集合沈線を施し、頸部には2条の刻み目の付いた隆帯と沈線による区画を配する。2は三角突起が付く口縁部破片である。突起には貫通孔が斜めに開く。口縁部文様は背割れ隆帯によるクランク文と集合沈線である。3は浅鉢で、口縁から体下部にかけて1/2弱が遺存する。推定口径22.9cm、現存高11cmを測る。平坦で厚みのある口縁に赤彩の痕跡が残る。1は勝坂式ないしはいわゆる中峠式、2は加曾利E1式古段階であろう。

(62) SK016 (第74図、図版15)

遺跡北東部、16S-24グリッド付近に位置する。北西側は調査区外に及んでいた。平面形は楕円形、規模は短軸1.26m、深さ50cmを測る。断面形はたらい状である。覆土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土が主体である。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。時期は1期であろう。

土器 (第83図、図版40)

1は口縁部文様に波状隆線を施す。2は半截竹管による平行沈線と蛇行文と懸垂文を施す。3は櫛歯条線文である。1は加曾利E1式、2は同E式前半であろう。

(62) SK018 (第74図、図版15)

遺跡北東部、16S-33グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、断面形は袋状である。規模は、開口部の長軸2.20m、短軸1.95m、底面の長軸2.32m、短軸2.30m、深さ40cmを測る。覆土は、上層は褐色土、中層は暗褐色土、下層は黄褐色土が主体で、いずれもローム粒・ロームブロックを含む。遺物は、覆土中層を中心に土器が出土した。時期は1a期であろう。

土器 (第83図、図版32・40)

1は櫛歯条線文を地文として隆線による渦巻文を施す。2は(62)SK020-2と接合した。接合した状態でここに掲載する。背割れ隆帯による渦巻文と集合沈線を施す。3は浅鉢で、底部直上は二次的加熱により荒れており、その上は炭化物が厚く付着している。1は勝坂式、2は加曾利E1式古段階であろう。

(62) SK019 (第75図、図版15)

遺跡北東部、16S-42グリッド付近に位置する。平面形はほぼ円形、断面形は袋状である。規模は、開口部の長軸1.65m、短軸1.05m、底面の長軸2.32m、短軸2.30m、深さ40cmを測る。西側の側面下にはピットが3か所掘り込まれている。中央の最も深いP2は深さ47cmを測る。覆土は、上層は焼土・ロームブロックを含む暗褐色土、中層は大きめのロームブロックを含む黄褐色土、下層はロームブロックを多く含む暗褐色土が堆積していた。遺物は、北東側の覆土中から土器・土製品が出土した。時期は1a期であろう。

土器 (第83図、図版32・40)

1・2は同一個体であるが、接合しない。推定口径16.5cm、現存高14cmである。突起は欠損するが、小型で中央に貫通孔が開く。突起の形状に沿って口縁部に2条平行する隆線を配する。上の隆線には幅の

狭い押引文が沿い、下の隆線にはへらによる刻み目が付く。胴部は先端が丸みを持つ工具による押引文が2条1単位で垂下する。押引文は胴部中段で途切れたり、一部破手状に派生している。3・4も同一個体である。小型の山形突起を中心に多截竹管内側による沈線で縦横に展開する文様を施す。口縁下で横位に展開する沈線には交互刺突文が伴い、胴部では蛇行沈線も施している。(10) SK572-1と接合し、(10) SK547-3と同一個体である。5は弧状の隆帯に沿って2列の太い刺突文を施す。6は背割れ隆帯の一方にへらによる刻み目が付く。7は舌状の突起に半渦巻文が付く。突起頂部には粘土紐を2本貼り付けている。8～10は底部である。8は内面全体に二次的加熱によるあばた状の荒れが顕著に残る。9も内面が同様に荒れ、底面の縁辺は使用による荒れが認められる。10は小型土器である。11は浅鉢である。口縁端部に赤彩の痕跡を残す。1～6は在地の勝版式、7は加曾利E1式古段階であろう。

土製品 (第92図、図版44)

4～6は土器片鏟である。いずれも完存品で、長軸に擦り切りによる糸掛けを作り出すが、5の下端側は不明瞭である。

(62) SK020 (第75図、図版15)

遺跡北東部、16S-42・52に位置する。平面形は楕円形、断面形はたらい状である。規模は長軸2.08m、短軸1.76m、深さ50cmを測る。覆土は黒・暗褐色土を主体とし、下層は大きめのロームブロックを含む。遺物は覆土中から土器・石器が出土した。時期は1a期であろう。

土器 (第83図、図版40)

1は口縁部と胴部との区画沈線と胴部の弧状沈線文様を施す。2は接合したため(62) SK018-2と合わせて掲載した。1は加曾利E1式、2は同式古段階であろう。

石器 (第93図、図版45)

16はチャート製の楔形石器である。図示した以外では黒曜石の剥片が1点出土した。

(62) SK022 (第75図、図版12)

遺跡北東部、16S-32グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は袋状である。規模は、開口部の長軸2.25m、短軸1.83m、底面の長軸1.73m、短軸1.61m、深さ1.03mを測る。覆土は上・中層はローム粒・焼土を含む暗褐色土、下層はローム粒・ロームブロックを含む。遺物は、覆土中層を中心に完形数個体を含む多量の土器・石器が出土した。時期は1a期であろう。

土器 (第84～86図、図版33・34・40)

1は口縁から底部までほぼ完存する。口径41.7cm、器高55.7cm、底径12.4cmを測る。内外面とも胴上部以下は二次的加熱を受け、荒れや脆くなった個所が多い。文様は口縁部、頸部、胴部の各文様帯に区分される。口縁部は背割れ隆帯による円文を6単位中段に配し、これを隆線による対向弧線でつなぎ、空間には集合沈線を充填している。文様帯の上端は頸部、胴部文様に用いた半截竹管による刺突列で画し、下端は2条の隆線で画する。頸部は半截竹管による平行沈線で波状文を中段に配し、その上下を2条から4条の平行沈線で画する。なお、上段の沈線は末端でずれが生じたため、弧線で連結させている。また、下段の沈線は胴部文様帯の懸垂文と一体化している。胴部文様は3条1単位の懸垂文間に蛇行沈線を施す。蛇行沈線は8単位である。2は口縁突起1個、胴部の一部を欠くほかほぼ完形である。口径37.1cm、器高42.8cm、底径9.6cmを測る。胴下部は二次的加熱により欠損または脆くなっている。口縁突起は3個とも同型である。左右で大きさの異なる耳状の突起を貼り合わせ、下半は眼鏡状突起となる。突起の上面観は

三角形で、裏面には貫通孔が開く。口縁部文様は眼鏡状突起から続く杵状隆帯区画を沈線で縁取り、集合沈線を充填している。杵状区画の下縁は断続的な交互刺突文を施す。胴部は全面縄文である。3は胴下部を欠くほかは完存する。胴下部に二次的加熱によるひびが認められる。口径31.6cm、現存高26.6cmを測る。4個の波状突起下に突出した渦巻文を配し、突起間に刻み目と断続的な交互刺突文を施す。胴部は全面縄文である。4は二次的加熱によって欠損した胴下部から底部にかけての一部を除き、完存する。口径21.1cm、器高26.6cm、底径9cmを測る。口縁に沿って隆帯が巡り、4個の波状突起下で半渦巻文を形成するが、1か所は円文である。胴部は全面縄文である。5はひびが入るが欠損はなく、完形である。口径19cm、器高32cm、底径8cmを測る筒型の土器である。胴下半に二次的加熱による荒れが顕著に残り、煮炊きによってひびが入ったため廃棄されたと考えられる。二次的加熱による荒れは口縁部の隆帯部分にも見られ、煮炊き時の火熱の高さは土器の高さにまで十分達していたことが分かる。なお、底面縁辺には使用による擦れと欠けが認められる。口縁には小型の山形突起が3個乗る。刻み付きの隆帯が口縁を巡り、各突起に環状に貼り付く。胴部には突起下に刻み付きの背割れ隆帯が垂下する。6は口縁から底部まで約1/2が遺存する。口径18.6cm、器高38cm、推定底径8.6cmを測る。口縁突起は1個が残る。眼鏡状突起で、内面にも貫通孔が開く。眼鏡状突起は左の孔が沈線と刻み目で縁取り、右側の孔は三角形をなし沈線で縁取る。口縁部文様は2条の隆線と胴部と区画し、突起下には隆線で短刻沈線を充填した円文を配する。区画内には沈線で半渦巻文や二重弧線文を施す。胴部には雑な2条の波状文を施すが、突起下でずれが生じている。7は各所に小さい欠損があるが、ほぼ完形である。口径23cm、器高29.7cm、底径11cmを測る。底面は使用による擦れが認められる。厚手の粗雑な作りで、乾燥時の管理が不十分であったため、器体が横に傾いている。無文の口縁下に半截竹管による刺突文を施した隆帯が巡り、以下に懸垂文と蛇行沈線を不規則に施す。8は口縁から胴上部までの大型破片2個からなる。あわせて1/2強が遺存する。推定口径22cm、現存高12.5cmを測る。軽く内湾した口縁部の下に指頭圧痕の付いた隆帯が巡るほかは、縄文のみである。9は胴部から底部まで欠損が各所にあるが器形を復元できた。現存高16.1cm、底径6.6cmを測る小型土器である。全面に縄文を施す。10は胴部から底部にかけて1/3程度が遺存する。現存高20cm、推定底径8cmを測る。胴下部から底部にかけて二次的加熱を受ける。櫛歯条線文を全面に施す。11は眼鏡状の口縁突起である。孔は沈線で縁取る。内面も眼鏡状突起となる。12は筒型の器形で、口縁に隆線で半渦巻文を施す。13は口縁部に幅広の無文帯を設け、区画隆帯の下に交互刺突文を施し、胴部に垂下する沈線と連結している。口縁端部及び隆帯上には深い刻み目が間隔をあけて付く。14は口縁直下の肥厚した無文帯下に交互刺突文を施す。15も交互刺突文を施す。16は口縁直下が肥厚している。17は口縁端部が肥厚し、刻み目と2条の沈線を施す。18は舌状の口縁突起を持つ。突起部には2条の沈線で半円文を施す。口縁下には隆帯が巡り、口縁との間につまみ状の小突起と連結した2条の沈線を施す。19は単隆線、20は背割れ隆帯により口縁部文様を施す。19には集合沈線を充填する。21は縄文のみの胴部破片、22～27は底部である。22は底の内面に二次的加熱によるあばた状の荒れが、23には底部縁辺に使用による擦れが認められる。22の胴下部文様は多条の沈線がV字に交差する。24・25は内面が二次的加熱によりあばた状に荒れており、25の底面には灰が付着する。27は2条1単位の懸垂文を施す。5・6は在地の勝坂式、2・3はいわゆる中峠式、1・19・20は加曾利E1式古段階、4・7は加曾利E1式古段階の半粗製土器、他の破片も同時期であろう。

土製品 (第92図、図版44)

7・8は土器片鏝である。いずれも完存品で、ともに長軸上端に擦り切りによる糸掛けを作り出しているが、7の下端は打ち欠きによるもの、8の下端は摩滅で不明瞭である。

石器（第93図、図版46）

17は安山岩製の磨石類である。図示した以外では石英製の楔形石器1点・剥片1点、黒曜石製の剥片1点が出土した。

(62) SK024・(62) SK025（第74図、図版15・16）

遺跡北東部、16S-31グリッドに位置する。(62) SK024が(62) SK025の南東側を切っている。(62) SK024は、平面形は楕円形、断面形は袋状である。規模は、開口部の長軸2.25m、短軸1.83m、底面の長軸2.43m、短軸2.18m、深さ1.03mを測る。覆土はローム粒・ロームブロックを含む褐色土・暗褐色土を主体とする。西側の壁際に部分的に浅い溝がみられる。覆土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土が主体である。(62) SK025は平面形がほぼ円形の小竅穴である。規模は、長軸3.47m、短軸3.43m、深さ35cmを測る。東側側面下に深さ25cmのビットがある。遺物は、(62) SK024は覆土上・中層を中心に土器・石器が出土した。(62) SK025は土器が少量出土したが図示できなかった。(62) SK024の時期は1a期であろう。

土器（第87図、図版34・40）

(62) SK024の1は口縁から胴下部にかけての大部分が遺存する。口径14cm、現存高15.2cmを測る小型土器である。全体に二次的加熱を受け、あばた状に荒れた所が多い。口縁を厚く作り、その下に背割れ隆帯で波状文様を施す。2は胴下部から底部の1/2強が遺存する。推定底径10.6cmを測る。内面のほぼ全体が二次的加熱によるあばた状の荒れが残る。3は背割れ隆帯による眼鏡状突起に隆線による半渦巻文が連結する。空隙には集合沈線を施す。1・3は加曾利E1式古段階であろう。

石器

(62) SK024からは、図示できなかったが黒曜石製の二次加工ある剥片1点が出土した。

(63) SK002（第75図、図版16）

遺跡北東部、17Q-58グリッドに位置する。北西側は掘乱により側面付近が失われていた。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は径約1.2m、深さ40cmを測る。覆土は、上層は暗褐色土、下層は黄褐色土が主体である。いずれもロームブロックを含み、北側から流れ込んだような堆積状況を示す。遺物は土器が少量出土した。出土状況は不明である。

土器（第87図、図版40）

1は櫛歯条線文の施文後、縄文を施す。加曾利E3式～4式であろう。

(63) SK005（第75図、図版16）

遺跡北東部、17R-30グリッドに位置する。平面形はほぼ円形である。規模は長軸1.16m、短軸95cm、深さ24cmを測る。西側の側面下に深さ40cmのビットが1か所ある。覆土は、ローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土・黒褐色土が主体で、ビット部分には径36cm、深さ40cmの柱痕跡状の黒色土の堆積がみられた。遺物は土器・石器が出土した。土器1は底面上から出土した。時期は3c期～4a期であろう。

土器（第87図、図版40）

1は口縁から胴下部にかけて約1/4が遺存する。推定口径18.4cm、現存高16.2cmを測る。口縁直下の無文帯を指頭による浅く太い沈線で画する。加曾利E3式新段階～3-4式であろう。

石器

図示できなかったが、信州系の黒曜石の剥片1点が出土した。

(64) SK001 (第75図、図版16)

遺跡北東部、17L-17に位置する。平面形は楕円形、規模は長軸1.93m、短軸1.75m、深さ77cmを測る。断面形はたらい状であるが、側面中位で大きく開く。覆土はローム粒を含む暗褐色土・黒褐色土が主体である。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。時期は3c期であろう。

土器 (第87図、図版40)

1は口縁直下を無文帯としている。2は2条の区画沈線内を無文としている。3～5は隆起線で大振りの渦巻文を施すいわゆる髷山類であろう。6は髷歯条線文、7は微隆起線文である。7は加曾利E4式、他は同3式新段階であろう。

(65) SK001 (第75図、図版16)

遺跡北東部、19P-33・43グリッドに位置する。平面形はほぼ円形である。規模は長軸1.75m、短軸1.43m、深さ75cmを測る。覆土は、上層はローム粒を含む黒色土、下層はローム粒主体であった。遺物は土器が出土した。土器2は北西側の覆土下層から出土した。時期は1a期であろう。

土器 (第87図、図版34・40)

1は胴の一部と口縁部を欠く。現存高24.1cm、底径8cmを測る。胴の欠損部周辺は二次的加熱により脆くなっている。胴部全体に2条1単位の沈線で重層的な杵状文ないしは縦位のクランク文を施し、胴下部の一部には蛇行沈線を加えている。上端に口縁部文様帯とを区画する青割れ隆帯が残る。2は口縁部下から底部直上まで1/3程度が遺存する。内外面とも二次的加熱によるあばた状の荒れが残る。地文の縄文を除き、口縁部と胴部を区画する青割れ隆帯を施すのみである。3は刻み目の付いた口縁部と胴部の区画隆帯の上に沈線文様が認められる。4・5は同一個体である。口縁は低い波状をなし、肥厚して交互刺突文と刻み目を施す。外反する口縁部は広い無文帯で、胴部との区画には交互刺突文を施す。

6は隆起線による杵状文と太い沈線による弧状の文様が残る。7は肥厚した口縁部下に懸垂文が認められる。8は胴下部の破片で、半截竹管内側による沈線を間隔とあけて施す。9は縄文のみ施している。10は底部破片で、底部縁辺は使用による擦れが顕著に残る。1は木大8a式にきわめて近い。前半期であろう。3は勝坂式、4・5はいわゆる中鉢式、2・6・7は加曾利E1式であろう。

石器

図示できなかったが、黒曜石の破片が2点出土した。

(66) SK001 (第75図、図版17)

遺跡北部、18L-23グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長軸1.47m、短軸1.31m、深さ80cmを測る。断面形はたらい状である。遺物は土器が出土した。1は底面中央付近から出土した。出土状況は不明である。時期は4a期であろう。

土器 (第88図、図版41)

1は波状突起を持ち、微隆起線で画した口縁直下の無文帯は突起部分でつまみ状に盛り上がる。突起下の文様は沈線による抱球文である。2・3は同一個体で、縄文のみを施す。1は加曾利E3-4式で、中段階であろう。

(66) SK007 (第76図)

遺跡北部、18L-88・98グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は長軸98cm、短軸95cm、深さ32cmを測る。

遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第88図、図版41）

1は微隆起線による弧状区画内に縄文を施す。加曾利E4式であろう。

(66) SK008（第76図、図版17）

遺跡北部、18L-89グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸99cm、短軸95cm、深さ55cmを測る。遺物は土器・石器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第88図、図版41）

1は幅の広い口縁直下の無文帯と以下との境に軽い段が付く。2は縄文を浅く施す。1は加曾利E3-4式であろう。

石器

図示できなかつたが、チャート製の剥片が1点出土した。

(66) SK009（第76図、図版17）

遺跡北部、18L-12グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形たらい状である。規模は長軸1.15m、短軸1.10m、深さ50cmを測る。遺物は覆土中から土器が出土した。時期は4a期であろう。

土器（第88図、図版35・41）

1は口縁から底部まで約1/2が遺存する。口径22cm、器高30.3cm、推定底径7cmを測る。外面は口縁の膨らんだ箇所から底部まで、内面は胴のくびれ部以下に二次的加熱による荒れが顕著に残る。底面縁辺は使用による著しい擦れが認められる。口縁直下の無文帯を指頭によって強くなでつけ、以下の縄文施文帯との境に段をつけている。2は断面蒲鉾状の隆線による区画文様が見える。3～5はいずれも口縁直下に無文帯を持つが、無文帯の作出がみな異なる。4は沈線で区画し、3は磨り消すのみである。5は口縁を軽く折り、以下との境に不明瞭な段を付ける。口縁部から胴部にかけては内部を磨消した沈線区画文様が見られる。2を除き加曾利E3-4式であろう。

(66) SK014（第76図、図版17）

遺跡北部、18L-57グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.06m、短軸86cm、深さ58cmを測る。北側にピットがあり、側面外に張り出す。深さは底面よりわずかに深い。本来は別の遺構が重複したものである可能性が高い。遺物は、土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第88図、図版41）

1・2とも2条の隆起線による弧状区画内に縄文を充填する。いわゆる髷山類である。加曾利E3式新段階であろう。

(66) SK016（第76図、図版17）

遺跡北部、18L-71グリッドに位置する。平面形は卵円形で、規模は長軸1.28m、短軸88cm、深さ55cmを測る。遺物は、土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第88図、図版41）

1は単隆線による弧状区画内に縄文を充填する。いわゆる髷山類である。加曾利E3式新段階であろう。

(66) SK017（第76図、図版17）

遺跡北部、18L-90グリッドに位置する。平面形は南北方向に長い卵円形で、規模は長軸1.68m、短軸1.32m、深さ60cmを測る。底面は北側で段を有し、10cmほど深くなり、さらに南東側に向かって徐々に深くなっ

ている。遺物は覆土中から土器・石器が出土した。時期は3c期であろう。

土器（第88図、図版41）

1・2は隆起線による大振りの渦巻文が展開するいわゆる梶山類である。3は太めの沈線によるU字、逆U字状の区画内に縄文を施す。4は波状突起に沿って施した沈線上に棒状工具による円形刺突文を施す。刺突列下には区画沈線が認められる。5は浅鉢の口縁部破片である。1～3は加曾利E3式新段階、4は同3-4式であろう。

石器（第93図、図版45）

19はチャート製の凹基無茎鏃である。先端部が欠損している。図示した以外はチャート製の石鏃の片脚片1点・剥片1点が出土した。

(66) SH001（第76図）

遺跡北部、18L-46グリッドに位置するビットである。規模は長軸48cm、短軸42cm、深さ57cmを測る。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第88図、図版41）

1は弧状区画内に縄文を充填する。いわゆる梶山類である。加曾利E3式新段階であろう。

(66) SH004（第76図）

遺跡北部、18L-57グリッドに位置するビットである。規模は長軸43cm、短軸35cm、深さ75cmを測る。遺物は土器・石器が少量出土した。

石器（第93図、図版45）

18は流紋岩製の凹基無茎鏃である。

(68) SK003（第76図、図版18）

遺跡北西部、20F-17グリッドに位置する。平面形は卵円形である。規模は長軸2.40m、短軸2.00m、深さ35cmを測る。底面には大型のビットが1基ある。径1.15m、深さ35cmを測る。遺物は覆土上層を中心に土器が出土した。出土状況は不明である。時期は3c期であろう。

土器（第88図、図版41）

1は小型の土器で、口縁部無文帯を画する隆起線と胴上部の隆起線文様を連結する短隆線が認められる。2は胴のくびれ部の破片で、胴下部には内部を磨り消した太く浅い沈線による逆U字状文を施す。胴上部には同様の沈線によるU字状文の一端が残る。1・2とも加曾利E3式新段階であろう。

(68) SK004（第76図、図版18）

遺跡北西部、20F-18グリッドに位置する。北東側約1mに(68) SX002、南東側70cmに(68) SK005が近接する。平面形はほぼ円形で、規模は長軸1.21m、短軸1.10m、深さ15cmを測る。北西側の覆土上層に焼土の分布がみられた。遺物は、中央付近から1の土器の胴部から底部が埋設され、その周囲の覆土上層から土器・石器が出土した。時期は3期であろう。

土器（第88図、図版35・41）

1は胴部から底部にかけてほぼ完存する。底径6cm、現存高24.5cmを測る。内面はほぼ全面が二次的加熱によるあばた状の荒れが認められる。文様は3条1単位の磨消懸垂文を6単位施す。2は2条の細い隆起線による弧状文様が認められる。いずれも加曾利E3式で、2は新段階であろう。

石器（第93図、図版45）

20～23はチャート製の石織末成品である。図示した以外では、ガラス質黒色安山岩製の二次加工ある剥片1点、チャートの剥片2点、黒曜石の剥片1点が出土した。

(68) SK005・(68) SK006 (第76図、図版18)

遺跡北西部、20F-18グリッドに位置する。東西に2基の土坑が重複する。新旧関係は調査時では不明であった。西側の(68)SK005は、平面形は南北方向に長い楕円形、規模は長軸1.40m、短軸約1.2m、深さ60cmを測る。断面形はたらい状である。東側の(68)SK006は、平面形はほぼ円形、規模は長軸1.10m、短軸約1.1m、深さ65cmを測る。断面形はたらい状である。北東側に焼土の分布がみられた。遺物は、(68)SK005は覆土中層を中心に土器が出土した。(68)SK006は覆土中層から土器・土製品が集中して出土した。(68)SK006の時期は4a期であろう。

土器 (第88・89図、図版35・41)

(68)SK005の1は口縁部文様帯に隆線による枠状区画を施すと思われる。2は内湾する口縁部を持ち、櫛歯条線文を施す。いずれも加曽利E3式、おそらく中～新段階であろう。

(68)SK006の1は口縁部がほぼ全周し、胴部は1/2弱が遺存する。口径12.5cm、現存高17.4cmを測る小型土器である。胴下部に二次的加熱によるあばた状の荒れが残る。対向する波状突起が付く。口縁直下を巡る無文帯は指頭による強いなでで凹線状をなし、以下の縄文施文部との境は明瞭な段となる。凹線は突起部でわずかに盛り上がる。2～4は隆起線で大振りの渦巻文などを施すいわゆる梶山類であろう。2は波状口縁となる。5は2条の沈線区画文の内部を磨り消している。右側の区画文は縦長の渦巻文で、左側の区画文はこれと異なる文様となる。6は縄文のみ、7は櫛歯条線文のみを施す。2～4は加曽利E3式新段階、1・5は同3-4式であろう。

土製品 (第92図、図版44)

(68)SK006の9は土製円板である。完存品で、周縁は打ち欠きのみである。

(68) SK007 (第76図、図版18)

遺跡北西部、20F-19・29、20G-10・20グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.70m、短軸1.48m、深さ1.00mを測る。遺物は、覆土中から多くの土器・土製品・石器が出土した。時期は3c期と考えたい。

土器 (第89図、図版35・41)

1・2は同一個体である。ともに内面には二次的加熱によるあばた状の荒れが残る。低い舌状の口縁突起を持つ。口縁部文様帯は、低い隆線で突起下に巻きのゆるい渦巻文を、両脇には枠状の区画文を配する。胴部文様帯は平行する2条の隆線が垂下する。3は上半が内部に縄文を充填したU字状文、下半が同じく逆U字状文を施す。区画沈線は線描が稚拙で、区画文様も不揃いである。4～6は断面三角形に近い隆起線を施す。7・8は口縁直下の無文帯を沈線で画する。7はその下に内部を磨り消した逆U字状の沈線区画文様を施す。1・2は懸架状連接区画文土器で、胴部はいわゆる梶山類の系統を引く文様である。4～6とともに加曽利E3式新段階であろう。3・7・8は同3-4式であろう。

土製品 (第92図、図版44)

10は土製円板である。完存品で、周縁の磨りはやや浅い。

(68) SK008 (第76図、図版18)

遺跡北西部、20F-19、20G-10グリッドに位置する。ほぼ円形の土坑の南側に浅い張り出しが付く形状で

ある。断面形はたらい状であるが、北側は側面中位で側面が屈折する。規模は、長軸2.00m、短軸1.01m、深さは、北側は77cm、南側は33cmを測る。遺物は北側の覆土中層から土器が出土した。時期は3c期であろう。

土器 (第89図、図版41)

1は磨消懸垂文ないしは逆U字状区画文であろう。2は口縁直下の無文帯を太く浅い沈線で画する。3～7は隆起線で大振りの渦巻文を施すいわゆる髷山類であろう。3の隆起線文様は簡素化した感がある。8は縄文のみを、9は口縁部が内湾した器形で縄文と櫛歯条線文を施す。大部分は加曾利E3式新段階であろう。

(68) SK009 (第76図、図版18)

遺跡北西部、20G-01グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は、長軸1.40m、短軸1.26m、深さ84cmを測る。遺物は、覆土中から土器・土製品・石器が多量に出土した。時期は3c期であろう。

土器 (第90図、図版35・41)

1は口縁から胴下部にかけて約1/2が遺存する。口径40.2cm、現存高34cmを測る。口縁部から胴上部、胴下部の上下2段とも断面三角形の隆起線で大振りの渦巻文を施す。渦巻の巻きはゆるく、要所で短隆線により連結している。いわゆる髷山類である。2～7も髷山類である。6・7は垂下した隆線文様で胴下半部のものである。8は幅広の磨消懸垂文である。9は口縁直下を狭い無文帯としている。10は口縁直下から縄文を施す。11は櫛歯条線文を施す。12は底部で、底面及び内面とも二次的加熱によるあばた状の荒れが残る。13は両耳壺の橋状突起片である。器壁の厚さ、突起の大きさからきわめて大型の土器であったと思われる。突起の上部は半渦巻文を作り出している。9は加曾利E3-4式、他は同3式新段階であろう。

土製品 (第92図、図版44)

11は土製円板である。孔が両面から開くが、裏面の穿孔が勝る。周縁の磨りは深い。

石器 (第93図、図版45)

24はホルンフェルス製の石錐である。図示した以外ではチャートの剥片が1点出土した。

(68) SK010 (第76図、図版18)

遺跡北西部、20G-20・21グリッドに位置する。平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は、長軸1.80m、短軸1.64m、深さ65cmを測る。遺物は覆土中から土器が出土した。出土状況は不明である。

土器 (第90図、図版41)

1は口縁直下の無文帯を太く浅い沈線で画する。以下の縄文は口縁部付近で羽状となる。2は縄文のみを施す。1は加曾利E3式新段階であろう。

(68) SK011 (第76図、図版18)

遺跡北西部、19G-92・93グリッドに位置する。平面形はほぼ円形である。規模は、長軸1.16m、短軸1.12m、深さ35cmを測る。遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。

土器 (第90図、図版41)

1は断面三角形に近い隆起線が認められる。2は縄文のみである。1は加曾利E3式新段階～4式であろう。

(68) SK014 (第76図、図版18)

遺跡北西部、20F-08グリッドに位置する。平面形は卵円形で、規模は、長軸1.14m、短軸1.01m、深さ22cmを測る。覆土は焼土が主体で、炭化物を混入する。炉跡と考えられるが、周辺に床面、ピットなどは検出されず、住居跡に伴うものとは断定できなかった。遺物は土器・石器が出土した。出土状況は不明である。時期は3c期と考えたい。

土器 (第90図、図版42)

1は隆線による区画文様を施すいわゆる椀山類である。2は浅い太めの沈線による逆U字状文が認められる。ともに加曾利E3式新段階であろう。

石器 (第93図、図版46)

25は石英安山岩製の石棒の頭部付近の破片である。図示した以外では、チャート製の石鏃1点・二次加工ある剥片1点・剥片1点が出土した。

(71) SK001 (図版18)

遺跡北西部、20E-82グリッドに位置する。平面形は円形である。規模は径96cm、深さ51cmを測る。遺物は、土器が出土した。出土状況は不明である。時期は4期であろう。

土器 (第91図、図版42)

1～3は同一個体である。胎土にすりつぶした土器片粒を含む。内面には二次的加熱によるあばたの荒れが残る。口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。4は胴下部の破片で、U字状の微隆起線文の内側を無文としている。5・6は同一個体である。太い沈線で曲線文様を施す。一部は縄文を充填した帯状文となるが、規則性がない。7は篩齒条線文である。いずれも加曾利E4式で、5・6は西日本系であろう。

(71) SK002 (図版 18)

遺跡北西部、20E-21グリッドに位置する。北西側に(71)SK003が接する。平面形はほぼ円形で、底面は南西側が深く、傾斜する。覆土は長軸2.40m、短軸1.90m、深さ55cmを測る。遺物は土器・土製品・石器が出土した。出土状況は不明である。時期は3c期であろう。

土器 (第91図、図版42)

1は幅広の磨消懸垂文である。2～4は隆起線による大振りの渦巻文様が展開するいわゆる椀山類である。5はその胴下部文様であろう。6は口縁直下の無文帯を微隆起線で画する。微隆起線は貼り付けであることが明らかに分かる。6は加曾利E3-4式～4式、他は同3式新段階であろう。

土製品 (第92図、図版44)

12～14は土製円板である。いずれも完存品で、12・14の周縁の磨りは浅く、13は打ち欠きのみである。

石器

図示できなかったが、チャートの剥片が1点出土した。

(71) SK003 (図版 18)

遺跡北西部、20E-21グリッドに位置する3基の土坑である。北側からA、B、Cと呼称した。A、Bは南北方向に重複する。新旧関係は不明である。(71)SK003Aは、平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は東西方向1.26m、深さ53cmを測る。(71)SK003Bは、平面形はほぼ円形、断面形はたらい状である。規模は東西方向約95cm、深さ46cmを測る。(71)SK003Cは、A・Bの約1m南西側に位置する。不整なほぼ円形を呈し、規模は長軸86cm、短軸77cm、深さ36cmを測る。覆土は焼土を多く含む。遺物は、

土器・土製品・石器が出土した。一括で取り上げられているため、帰属及び出土状況は不明である。時期は3c期であろう。

土器（第91図、図版42）

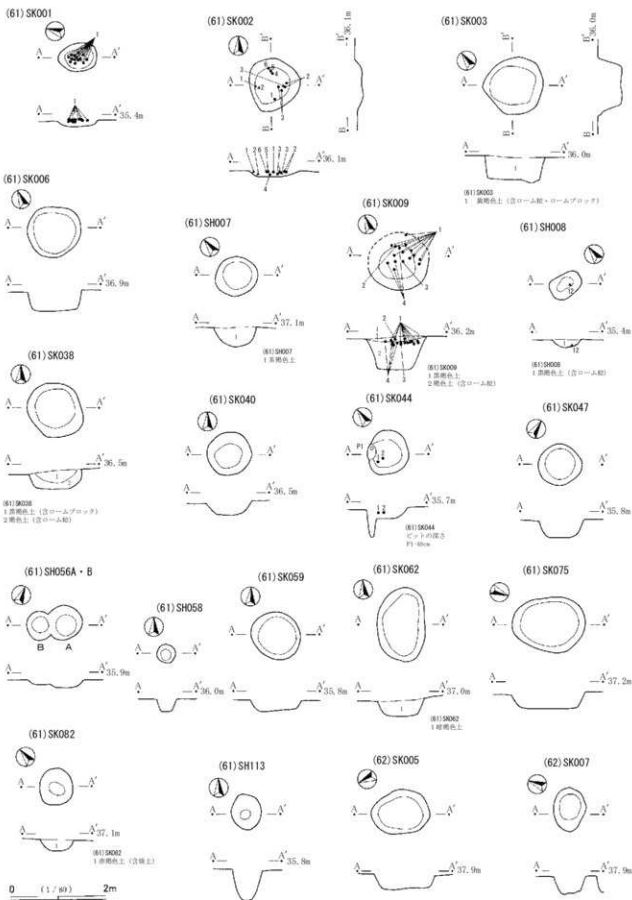
1は舌状の口縁突起を持つ。口縁部文様帯は突起下に巻きのゆるい渦巻文を、その両脇に杵状文を配する。胴部文様帯はきわめて幅の広い磨消懸垂文である。2も杵状の口縁部文様帯下に3条の沈線による幅広の磨消懸垂文を施す。3も幅広の磨消懸垂文である。4は隆起線による口縁部文様と蕨状文を伴う胴部文様が認められる。5・6は大振りの隆線文様を施す、いわゆる梶山類である。6は胴下部文様であろう。1・3は加曾利E3式中段階、他は同新段階であろう。

土製品（第92図、図版44）

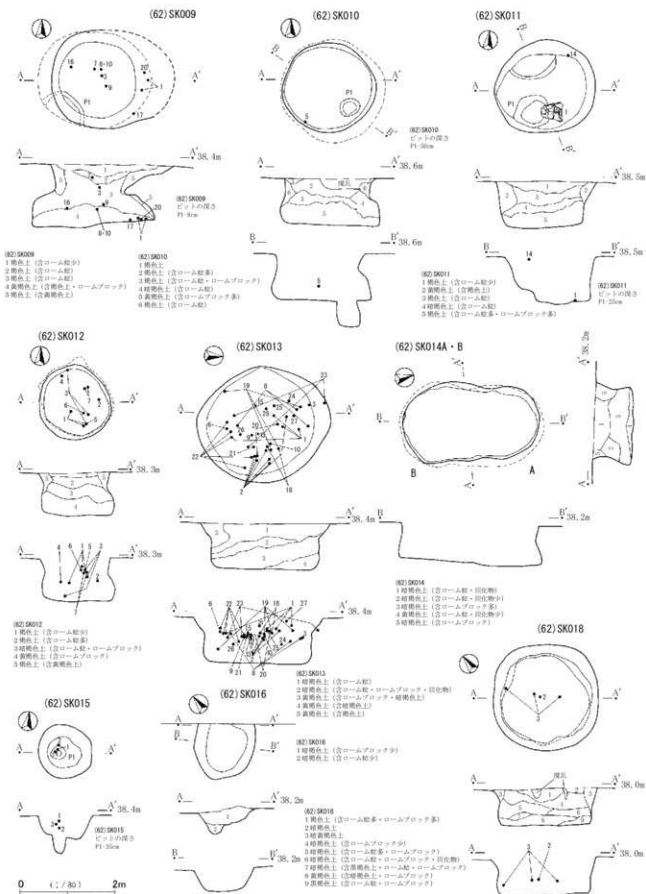
15は土製円板である。表面側からのみ未貫通の孔が開く。周縁の磨りは深い。

石器（第93図、図版45）

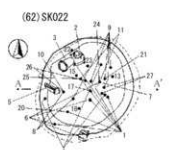
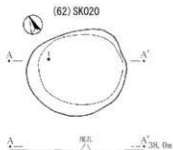
26は黒曜石製の石鏃未成品である。図示した以外では、黒曜石の剥片4点・砕片1点、ガラス質黒色安山岩製の剥片1点、チャートの砕片が1点出土した。



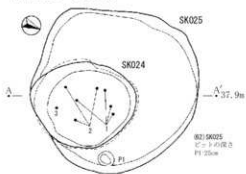
第73図 縄文時代土坑等 (1)



第74図 縄文時代土坑等 (2)



(62) SK024・(62) SK025

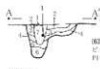
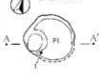


- (62) SK022
- 1 堆積土上 (空堀り)
 - 2 堆積土上 (空堀り)
 - 3 堆積土上 (空堀り)
 - 4 堆積土上 (空堀り)
 - 5 堆積土上 (空堀り)
 - 6 堆積土上 (空堀り)
 - 7 堆積土上 (空堀り)
 - 8 堆積土上 (空堀り)



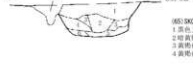
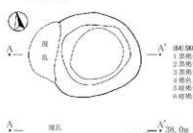
- (63) SK002
- 1 堆積土上 (空堀り)
 - 2 堆積土上 (空堀り)
 - 3 堆積土上 (空堀り)
 - 4 堆積土上 (空堀り)
 - 5 堆積土上 (空堀り)
 - 6 堆積土上 (空堀り)

(63) SK005



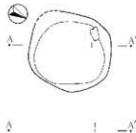
- (63) SK005
- 1 堆積土上 (空堀り)
 - 2 堆積土上 (空堀り)
 - 3 堆積土上 (空堀り)
 - 4 堆積土上 (空堀り)
 - 5 堆積土上 (空堀り)
 - 6 堆積土上 (空堀り)
 - 7 堆積土上 (空堀り)

(64) SK001

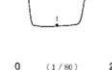
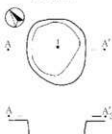


- (64) SK001
- 1 堆積土上 (空堀り)
 - 2 堆積土上 (空堀り)
 - 3 堆積土上 (空堀り)
 - 4 堆積土上 (空堀り)
 - 5 堆積土上 (空堀り)
 - 6 堆積土上 (空堀り)

(65) SK001

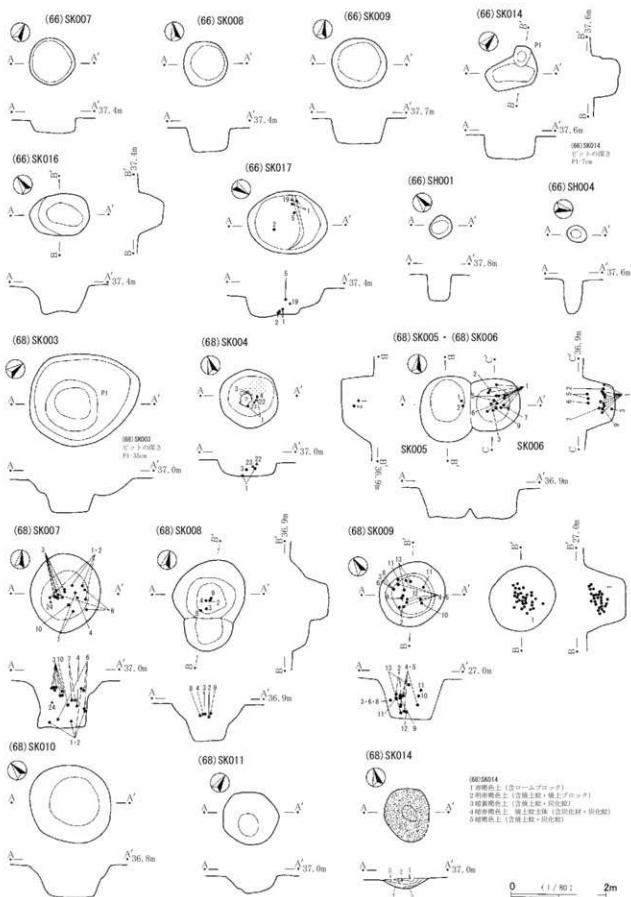


(66) SK001

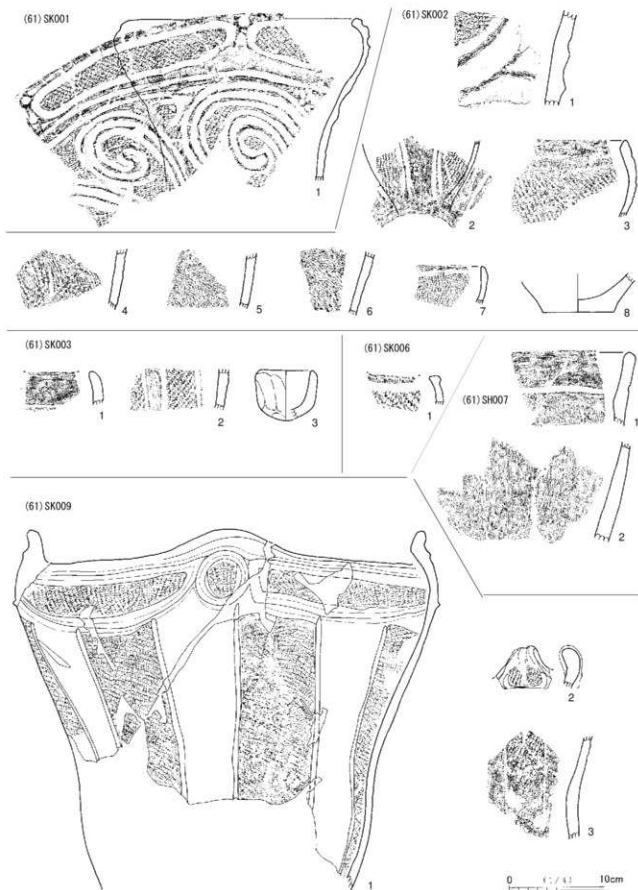


0 (1/80) 2m

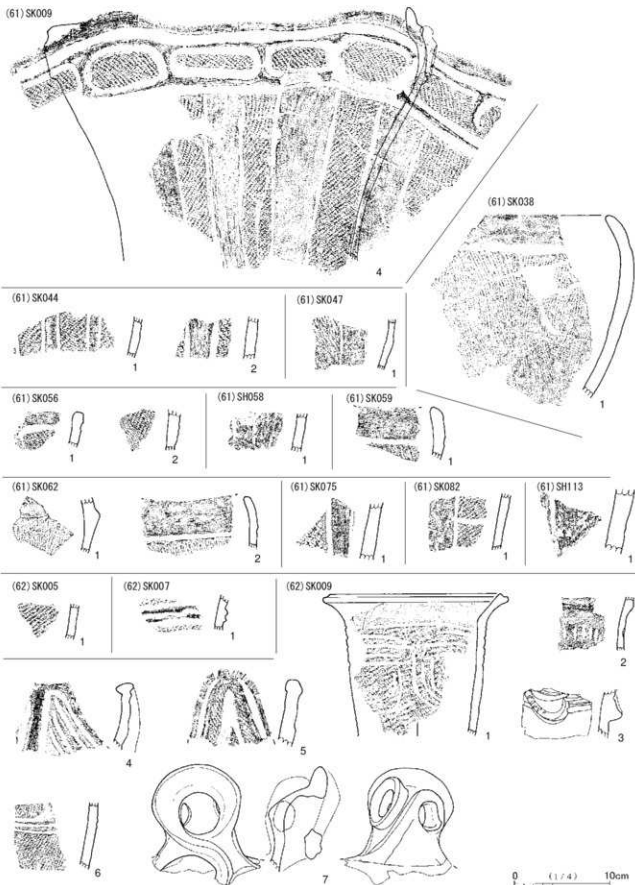
第75図 縄文時代土坑等 (3)



第76図 縄文時代土坑等 (4)

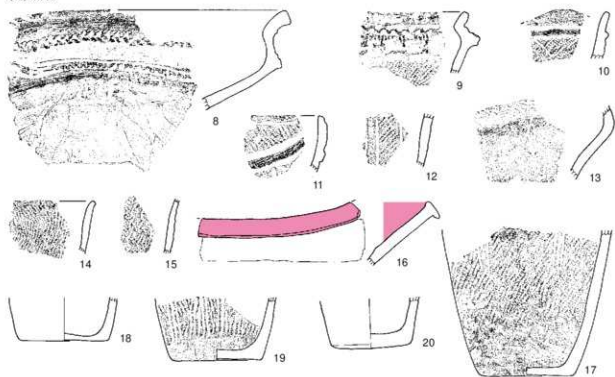


第77図 縄文時代土坑等出土土器（1）



第78図 縄文時代土坑等出土土器 (2)

(62) SK009

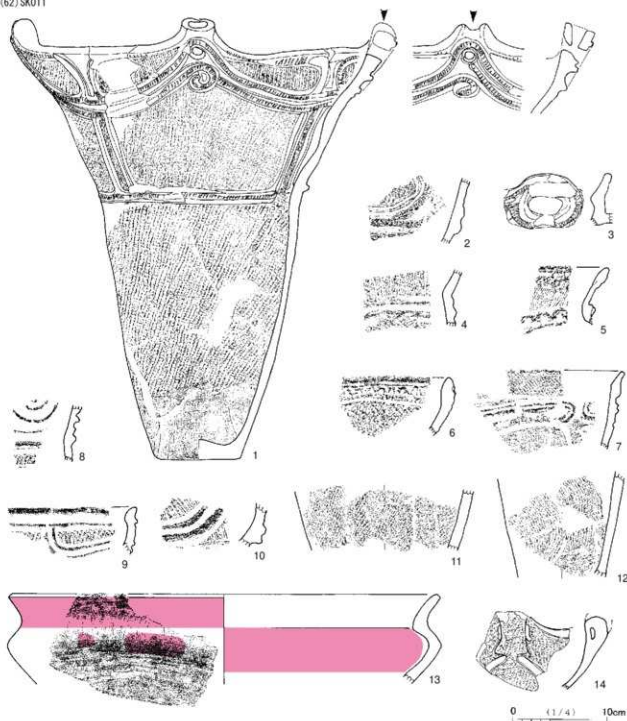


(62) SK010



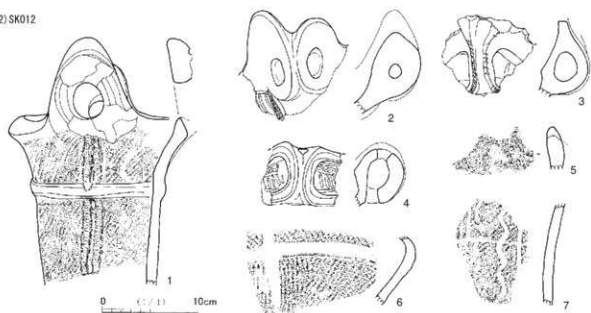
第79図 縄文時代土坑等出土土器 (3)

(62) SK011

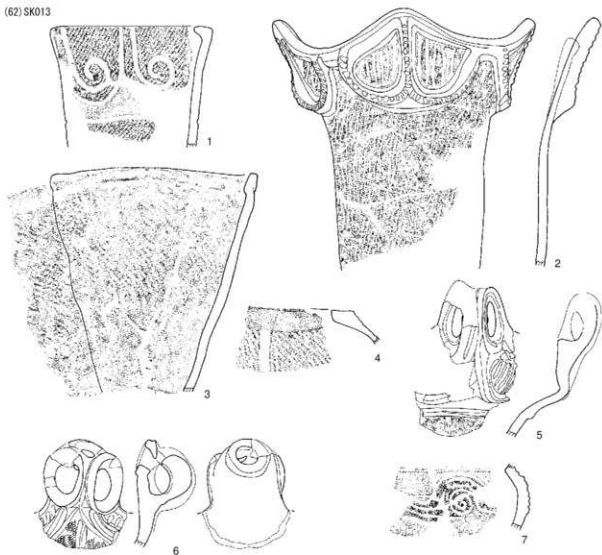


第80図 縄文時代土坑等出土土器(4)

(62) SK012

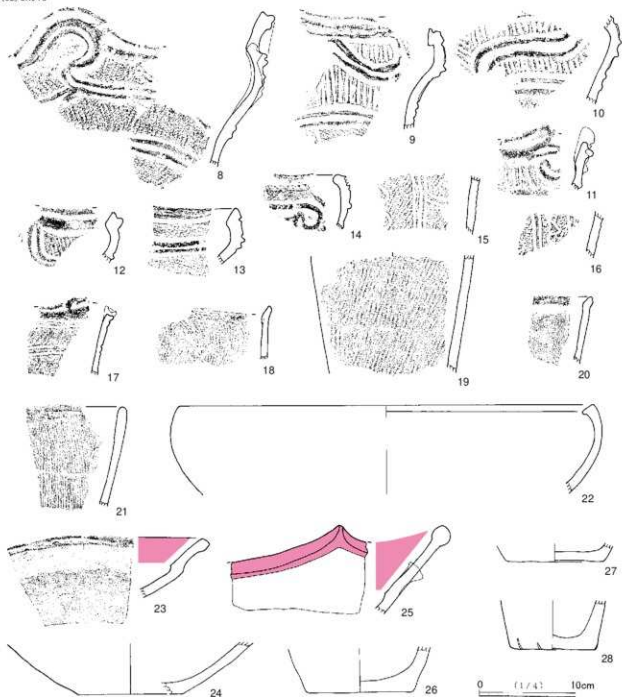


(62) SK013

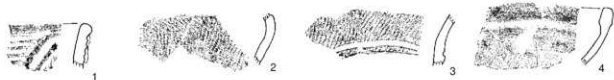


第81図 縄文時代土坑等出土土器 (5)

(62) SK013

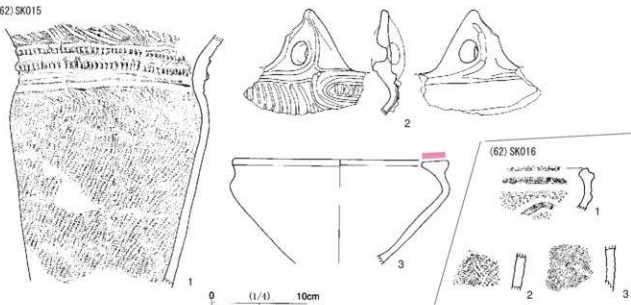


(62) SK014

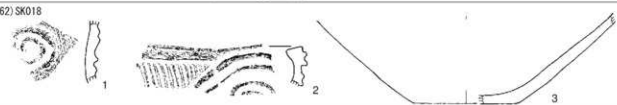


第82圖 縄文時代土坑等出土土器(6)

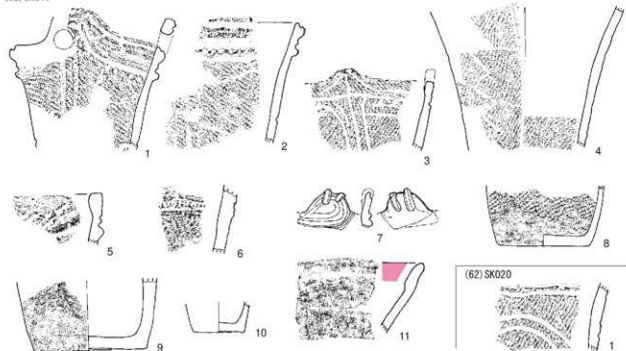
(62) SK015



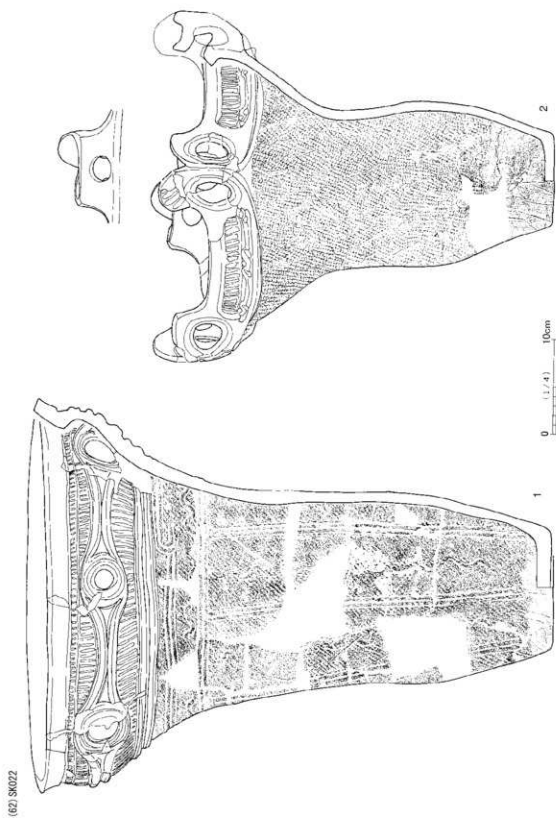
(62) SK018



(62) SK019



第83図 縄文時代土坑等出土土器 (7)



第84図 縄文時代土坑等出土土器(8)

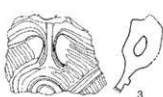


第85図 縄文時代土坑等出土土器 (9)



第86図 縄文時代土坑等出土土器 (10)

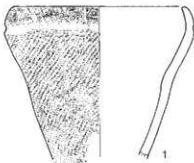
(62) SK024



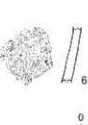
(63) SK002



(63) SK005

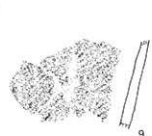
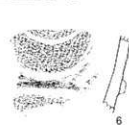
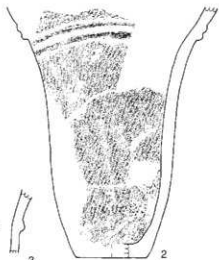
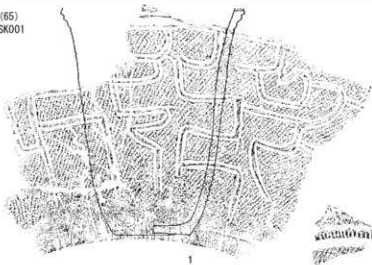


(64) SK001

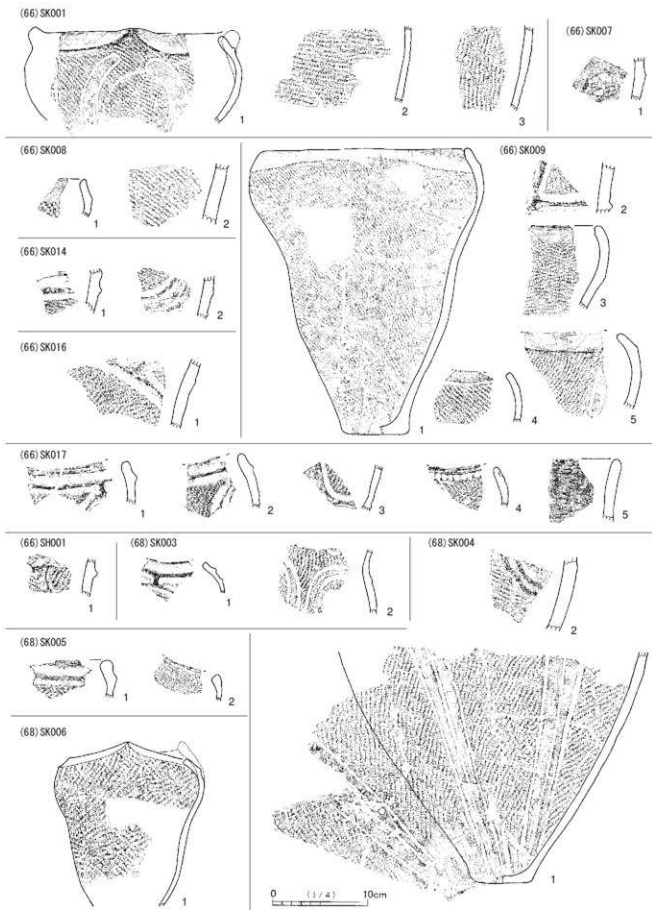


0 1/4 10cm

(65) SK001

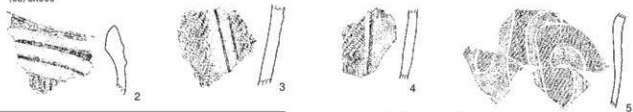


第87図 縄文時代土坑等出土土器 (11)

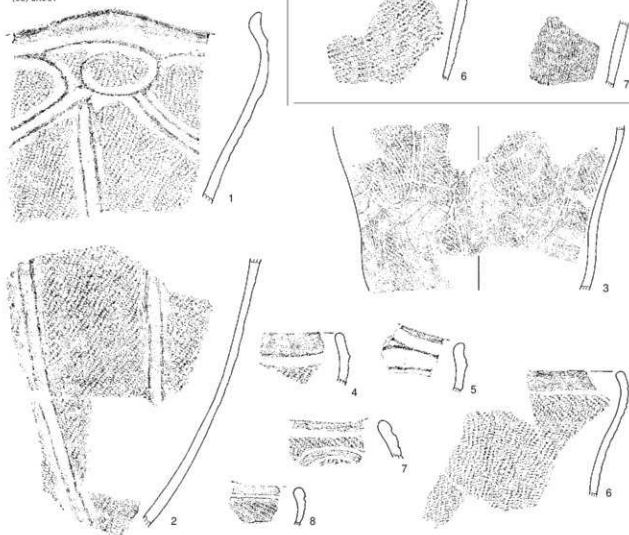


第88図 縄文時代土坑等出土土器 (12)

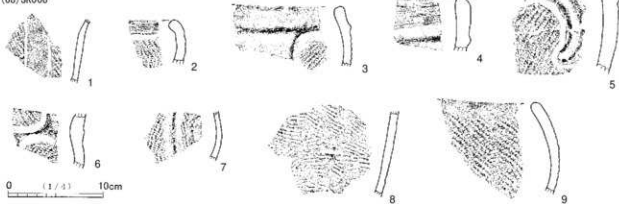
(68) SK006



(68) SK007



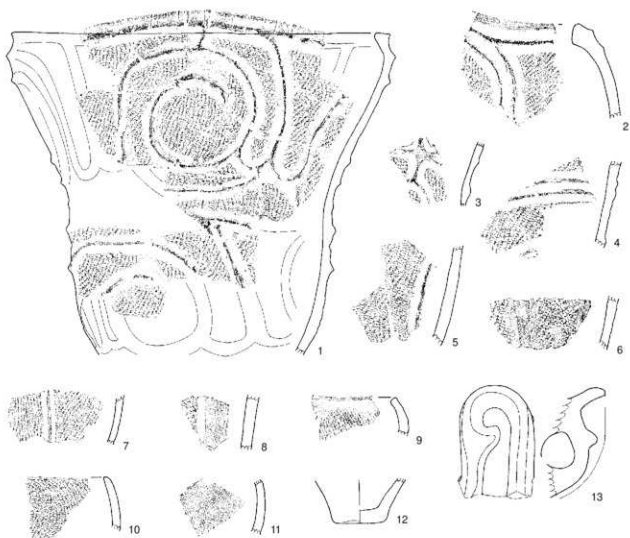
(68) SK008



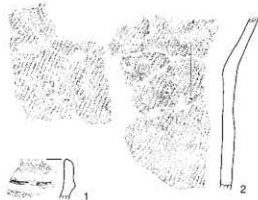
0 (1/4) 10cm

第89図 縄文時代土坑等出土土器 (13)

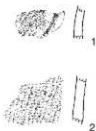
(68) SK009



(68) SK010



(68) SK011

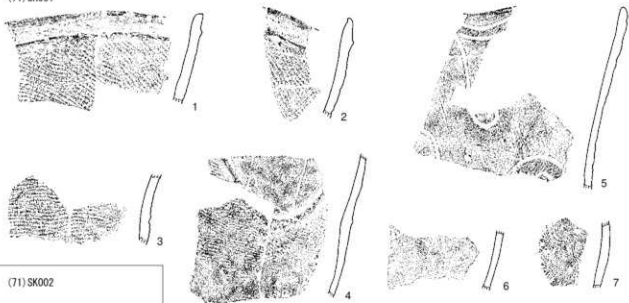


(68) SK014



第90図 縄文時代土坑等出土土器 (14)

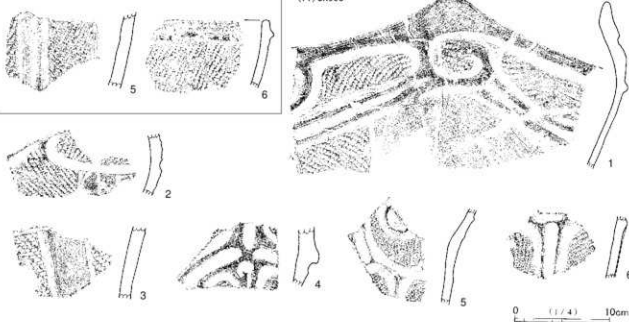
(71)SK001



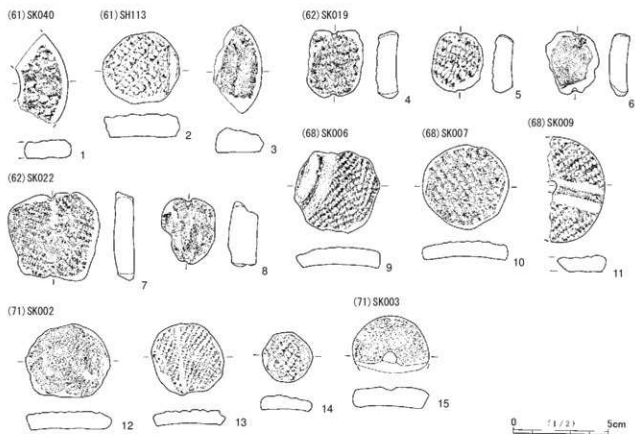
(71)SK002



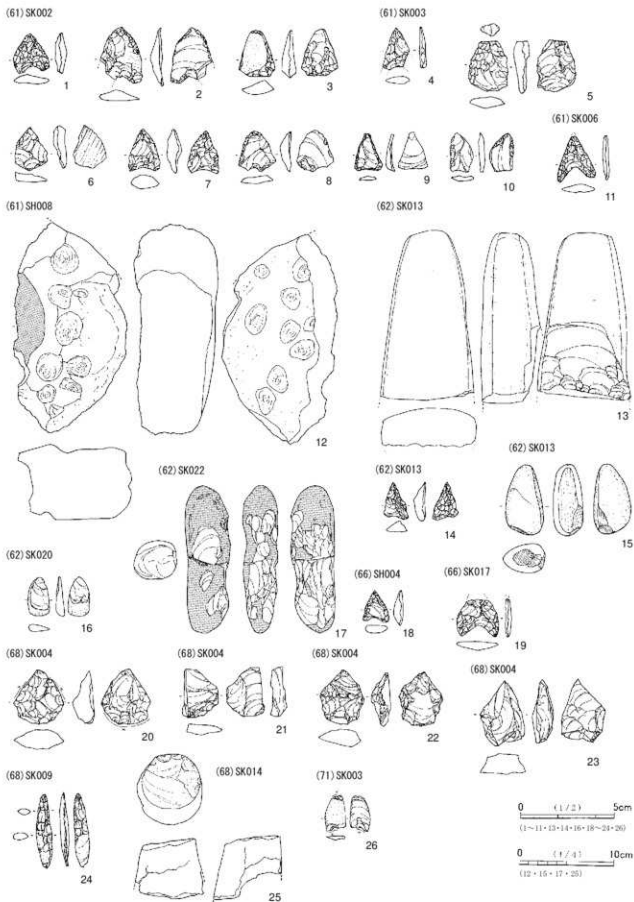
(71)SK003



第91図 縄文時代土坑等出土土器 (15)



第92圖 縄文時代土坑等出土製品



第93図 縄文時代土坑等出土石器

3 遺構外出土遺物

(1) 土器

(60) 区 (第94図、図版42)

1は口縁直下に鋭い直線的な刻み目を施す。2は縄文施文後に細い粘土紐を縦に貼り付ける。3は隆線で口縁部文様帯に枠状区画を施す。4～6も同様であるが、枠状区画は沈線で行っている。7～9は胴部文様帯に磨消懸垂文を施す。9の地文は櫛歯条線文である。10・11は口縁直下に棒状工具による刺突列を施す。10にはその下に太い沈線による弧状文が認められる。12は2条の平行する隆線が垂下する。13は口縁直下の無文帯を凹帯とし、以下の縄文との境に段を設ける。14は半截竹管による平行沈線で蛇行文様を施す。15は櫛歯条線文である。16は縄文を地文として平行する条線を施す。17は薄手で堅緻な焼成である。細かい縄文を施す。1は阿玉台2式、2は加曾利E2式併行の曾利式、3～9は加曾利E3式で、大部分は古段階であろう。10・11は同時期の連瓜文土器、12・13は加曾利E3式新段階、16は後期堀之内1式、17は同じく加曾利B式であろう。

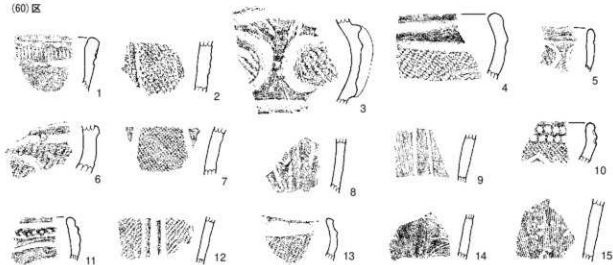
(61) 区 (第94・95図、図版35・42)

1は口縁から胴下部にかけて約2/3が遺存する。口径30.8cm、現存高25cmを測る。口縁下に沈線が4条巡り、その下に縄文を充填した逆U字状文を配する。2は指頭による凹線で口縁部文様帯の渦巻文を施す。3～6は磨消懸垂文を施す。3・4には口縁部文様帯との区画沈線が見える。7～10は口縁部破片で、背の低い隆線や細い隆線で巻きのゆるい渦巻文を施す。11は太い沈線で内部を縄文で充填した逆U字状文と思われる。12も逆U字状文を施す。13は渦巻文・区画文内に縄文を充填する。14～18は隆線による大振りの渦巻文ないしは近似の文様を施すもので、いわゆる梶山類である。19～21は櫛歯条線文を施す。19は口縁直下の広い無文帯を太い沈線で画している。22は壺状の器形をなすと思われる、肩部に帯縄文を施す。23は口縁下に縦線文及び条線を施す。2～6は加曾利E3式古段階、1・7～13は同中段階、14～18は同新段階、22・23は後期加曾利B式であろう。

(62) 区 (第95図、図版43)

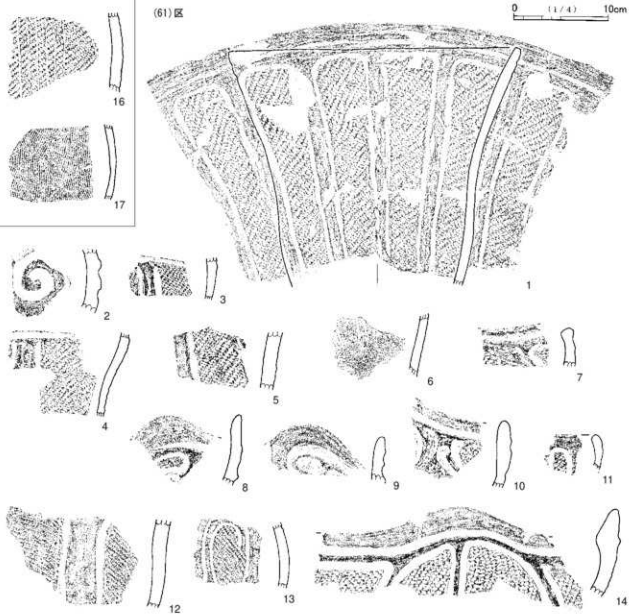
1は口縁部、口頸部、胴部のそれぞれに縄文を施す。口頸部の縄文は撚りの異なる縄文を横位回転施文している。2は口縁部部に押圧縄文と縦走縄文、口頸部に横走縄文を施す。3は口縁が肥厚しない。斜行縄文を端部の表裏に施す。口頸部は押圧縄文と縦位回転施文の縄文である。4は口頸部以下が縦走縄文となるが、肥厚した口縁下には同じ縄文原体の押圧が認められる。5は縦走する縄文を施す胴部破片である。6は縄文のかかった区画隆帯の左右に沈線による渦巻文様などを施す。7・8は同一個体である。7には突起を貫通する孔の一部が残る。口縁部文様は青潮れ隆帯による波状文と集合沈線である。9も口縁部文様帯部分の破片で、整った青潮れ隆帯が認められる。10は口縁部文様帯の渦巻文は巻きがしっかりしている。11・12は胴部破片で、11には蛇行沈線の脇に沿った沈線は押し引き状となる。12は磨消されない懸垂文である。13は浅鉢である。屈折した体部上半に沈線文様を施す。14は小型の波状突起下に巻きのゆるい渦巻文が認められる。15の口縁部枠状区画隆線はやや細くなっている。16～18は胴部片で、磨消懸垂文を施す。16の地文は単節の燃糸文である。19は交互刺突列の下に隆線が垂下する。右端の隆線は蛇行するようである。20は口縁部が斜行する条線、胴部が縦走する条線を地文として隆線が垂下する。21・22も縦走する条線を地文として蛇行する隆線を施すが、21は隆線がきわめて太い。23・24は隆線で口縁部文様帯を画するが、渦巻文を構成していない。25・26は沈線による円文ないしは楕円文の口縁部文様である。

(60)区



(61)区

0 (1/4) 10cm



第94图 遺構外出土縄文土器(1)

27は太い沈線で口縁部文様帯の下限区画が巖手文となる。28は間隔の狭い平行沈線が逆U字状になると思われる。29は低い隆線がH字状となる。大振りの渦巻文同士が連結する部分の破片であろう。30・31は同一個体である。口縁直下の無文帯は下半に円形刺突列を施し、突起部分でつまみ状に盛り上がる。無文帯下との境は不明瞭な微隆起線となり、その下には沈線で広い無文帯をもった逆U字状文が展開する。32は口縁直下の無文帯を権拙な沈線で画する。33の口縁直下を画する微隆起線は30と同じく不明瞭である。34・35は微隆起線文の胴部破片である。36は細かい縄文のみを施す。37は櫛歯条線文である。上端には太い沈線が認められる。38は刻み目の付いた低い隆線の上下に条線文を施す。

1～5は草創期後半の燃糸文土器で、1～3は井草1式、4は同2式であろう。6は勝坂式、7・8は加曾利E1式古段階、9は加曾利E2式古段階、10は同新段階であろう。11～13は加曾利E式前半に属しよう。14～18は加曾利E3式古段階、19～22は同式に伴う曾利式系の土器であろう。23～29は加曾利E3式中～新段階であろう。このうち、28はいわゆる吉井城山類、29は梶山類であろう。30～33は加曾利E3-4式、34・35は同4式であろう。38は後期加曾利B式の粗製土器であろう。

(62)・(63) 区 (第96図、図版43)

1は角頭状の口縁端部に磨きがかかる。文様はやや間隔の開いた燃糸文が縦走する。2は3条1単位の懸垂文を施す。3は縦走する縄文地に弧線文様を施す。4は円形刺突列と沈線による横位区画の下に逆U字状文を施す。区画の上にも弧状沈線の一部が認められる。5は区画隆線と短隆線が残る。短隆線は欠損部の大振りの渦巻文に連結するものと思われる。6は口縁が低い波状突起となる。幅広の口縁直下の無文帯を太めの沈線で画し、以下に櫛歯条線文を施す。1は草創期後半の桶荷台式であろう。2は加曾利E2式、3は連弧文土器、4～6は加曾利E3式で、4は中段階頃、5は新段階、6は新段階～3-4式であろう。

(64) 区 (第96図、図版43)

1はうねった隆帯区画内に集合沈線を充填する。隆帯の裾には刻み目が付く。2は突起が眼鏡状突起に近いが、孔は貫通していない。両側面にも未貫通の孔がある。突起下には巖手文と逆U字状文を施す。3・4は幅広の磨消懸垂文である。5～8は隆線による大振りの渦巻文が展開するいわゆる梶山類である。9・10は口縁直下の幅広の無文帯を太く浅い沈線で画する。11は口縁直下から縄文を施す。12は無文地に低い隆線文様を施す。1は勝坂式末期、2は加曾利E3式中段階、3・4は同中～新段階、5～10は同新段階であろう。

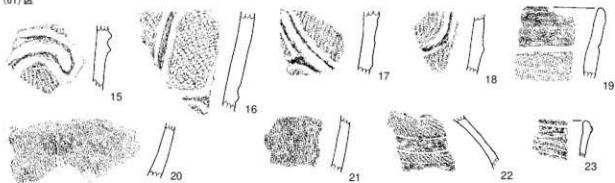
(65) 区 (第96図、図版43)

1は燃糸文を地文として押し文を環状に施す。外傾する口縁端部にも燃糸文を施す。2はクランク状の青割れ隆帯の一方に刻み目が付く。3は有孔罅付土器である。無文地に隆線で渦巻文様を施すらしい。1は前期大木5式、2は勝坂式であろう。

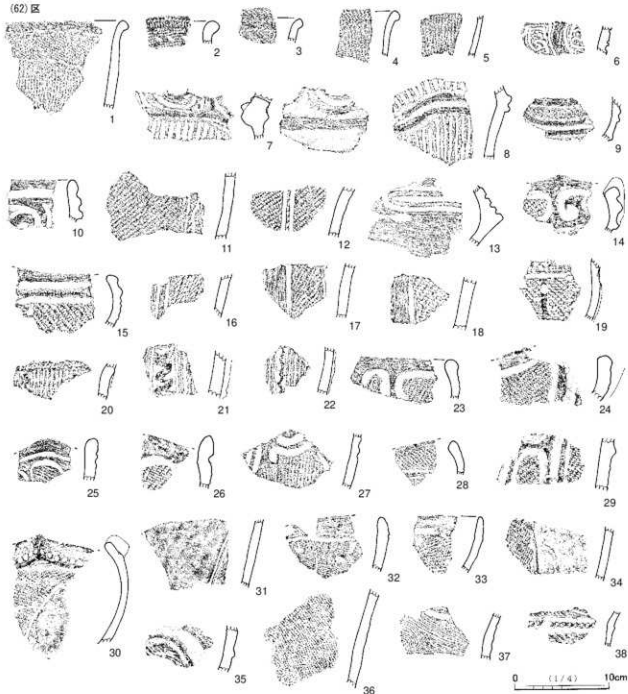
(66) 区 (第96図、図版43)

1は口縁部区画隆線の上下に施文方向の異なる縄文を施す。2・3は幅の広い磨消懸垂文である。4は太い沈線による逆U字状区画内に縄文を充填する。5は区画隆線とその下に展開する大振りの渦巻文を連結する短隆線が認められる。6～9は口縁直下の無文帯を沈線で画するがそれぞれ少しずつ異なる。6は無文帯の幅が狭く、9は広く沈線が細い。8は無文帯に指頭による凹線を2段施しており、凹線間が微隆起状となる。10～12は微隆起線文を施す。13は櫛歯条線文を施す。14は外反した口縁端部に隆起線による装飾が付く。口頭部はくびれて隆線が垂下し、胴上部の区画隆線に連結する。胴部文様は縦走する燃糸文

(61) 区



(62) 区

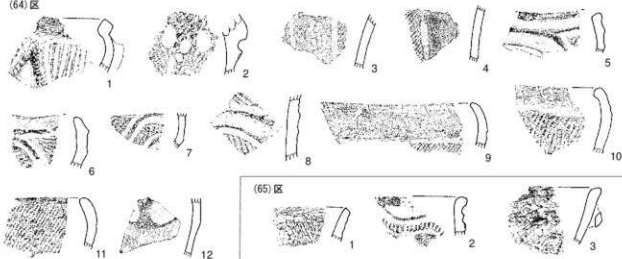


第95図 遺構外出土縄文土器(2)

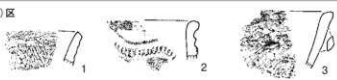
(62)·(63)区



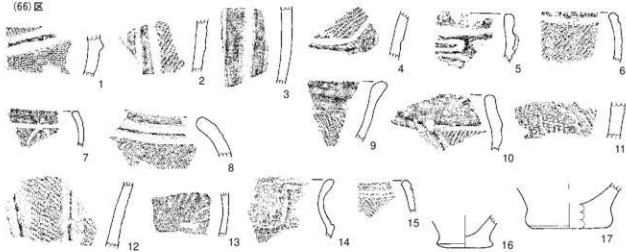
(64)区



(65)区



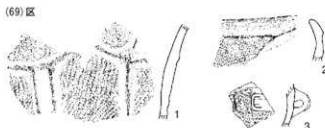
(66)区



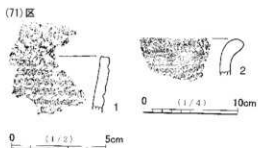
(68)区



(69)区



(71)区



第96図 遺構外出土縄文土器(3)

である。15は口縁部区画沈線に三角形の刻み目が付く。16・17は底部である。底の作りが厚い。2～4は加曾利E3式中段階頃、5は同式新段階、6～9は同式新段階～3-4式、10～12は同4式、14は大木10式であろうか。15は加曾利B3式であろう。

(68) 区 (第96図、図版43)

1は隆線による大振りな渦巻文と連結する短隆線の文様と思われる。2は同類の胴下部の破片であろう。3は羽状の縄文で口縁直下を磨り消して狭い無文帯としている。4は波状突起をなし、口縁直下に沈線と円形刺突を施す。以下はやや複雑な沈線区画を施すらしい。5は微隆起線文を施す。1・2は梶山類で、加曾利E3式新段階、4は同3-4式、5は同4式であろう。

(69) 区 (第96図、図版43)

1は隆線による弧状の文様と連結した垂下する隆線が認められる。2は微隆起線による逆U字状文である。3は小型の橋状突起で、突起には縄文がかかる。1はいわゆる梶山類で、加曾利E3式新段階、2・3は同4式であろう。

(71) 区 (第96・97図、図版43)

1は薄手の作りの直口口縁である。口縁部から内面にかけて横位施文と思われる回転縄文を施し、外面側には押圧縄文を多段に施す。現状では5段まで観察できる。2は肥厚外反する口縁部に縦走する縄文を施し、口頸部には押圧縄文を横位及び左下がり施す。3は口縁部に細かな条線を施す。口縁部文様は一部に交互刺突文を取り入れた細い角押文を多段に施し、その下に細い隆線による杵状区画文様を配する。無文部には細かい縄文が部分的に残る。4は波状突起部に微隆起帯を半渦巻状に巻いた装飾が付く。5は口縁部を欠く破片で、縄文を充填した微隆起線による逆U字状文の上端が盛り上がる。6は口縁に縄文を施す。口縁直下の縄文は沈線で画し、その下の無文部には沈線による曲線区画が認められる。7は口縁直下に細い紐線文を付け、以下に粗い縄文地に条線文を施す。1は草創期前半の多縄文土器、2は同後半の井草1式、3は中期前葉の竹ノ下式であろう。4・5は加曾利E4式、6は同時期の西日本系の土器であろう。7は後期加曾利B式の粗製土器であろう。

(72) 区 (第97図、図版43)

1・2とも波状突起で、口縁直下には条線を施す。1の口縁部文様は横位及び垂下する交互刺突文に細かい半截竹管刺突が伴う。2は半截竹管による押引文の下に沈線による三角形区画内に三角形の沈刻文を施す。3は隆線による杵状区画内に沈線文様を施す。下部にも平行沈線を施す。4は口縁部に条線を付け、口縁直下には細い角押文と凹線が認められる。口縁内面には沈線を1条施す。5はつまみ状の小型突起を持つ。口縁部に条線を付け、口縁部に縄文を施す。6は口縁から胴下部までの大型破片で、胎土に石英粒を多量に含む。口縁部外側は横位、以下は縦位の縄文を施す。7は無文土器である。口縁部に細く深い刻み目が付く。補修孔がある。8は微隆起線文である。1～7は中期前葉の五領ヶ台式直後から阿玉台式以前の土器で、1は雷3類、2・3は竹ノ下式、4は阿玉台式直前であろう。8は加曾利E4式であろう。

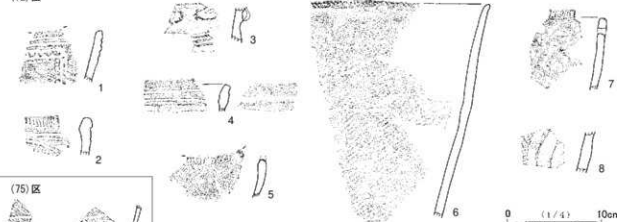
(75) 区 (第97図、図版43)

1はくびれ部に刻み目を付け、胴部には磨消縄文帯を配する。この磨消縄文帯ははっきりしないが、入組弧線文に見えない。加曾利B3式であろう。

(71)区



(72)区



(75)区



第97図 遺構外出土縄文土器(4)

(2) 土製品

(60) 区 (第97図、図版44)

円板が1点出土した。1は表裏両面から孔が開く。周縁の磨りは深い。

(61) 区 (第97図、図版44)

円板が7点出土した。2のみ表裏両面から孔が開く。周縁の磨りは深い。3～8には孔はない。周縁の磨りは3が深く、4～6がやや浅く、7・8は浅い。5・7には櫛歯条線文が、8には微隆起線文が認められる。

(62) 区 (第97図、図版44)

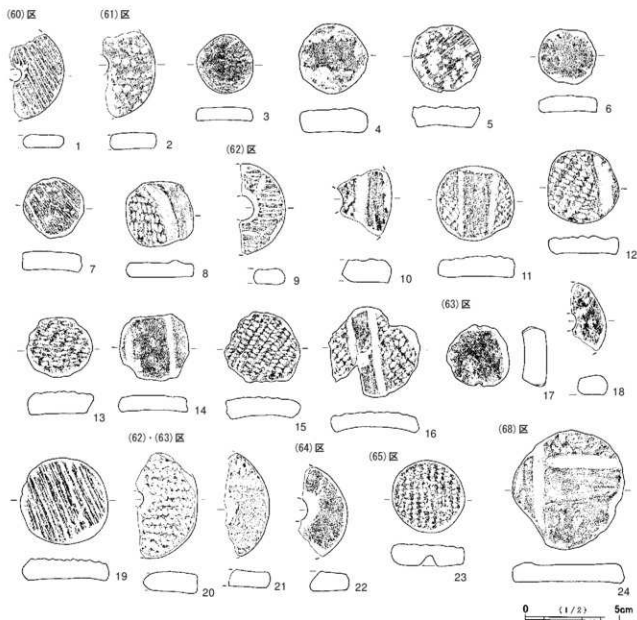
円板が8点出土した。9・10には孔が開く。9は表裏両面からの穿孔であるが、表面からの穿孔が勝る。周縁の磨りはやや浅い。11～16には孔はない。11・12は周縁の磨りが深く、13は浅い。14～16は打ち欠きのみである。9は櫛歯条線文が、10～12・14・16には磨消懸垂文が認められる。

(63) 区 (第97図、図版44)

土器片錘1点と円板2点が出した。17は土器片錘で、浅い磨りで略円形に仕上げられ、擦り切りによる糸掛けを設けている。18・19は円板で、18には孔が開く。19は周縁の磨りが深い。櫛歯条線文が認められる。

(62)・(63) 区 (第97図、図版44)

円板が2点出土した。20は表裏両面から均等に孔が開く。周縁の磨りはやや浅い。21は表面から未貫通の孔が開く。周縁の磨りは深い。幅広の磨消懸垂文が認められる。



第98図 遺構外出土土製品

(64) 区 (第97図、図版44)

円板が1点出土した。22は表裏両面からの穿孔であるが、表面からの穿孔が勝る。周縁の磨りは深い。

(65) 区 (第97図、図版44)

円板が1点出土した。23は裏面から未貫通に孔が開く。周縁の磨りは深い。

(68) 区 (第97図、図版44)

円板が1点出土した。24は大型で、周縁の磨りは浅い。幅広の磨消懸垂文が認められる。

(3) 石器

(54) 区

チャート製の石鏃未成品1点、安山岩製の磨石類1点が出土した。

(61) 区 (第98図、図版45・46)

1はチャート製の石鏃未成品である。2は凝灰岩製の楔形石器である。3は分銅形の打製石斧の半欠品である。石材は安山岩である。図示した以外では、チャート製の石鏃未成品1点・剥片14点・砕片3点、黒曜石製の剥片2点、石英斑岩製の磨石類の断片1点、ホルンフェルス製の砕片1点が出土した。

(62)・(63) 区 (第98図、図版45)

4・6・11は信州系の黒曜石製の凹基無茎鏃である。11は片面加工による。5はチャート製の石鏃未成品である。7は信州系の黒曜石製使用痕のある剥片である。二側縁に刃こぼれがみられる。8はチャート製の石鏃未成品である。楔形石器の素材を用いている。9は砂岩製の砥石の破片で、被熱している。10はガラス質黒色安山岩製の石鏃である。先端部が縦溝状剥離により一部欠損している。12はチャート製の石鏃未成品である。図示した以外では、黒曜石製の石鏃未成品1点・二次加工ある剥片2点・剥片12点・砕片3点、チャート製の石鏃未成品1点・剥片11点・原石1点、ガラス質黒色安山岩製の剥片2点、石英の剥片1点、メノウ製の剥片1点、トトロ石の剥片1点、粘板岩製の楔形石器1点、流紋岩製の磨石類2点、安山岩製の磨石類の破片3点、砂岩製の砥石1点が出土した。

(64) 区

チャートの剥片2点、黒曜石の剥片1点が出土した。

(66) 区 (第98図、図版45)

13は三角形の凹基無茎鏃である。石材は黒曜石である。14・16はチャート製の石鏃未成品である。15は黒曜石製の石鏃未成品である。図示した以外では、石英製の石鏃未成品1点、黒曜石の石核1点・二次加工ある剥片1点・砕片2点、チャート製二次加工のある剥片1点・剥片2点・砕片2点、ガラス質黒色安山岩製の剥片・砕片が各1点、メノウ製の剥片・砕片各1点、流紋岩の両極剥片1点、トトロ石製の剥片1点、点紋斑岩製の石棒断片1点、緑泥片岩製の石皿破片1点がある。

(68) 区

チャート・ガラス質黒色安山岩製の剥片が各1点出土した。

(69) 区 (第98図、図版45)

17はチャート製の石鏃未成品である。18は砂岩製の磨石類で、表裏に凹み痕、敲打痕がみられる。図示した以外では、チャート製の石鏃未成品1点、砂岩製の磨石類が1点出土した。

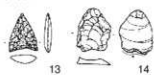
(71) 区 (第98図、図版45)

19は硬質頁岩製の凹基無茎鏃である。表面の基部寄りに局所的な研磨痕がみられる。20は軽石製の浮子である。孔が1か所穿たれている。図示した以外では、黒曜石製の二次加工ある剥片1点、石核1点、剥片3点、チャートの原石1点・石核1点・剥片7点・ガラス質黒色安山岩の砕片1点、トトロ石製の剥片1点、砂岩製の磨石類1点が出土した。

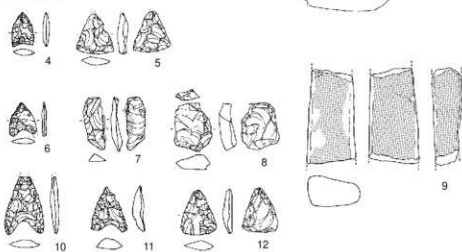
(61)区



(66)区



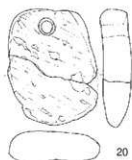
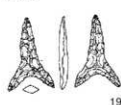
(62)・(62)区



(69)区



(71)区



0 1 2 3 4 5cm
(1~8・10~17・19・20)

0 1 2 3 4 5 10cm
(9・18)

第99図 遺構外出土石器

第4節 奈良・平安時代

1 竪穴住居跡・掘立柱建物跡

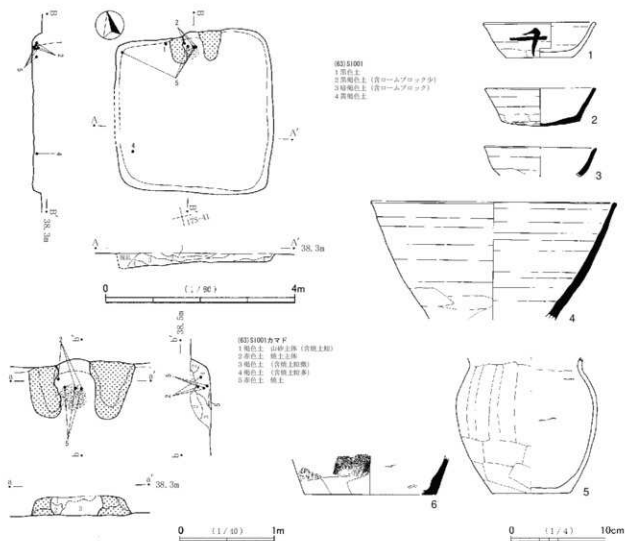
(63) S1001 (第100図、図版19)

遺跡北東部、17S-40・41グリッドに位置する。平面形は南北に長い方形で、主軸方向はN-14°-Eである。西壁の中央付近は攪乱を受けている。規模は、主軸長3.50m、幅3.35m、深さ27cmを測る。覆土は黒色土が主体で、下層ほどロームブロックが多く含まれる。カマドは北壁中央に位置する。煙道部は壁外に約10cm掘り込まれ、全長65cm、全幅1.13m、袖部の高さ21cmを測る。袖部の構築材は山砂主体で、基底部分はロームブロックを混入していた。火床部は火熱により硬化していた。覆土は焼土または焼土を含む層が堆積していた。ピットは検出されなかった。

遺物は、カマド内を中心に土器が出土した。

土器 (第100図、図版46・50)

1は土師器坏である。体部下端から底部にかけて手持ちヘラケズリが施される。胎土中に長石を含む。



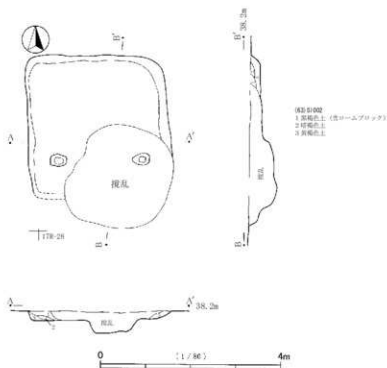
第100図 (63) S1001

体部外面に墨書「千」が記されている。2・3は須恵器坏である。いずれも色調は橙色基調である。2は底部に丸みがあり、体部から口縁部は直線的に開く形状である。比較的薄手の作りである。底部は一方方向、底部周縁及び体部下端は手持ちヘラケズリが施される。3は体部下端に手持ちヘラケズリが施される。胎土中に白色粒子を多量に含む。4は須恵器の鉢である。色調は黄褐色で、体部下端に手持ちヘラケズリが施される。胎土中に白色粒子を多量に含む。5は口縁端部を欠く土師器の小型の甕である。胴部は上位から中位にかけて縦方向、下位に横方向のヘラケズリが施される。胎土中に白色粒子を含む。6は須恵器甕の胴部下端から底部周辺である。色調は明黄褐色である。外面タタキの後、ヘラケズリを加える。底部は無調整である。胎土中には雲母・赤色スコリアを含む。茨城県南部の新治窯産である。

(63) S1002 (第101図、図版19)

遺跡北東部、17R-17・18グリッドに位置する。平面形は南北に長い方で、主軸方向は $N-0^{\circ}$ である。南東側は風倒木による攪乱を受けている。規模は、主軸長3.24m、幅3.13m、深さ22cmを測る。覆土は遺存する壁付近では、上層は黒・暗褐色土、下層は黄褐色土が主体である。ピットは南側に柱穴と考えられる2か所が検出された。平面形はいずれも東西方向に長い方で、深さ約50cmを測る。カマドは検出されなかった。

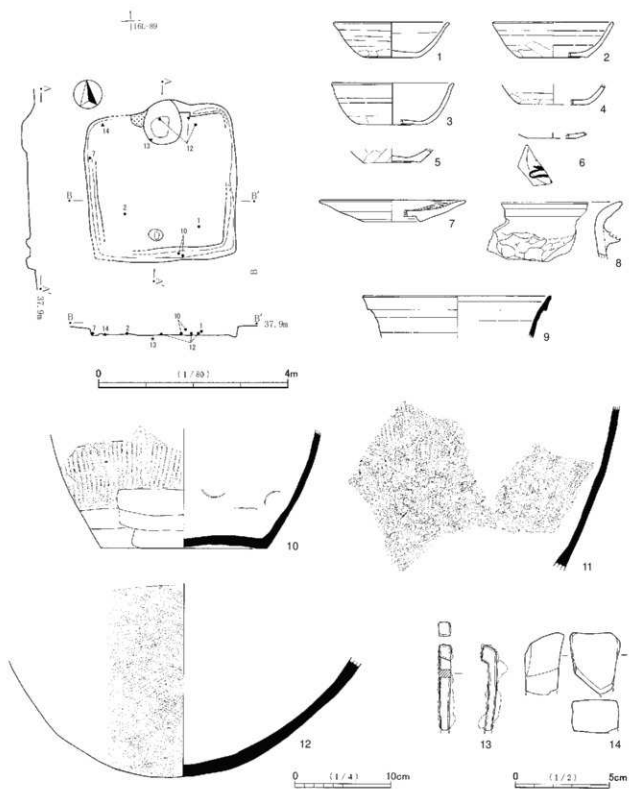
遺物は、土器が少量出土しか図示できるものはなかった。



第101図 (63) S1002

(64) S1001 (第102図、図版19)

遺跡北部、16L-88・89・98・99グリッドに位置する。平面形は南北に長い方形で、主軸方向は、N-



第102図 (64) S1001

0°である。部分的に木の根などによる攪乱を受けている。規模は、主軸長3.40m、幅3.20m、深さ19cmを測る。覆土はローム粒を少し含む暗褐色土が主体である。床面は平坦で、全体に踏み固められ堅緻であった。カマドは北壁中央付近に位置する。遺存状態は悪く、西側の袖部は攪乱を受けていた。全長93cm、推定幅約1.4m、袖部の高さ13cm、底面の掘り込みの深さ10cmである。周溝は攪乱により途切れているが、本来はカマド部分を除いて掘り込まれていたと思われる。幅22cm～27cm、深さ約8cmを測る。ピットは南壁下、中央やや西寄りに1か所検出された。深さ8cmを測り、梯子ピットと考えられる。

遺物は土器・鉄製品・石製品が出土した。ほとんどの遺物は床面上から出土した。

土器（第102図、図版46・50）

1～6は土師器坏である。口径12.2cm～12.7cm、底径5.4cm～7.7cmを測る。1はほぼ完形である。口縁部は肥厚し、やや外傾する。体部下端から底部は手持ちヘラケズリが施される。色調は黄褐色で、胎土中に白色粒子・赤色スコリアを含む。2は体部中位から直線的に立ち上がる。体部下端から底部は手持ちヘラケズリが施される。色調は黒褐色で、胎土中に白色粒子を含む。3は深めのもので、底部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は弱く外折する。底部は回転糸切り離して、体部下端から底部外周に手持ちヘラケズリが施される。色調は浅黄色である。4～6は体部下端から底部の破片で、5は被熱により内面の剥落が顕著である。底部は回転糸切り未調整である。6は底部外面に墨書「三」が記される。7は土師器の皿である。底部外面削り込むことによって高台が作出されている。体部外面下位は回転ヘラケズリ、内面はミガキが施される。色調はにぶい黄橙色で、胎土は緻密である。8は土師器の甗の把手付近の破片である。把手は先端が欠損するが、扁平な角状のものである。把手貼り付け後に体部外面に縦方向のヘラケズリが施される。9～12は須恵器甕である。9～11は褐色基調で下総産である。12は丸底の甗の胴部から底部で、厚手で重量感のあるものである。底部内面の中央部分は円形の粘土板をはめ込み成形したことがわかる。外面は全面に目の細いタタキが施される。内面はヘラナデが施されるが同心円状の当て具痕が部分的に残る。色調は灰色基調であるが、部分的に灰褐色を呈する。東海産である。

鉄製品（第102図、図版49）

13は鉄製の釘である。先端部を欠損する。現存長4.6cm、幅6.0mm、厚さ4.0mmを測る。

石製品（第102図、図版50）

14は凝灰岩製の砥石である。断面方形を呈する。最大長66mm、最大厚35mm、最大厚52mm、重量170gである。

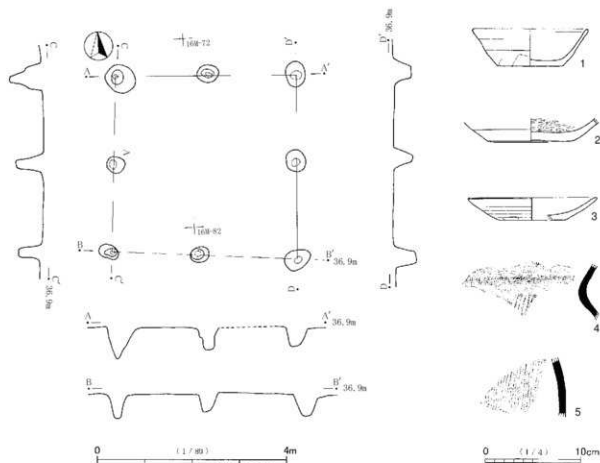
(64) SB001（第103図、図版19）

遺跡北部、16M-71・72グリッドに位置する。桁行2間、梁行2間の側柱建物で、主軸方位はN-5°-Eである。規模は、桁行・梁行とも総長3.90m、柱間は1.80m～1.97mを測る。柱穴の掘り方は円形で、径26cm～56cm、深さ39cm～78cmを測る。

遺物は土器が少量出土した。

土器（第103図）

1は土師器坏である。体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施される。底部の中央付近に回転糸切痕が残されている。2は土師器甗の体部下位から底部の破片である。体部下端は回転ヘラケズリ、底部は回転糸切離した後ナデが施される。3は土師器皿である。体部下端から底部は手持ちヘラケズリが施される。4・5は須恵器甕である。4は頸部から胴部の破片で、胴部にタタキが施される。5は胴部破片で、白色粒子・雲母を含む。新治窯産である。



第103図 (64) SB001

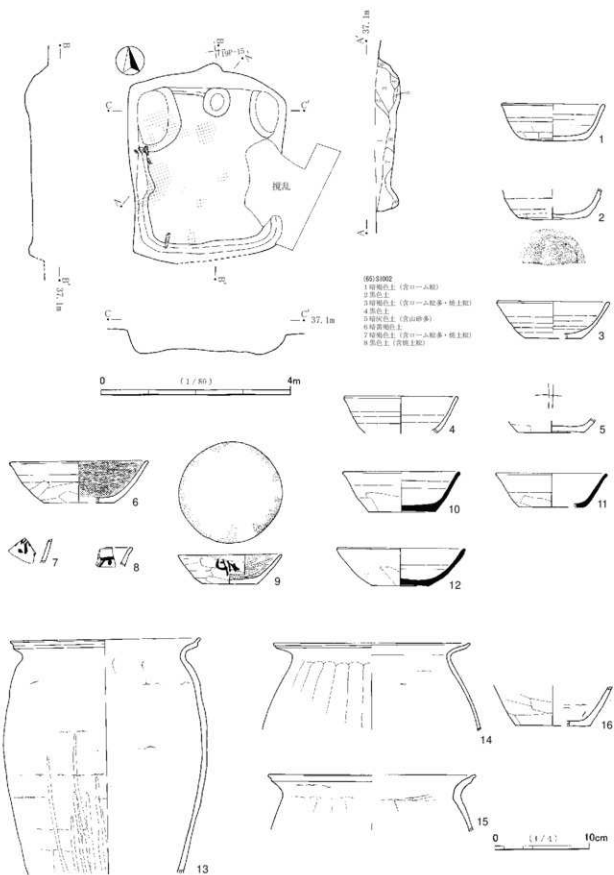
(65) S1002 (第104図、図版19)

遺跡北東部、19P-14・15・24・25グリッドに位置する。平面形は南北に長い方形で、主軸方位はN-5°-Eである。攪乱を受け遺存状態は不良であった。規模は、主軸長4.15m、幅3.35m、深さ39cmを測る。覆土は暗褐色土・黒色土が主体で、焼土粒を多量に含む。焼土を含む層の分布は西側が顕著で、西壁付近では炭化材もみられた。床面は凹凸が激しく、特に北東及び北西側コーナー付近は5cm～10cm低くなっていた。カマドは北壁中央付近に位置する。袖部は遺存しておらず、煙道及び底面の掘り込みが検出されたのみである。底面の掘り込みは円形で、深さは16cmを測る。付近には構築材と思われる山砂を含む暗灰色土が検出された。周溝は、北壁下はカマド西側、西壁下の南側から南東側コーナー付近で検出された。本来はカマド部分以外は掘り込まれていたと思われる。幅約40cm、深さ9cm～20cmを測る。ピットは検出されなかった。以上、カマド・床面・周溝など攪乱を受けていない部分の遺存状況が悪いことから、人為的に壊されものと考えられる。

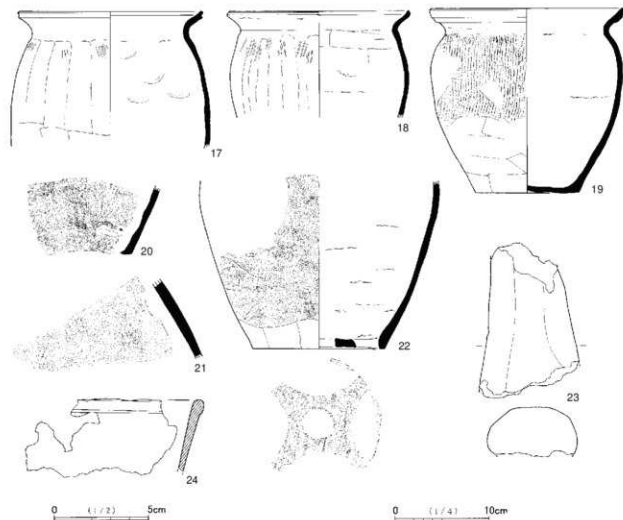
遺物は土器・土製品・鉄製品が出土した。出土状況は不明である。

土器 (第104・105図、図版46・47・50)

1～9は土師器環である。1～5は口径10.8cm～11.8cm、底径6.0cm～7.1cmを測る小型のものである。1・2は丸底気味の環で、口径が小さく箱形を呈する。体部下端から底部は手持ちヘラケズリが施される。



第104图 (65)S1002 (1)



第105図 (65)S1002 (2)

2は底部中央付近回転系切痕が残されている。1は白色粒子・赤色スコリアを含む。3は底部のみ手持ちヘラケズリが施される。5は体部下端から底部で、底部内面中央に「井」の線刻が施される。線は細く浅いもので、焼成後に施されたものである。6は中型の坏で、内面は黒色処理及びミガキが施される。胎土中に雲母・赤色スコリアを含む。7・8は外面に墨書が記された破片で、7は「奈」、8は「倉」の一部と考えられる。9は体部外面から底部にかけて手持ちヘラケズリ、内面はミガキが施される小型の坏である。体部外面に墨書「寺」が記される。口縁部の内外面に油煙及び煤が付着しており、灯明皿として使用されたものである。10～12は須恵器坏である。口径11.7cm～13.3cm、底径6.0cm～7.0cmを測る。体部下端から底部は手持ちヘラケズリが施される。12は底部に回転系切痕が観察される。10は長石、12は雲母・白色粒子を含む。13～16は土師器甕である。13は常総型の甕で、胴部下位から底部を欠く、胴部外面はナデ後中位から下位に縦方向のミガキが施される。胴部内面はヘラナデが施される。胎土中に長石・石英・雲母・白色粒子を含む。14・15は口縁部から胴部の破片である。胴部外面に縦方向のヘラケズリ、内面にヘラナデが施される。14は白色粒子を多く含む。16は胴部下位から底部で、外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。17～21は須恵器甕である。17・18は土師器の甕の器形を模倣したものである。胴部外

面はタタキが施された後に縦方向のヘラケズリが施される。胴部内面は横方向のヘラナデが施されるが、当て具痕がみられる。18は口唇部の断面形は方形に近く、頭部と胴部の境が強くヨコナデされるのが特徴である。19は小型の甕で、頭部は短く、口縁部帯は折り返し状に作出される。胴部外面はタタキが施され、中位以下は手持ちヘラケズリが加えられる。胴部内面から下位は煤が付着している。20は胴部下位の破片で、外面はタタキ後ヘラケズリが施される。白色粒子を多量に含む。19～20は下総産である。21は東海産の大型の甕の胴部の破片である。外面はタタキが施される。外面はにぶい褐色、内面は灰色を呈し、石英を含む。22は下総産の須恵器甕の胴部から底部で、胴部外面はタタキ後、下端はヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。底部は5孔式で、外面は無調整である。色調はにぶい黄色で、白色粒子を多量に含む。

土製品（第105図、図版49）

23は土製支脚である。上端部・下端部・片側部を欠損する。断面八角形に面取り成形される。現存長は16.3mmである。色調はにぶい黄褐色土である。

鉄製品（第105図、図版49）

24は鉄鍋の口縁部周辺の破片である。口縁部は外側に折り返され玉縁状に作出される。口縁部の厚さ5.0mm、胴部の厚さ2.5mm～3.5mm、口径25cm以上を測るものである。

(65) S1003・(12) S1045（第106図、図版20）

遺跡北東部、19P-03・04・13・14グリッドに位置する。西側1/3は(12)区に及んでおり、既に(12)S1045として報告済みである。(65)区の調査で全容が明らかとなったので、既報告範囲も含めて改めて報告する。平面形は南北に長い方形で、主軸方位は $N-16^{\circ}-E$ である。規模は、主軸長4.73m、幅4.35m、深さ40cmを測る。覆土は、上層は黒褐色土、下層は暗褐色土が主体で、ローム粒・ロームブロック・焼土粒・炭化物を含む。カマドは北壁中央に位置する。全長1.13m、全幅1.19m、袖部の高さ12cm、底面の掘り込みの深さ17cmである。袖部は灰褐色粘土によって構築されていた。火床部は火熱により硬化していた。覆土は、天井部が崩落したものと考えられる粘土ブロック・焼土粒を含む褐色土・暗褐色土、その下の火床部から煙道部上は焼土粒を含む赤褐色土が堆積していた。ピットは主柱穴が4か所検出された。いずれもしっかりとした掘り込みで、径63cm～85cm、深さ73.7cm～85cmを測る。周溝は、カマド部分と北壁のカマド東側から北東側コーナー付近以外は掘り込まれている。幅37cm、深さ7cm～10cmを測る。カマドの西側はやや深く掘り込まれている。

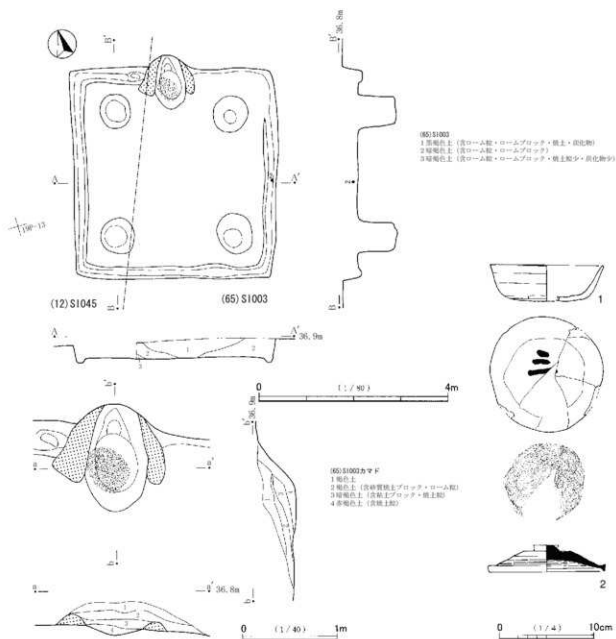
遺物は土器が出土した。出土状況は不明である。

土器（第106図、図版47・50）

1は丸底気味の土師器環である。体部下端から底部は手持ちヘラケズリが施され、底部中央付近は回転糸切り痕が残され、墨書「三」が記される。2は須恵器蓋である。灰色を呈し、白色粒を多量に含む。新治産である。ほかに既報告の(12)S1045で図示した土師器環、4の土師器の武蔵型壺と同一個体の破片が出土し、一部接合したが、4のみ写真図版を掲載した。

(66) S1001（第107図、図版20）

遺跡北部、18K-68・69・78・79グリッドに位置する。遺存状態は良好である。平面形は東西に長い方形で、主軸方位は $N-16^{\circ}-E$ である。規模は主軸長4.35m、幅4.63m、深さ48cmを測る。覆土は、上層はローム粒・ロームブロック・焼土粒・炭化物を含む黒褐色土、下層はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土が主体で、カマドは北壁東寄りに位置する。全長1.43m、全幅1.23m、袖部の高さ35cmである。



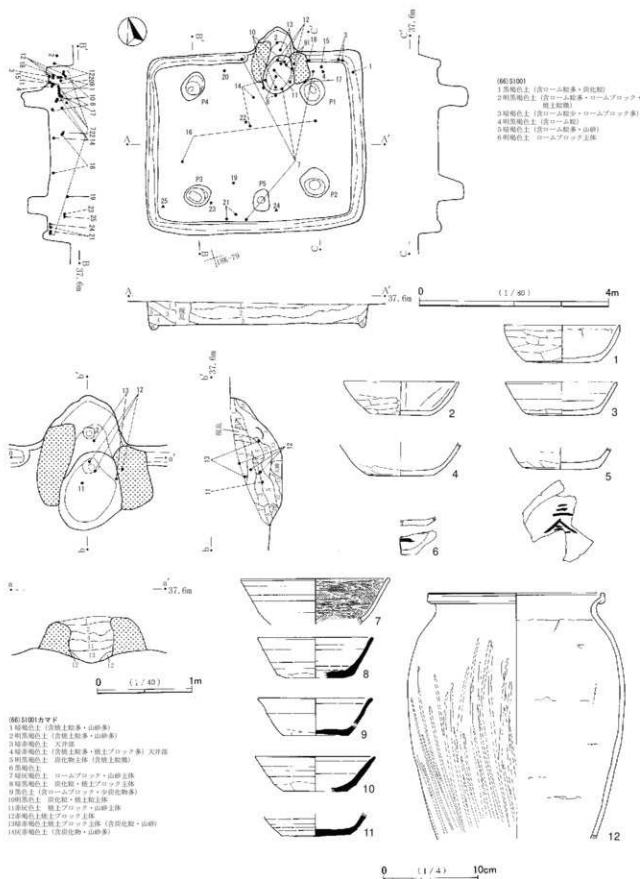
第106図 (65)S1003・(12)S1045

火床部の掘り込みは楕円形で、深さ約12cmを測る。火床部及び袖部の内側面は火熱により焼け、赤色を帯びていた。火床部の北側の底面中央付近には土製支脚が使用時の状態で直立していた。覆土は、上層は焼土・山砂を多く含む暗褐色土・明黒褐色土、中層の3・4層は崩落した天井部で、支脚直上の6層は掛け口と考えられる。底面直上の12・13層は焼土ブロックが主体であった。ピットは、P1～P4は主柱穴で、径45cm～62cm、深さ60cmを測る。南壁中央壁下のP5は梯子ピットで、深さ19cmを測る。

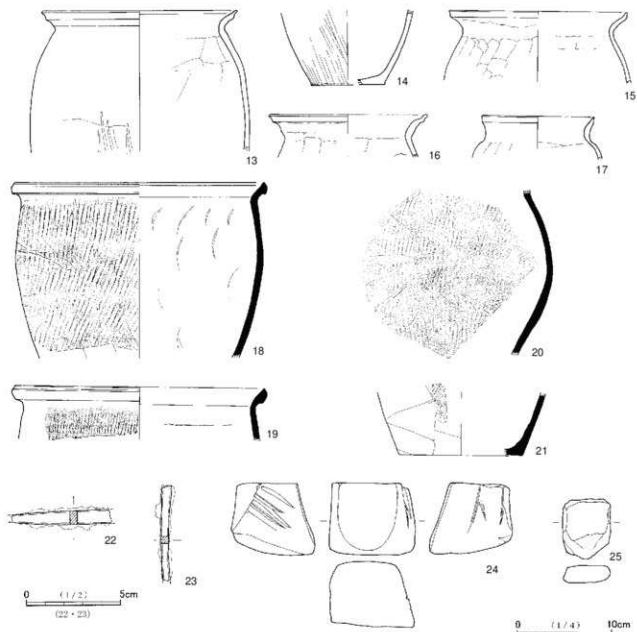
遺物は、カマド周辺及び南壁下を中心に土器・鉄製品・石製品が出土した。

土器 (第107・108図、図版47・50)

1～7は土師器環である。1・2は体部から底部の外側面はヘラケズリ後ヘラナデ、内面はヘラナデが施



第107図 (66)S1001 (1)



第108図 (66)SI001 (2)

される。1は底径7.8cmと大きく、口縁部にヨコナダが加えられ、作りが丁寧である。3は口縁部から体部はヨコナダ、体部下端から底部はヘラケズリが施される。胎土中に白色針状物質を含む。4～6は体部から底部で、いずれも体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施される。5は「三倉」、6は「三」と思われる墨書が底部に記される。7は口縁部から体部で、体部下端は回転ヘラケズリ、内面にミガキ及び黒色処理が施される。8～11は須恵器環である。口径11.9cm～12.5cm、底径6.2cm～6.9cmを測る。8～10は体部下端から底部は手持ちヘラケズリが施される。11は底部のみ手持ちヘラケズリが施される。9は底部に回転ヘラ切り痕がみられる。12～14は胴部に縦方向のミガキが施される土師器の常総型甕である。いずれも胎土中に雲母・長石・石英を多量に含む。15～17は土師器の甕の口縁部から胴部上位である。胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。16・17は小型である。18～21は須恵器の甕である。18・

19は頸部が短い甕の口縁部から胴部である。胴部外面はタタキ、内面はヘラナデが施される。20は胴部片で、外面はタタキ後横方向のナデが加えられる。21は胴部下方から底部である。

鉄製品 (第108図、図版49)

22は刀子の茎部分である。現存長53mm、幅7.0mm、厚さ4.0mmを測る。23は棒状の鉄製品である。全長51mm、幅・厚さともに3.5mmを測る。

石製品 (第108図、図版50)

24は凝灰岩製の砥石である。金属の刃部による擦痕が数条みられる。長さ7.5cm、幅9.3cm、厚さ7.0cm、重量810gである。25は雲母片岩である。長さ6.4cm、幅5.0cm、厚さ5.0mm、重量95.2gである。

(66) S1002 (第109図、図版20)

遺跡北部、18L-61・62・71・72グリッドに位置する。耕作による攪乱を受けていた。東側に (66) S1003が隣接する。平面形は方形で、主軸方位は $N-8^{\circ}-E$ である。主軸長4.17m、幅4.07m、深さ35cmを測る。覆土は、上層はローム粒・炭化物を含む黒褐色土が主体で、西側の床面付近は炭化材が放射状に分布し、中央付近には焼土もみられた。カマドは北壁東寄り、コーナー近くに位置する。袖部は失われていた。壁外への掘り込みは17cmを測り、底面の浅い掘り込みまでの全長95cmを測る。ピットは5か所検出された。P1～P4は主柱穴で、径23cm～40cm、深さ17cm～26cmを測る。P5は梯子ピットで、径26cm、深さ17cmを測る。周溝はカマド部分を除いて全周する。幅19cm～37cm、深さ4cm～15cmを測る。

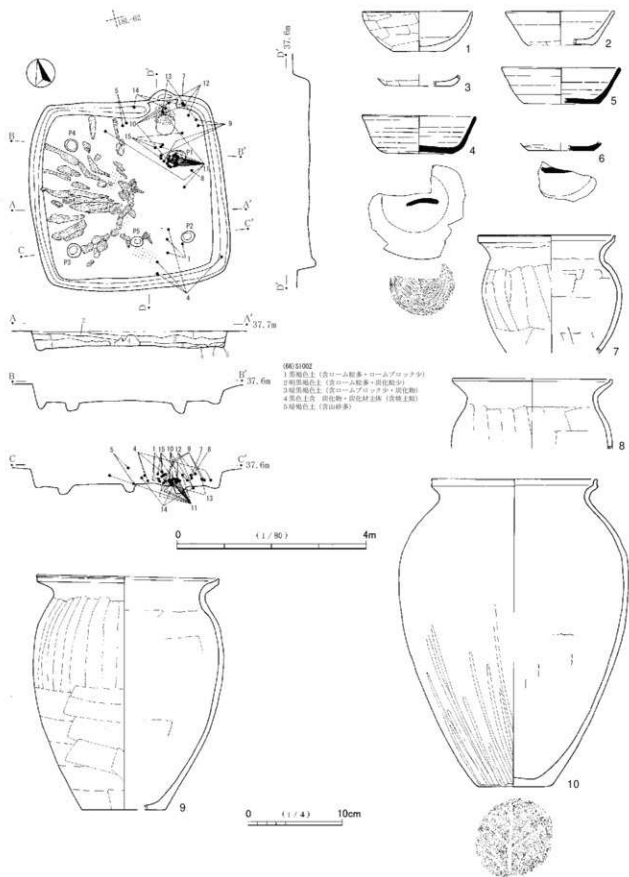
遺物は、カマド周辺及び南東側コーナーを中心に土器が出土した。

土器 (第109・110図、図版47・48・50)

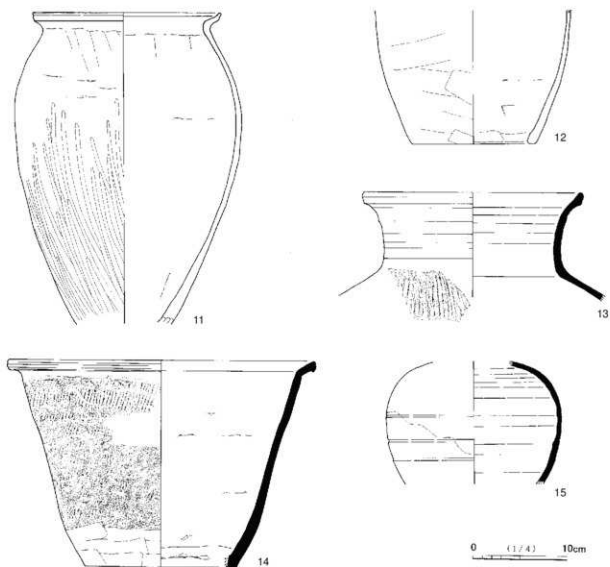
1～3は土師器である。1は、外面は手持ちヘラケズリ、内面はヨコナデが施される。2・3は体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施される。4～6は須恵器である。いずれも色調は橙ないし褐色基調である。回転糸切り後、4・6は体部下端から底部外周に手持ちヘラケズリ、5は体部下端に回転ヘラケズリ、底部外周に手持ちヘラケズリが施される。4・6は底部に墨書が記される。いずれも欠損しているが、他の出土例から「三」と推測される。4は上総産、5・6は下総産である。7～11は土師器の甕である。胴部外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。7は小型である。10・11は胴部にミガキが施される常総型甕で、10は底部に木葉痕が残されている。11は火熱により胴部は黒褐色の焦げが顕著である。12は土師器甕の胴部から底部の破片である外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。13は須恵器の広口の甕の口縁部から胴部である。口縁部は幅の狭い口縁帯が作出され、頸部は比較的短く、胴部外面はタタキ、内面はヘラナデが施される。色調は黒褐色で上総産と思われる。14は須恵器の甕である。深めのたらい状を呈する。破片であるため底部の孔数は不明である。外面はタタキ後、下位はヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。色調はにぶい褐色で、胎土中に雲母・長石・石英を多量に含む。新治窯産である。15は須恵器長頸壺の胴部である。上方に降灰袖がかかる。素地の色調は黄灰色で、白色粒を含む。東海産である。

(66) S1003 (第111図、図版20)

遺跡北部、18L-72・73・92グリッドに位置する。西側に (66) S1002が隣接する。全体的に耕作による攪乱を受けていた。平面形は隅丸方形で、主軸方位は $N-2^{\circ}-E$ である。主軸長2.75m、幅2.45m、深さ21cmを測る。覆土は、上層はロームブロックを含む明褐色土、下層はロームブロック・山砂を含む暗褐色土が主体であった。カマドの南側には焼土・炭化材の分布がみられた。カマドは北壁中央付近に位置



第109図 (66)S1002 (1)



第110図 (66)S1002 (2)

する。袖部は失われており、壁外から焚口までの全長73cm、底面の掘り込みの深さ12cmを測る。底面北側には土製支脚が直立した状態で出土した。

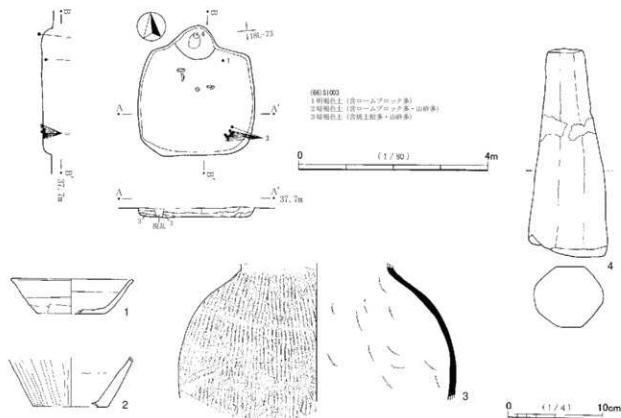
遺物は、上記の支脚の他、土器が少量出土した。

土器 (第111図、図版48)

1は土師器坏である。体部下端から底部は手持ちヘラケズリが施される。2は土師器の常総型甕の胴部下端から底部である。胎土中に雲母・長石・石英を多量に含む。3は須恵器甕の胴部である。外面はタタキ、内面はヘラナデが施される。

土製品 (第111図、図版49)

4は支脚である。非常に脆く、取り上げ後に一部欠損した。断面八角形に面取り成形される。最大長22cm、上端部幅3.7cm、下端部8.4cmを測る。色調はにぶい黄褐色である。



第111図 (66) S1003

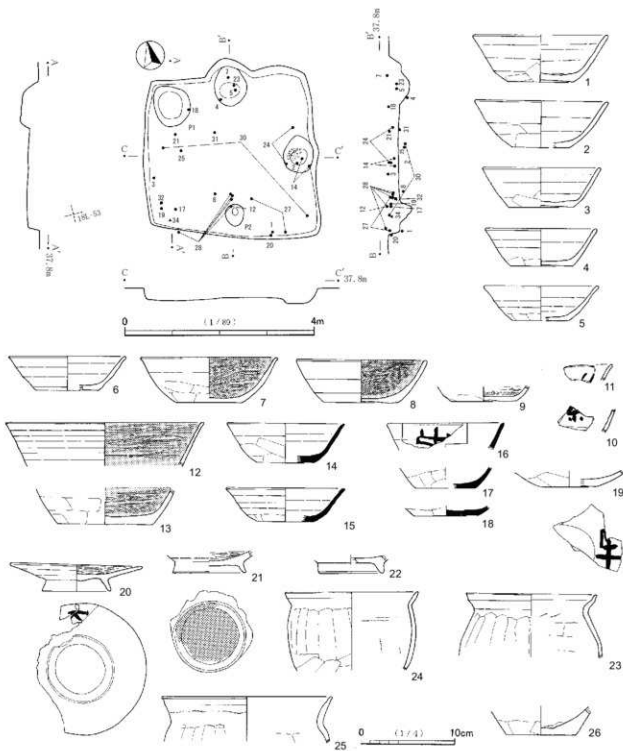
(66) S1004 (第112図、図版21)

遺跡北部、18L-43・44・53・54グリッドに位置する。全体的に耕作による攪乱を受けていた。平面形は方形で、主軸方位はN-13°-Eである。規模は、主軸長3.79m、短軸3.50m、深さ25cmを測る。覆土は、上層は焼土粒・ローム粒を含む黒褐色土、下層はローム粒・砂粒を含む暗褐色土が主体である。カマドは北側と東側の2か所にある。北側のカマドは、北壁のほぼ中央に位置する。袖部は攪乱を受けており、粘土・山砂・焼土の堆積がみられたが形状を留めていなかった。壁外から焚口までの全長1.00cm、底面の掘り込みの深さ20cmを測る。東側のカマドは、袖部は壊されていたが、煙道部の壁外の掘り込み部分には山砂・焼土の堆積がみられた。全長0.76m、底面の掘り込みの深さ10cmを測る。火床部は火熱により硬化していた。ピットは2か所検出された。北西コーナー下のP1は貯蔵穴である。円形基調で、径75cm～91cm、深さ20cmを測る。南壁下のP2は梯子ピットで、径40cm～47cm、深さ25cmを測る。周溝は検出されなかった。

遺物は土器・土製品・石製品が出土した。覆土中の床面から浮いた状態で出土したものが多い。

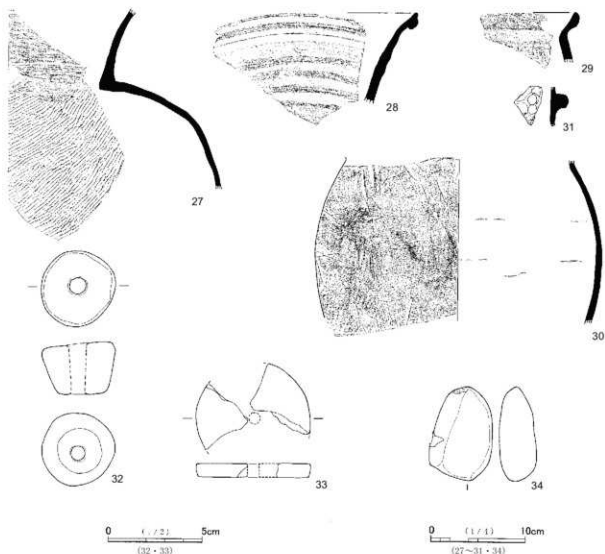
土器 (第112・113図、図版48・50)

1～11は土師器坏である。口径が約14cmの1・2・6・7と12cm前後の3～6がある。1～4は体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施されるもので、1～3、5は底部に回転系切り痕がみられる。5は体部下端から底部に回転ヘラケズリが施される。2は赤色スコリアを含む。7～9は内面にヘラミガキが施される坏で、体部外面下端から底部の調整は、7は手持ちヘラケズリ、8は回転系切り後外周回転ヘラケズリ、9は回転系切り後外周手持ちヘラケズリである。7・8は内面に黒色処理が施される。10・11は



第112図 (66)SI004 (1)

墨書が記された破片で、他の出土例を参考にすると、10は「三」、11は「奈」と判読できる。12・13は土師器碗で、同一個体の可能性が高い。内面にミガキ及び黒色処理が施される。12は体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施される。14～18は須恵器坏である。口径12.2cm～12.4cm、底径6cm～6.8cmを測る。体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施される。16は墨書「庄」が記される。19は土師器皿である。体

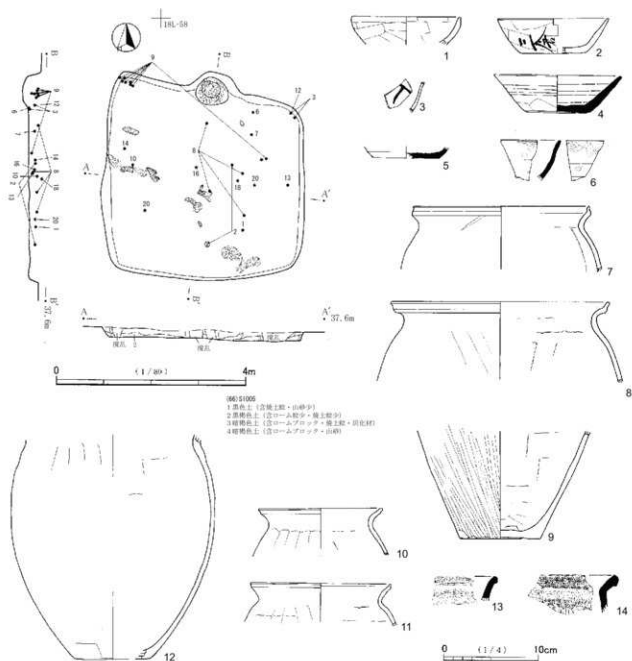


第113図 (66)S1004 (2)

部下端から底部は手持ちヘラケズリが施される。16と筆致が似た墨書「庄」が記される。20は土師器の高台付皿である。内面にミガキが施される。体部外面に「犬」とみられる墨書が記されている。21・22は土師器の高台付椀である。21は内外面に墨痕が認められ、甗として転用されたとみられる。23～26は土師器甕である。外面はヘラケズリ、内面はヘラナデが施される。23・24は小型の甕の口縁部から胴部である。27～30は須恵器甕である。27は甕の頸部から胴部で、大型の丸底甕であると思われる。胴部外面はタタキが施され、内面は同心円状の当て具痕がみられる。焼成は堅緻で重量感がある。東海産である。28～30は下総産の甕である。30は焼成が不良で、黄褐色を呈する。外面はタタキ、内面はヘラナデが施される。28・29は口縁部付近の破片である。31は須恵器甗の把手部分の破片で、タタキ後に把手が貼り付けられたものである。

土製品 (第113図、図版49)

32は紡錘車で、最大径4.0cm、下面径2.4cm、厚さ2.7cm、孔径9mmを測る。全面ナデで仕上げられる。色調はにぶい黄褐色である。33は土師質の有孔円板で、2点の破片から復元した。径6mmほどの孔が穿たれているものと思われる。全面丁寧なヘラケズリで仕上げられる。径約6cm、厚さ7mmを測る。色調



第114図 (66)SI005 (1)

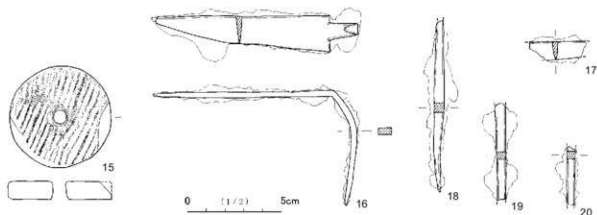
はにぶい黄褐色である。

石製品 (第113図、図版50)

34は凝灰岩製の敲石である。全体的に火熱により赤色を帯びている。最大長9.9cm、最大幅6.6cm、厚さ4.0cmを測る。

(66) SI005 (第114図、図版21)

遺跡北部、18L-57・58・67・68グリッドに位置する。全体的に耕作による攪乱を受けていた。平面形は方形で、主軸方位はN-7°-Eである。規模は、主軸長4.40m、幅4.20m、深さ22cmを測る。覆土は焼土粒・山砂を含む黒色土が主体である。南西側を中心に焼土・炭化材の分布がみられた。カマドは北壁の



第115図 (66)SI005 (2)

ほぼ中央に位置する。袖部は遺存していなかった。全長72cm、底面の掘り込みの深さ13cmを測る。火床部は火熱により硬化していた。ピット・周溝は検出されなかった。

遺物は、土器・土製品・鉄製品が出土した。覆土中の床面からやや浮いて出土したものが多い。

土器 (第114・115図、図版48・50)

1～3は土師器環である。1・2は外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施される。2は墨書「三倉」が記される。3は体部片で、墨書「入」が記される。4～6は須恵器環である。4は器厚が厚く、体部から口縁部にかけて直線的に開くもので、雲母・長石・石英を多量に含む。新治窯産である。5は体部下端から底部に回転ヘラケズリが施される。6は口縁部から体部の破片で、内外面に油煙が付着する。7～12は土師器の甕である。7～9は常総型甕で、胴部はヘラナデ、外面下方にミガキが加えられるものである。胎土中に雲母・長石・石英を多量に含む。10～12は胴部外面にヘラケズリ、内面にヘラナデが施される。10・11は比較的小型のものである。13は須恵器甕の口縁部から頸部の破片である。外面にカキ目状の横方向の条線がみられる。色調は暗灰色で、長石・石英等の白色粒子を含む。14は須恵器の甕の口縁部付近で、胴部外面にタタキが施される。雲母・長石・石英を含む。新治窯産である。

土製品 (第115図、図版49)

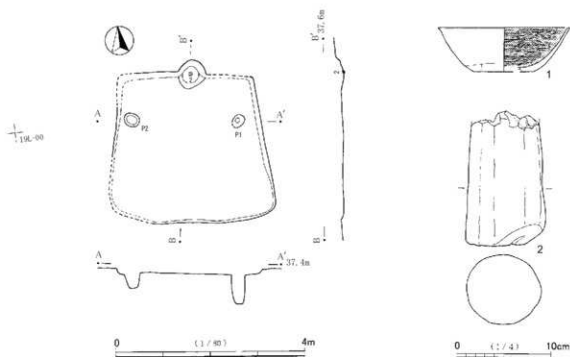
15は須恵器甕の胴部片を転用した有孔円板である。穿孔は両面からなされ、周縁は丁寧に磨りが施されている。最大径5.4cm、最大厚1.0cm、孔径7.0mmを測る。

鉄製品 (第115図、図版49)

16・17は刀子である。16は茎が折れ曲がった状態で出土した。刃先が欠損している。現存復元長15.7cm、刃部断面部位の幅1.45mm、背側厚3.0mm、茎部断面部位の幅7.0mm、厚さ3.5mmを測る。17は刃部の破片で、現存全長3cm、断面部位の背側厚3mm、幅1.0cmを測る。18～20は棒状製品で、いずれも断面方形を呈する。

(66) SI006 (第116図、図版21)

遺跡北部、18L-90・91、19L-00・01グリッドに位置する。全体的に耕作による攪乱を受けていた。平面形は方形で、N-5°-Wである。規模は、主軸長3.45m、幅3.50m、深さ12cmを測る。覆土は記録を欠くため不明である。カマドは北壁のほぼ中央に位置する。袖部は形状を留めていなかった。底面の掘り込みの中央に土製支脚が使用時の状態で直立していた。全長61cm、底面の深さ9cmを測る。ピットは東・



第116図 (66) S1006

西壁下の北側に1か所ずつ検出された。2か所であるが、位置関係は対称で、比較的しっかりと掘り方であることから、主柱穴と捉えられるものである。P1は径約25cm、深さ60cm、P2は径約29cm、深さ35cmを測る。周溝は検出されなかった。

遺物は、上記の支脚の他、土器が少量出土した。

土器 (第116図)

1は土器器坏である。体部下端から底部は手持ちヘラケズリ、内面はミガキ及び黒色処理が施される。

土製品 (第116図、図版49)

2は土製支脚である。上端部は欠損する。下端部は一部欠損するが丸みを帯びている。断面形は円形である。現存全長14.4mm、下端部幅8.5cmを測る。

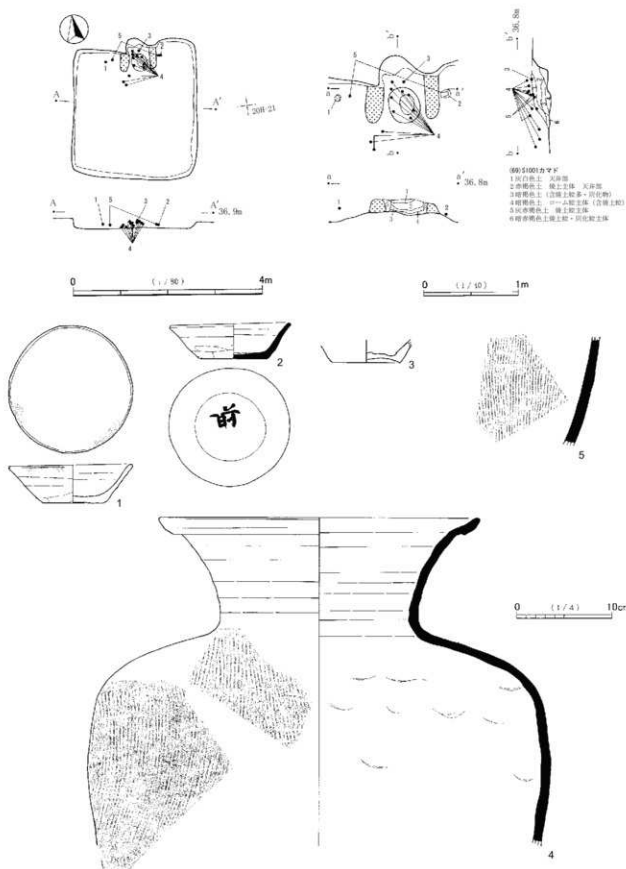
(69) S1001 (第117図、図版21)

遺跡北西部、20H-10・11・20・21グリッドに位置する。平面形は方形で、N-11°-Wである。規模は、主軸長3.00m、幅2.63m、深さ22cmを測る。覆土は記録を欠くため不明である。カマドは北壁のほぼ中央東寄りに位置する。床面より5cm～8cm高い場所に造られている。全長72cm、幅80cm、底面の掘り込み4cm、袖の高さ14cmを測る。袖部は白色粘土で構築される。内部の覆土は、崩落した天井部と考えられる灰白色土及び内面が焼土化したもの、その下に焼土粒・炭化物を含む堆積がみられた。ピット・周溝は検出されなかった。

遺物は、カマド周辺を中心に土器が出土した。

土器 (第117図、図版48・50)

1は土器器坏である。底部は回転糸切り未調整である。体部下端に手持ちヘラケズリが施される。口縁部に油煙の付着が認められる。2は完形の須恵器坏である。体部下端から底部は手持ちヘラケズリが施される。底部に墨書「前」が記される。3は土器器坏の底部付近である。胎土中に長石・石英・雲母を含む。



第117図 (69) S1001

常総型甕である。4は大型の須恵器甕である。他の出土例から丸底と推測される。胴部は平行タタキが施される。内面は当て具痕がみられる。色調はふい黄褐色で、下総産と判断される。5は須恵器甕の胴部片で、外面は平行タタキ、内面はヘラナデが施される。色調は灰黄色で、器質は堅緻である。

第5節 野馬土手・溝状遺構・道路状遺構・土坑

(52)・(54)・(55) SA001・(51) SD001・(52)・(55) SD001・(52)・(55) SD002・(51) SK003

(第118・119図、図版23)

遺跡北西部、10L・11K・11L・12J・12K・13I・13J・14I・14J グリッドに位置する。台地北端から西側の台地縁辺に沿って北東から南西方向に伸びる野馬土手1条とそれに沿った溝を検出した。平成11年度に(52)区の一部で確認調査が行われており、(4)SD065として報告済みである。南西側は(24)区の野馬土手に続き、谷を越え、台地の縁辺に沿うように屈曲しながら(26)・(28)区まで延びている。(52)区の南西側、12K-34グリッド以南において、断続的に幅70cm～1.00m、高さ約40cmの土手状の高まりを調査前に視認できた。地形測量終了後、トレンチを9か所設定して調査を行った。

(52)・(54)・(55) SA001は、調査前に高まりを視認できたトレンチにおいて土手の盛り土が検出され、(52)区の南西端では土手が途切れることを確認した。(52)区の北側では、両側の溝は50cm～60cmと近接して並走していることから、その間に盛り土はなかったものと考えられる。

盛り土は基底部幅は1.40m～2.10m、地山からの高さは30cm～50cm 遺存しており、ローム粒・ロームブロックを含む黒褐色土・暗褐色土が積み上げられていた。

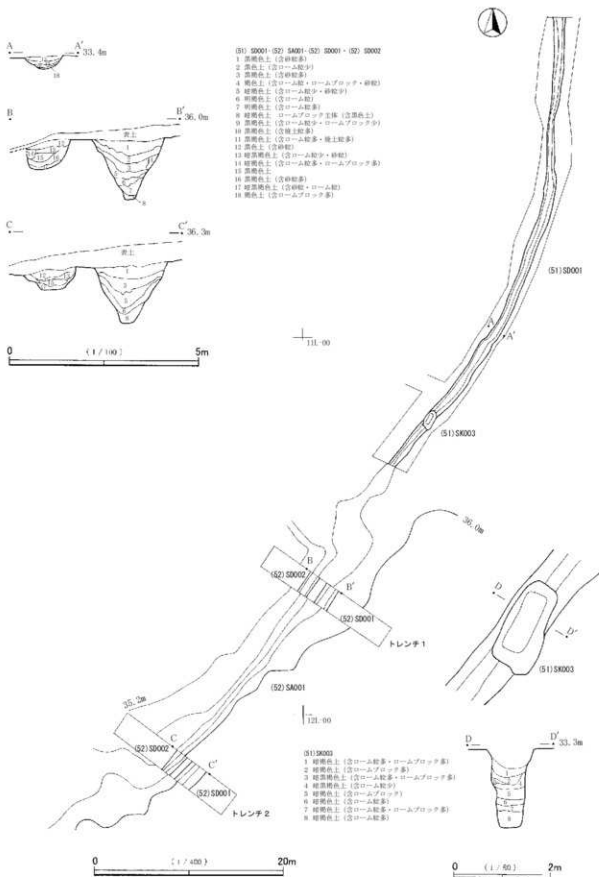
溝はおおむね土手の両側に沿うように掘り込まれていた。東側の溝(52)・(55)SD001は、断面形はV字状のしっかりとしたもので、野馬堀と捉えられるものである。規模は、開口部幅1.10m～2.40m、底面幅30cm～65cm、深さ1.10m～1.60mを測る。覆土は、上層は砂粒を含む黒色土、中層はローム粒を含む暗褐色土、下層はローム粒を多量に含む明褐色土またはロームブロック主体の層が堆積していた。

西側の溝(52)・(55)SD002は、地山まで掘り込まれていない浅い箇所もあり断続的に検出された。土手に沿うように掘り込まれているが、(52)区の南側では一旦西側にそれ、(55)区で再び土手に並走するように思われる。(52)区の南西端で途切れ、(24)区には連続しない。断面形はU字状ないし逆台形状で、開口部幅60cm～2.10m、深さ20cm～87cmを測り、不均一である。覆土は、上層は砂粒を含む黒色土、中層は黒褐色土、下層は砂粒・ローム粒を含む暗黒褐色土を主体とする。

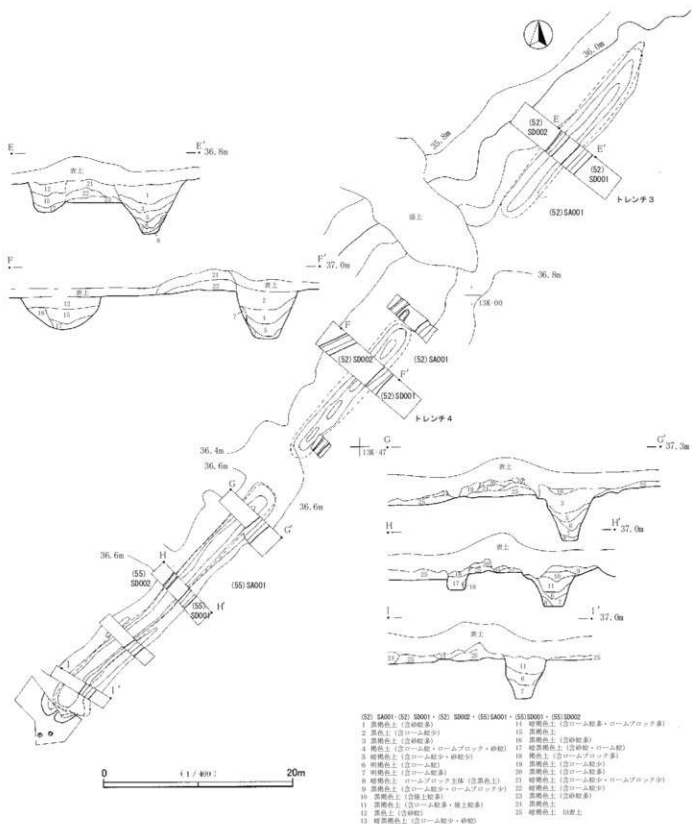
(52)区の南西端は土手・溝とも途切れ、(24)区との間は土手が切通しとなっていることを確認した。この間は八日市場道が通っていたと思われる。南西端で検出された2か所のピットは、径36.0cm～44.0cm、深さ25.0cm～32.5cmを測る。周辺の小字名が「木戸脇」であることから、木戸の柱穴の可能性がある。

(51)SD001は(52)・(55)SD002と同一の溝と思われる。東側の(52)・(55)SD001に連続する溝は検出されなかった。南側では(51)SK003が溝を切って掘り込まれている。

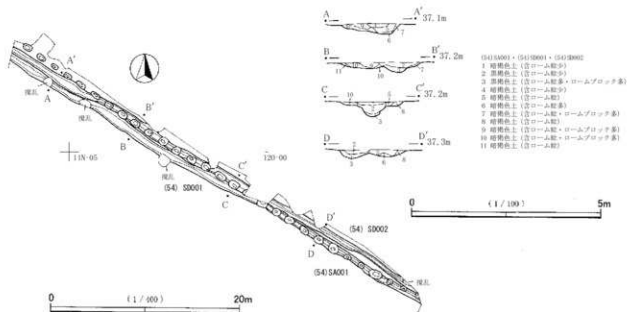
(51)SK003は長方形を呈する土坑で、長軸2.00m、最大幅95m、深さ1.70mを測る。底面は平坦である。覆土はローム粒・ロームブロックを多量に含む暗褐色土が主体で、人為的な埋土と思われる。遺物は、馬骨2体分が出土した。しし穴・犬落とし穴とされるものである。



第118図 (51)SD001・(52)SA001・(52)SD001・(52)SD002・(51)SK003



第119図 (S2) SA001・(S2) SD001・(S2) SD002・(S5) SA001・(S5) SD001・(S5) SD002



第120図 (54) SA001・(54) SD001・(54) SD002

(54) SA001・(54) SD001・(54) SD002 (第120図、図版23)

遺跡北側、11N・12N・12O グリッドに位置する北西から南東方向に延びる土坑列1条と溝2条である。隣接する地区では連続するものは検出されていない。3条とも切り合っており、土層断面によれば、土坑列 (54) SA001が (54) SD001・(54) SD002を切り、北側の溝 (54) SD002が南側の溝 (54) SD001を切っていることがわかる。

(54) SA001は、40cm～90cm間隔で直線的に配列される土坑29基からなり、長さ約50mを測る。方向は (54) SD001・(54) SD002よりやや北東側に触れている。土坑は、(54) SD001・(54) SD002埋没後に掘り込まれており、おおむね走向方向に長い楕円形を呈する。規模は径約50cm～1.5m、深さ24cm～40cmを測る。覆土は、暗褐色土が主体で、上層はローム粒を少量、下層はローム粒・ロームブロックを多量含む。

(54) SD001は、長さ56m、幅60cm～1.50m、深さ10cm～20cmを測る。覆土は、ローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土を主体とする。

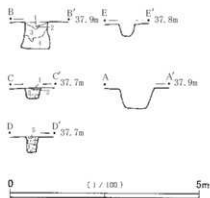
(54) SD002は、(54) SD001の北側に並走し、一部を切っている。長さ54m、幅60cm～1.5m、深さ10cm～30cmを測る。覆土は、ローム粒を含む暗褐色土が主体である。

遺物は出土しなかった。

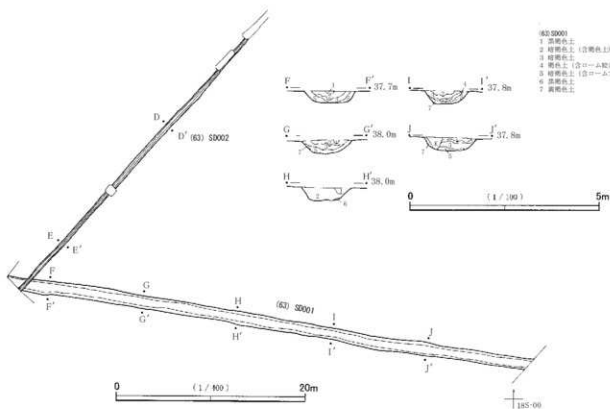
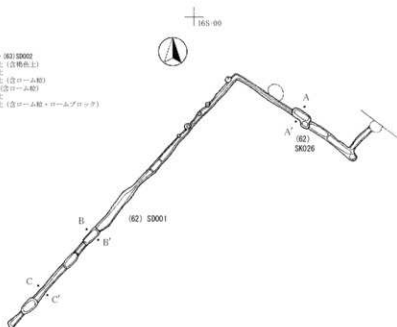
(63) SD001 (第121図、図版22)

遺跡北東部、17Q・17R・17S グリッドに位置する奈良・平安時代の溝状遺構である。西端は近世以降の溝状遺構 (63) SD002に切られる。西側は既報告の (8) SD033・(10) SD346に連続し、17Q-59グリッド付近で南側に90°屈曲する区画溝である。東側は未検出で連続しないが、(10) 区の東端で検出された (10) SD554は方向・規模が同一であり、本来は一連の区画溝の一部と捉えることができる。(63) 区で検出された長さは56.5mである。断面形は逆台形状で、底面は平坦である。開口部幅1.20m～1.60m、底部幅60cm～1.00m、深さ40cm～50cmを測る。覆土は、上層は暗褐色土、下層はロームブロックを含む暗褐色土が主体である。

遺物は、土器が約20点、鉄製品が数点出土した。



- (62) SD001・(62) SK026
- 1 埴輪粘土 (古埴輪土)
 - 2 埴輪粘土
 - 3 埴輪粘土 (含ローム層)
 - 4 埴輪土 (含ローム層)
 - 5 埴輪粘土
 - 6 埴輪粘土 (含ローム層・ロームブロック)

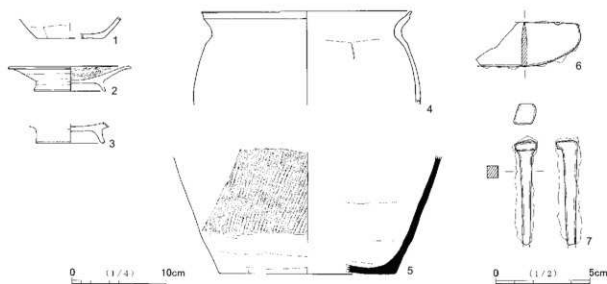


- (63) SD001
- 1 埴輪粘土
 - 2 埴輪粘土 (埴輪粘土)
 - 3 埴輪粘土
 - 4 埴輪土 (含ローム粘土・ロームブロック)
 - 5 埴輪粘土 (含ロームブロック)
 - 6 埴輪粘土
 - 7 埴輪粘土

第121図 (62) SD001・(62) SK026・(63) SD001・(63) SD002

土器 (第122図、図版48)

1は土師器環である。体部下端から底部に手持ちヘラケズリが施される。2・3は土師器の高台付皿で



第122図 (63)SD001出土遺物

ある。いずれも内面にミガキが施される。底部の調整は、2は全面回転ヘラケズリ、3は回転糸切り離し後、外周のみ回転ヘラケズリが施される。4は土師器甕で、胴部は内外面ヘラナデが施される。胎土中に雲母・長石・石英を含む常総型甕である。5は須恵器甕である。胴部外面は平行タタキ後、下端にヘラケズリが加えられる。内面はヘラナデが施される。色調は暗灰黄色で、下総産である。

鉄製品 (第122図、図版49)

6は穂摘具の破片で、現存長5.6cm、断面部位の青側幅は2.4cm、厚さ3.0mmを測る。7は釘で、先端は欠損する。現存長58cm、頭部幅1.1cm、厚さ6.0mmを測る。

(65) SD001 (第123図、図版22)

遺跡北東部、18P-89、18Q-80・81・82グリッドに位置する奈良・平安時代の溝状遺構である。18Q-80付近で途切れ、西側では未検出、東側の(10)区では連続しないが、西側は(12)SD057、東側は(10)SD430、(10)SD512に繋がる。(65)区で検出された長さは15.0m、幅60cm～1.10m、深さは、西端で11cm、東端で22cmを測る。断面形はおおむね逆台形状である。覆土はロームブロックを含む黒色土である。

遺物は出土しなかった。

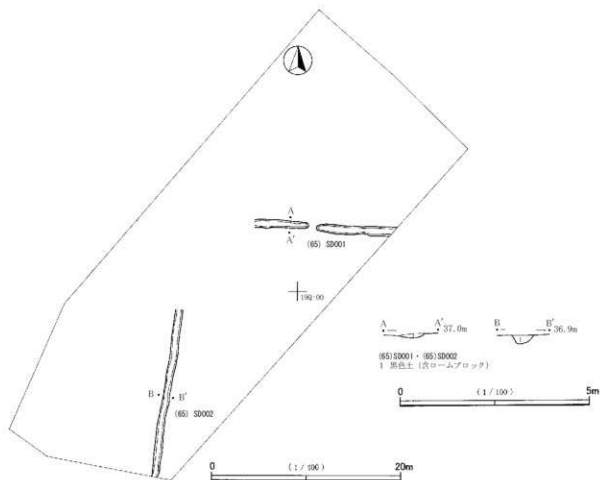
(65) SD002 (第123図、図版22)

遺跡北東部、19P-06・16・26・36・46グリッドに位置する奈良・平安時代の溝状遺構である。北・南側とも途切れるが、北側は(12)SD042、南側は(10)SD535に繋がる。(65)区で検出された長さは18m、全長92mである。断面形は逆台形で、底面は凹凸がある。幅65cm～75cm、深さ10cm～27cmを測る。覆土はロームブロックを含む黒色土である。

遺物は出土しなかった。

(66) SD001、(71) SD001 (第124・127図、図版22)

遺跡北部、18K-87・88・89・97、18L-80・81・82グリッドに位置する奈良・平安時代の溝状遺構である。(13)・(15)区では繋がる溝は検出されていないため、東端とみられる。西側は(14)SD054に繋がり、不連続であるが(19)SD682・(33)SD022を挟んで、(71)SD001に繋がる。(19)SD682は奈良・平安時代の



第123図 (65)SD001・(65)SD002

住居跡(19) S1679に切られている。長さは(66)区は24.0m、(71)区は51.1mである。これまで検出された全長は418.5mを測る。断面形は逆台形で、底面は若干の凹凸があるが堅く締まっている。幅90cm～1.65m、深さ24cm～33cmを測る。(66)SD001は(66)SD002・(66)SD003と切られる。覆土は、上層は黒褐色土、下層はローム粒を多く含む暗褐色土である。

遺物は、(66)SD001から土器が10数点出土した。

土器(第124図、図版50)

1は(66)SD001から出土した土師器杯の底部破片である。外面は回転糸切り痕が残され、墨書「三」が記される。

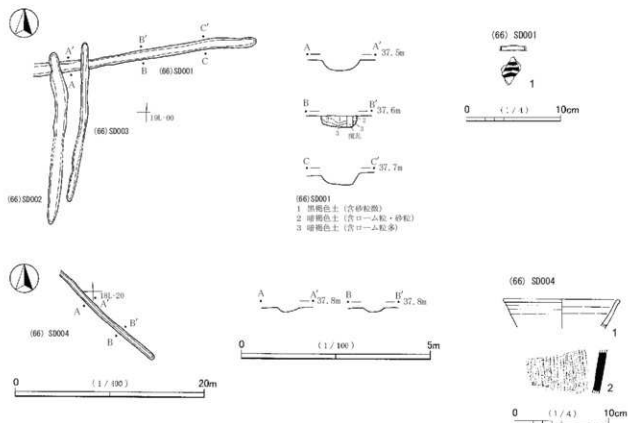
(66)SD004(第124図、図版22)

遺跡北部、18K-19・29、18L-20・31グリッドに位置する。奈良・平安時代の可能性が高い。北西側は(14)SD150に繋がるとみられる。長さ13.5m、全長23.0mを測る。幅25cm～29cm、深さ10cm～12cmを測る。

遺物は、土器が10数点出土した。

土器(第124図)

1は土師器杯である。内外面ともヨコナデが施される。2は須恵器甕の胴部片である。外面は平行タタキ、内面はヘラナデが施される。下総産である。



第124図 (66)SD001・(66)SD002・(66)SD003・(66)SD004

(68)・(69) SD001・(71) SD003 (第125・127図、図版23)

遺跡北西部、20C・20D・20E・20F・20G・20Hグリッドに位置する。東西方向に直線的に延びる道路状遺構である。東側は既報告の(18)SD120に繋がりを、遺跡を横断するようにさらに東へ直線的に延びている。長さ202.5m、これまで検出した全長は約520mに及ぶ。側面、底面とも凹凸があり、部分的に轍と思われる幅の細い溝がみられた。固く締まっている。開口部幅1.65m～3.70m、底面幅85cm～1.75m、深さ30cm～75cmを測る。覆土は、黒色土が主体で、西側では比較的ローム粒・ロームブロックを多量に含む。

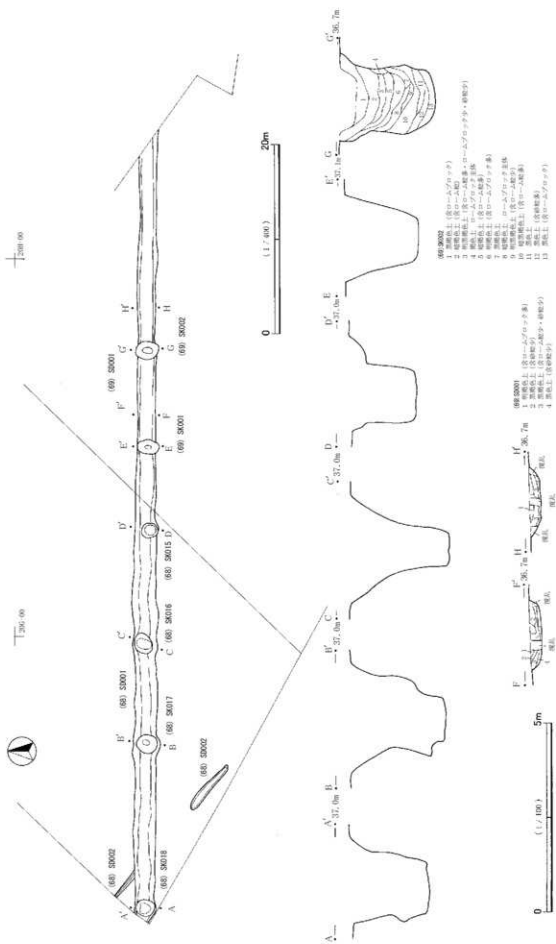
溝内には東側と同様に陥穴状の大規模な土坑が13基掘り込まれていた。しし穴・犬落とし穴とされるものである。道路状遺構と時期差はあまりないと思われる。土坑の平面形は円形ないし楕円形で、楕円形のものには長軸方向が道路の走行方向と直交し、規模は開口部径1.30m～2.67m、底面径55cm～1.20m、深さ1.50m～2.64mを測る。覆土は、全体的に締まりがなくロームブロックを多く含み、人為的な埋土と考えられる。

遺物は、(71)SD003から近世の陶磁器が少量出土した。

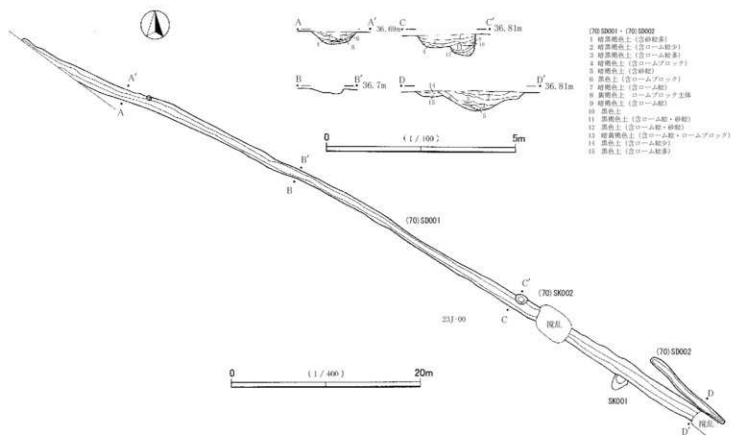
(70) SD001 (第126 図、図版23)

遺跡中央部、22H・22I・22J・23Jグリッドに位置する。遺跡を北西から南東に横断する道路下に検出された。(70)SD001は長さ83m、幅70cm～1.75m、深さ10cm～54cmを測る。断面形はU字状で、底面は凹凸があり、固く締まっている。覆土はローム粒・ロームブロックを含む暗褐色土が主体である。道路状遺構と考えられ、東側は位置からみて八日市場道に接続するとみられる。

遺物は出土しなかった。



第125図 (68) SD001 ・ (68) SD002 ・ (69) SD001 ・ (69) SK001 ・ (69) SK002



第126図 (70)SD001・(70)SD002・(70)SK001・(70)SK002

(71) SD002 (第127図、図版23)

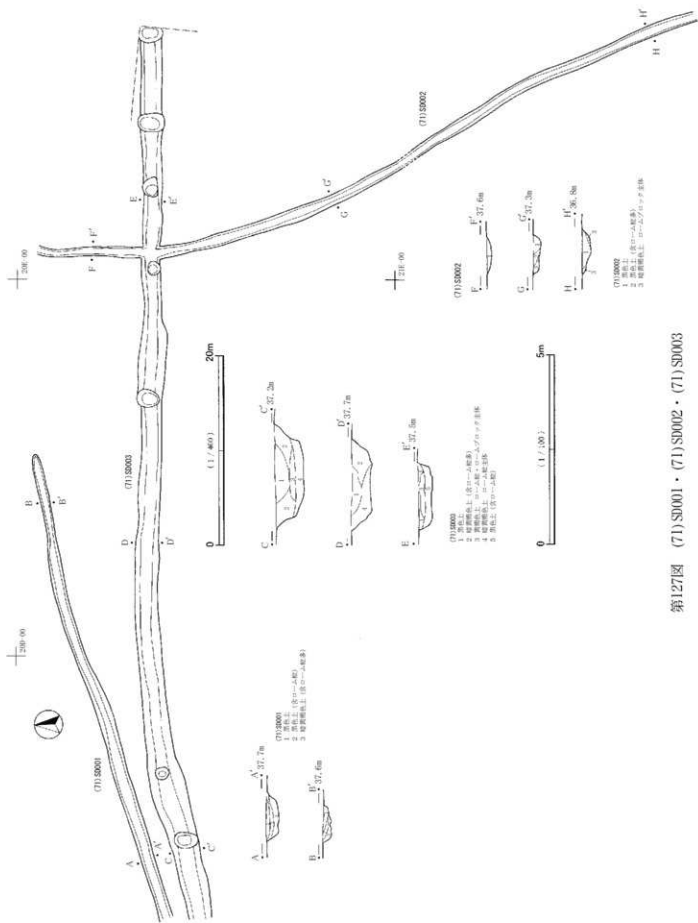
遺跡北西部、20E・21E グリッドに位置する。南北方向に延びる溝である。地区外では、南側の(40)区で可能性のある溝がトレンチで確認されているが、確実ではない。南東から北西に向かって延び、(71)SD001に直交し、ほぼ真北に延びる。長さ約75m、断面形はU字状・逆台形状で、幅1.10m～1.50m、深さ5cm～22cmを測る。覆土は黒色土が主体である。

遺物は縄文土器・土師器が少量出土した。

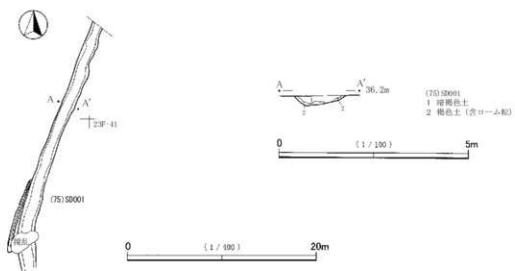
(75) SD001 (第128図、図版23)

遺跡西部、23D・23E グリッドに位置する。北東から南西方向に延びる溝である。南側で西側に屈折する。周辺の地区では、北側は(37)SD106または(37)SD107、南側は(40)SD002と繋がる可能性がある。長さ27.5m、幅1.3m～1.75m、深さ23cm～48cmを測る。覆土は暗褐色土が主体である。

遺物は土師器が少量出土した。



第127図 (71)SD001・(71)SD002・(71)SD003



第128図 (75)SD001

第4章 柳沢牧墨木戸境野馬土手

第1節 概要 (第4・129図)

本事業地は、近世佐倉牧の一つである柳沢牧の北西端に位置する。佐倉牧は北東から油田牧、矢作牧、取香牧、高野牧、内野牧、柳沢牧、小間子牧の七牧に分かれ、範囲は香取市から千葉市に及ぶ。柳沢牧は八街市北部を中心に広がり、佐倉牧のなかで最も広く約36km²を擁する。その施設の大部分は明治期の開墾などによって削平され、現存する遺構は野馬土手24か所と水呑場1か所である。

今回調査対象となった柳沢牧墨木戸境野馬土手は、牧の北西端に位置する野馬土手として周知されており、飯積原山遺跡の南東側の酒々井町と八街市との行政界に位置する。全長約850mで、西側に振れながら南北方向に延びる。北端は高崎川、南端は南部川の支谷の谷頭部に接する。南側は、本佐倉宿から芝山を経て八日市場に向かう芝山道／八日市場道（新道、現県道77号富里酒々井線）と交差する。ここが野馬土手の名称の由来である木戸跡である。土手の南端付近には、絵図に長方形の「古込」の記載があり、捕込があったとされるが詳細は不明である¹⁾。土手の現況は、部分的に削平されている箇所もあるが、おおむね裾部を確認することができ、土手の西側の一部では、溝と思われる凹みを視認することができる。

柳沢牧の野馬土手の特徴として、主に黒色土を版築して土盛りし、周囲の表土及びソフトロームを削っており、土手の両側もしくは片側から検出される溝の深さは数cmから30cm程度である¹⁾。残存状態の良い土手の調査例として、八街市立合松に所在する柳沢牧文違野松里野馬土手は、東に開くコの字状を呈し、両側に溝がある。土手の全長515m、溝を含めた幅は約9m、土手の幅4.0m～6.5m、高さ1.0m～2.3mを測る。盛土中から1707年に降下した宝永火山灰が検出されている²⁾。

西側に隣接する飯積原山遺跡において検出された近世の主な遺構をみると、遺跡の北側の台地縁辺付近において、従来周知されていなかった野馬土手1条及び堀が検出されており、地形に沿うように北西から南東方向に屈曲・蛇行しながら延びていた。土手は長さ155m、高さ約2m～3m、幅5.2m～6.2m、溝は断面三角形状で、土手の東側の牧側に築かれている。本事業地内には高崎川を挟んだ対岸の尾上から八日市場道方面に通じる古道である八日市場道が通り³⁾、北側の土手の交差する箇所(55) SA001では土手が途切れ、付近から柱穴と思われるピットが検出された(第119図)。周辺の小字名は木戸脇であり、木戸跡である可能性が高い。土手西側ではし穴・犬落とし穴と考えられる土坑列が検出された。同様な土坑列は、遺跡中央付近を東西方向に横断する道路状遺構内にも検出されており、一部からは馬骨が出土した。いずれも墨木戸境野馬土手の東側の牧内への害獣の侵入を防ぐために掘られたものと考えられる。

牧関係以外の遺構は、遺跡の中央西寄りから出羽三山塚が2基検出された。西側の(39) SM001は盛土が削平されていたが、方形の周溝が検出され、東側の(37) SM003には、元文三年(1738)、文久二年(1862)などの銘が刻まれた出羽三山塔4基が立てられていた。いずれかが消滅したとされる飯積浅上三山塚の可能性もある⁴⁾。

周辺の文化財は、飯積原山遺跡の南東端の八日市場道の切通しに寛政11年(1799)造立の八日市場道飯積道標が立っていた。事業地外の西側には伊豆神社が鎮座する。安産の神として合祀されている子安神社が有名である。御神木の飯積の大杉は推定樹齢700年の巨木で、伊豆神社の創建当時の植樹と考えられている。近くには泉が湧出しており、村名の由来として泉が転訛して飯積になったとの説がある⁵⁾。



八日市場道飯種遺構 (4799)

(51)SD001

(52)-(55)SA001
野馬土手・堀

木戸跡

伊豆神社

しし穴列 (26)SD001

(24)馬土手

(28)SD003

道路伏遺構・しし穴列

(71)SD003

(69)SD001

(16)SD001

(39)SM001
出羽三山塚

(37)SM003
出羽三山塚

柳沢牧墨木戸境野馬土手 (1)

八日市場道

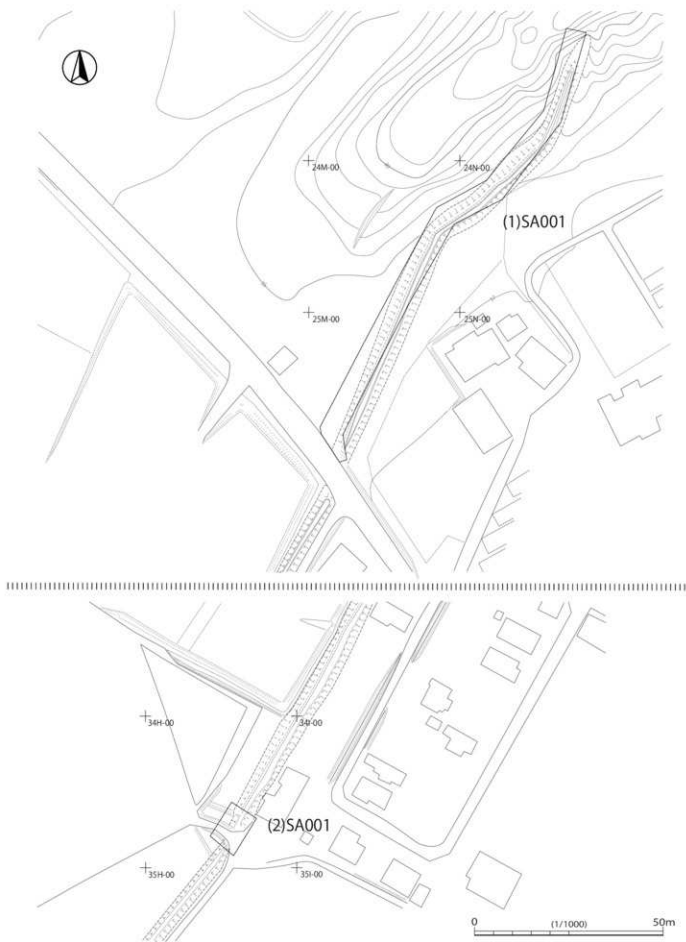
立合松北

八街は

柳沢牧墨木戸境野馬土手 (2)

芝山道 / 八日市場道 (新道)

0 (1/5000) 200m



第130図 調査範囲と周辺の地形

- 注1 進藤泰浩 2006『柳沢牧』『房総の近世牧跡』千葉県教育委員会
2 (財)印旛都市文化財センター 2002『柳沢牧文違野松里野馬土手』
3 酒々井町教育委員会 2012 酒々井町の街道と道しるべ
<http://www.town.shisui.chiba.jp/kanko/road_and_guidepost/index.html>
4 酒々井町教育委員会 2012『酒々井町埋蔵文化財包蔵地所在調査報告書』
5 酒々井町教育委員会 2012『酒々井町地誌』

第2節 野馬土手

調査は、平成23年11月にH2309、平成24年11月にH2410の2地点で実施され、本報告では北側のH2309を(1)区、南側のH2410を(2)区とした。

(1) SA001 (第130・131図、図版51)

調査範囲は、土手の北端から八日市場道までのおよそ150mで、土手の頂部より西側の酒々井町域である。北側は谷の東側の斜面上に築かれており、土手と谷の方向は同一であるが、24M-47グリッド付近で平坦部の立地になると東側に屈折する。土手は、概して北半分の遺存状況は悪く、谷側は裾部付近に崩落箇所がみられた。遺存状態の良い北側の基底部幅は約6.5m、高さ約2.5mであった。裾部の標高は東側より西側の方が70cm～80cm低い。北端の傾斜はゆるやかに立ち上がる。南端は八日市場道が通る切り通しで、約4m間を挟み南側に土手が続く。調査前は主に竹が密生しており、未伐採の西半分の地形測量はほとんど不可能であった。

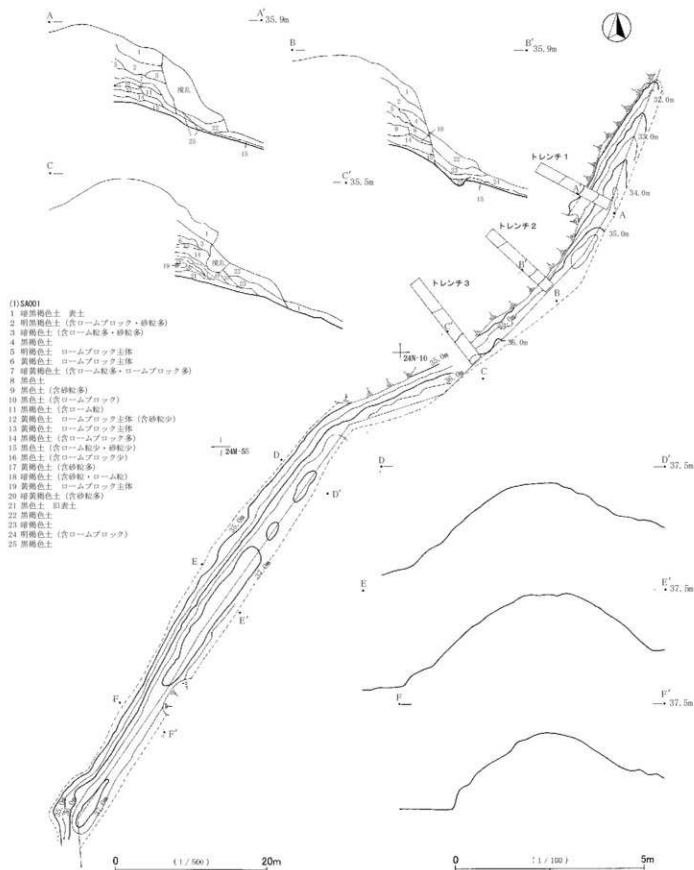
北側に3か所トレンチを設定し、構築状況を確認した。盛り土上には20cm～40cm表土が堆積し、ロームブロック、ロームブロックを多く含む黒色土を主体に構築されていた。盛土の頂上部から裾部までの高さは、約2.5mと推測される。裾部の外側には部分的に深さ約30cmの溝状の凹みが検出された。

遺物は出土しなかった。

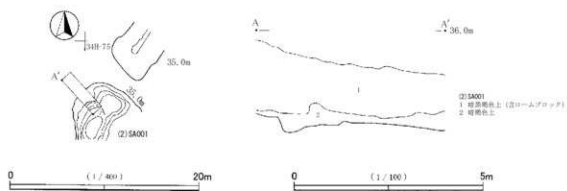
(2) SA001 (第130・132図、図版51)

調査対象は、(1)区の約400m南西側に位置する。長さ約10mの調査区で、遺存状況は悪く、最大幅約5m、高さ約1.2mの土手が残存していたが、中央付近は住宅への進入路として開削され、切り通し状になっていた。南西側裾部にトレンチを1か所設定して構築状況を確認したが、盛り土を検出することはできなかった。トレンチ東端に溝状の段を検出した。土手の裾部である可能性が高い。

遺物は出土しなかった。



第131図 (1)SA001



第132図 (2) SA001

第5章 まとめ

第1節 飯積上台遺跡

1 旧石器時代

飯積上台遺跡では、立川ローム層中から一つのブロックと計109点の遺物が検出された。

石器群は、ナイフ形石器、削器、彫刻刀形石器、二次加工ある剥片、使用痕ある剥片、石刃、剥片類、石核、敲石、磨石類、礫器で構成される。当該期の一般的な石器組成と比較すると、搔器の欠落が気になるところであるが、この点については遺跡間の変異として捉えておきたい。

技術基盤は石刃技法と横長剥片生産技術が共存しており、当該期の一般的傾向と言える。また、石器石材については偏りがみられ、剥片石器にはもっぱらメノウが用いられている。

総じて、石器製作の痕跡はあるものの、小規模で零細な資料であり一過性のキャンプ地であったと公算が大きい。

これらの石器群の様相は既報告の第1文化層第1ブロック¹⁾に対比され、立川ロームⅦ層段階の典型例と考えられる。

ちなみにメノウを主要石材とした分類としては、その他、袖ヶ浦市台山遺跡第1文化層²⁾、成田市取香和田戸（空港No60）遺跡第4文化層³⁾、八千代市西芝山南遺跡第1文化層⁴⁾がある。

注1 (公財)千葉県教育振興財団 2013 『酒々井町飯積上台遺跡1—酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書1—』

2 (財)千葉県文化財センター 2002 『袖ヶ浦市台山遺跡—東関東自動車道(千葉・富津線)埋蔵文化財調査報告書10—』

3 (財)千葉県文化財センター 1992 『取香和田戸遺跡(空港No60遺跡)—新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅶ—』

4 (公財)千葉県教育振興財団 2012 『八千代市西芝山南遺跡—西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書2—』

2 縄文時代以降

(5)～(9)区の調査区域は、遺構が希薄な台地中央部が主体であり、遺構・遺物とも検出量は多くなかった。住居跡は、台地南西端の発掘区で検出された縄文時代早期子母口式期の(8)S1001が唯一のものであった。既報告の(1)～(4)区では縄文時代の住居跡9軒が検出されたが、6軒は前期黒浜式、3軒は中期加曾利E式期に比定されるものであった。ほかに燃系文系や沈線文系、条痕文系など早期の土器片は出土しているが、今回子母口式期の住居跡が確認され、本台地上の居住地としての利用が縄文時代早期にさかのぼることが確実となった。陥穴1基を含む縄文時代の土坑4基も検出されたが、正確な時期も用途もはっきりしない。

縄文時代の遺物としては、(1)～(4)区では早期前半の燃系文系土器から後期前半の堀之内式土器までの土器片群が出土している。(5)～(9)区では早期燃系文系は検出されず、沈線文系から後期加曾利B式までの土器が確認された。

縄文時代早期では沈線文系の田戸下層式及び田戸上層式土器が確認され、条痕文系土器も少量出土している。前期では、最も多く確認されたのは黒浜式土器であり、これは(1)～(4)区での出土傾向に一致する。紐状の粘土を貼り付け、爪形文を施す諸磯式かとみられる土器も少量確認された。中期では阿玉台式、加曾利E式土器、後期では堀之内I式、加曾利B式土器が出土しているが、いずれも量は少ない。

最も多く出土したのが前期の土器であるが、そのほとんどは(9)区の北半部から出土している。黒浜式期の住居跡群は台地北西端部に集中しており、そこから100mほど離れた区域に当たる。周囲からはこの時期の明確な遺構は全く検出されていないので、なぜ多くの黒浜式土器がこの区域に含まれていたのか、理由は不明である。

古墳時代以降については、時期を確定できる遺構は確認されなかった。検出された性格不明の土坑4基、溝4条からは、時期を確定するに足る資料は確認されなかったが、いずれも近世以降に農作業などに伴って掘り込まれたものと考えている。

遺構に伴うものではないが、(9)区の北半部、61-61・62グリッドで古墳時代の土器破片がまとまって出土している。いずれも坏、椀、高坏などの破片で、赤彩されているため古墳への供献土器かもしれない。(1)～(4)区では、既に墳丘を削平された円墳2基が検出されており、その墳丘上にあつた遺物が土採りなどに伴って移動してきた可能性が考えられる。

第2節 飯積原山遺跡

1 旧石器時代 (第133図)

遺跡北端のH2301調査区において、立川ローム層中から6つのブロックと計192点の遺物が検出された。これらの資料は、出土層準によって3つの文化層に大別することが可能である。

第1文化層は、立川ローム第2黒色帯 (IX層) 上部から検出された第23・26～28ブロック、第2文化層は立川ロームIV層下部～V層、第3文化層は採集・単独出土資料の一部である。このうち第3文化層については石器の技術形態学的特徴から時期決定を行った。本来の出土層準は立川ロームIII層中と推定される。

第16表 旧石器時代石器組成表 (全体)

器種・石材	槍先形 尖頭器	ナイフ 形石器	角錐状 石器	搔器	石刃	二次加工 ある剥片	使用痕 ある剥片	石斧	石核	剥片	砕片	計
ガラス質黒色安山岩	2	2	5			4	1		4	45	9	72
黒曜石		5			1	8			1	9	9	33
メノウ		2		1		5	1		1	12	2	24
チャート							2			1		3
トロトロ石										1		1
緑色凝灰岩										2	6	8
赤玉石										1		1
東北頁岩	2	1		1						1		5
黒色頁岩					2		2			3	1	8
白蔵頁岩									1		1	2
ホルンフェルス								2		3	27	32
流紋岩									1	1	1	3
合計	4	10	5	2	3	17	6	2	8	79	56	192

第1文化層

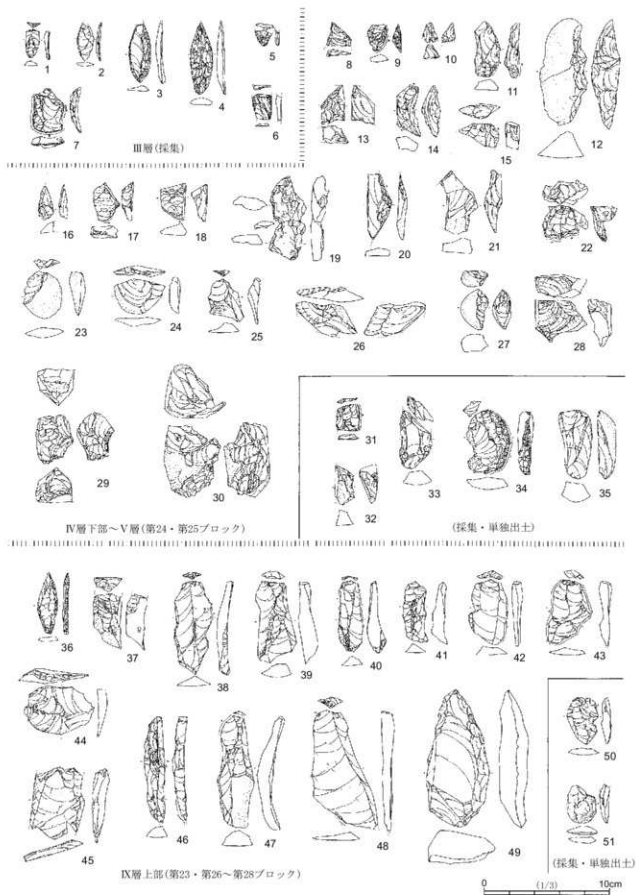
第23・第26～28ブロック (36～49) に、採集・単独出土 (50・51) の2点を加えた、石器計71点が該当する。第23ブロックは調査区の北側に孤立しているが、第26～28ブロック、特に第26・27ブロックは互いに近接している。

石器組成は、ナイフ形石器1点、二次加工ある剥片2点、石刃3点、使用痕ある剥片6点、打製石斧1点、局部磨製石斧1点、剥片21点、砕片36点、石材組成は、ガラス質黒色安山岩8点、黒曜石2点、メノウ3点、緑色凝灰岩8点、赤玉石1点、黒色頁岩8点、ホルンフェルス2点、流紋岩2点となっている。緑色凝灰岩とホルンフェルスについては、剥片・砕片に偏っており、石斧の調整時に生じた可能性が高い。したがって、石斧本体 (2個体) にこの事実 (最少で2個体) を加味すれば、石斧の最少個体数を2から4とすることも可能である。このほか石刃には黒色頁岩とチャートが用いられる傾向がある。

技術基盤は石刃技法を基調としているが、石核が欠落しており、また石刃や利器が単独母岩であることから、石刃生産は他所で行われ、その後本遺跡へ搬入されたものと推定される。なお、このことに関連して、打製石斧については、その形態と技術的特徴から大型の資料を再加工した可能性が考えられる。

石器組成については石斧、石刃、石刃素材の二側縁加工のナイフ形石器はあるものの、台形様石器が欠落しており、立川ロームIX層でも後出の様相を呈している。

同時期の石器群としては、地区内で、飯積原山遺跡第2文化層がある¹⁾。ここでは4か所のブロックから、



第133図 旧石器時代石器群の変遷

局部磨製石斧、ナイフ形石器、及び台形様石器を含む計86点の遺物が出土している。

第17表 旧石器時代石器組成表 (第1文化層)

器種・石材	槍先形 尖頭器	ナイフ 形石器	角錐状 石器	挿器	石刃	二次加工 ある剥片	使用痕 ある剥片	石斧	石核	剥片	砕片	計
ガラス質黒色安山岩		1					1			6		8
黒曜石					1					1		2
メノウ						2	1			4	1	8
チャート							2					2
トロトロ石												
緑色凝灰岩										2	6	8
赤玉石										1		1
東北頁岩												
黒色頁岩					2		2			3	1	8
白滝頁岩												
ホルンフェルス								2		3	27	32
流紋岩										1	1	2
合計		1			3	2	6	2		21	36	71

第2文化層

第24・第25ブロックの遺物に、採集・単独出土のナイフ形石器 (31)・角錐状石器 (33)・二次加工ある剥片 (32)・挿器 (34)・石核 (35) 各1点を加えた計94点が該当する。両ブロックは、約5mの距離を隔てて互いに隣接しており、接合関係は確認できなかったが、同時併存の可能性はある。

石器組成はナイフ形石器3点、角錐状石器5点、挿器1点、二次加工ある剥片13点、石核5点、剥片49点、砕片18点となっている。石材組成については全体の約546%がガラス質黒色安山岩であり、これに黒曜石(25点)、メノウ(16点)、チャート・硬質頁岩各1点が加わる。黒曜石には箱根畑宿や伊豆峠産が含まれており、広範な石材流通が想定される。

素材剥片や二次加工時の砕片(調整剥片)が多数見られることから、ブロック内で一連の石器製作が行われた公算が大きい。最終的に石核は打面転移の頻繁な小型のサイコロ状石核となっており、限られた石材を有効利用するために、良質な石材を徹底的に使い尽くそうとする製作者の意図がうかがわれる。

類例としては、本地区では飯積原山遺跡第4文化層がある²⁾。

ちなみに当該期は下総台地でも最も土地利用が盛んな時期であり、基本的に以下の内容によって特徴づけられる。

- ・石器群は、ナイフ形石器、挿器、及び角錐状石器等で構成される。ナイフ形石器は横長剥片を素材とした切出形が主体である。
- ・技術基盤は横長剥片生産技術を基調としている。
- ・石器石材には、ガラス質黒色安山岩・黒曜石・メノウが三大石材であり、北関東との関係を論じる上で資料的価値が高い。
- ・遺物集中地点に礫群が共存する場合がある。

本遺跡では礫群の検出こそなかったものの、それ以外の様相はこれに良く合致しており、当該期の典型例といえる。

なお、隣接する第24・25ブロックは、同時期であるのにも関わらず、器種と石材を異にしており、かつ相互補完的であることに注意しなければならない。すなわち器種に関しては、ナイフ形石器が第25ブロック、角錐状石器が第24ブロックに、石材はメノウが第25ブロックに偏り、黒曜石にも原産地の違いが見られるのである。興味深い事実であるが、検証は今後の課題とせざるを得ない。

第18表 旧石器時代石器組成表（第2文化層）

器種・石材	槍先形 尖頭器	ナイフ 形石器	角錐状 石器	挿器	石刃	二次加工 ある剥片	使用痕 ある剥片	石斧	石核	剥片	砕片	計
ガラス質黒色安山岩			5			3			3	32	8	51
黒曜石		1	1			6			1	7	9	25
メノウ		2		1		3			1	8	1	16
チャート										1		1
トロトロ石												
緑色凝灰岩												
赤玉石												
東北頁岩										1		1
黒色頁岩												
白滝頁岩												
ホルンフェルス												
流紋岩												
合計		3	6			12			5	49	18	94

第3文化層（1～7）

ナイフ形石器2点（1・2）、小型の槍先形尖頭器4点（3～6）、挿器1点（7）が該当する。ナイフ形石器2点と槍先形尖頭器の一部（3、6）は石刃ないしは縦長剥片を素材としている。器種もさることながら信州系黒曜石（4・5）と東北頁岩（1、3、6・7）の使用が特徴的である。

第19表 旧石器時代石器組成表（第3文化層）

器種・石材	槍先形 尖頭器	ナイフ 形石器	角錐状 石器	挿器	石刃	二次加工 ある剥片	使用痕 ある剥片	石斧	石核	剥片	砕片	計
ガラス質黒色安山岩		1										1
黒曜石	2											2
メノウ												0
チャート												0
トロトロ石												0
緑色凝灰岩												0
赤玉石												0
東北頁岩	2	1		1								4
黒色頁岩												0
白滝頁岩												0
ホルンフェルス												0
流紋岩												0
合計	4	2	0	1	0	0	0	0	0	0	0	7

注1（公財）千葉県教育振興財団 2014『酒々井町飯積原山遺跡1-酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書2-』
2 1と同じ。

2 縄文時代

今回の報告で前回虫食い状に残された地区が埋められ、台地北東端の(78)区を除いた遺構密集箇所の全貌が明らかとなった。ここでは、前回報告分を含めて出土遺物や集落の変遷等を詳述することとする。

本題に入る前に土器の時期区分と分類基準を改めて示す。

時期区分は以下のとおりとしたが、このうち、中期阿玉台3式以前及び後期堀之内1式以降は時期区分を行わなかった。

前1期 草創期後半 撚糸文土器、早期 沈線文土器、前期 関山式・黒浜式・浮島式

中期 五領ケ台式直後、阿玉台式1a式・1b式・2式

1a期 阿玉台3式～4式・勝坂式末期・いわゆる中峠式及び諸類型・加曾利E1式古段階

1b期 加曾利E1式新段階

2a期 加曾利E2式古段階

2b期 加曾利E2式新段階

2c期 加曾利E2-3中間式

3a期 加曾利E3式古段階

3b期 加曾利E3式中段階

3c期 加曾利E3式新段階

4a期 加曾利E3-4中間式

4b期 加曾利E4式古段階

4c期 加曾利E4式中段階

4d期 加曾利E4式新段階

5期 称名寺1式

後5期 後期 堀之内1式・加曾利B式・安行1～2式、晩期 安行3式

1a期については各型式の同時期性について問題のあるところだが、ここでは議論せず、集落形成過程を理解する都合において同一時期として扱うこととした。中期土器の分類に当たっては、阿玉台式については西村正衛編年を基準とし、1a期の各土器の理解については下総考古学研究会による諸研究を参考とした。また、加曾利E式については前半を山形眞理子編年、後半を柳澤清一・長山明弘編年を基準とした。なお、柳澤・長山編年では各期がさらに小細別されているが、土器の出土量が少ない遺構ではその認定が困難となるため細別段階にとどめた。個別の土器で認定できたものについては可能な限り記載した。各々、理解に誤りがあれば、報告者の責任である。

参考文献

西村正衛 1984『石器時代における利根川下流域の研究－貝塚を中心として－』早稲田大学出版部

高橋良治他 1998『<特集>中峠式土器の再検討』『下総考古学』15 下総考古学研究会

高橋良治他 2004『<特集>房総半島における勝坂式土器の研究』『下総考古学』18 下総考古学研究会

山形眞理子 1996・1997『曾利式土器の研究(上)・(下)』『東京大学考古学研究室研究紀要』14・15 東京大学文学部考古学研究室

- 柳澤清一 1997「千葉県における加曾利E(新)式編年の検討—下総 利根川下流域の遺跡変動にふれて—」『東邦考古』21 東邦考古学会
- 柳澤清一 2006「千葉県における縄紋中期末葉・後期初頭編年の再検討—『縄文セミナー』千葉県編年案の標本資料から(1)—」『東邦考古』30 東邦考古学会
- 柳澤清一 2006「縄紋時代中・後期の編年学研究—列島における小細別編年網の構築をめざして—」『千葉大学考古学研究叢書』3
- 長山明弘 2010「加曾利E(新)式における土器系列の研究(1)—「連弧文土器」から「Y字文土器」へ—」『古代』第124号 早稲田大学考古学会
- 長山明弘 2012「関東北に於ける土器系列の相関(1)—「懸弧状連接区劃文土器」の分布と加曾利E3式土器の終末(上篇)」『千葉大学文学部考古学研究室30周年記念 考古学論叢1—岡本東三先生退職とともに—』千葉大学文学部考古学研究室 考古学論叢編集委員会

(1) 出土土器について

前1期(第151区)

集落が構成されない草創期後半から阿玉台2式までを一括して前1期とした。それぞれ少量の土器が散漫ないしは若干まとまって出土する程度である。

燃糸文土器は遺跡の北半でも谷寄りの(1)、(29)、(71)、(62)・(63)、(10)の各地区から出土した。(71)区-1の井草式直前の土器は、薄手の直口口縁で口縁直下から多段に縄文を押し、裏面に回転縄文を施したもので、重要である。他の地点の燃糸文土器は井草1式が主体で、(10)区でややまとまって出土しており、(62)・(63)区-1は大形破片である。(71)区-2は頸部に押し縄文を幅広く施文している。井草2式は少量で、(10)区、(62)・(63)区でわずかに見られる程度である。夏島式はなく、稲荷台式は(62)・(63)区で1点出土したにすぎない。

沈線文土器は(10)区、(39)区で微量出土した。(10)区は田戸下層式と尖底の小破片が各1点、(39)区は田戸上層式の小破片が1点である。

前期の関山式と黒浜式は(26)区、(29)区に限定され、量的にはごく微量である。浮島式は関山式と黒浜式とは谷筋を違えて(16)区、(17)区から出土した。やはり、出土量は微量である。この時期の土器で注目されるのが(17)区-3、(65)区-1の大木5式土器である。別個体であるが、いずれも口縁部と口縁端部に燃糸文を施し、(17)区-3の口縁部には刺突を付した環状の貼付文を、(65)区-1の口縁部には環状の押し文を施している。燃糸文と環状貼付文の土器は福島県宮西遺跡に例がある¹⁾が、当該例とはやや異なる。燃糸文を施した大木5式は県内初出であろう²⁾。

中期五領ケ台式直後から阿玉台1a式にかけては(1)、(26)、(29)、(39)、(40)、(71)、(72)の各区から出土した。いずれも同一の谷筋側である。このうち、(29)区ではSK769・SK770の楕円形土坑が2基並んで検出された。微量ながら当該期の土器が出土している。(39)区、(72)区では小破片ながらややまとまって出土している。(39)区-5~14、(71)区-4は縄文を地文として角押文や連続刺突文、三角彫刻文が付く五領ケ台式直後の竹ノ下式で、(72)区からも出土している。(72)区-1・2、(40)区-1は縄文がなく雷3類に属し、竹ノ下式よりやや古いものであろう。(26)区-2~4、(29)区-5・6、(39)区-15は阿玉台1a式直前ないしは1a式であろう。

阿玉台1b式から2式も断片的で、1a期の集落展開の予兆がまったく認められない。(7)、(60)、(10)、(11)・(12)、(21)、(33)、(47)の各区から出土している。阿玉台1b式は(47)区に大形破片1個体分、(10)区、

(21) 区に小破片が各1点ある。同2式は(7)区-1、(33)区-1、(47)区-3~5、(60)区-1が相当しよう。

1期

阿玉台3~4式から加曾利E1式までを1期とした。1期の出土土器の大半は1a期に属する。

1a期(第134~137図)

多量かつ多種類の土器が出土した。阿玉台3~4式、勝坂式末期ないしは勝坂式を模倣した在地の土器、いわゆる中峠式及び近縁諸類型、加曾利E1式古段階、大木8a式及びその影響が認められる土器があり、同一遺構内で混在し、かつ同一個体内で同居する状況も認められた。各類型が同居するものについては、最も適当と思われる類型に所属させた。

阿玉台3式~4式(第134図)

(10)SK383-1、(10)SK563-1が阿玉台3式であろう。隆帯上に縄文がかかる土器とそうでない土器とがある。(10)SK480-1は胴部が阿玉台4式、口縁部は七郎内II群土器または諏訪タイプである³⁾。七郎内II群土器及びこれと関連のある土器については後述するが、本例を阿玉台4式段階の確実な七郎内II群土器として提示できたのは幸いであった。(8)SI20-5と(7)SK219-6は埴図作成後接合した。器形、隆帯上の縄文に阿玉台4式の特徴を強く残すが、クランク状の隆帯及び口縁との間に施された沈線文様は加曾利E1式に限りなく近い。(7)SK240-1は、口縁部の枠状区画内に太く整った縦位方向の集合沈線を施す。この集合沈線は阿玉台4式の集合沈線とは異なり、加曾利E1式のそれであるが、顎の張り出した枠状区画は阿玉台式の特徴である。また、眼鏡状突起の片側のみ刻みを施したり、枠状隆帯を縁取りする沈線を部分的に欠くといった左右非対称の文様施文の癖は、いわゆる中峠式に見られる特徴である。(7)SK238-10は左右非対称の口縁突起は在地の勝坂式であるが、胴部文様が難解である。胴部文様帯の上部には交互刺突文を施す。その下の縄文のかかったト字状の隆帯は笠間市橋爪遺跡203SKに類似があつて(第146図1)⁴⁾、阿玉台式の系統と思われ、この土器も複数の系統の混在を示している。

勝坂式末期(第134図)

(62)SK013-1と接合した(10)SK395-1、(10)SK482-1、(10)SK464-1、(10)SK579-1は円筒器形の土器である。このうち、(10)SK395-1、(10)SK482-1は連続波状磨消縄文土器と呼ばれるものである⁵⁾。(10)SK579-1は欠損した上部に同様の文様を施すが、胴下部には加曾利E1式の特徴である蛇行沈線と単線の懸垂文が付く。

以下の各土器も勝坂式ないしは在地で製作された勝坂式であろう。(62)SK022-6は突起が左右非対称で、口縁部文様は勝坂式であるが、相当にくずれている。胴部の波状沈線はいわゆる中峠式のそれである。(7)SI257-4は口縁部の蛇行隆帯が不規則である。(62)SK011-1の文様構成は勝坂式の規範から相当逸脱しており、在地製作が明らかであろう。(62)SK013-2も複雑な文様構成である。(13)SK646-1は狭い口縁部文様帯と口縁突起に刻み目付きの隆帯による文様が展開するがこれも本来の勝坂式の構成と異なる。また、口縁部文様帯下には波状の隆線文様が付く。(7)SK238-9は眼鏡状突起以外に特徴がなく、とりあえずここに含めた。(7)SK219-5は浅鉢で、口頸部の主文様は縦区画内に半渦巻文と楕円文を配する勝坂式であるが、やはり文様はくずれている。

いわゆる中峠式及び近縁の土器(第134・135図)

(62)SK022-3~(13)SK642-1までの5個体は突起を持つ中峠O地点型深鉢、次頁(10)SK368-2~(8)

SK024-1までの4個体は平縁の中峠0地点型深鉢であろう。いずれも狭い口縁部文様帯を持つ。最初の(62) SK022-3は突起下に突出した渦巻文を配する。(62) SK022-2・(10) SK394-5の口縁突起は沈線文様が付き、勝坂式的である。なお、後者は口縁部文様帯が2段となる。(7) SK283-1は区画内文様が単位ごとに異なるいわゆる中峠式の特徴が見られる。平縁系の(10) SK368-2の口縁部区画隆帯は下部区画帯から立ち上がって半渦巻文を作り、(8) SK035-1は下部区画隆帯がフック状にうねっている。(7) SK238-5・(10) SK392-2の小型土器は前者には耳状突起が付き、後者には突起下いわゆるたらこ状文を施す。

(10) SK368-1は「ティピカルな中峠6次1住型深鉢」である⁶⁾。(10) SK404-4・(7) SK267-7は中峠0地点型深鉢の口縁部文様の下に中峠6次1住型深鉢の文様を配したものである。(8) SK026-2・5は同一個体と思われる。口縁部文様は中峠6次1住型深鉢であるが、5の胴部文様が特殊である。縦走る隆線に絡んだ半渦巻文やS字状文、内部に充填された集合沈線は一見、長野方面の唐草文土器を想起させる。しかし、下部区画を隆線で行っている点や隆線に沿う沈線の一部が細かい波状になっている点は、唐草文土器にはない勝坂式や阿玉台式の特徴である。寡聞にして類例を知らないが、墨古沢遺跡061号住居跡の胴部文様はやや近い例(第146図6)⁷⁾で、胴部に幅広の隆帯文様と集合沈線の充填文を持つ。(7) SK244-2、(7) SK271-1は「中峠6次1住型深鉢類似」土器である⁸⁾。ともに口縁突起は勝坂式に近似する。口縁部文様は前者が弧状文様、後者が橋状突起を伴うクランク文である。前者は東金市羽戸遺跡第113号住居跡出土土器(第146図2)に近い⁹⁾。(13) SK607-2は台耕地34号住型深鉢に類似のものがある。(10) SK389-1、(65) SI001-1、(10) SK395-5は当該期の浅鉢である。交互刺突文があることから、ここに置いた。

(7) SK271-3、(7) SK260-1はくびれた口縁部文様帯の上下をタガ状の太い隆帯で区画し、隆帯間に橋状突起を掛け渡す独特の器形を持つ。上下のたか状隆帯を橋状突起でつなぎ、その中が無文となる土器は大木8a式にあるが、当該例はたか状隆帯間の幅が広く、かつ集合沈線を加えている。口縁突起は前者が大木8a式的、後者が勝坂式的である。やや近い例に柏市大松遺跡 SK092があり(第146図7)、同報告では中峠式のいずれの類型にも属さないものとしている¹⁰⁾。ここでは、新たに大木式の影響を受けた当該期の一類型として提唱したい。なお、この2例は非常によく似ており、同一の作者が製作したものかもしれない。

加曾利E1式古段階(第135・136図)

口縁部文様帯に背割れ隆帯による横蔵状文、クランク文、両者を併用したもの、円文を配するものが主体となる。このうち、(7) SK259-1、(7) SK219-8は胴部に懸垂文を持つ。(7) SK219-7、(7) SK271-1は口縁突起が勝坂式的である。(62) SK022-1は半截竹管内側を使って頸部と胴部に文様を施す。馬目順一氏は半截竹管の使用を大木8a式の後半としている¹¹⁾が、口縁部文様は勝坂式から変化した円文と中峠式の特徴である詰襟状の口縁を持ち、古段階であることを示している。出土状況も勝坂式末期の土器3個体、中峠式2個体と一括出土している。(10) SK402-3についてはすでに触れたが、胴部に隆線による懸垂文があることからここに含めた。(7) SI262-3は突起及び口縁部文様は勝坂式であるが、胴部文様は加曾利E1式である。これも位置づけに迷う個体である。(10) SK464-3は口縁部文様帯の中段に背割れ隆帯が幅状に巡る。口縁突起に連絡するのかもしれない。

加曾利E1式古段階の半粗製土器(第136図)

口縁部横蔵状文ないしはクランク文、胴部懸垂文という文様構成を持たない一群の土器をまとめた。器形もキャリパー状の器形をなさないものが多い。(17) SI012-1、(13) SK605-1は集合沈線を主体とする文様を持つ。(10) SK451-1は途中で消えてしまう杵状文と波状文を持つ。(7) SK236-1は口縁部に指頭圧痕

付きの隆帯を2段施したのみの土器で、(7) SK267-3は交互刺突文のみを口縁部に施す。(7) SK278-1は口縁直下の肥厚帯が突起をフック状に巻き込んでいて、大木8a式の文様に似ている。その下の懸垂文は加曾利E1式系であろう。

以上は中峠式の要素を含んでいるが、以下は加曾利E1式系といえよう。(7) S1273-3、(62) SK024-1、同SK022-4は背割れ隆帯による簡素な文様のみを施す。(10) SK384-1は口縁部に隆帯を2段施すのみである。(10) SK477-11、同SK538-4、(62) SK022-7は胴部に蛇行沈線と懸垂文を施すが、口縁部は簡素な文様や無文となる。(8) SK027-6は小型土器で胴部文様は稚拙な蛇行沈線と解されよう。

大木8a式土器 (第137図)

大木8a式そのもの、またはその影響が強く見られるものを含む。(65) SK001-1は大木8a式そのものといえよう。(10) SK402-4は大木8a式の上下2段の沈線文様を模倣したものと思われる。(17) SK019-2の胴部文様は大木8a式であるが、幅広く無文の口縁部を持つこうした器形は栃木県鳥田遺跡に例がある(第146図8)¹¹⁾。

七郎内II群土器及び関連土器 (第137図)

七郎内II群土器は角押文が特徴的な北関東から東北南部に分布する土器である。阿玉台式の各段階に平行する時間幅を持った型式とされている。先述した(10) SK480-1は口縁部文様が七郎内II群土器そのものであった。(7) SK267-1、(10) SK409-1は同群土器の角押文を伴うS字状突起に近似する。このような突起は東北では大木8a式の最も古い段階に区分されることが多いが、上記土器は単純深鉢であり器形が異なることから、時間的には加曾利E1式古段階であろう。小片では(7) SK219-1が同群土器そのものであろう。

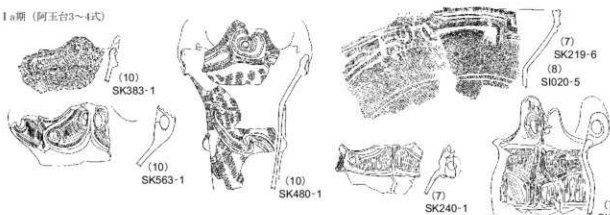
これらのほかに押引文が付随的に用いられる土器がある。代表的なものを第137図にまとめた。隆帯の上に背割れ状に施すもの、円文内を充填するもの、口縁端部に平行して1~2条施すもの、頸部の横位区画に施すもの、胴部の懸垂として施すものなどがあり、施文具も矢羽根状、ペン先状、編み棒状、扁平で先端を丸く加工したものなどいくつかの種類がある。これら押引文が採用された土器は勝坂式ないしは勝坂式系の土器、加曾利E1式、いわゆる中峠式的な土器と多様であり、各土器系統に関わりなく施されるようである。ただし、時期的な幅は限定され、加曾利E1式古段階にほぼ限られるが、同新段階に比定される(10) SK566-4・5にもペン先状の押引文が付く。(8) S1020-2の逆U字形の懸垂文は部分的に押引文となり、大部分は普通の沈線である。こうした癖は七郎内II群土器の中にもあり、押引文は七郎内II群土器の系統と考えられる¹²⁾。

I b期 (第137図)

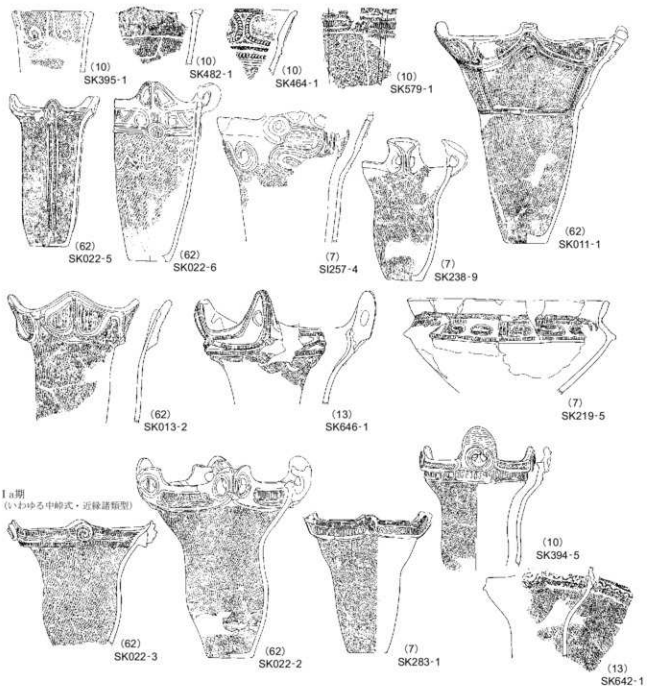
加曾利E1式新段階

I a期に比べて出土量が激減する。混在を除き、勝坂式末期、阿玉台4式、いわゆる中峠式と遺構内で伴出しにくい。典型例を図の冒頭に並べた。西関東と異なり、頸部無文帯がなく、地文の燃糸文もごく少ない。(7) SK220-2、(12) SK070-1、(10) SK579-4を見ると口縁突起は前段階より退化していることがわかる。口縁部文様はこれら3例及び平縁の(10) S1570-1のようにクランク文と半渦巻文が組み合わせられてより複雑化するが、半渦巻文・渦巻文の文様帯内の位置付けははまだ不安定で、無理に組み込まれたように見える。隆帯は貼付隆帯やそれに近いものが多い。(7) SK290-2、(10) SK577-1・2は前段階に特徴的なクランク文であるが、貼付風で背割れ隆帯ではなく2本平行の隆線となる。(12) S1014-3の口縁部文様は大型の半渦

Ia期 (阿玉台3~4式)



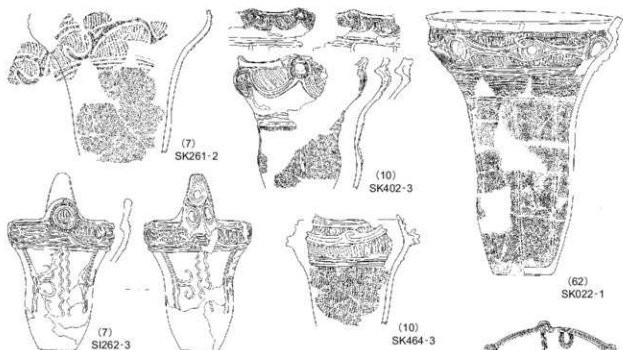
Ia期 (勝坂式末期)



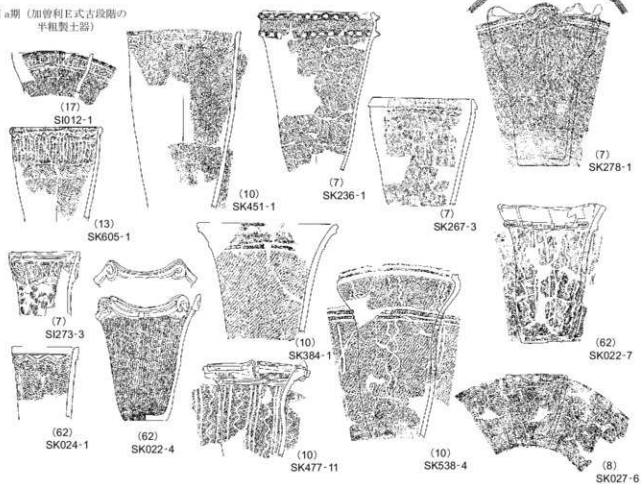
第134図 出土土器集成図(1)



第135图 出土土器集成图(2)



Ia期 (加曾利式古段階の
平組製土器)

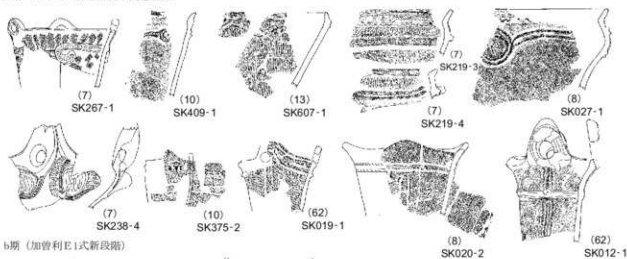


第136図 出土土器集成図(3)

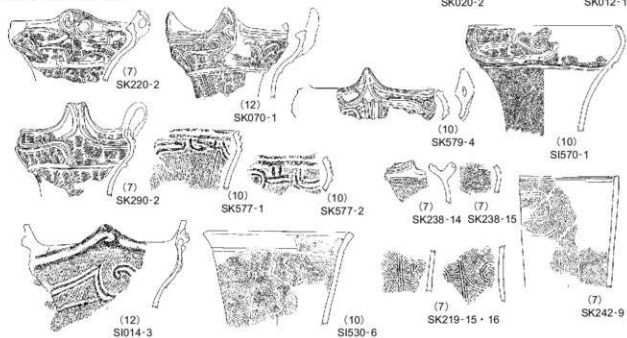
Ia期 (大木8a式)



Ia期 (七郎内II群土器及び関連土器)



Ib期 (加曾利E1式新段階)



第137図 出土土器集成図(4)

卷文の末端が強く屈折して横走する隆帯につながる独特な文様である。大畑貝塚では近似のものを大木8a式後半としている¹³⁾。(10) S1530-6は半粗製土器である。口縁部文様帯を持たない例で、同時期の小破片と共伴している。

(7) SK238-14・15、(7) SK219-15・16、(7) SK242-9は大木式系の土器である。(7) SK238-14・15、(7) SK219-15・16は胴部文様を半截竹管により施した大木8a式後半、(7) SK242-9は大木8b式に近いが剣先文がなく、その直前であろう。

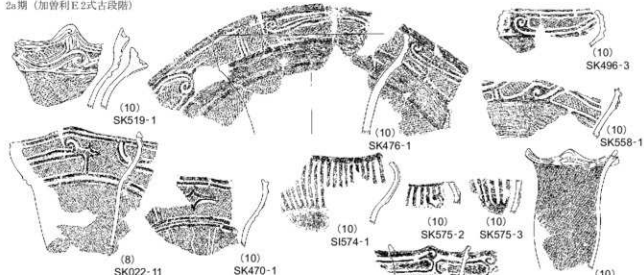
2期

加曾利E2式、2-3中間式を2期とした。出土量は1b期に比べて一層少なくなる。

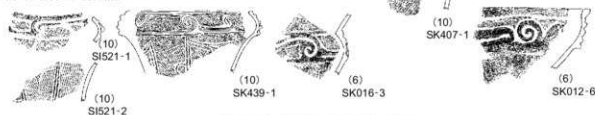
2a期 (第138図)

加曾利E2式古段階は(10) SK519-1、(10) SK476-1、(10) SK496-3、(10) SK558-1などが相当しよう。頸部に無文帯を持つものが多く、口縁部文様帯の渦巻文はしっかりと巻かれるが、枠状区画はまだ流動的である。(8) SK022-11、(10) SK470-1は貼付隆線による口縁部文様を施し、その末端に剣先文が付く。剣先文がないと大木8a式と区別が付かないが、ここでは剣先文を重視して大木8b式最古段階すなわち加曾利E2式最古段階としておきたい。(10) S1574-1及び同一個体の同SK575-2・3はいわゆる縦位隆帯貼付文土器である¹⁴⁾。当該土器は時間幅がかなりあるらしい。本遺跡の例は貼付隆線が密接しており、隆線間には竹管の背による沈線が沿うものであった。また、付随する半渦巻文は小型である。御堂前遺跡I区SK-30例(第146図9)¹⁵⁾が最も近いが、本例の方が文様帯の幅がやや広い。同例は加曾利E2式古段階に伴っており、本例も同様と考えたい。(10) SK547-10は外反した狭い口縁に渦巻文を施す。大木8b式には同文様で下ぶくれの胴部に沈線文様を施すものがあり、無関係ではないと思われる。

2a期 (加曾利E2式古段階)



2b期 (加曾利E2式新段階)



第138図 出土土器集成図(5)

2b期 (第138図)

加曾利E2式新段階は(10) S1521-1・2、(10) SK439-1が相当しよう。口縁部文様帯は枠状区画にしっかりと渦巻文を施す。頸部無文帯がなくなり、胴部文様は両者とも大木8b式の影響を受けた3本単位の懸垂文と剣先文を施している。(6) SK016-3の浅鉢もおそらくこの段階であろう。(10) SK407-1、(6) SK012-6はいずれも加曾利E2式と考えられるが、新古の判断がつかない。

2c期

加曾利E2-3式と認められる土器は検出できなかった。この段階は西関東の連弧文土器が隆盛をきわめる段階であるが、東関東ではこれに平行する土器組成がはっきりしない。柳澤清一氏は子和清水の土器(第147図10)を、長山明弘氏は市原市草刈貝塚B区186土坑、441A土坑の完形土器(第146図11・12)をこれに当てている¹⁶⁾が、近似の土器は当遺跡では出土していない。

3期

加曾利E3式を3期とした。古段階・中段階・新段階に細分される。小細別ではそれぞれ1・2段階にさらに分けられるが、確定しえなかったところがある。

3a期

加曾利E3式古段階は、前段階に引き続き出土量がきわめて少なかった。(10) SK424-2は胴部に磨消懸垂文があるかどうか不明であるが、口縁部のややくずれた渦巻文は古段階に相当しよう。このほか、小片では(7) S1275-1、(6) SK015-1、(10) 区遺構外32が古段階と思われる。また、ほぼ同段階としてよいと考えられるのは、(10) S1342-11~13、(7) SK252-1、(7) 区遺構外28-29、(10) 区遺構外34の曾利式、(7) 区遺構外24、(8) 区遺構外6、(17) 区遺構外4の連弧文土器程度であろう。

3b期 (第139図)

加曾利E3式中段階になると出土量が増加し始める。3b期以降の遺構分布はこれまでとは明らかに異なり、この時期が本遺跡の大きな画期となる。第139図上段が中1段階、下段が中2段階と判断した。遺構単位でまとまって出土したものとしては、前者では(11) S11015が、後者では(29) S1711が好例である。

中1段階は(11) S1014-1、(10) S1312-3のように口縁部文様帯の渦巻文は前段階に比べて巻きがゆるくなり、さらにはより省略が進んで、(17) SK018-1のように単なる円文になってしまうものもある。区画隆線は低くなり、胴部磨消懸垂文は磨消部の幅が太くなる。(11) S11015以外は断片的である。(61) 遺構外1はボジ逆U字文¹⁷⁾のほかに特徴がなく、中1段階かどうか判断できない。とりあえずここに置いた。

中2段階は(9) SK189B-1、(71) SK003-1のように渦巻文の巻きが一層ゆるくなり、胴部磨消懸垂文の磨消部の幅もさらに太くなる。(29) S1711がまとまった一括資料である。1の胴部の低い隆線による渦巻文は、(61) SK001-1と同様にゆるい腕山類の大振りな渦巻文へとつながるものである。(29) S1711-4は西関東のいわゆる吉井城山類=波状入組逆U字状文土器とはやや趣を異にするが、近縁類であろう。(12) SK031-1が同類により近い。(29) S1711-5の口縁部文様は大木9式の影響が考えられる。近似のモチーフは香取市多田遺跡にある(第146図13)¹⁸⁾。(29) S1711には他に口縁下に指頭による凹線を施した粗製土器12や飾歯条線文の鉢13、肩の張った広口壺形の土器17がある。(29) S1709-1・7・10は枠状区画の口縁部文様帯を持つものであるが、渦巻文が付かない。2とともに、3-4式期の東側炉(炉体土器9)によって切られた西側の古い炉に伴うものと解釈される。(33) SK050-1は類例を知らない。細めの沈線で枠状の口縁

部文様と胴部にボジ逆U字状文を施す。

3c期 (第140・141図)

加曾利E3式新段階はさらに出土量が増加する。遺構単位でまとまって出土したものとしては、(11) S11013、(19) SK681、(33) SK102、(61) S1001、(68) S1001が好例である。

加曾利E式の伝統的な口縁部渦巻文+枠状区画文、胴部懸垂文の2帯構成の土器は、(61) S1001-2のように口縁部文様の渦巻文が消失してしまうものや、(61) SK009-1、(68) S1001-1のように前代に引き続き円文のみの表現、(33) S1011-1・2のように沈線による痕跡的な渦巻文となる。胴部磨消懸垂文は一層幅広くなっている。(33) SK102-1、(13) SK647-1は口縁部渦巻文の状態が不明であるが、胴部の磨消懸垂文が広いことからこの段階と判断した。(10) S1356-1はやや太めの沈線による線描の渦巻文で、左右には逆U字ボジ文を施す。前掲の土器よりやや後出であろう。(8) S1016-1はこの時期の指標とされるいわゆる懸華状連接区劃文土器と思われる³⁰。20・21の瓢箪型土器が伴出している。

口縁部文様帯を持たないいわゆる吉井城山類に代表される沈線文土器の系列に属するものとしては、地域性を反映して(19) SK681-7のH字状ネガ文の好例を除いて断片的である。(8) S1016-14、(68) S1001-5は口縁部に太い沈線が巡り、以下逆U字ネガ文となる。(11) S11013-10、(19) SK681-2~4は口縁直下を巡る沈線がない。前者は逆U字ネガ文ないしはH字状ネガ文が、後者は上半が波状ネガ文、下半が逆U字ボジ文となり、指頭による凹線を用いている。同6は同7に近いH字状ネガ文であるが、7より文様が硬化化しており、沈線も細い。同5も沈線が細い。同16とともに3-4式に下るかもしれない。同8はネガ渦巻文の左巻きと右巻きが連結するもので、終末に位置付けられよう。(33) SK038-2~4はU字状、逆U字状ボジ文に蕨手文が加えられている。同6・7も類似の文様を施す。これらには同1のような口縁部に沈線が巡る粗製土器が伴う。(10) S1341-3~5も近い。伴出した粗製土器1の口縁部沈線は指頭による凹線となっている。先に掲げた(8) S1016-20の瓢箪型土器も同一の文様構成をとる。なお、(10) S1355-4は中段階の可能性もある。

この時期の特徴的な土器がいわゆる梶山類である。これも地域性を反映しており、ほぼ全体ないしは上半の文様構成が分かる土器が多数得られた。大型から小型のものまで大きさは各種ある。文様は上下2段に別れ、ともに大振りの渦巻文が4単位程度上下で位置をずらして配置されるのが基本のようである。上下の分帯が(61) S1001-1のように無文帯となるもの、(68) SK009-1のように縄文帯となるもの、(11) S11013-14のように隆線で区画するもの、(61) S1002-1のように区画が不明瞭なものときまざりである。隆線は2本1単位のもの、単線のものがあり、渦巻文は多重のものから現状に退化したものまであり、時間的変化を想定することも可能であろう。下段側の(33) S1017-7は同種の粗製の土器、(33) SK102-2は大振りの渦巻文を凹線で施したもので、沈線文系列とのキメラであろう。

その他粗製土器には口縁部に凹線、太めの沈線のみを施した(10) S1342-6、(14) SK137-10、(33) SK030-3などや口縁部に横位施文の縄文を施して羽状効果をねらった(10) S1356-7がある。なお、(10) S1342では1~3のような梶山類が伴っている。

加曾利E3式新段階は1・2の新旧2段階にさらに細分されているが、今回の出土資料からは区分できなかった。しいていば、大部分は1段階で、2段階は(10) S1356・(61) S1002あたりの土器と思われる。また、第141図最下段の(14) SK137-1~7・9はこの段階が3-4式か判断しがたい。1の幅広の磨消懸垂文は3式だが、2の蕨手文や5の口縁部の弧状隆線区画は3式とは趣が異なる。また、4・7の梶山類は隆線が縦長に流

れている。また、口縁部の刺突文も6とは異なり、2・3は縦長の刻みで、9は爪形文となっている。先にあげた口縁部に凹線が巡る粗製土器10も伴っている。3-4式への過渡期と見ておきたい。

4期

加曾利E3-4式・4式を4期とした。ともに古段階・中段階・新段階に細分される。また、4式では各段階が1・2段階にさらに小細別されている。しかし、3-4式内の細別、4式内の小細別には確定できないものがあり、ここでは3-4式は4a期として一括し、4式は4b・4c・4dの各期に細分し、3-4式内の細別、4式各段階の小細別は傾向として指摘するに止めたい。

4a期 (第142・143図)

加曾利E3-4式は一括したためか、全体の遺物量は多くなっている。遺構単位でまとまって出土したものとしては、(11) SK1034、(29) S1703、(30) S1011、(68) SK002が好例である。加曾利E式の伝統的な口縁部渦巻文+枠状区画文、胴部懸垂文の2帯構成の土器は姿を消している。この型式を構成するのは吉井城山類の系統を引く沈線文様の土器と梶山類の系統を引く隆線文様の土器及び粗製土器となろう。

沈線文の土器には(10) S1353-8・9のような太めの沈線による上半が波状ボジ文、下半が逆U字状ボジ文を施す3式新段階と区別がつかない土器がある。(68) SK007-3はその直後と思われ、沈線の太さは中位で下手な線描となっている。量的には少ないが他時期を混じていない(68) SK002では、5が同類である。また、(68) S1001-7のH字状ネガ文も稚拙な線描である。これらの伝統的な文様から脱皮して新たな文様を構成しようとする試みが認められる。(13) SK649-1は横S字状ネガ文となる。(29) S1703-4はH字状ネガ文から変化したと思われる上半が繫珠状に発達したH字状ネガ文とU字・逆U字状ネガ文となり、5~11のようなU字・逆U字ボジ文が伴う。(29) SK772-1・2、(33) SK042-1は抱球状ボジ文とπ字状ボジ文が、(62) SK011-14・(66) SK001-1は繫珠状ボジ文が施される。これらの新たな文様構成が形成される過程で、ボジ文とネガ文との間で混乱が生じるのもこの時期の特徴となる。(33) S1018-6の小型釣手?土器がその好例で、区画文様と充填される縄文ともに不明瞭な構成となっている。(26) S1001-1にも混乱が見られる。(29) S1710-5は複雑な沈線区画を持つ。埼玉県塚越向山遺跡例(第146図14)のような文様になると思われる²⁰⁾。(30) S1011-3は狭山市森ノ上遺跡33号住居跡例(第146図15)²¹⁾のような逆U字状ネガ文内に楕円と逆U字を上下に重ねたボジ文を入れる文様構成を取ると思われる。森ノ上例は加曾利E4式古段階に位置付けられているから本例はその直前となろう²²⁾。同5は逆U字状ボジ文の上端が連結して短冊文に近い文様を持つ。口端直下にはE4式につながるつまみ状の小突起を持つ。(68) SK002-3も同様のつまみ状突起を持つ。突起の左右には枠状のネガ文を配している。この枠状文はE3式の口縁部文様帯の名残であろうか。(29) S1710-9は波状ネガ文を施す。口縁が内折し、その下に弱い段が付く。一見E4式だが、この段は微隆起線ではないので3-4式段階と判断できる。

確実にこの時期の隆線文土器を提示するのは困難である。前段階のいわゆる梶山類は先に見たとおり規範的な文様構成をとるものが多いが、他遺跡の事例を見るときわめて変異があり、同時期内のバラエティーか時間的変化かを何をもって判断するかが難しい。本遺跡では(9) S1148-1が3-4式の候補にあげられよう。伴出土器は少ないが、確実にE3式・E4式は出土していない。「の」の字状ボジ文が独立し、ボジ文区画に沿って太めの沈線を施すのが特徴である。(11) SK1034では短冊文や長楕円文のような文様の7・9が、ほとんど他の時期の土器を混じえずに出土している。(11) S11013-11は隆線が断面三角形である。大

振りの渦巻文が口縁直下を巡る隆線に連結していない。しかし、伴出土器は大部分が前段階のものである。(68) S1002も直線化した隆線の土器9が他の時期を混じえずに出土している。ただ、これらは髷山類の上下2帯の文様構造から逸脱していないから、时期的には3-4式でも新しくなることはないと思われる²³⁾(26) S1001-2の隆線文様は例を知らない。大木9-10式との関連を考えたがそうではなく、大型の窓枠状ボジ文となるらしい²⁴⁾。

粗製土器は大まかには4種に分けられよう。第1は口縁部に沈線ないしは指頭による凹線を巡らすもので、前代にもあってほとんど識別できない。(29) S1703-13・14・16、(30) S1011-11、(68) S1002-1・2は他の3-4式と伴出していることからこの時期と判断した。第2は口端直下を強くなでつけることによって窪ませて凹帯とし、以下の縄文施文部との境が明確に切れるものである。この口縁部整形はE3式にもE4式にも見られない3-4式の特徴となる。(29) S1703-17、同S1709-9、(66) SK009-1、(68) S1001-3-20、(68) SK006-1がある。第3は口端直下を平滑になで付けたもの及びその末端が下の縄文施文部にはみ出して不明瞭な微隆起線を形成するもので、E4式の稜を持つ明確な微隆起線と異なり、見た目があまい微隆起線となるものである。(33) SK045-10が分かりやすい。にぶい微隆起線の下は未調整の狭い無文帯となっている。他の3-4式に伴出したものとして(26) S1001-3、(29) S1710-16などがある。(26) S1005-1、(29) S1709-13、(68) S1001-2はこの時期の別の特徴である円形刺突列が伴う。単独または伴出土器が確定できないものでは(7) S1276-1、(26) S1003-1、(29) S1860-2、(33) S1016-2・8、(33) S1075-6、(37) S1004-5などがあげられよう。第4は他の類とは器形が異なり、口縁下が軽くすばまって口端との間が幅広の無文帯となるものである。(14) SK143-3・4が該当する。他の時期には例がなく、ここに含めておきたい。

4b期 (第143・144図)

加曽利E4式古段階はやや少なくなる傾向が見られる。

(29) S1705-1・2の戸開い土器が好資料である。1は口縁部の無文帯につまみ状に盛り上がった小突起が付く。2の波状突起部にも同様の小突起がある。このつまみ状の小突起は粘土を貼り付けた後、左右になでつけたのみで、頂部の調整が行われない作りであって、前代の(30) S1011-5のそれと同様で、これらがE4式の中でも古い証拠となる。同様の例は(33) S1016-1、(29) SK817-1があげられよう。(29) SK816-1、注口土器の(29) SK861-1はこうした特徴はないが、口縁直下を巡る微隆起線が稚拙・不明瞭で剥落しているものもあり、キャリパー度が強いことから古段階と考えられよう。(33) SK048-2も同様である。(29) S1706-1も同じ様にキャリパー度が強い。伴出した2の瓢車型土器も同時期と考えたい。(26) S1004-1はどのような文様構成を取るのか、理解が難しい。長台形、逆長台形のボジ文が交互に配置されるのかもしれない。とすれば、時期はこれより古いが成田市新山台遺跡002号住居跡に近い文様構成のものがある(第146図18)²⁵⁾。いずれにしても、この土器の微隆起線は前掲の(29) SK816-1などと同様のやや鈍い微隆起線であり、时期的にはこの段階と思われる。(30) S1010-11の両耳壺は松戸市一の谷西貝塚P-22からキャリパー度の強い土器とともに出土している(第146図19)²⁶⁾。(29) SK777-1は沈線区画の土器である。波状線部分の無文帯は左右から作り出したつまみ状をなしており古段階とみられるが、上下の三角ボジ文は近接していてやや新しい要素を持つ。

(30) SK039-10、(29) S1701-3の口縁部の無文帯に付く小突起は(29) SK777-1などに比べて側縁と頂部の境を明確に縁取り、頂部の調整もきちんとなされていることからより新しいと見ることができよう。しかし、前者の対向三角文は近接していて(29) SK777-1とほとんど差はない。また、(29) S1701-3の微隆起

線は断面が丸みを帯びて、キャリパー度もやや強いように見える。したがって、これらは古2段階とみることもできよう。

4c 期 (第144図)

加曾利E4式中段階は古段階と同程度の量であろう。

(29) S1713-4・5が好資料である。口縁部の無文帯に付く小突起は前代に比べて間延びして弧状微隆起線に明確化する。弧状微隆起線は背中合わせになり、その間は浅く窪んで縄文がかかっている。(29) S1701-1・2は同様の小突起が口縁部の無文帯とボジ逆U字状文の接点に置かれた例である。中1段階であろう。(29) 704-1は小突起は完全に弧状微隆起線化して、前代のつまみ状の面影はまったく失われている。また、(29) S1713-6は背中合わせの弧状微隆起線がさらに離れて、貼り付け痕跡を残しており、粗雑化している。同9はこれに伴う粗製土器であろう。これらは中2段階になると思われる。器形は前代に比べてキャリパー度が弱くなる。

(29) SK944-11・15~17は称名寺式ではなく、同式成立前の西日本系の土器である。10が伴う。11・15は区画沈線内に縄文を充填する称名寺式の手法がいまだ確立していない。類似の例は東京都分寺市窓ヶ窪東遺跡(第146図20)²⁷⁾や横浜市幅ヶ原遺跡(第146図21)²⁸⁾にある。両遺跡例は称名寺式のパネル装飾文形成に向かう指向性が読み取れるが、当遺跡の11例は地域性のためかそれがやや読み取りにくい。15はこの時期特有の王字文になると思われる。16・17は11・15例よりさらに西日本系の土器との距離が遠い沈線文様である。在地の模倣土器であろう²⁹⁾。

4d 期 (第145図)

加曾利E4式新段階は明らかに減少している。

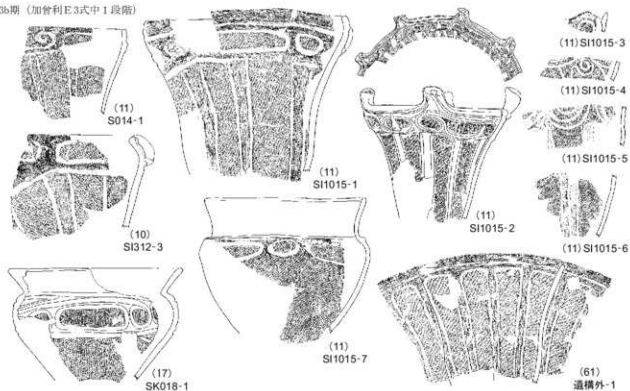
(30) SK035-1が好例である。口縁直下の無文帯に付く弧状微隆起線は直線的に立ち上がるようになる。一部剥落しており、器体への貼り付けが雑になっている。山形突起下に円形の貼付文が付く8や15・16のような西日本系の土器が伴っている。(29) SK948-2・3も弧状微隆起線が直線的に立ち上がる。微隆起線の上には縄文がわかる。伴出した同1の突起部に環状貼付文が付く土器及び(33) S1019-4の半渦巻貼付文が付く土器もこの時期と思われる。(33) SK043-4は口縁部無文帯が広く胴が張る器形である。(33) SK043は中段階と新段階の土器などが混在するが、上述と同様の新段階の特徴を持つ5や8に伴う北関東系の土器であろう。(29) SK772-3も口縁部無文帯の幅が広い。3-4式とともに出土しているが、この段階としたい。(33) S1019からはややまとまって16~22のような西日本系の土器が出土している。中段階の西日本系土器に比べて直線的な区画になり、縄文も区画内に納まっていてこれらより新しいことがわかる。(33) S1018-23~28も同時期と思われる。

5 期 (第145図)

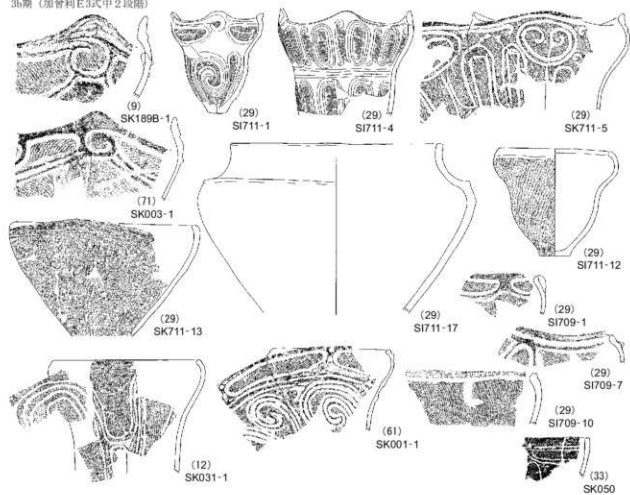
称名寺式を5期とした。

称名寺式を出土した遺構は(33) S1019と(33) SK031の2基のみで、他は断片的に出土しているにすぎない。(33) S1019は建て替えにより他の時期と混在状態で出土したが、抽出した称名寺式は3個体でいずれも古い段階のものであった。23・24の縄文のみの土器は胎土、焼成が精良であり、この時期のものと思われる。(33) SK031では微隆起線文の土器3が典型的な称名寺式の古い段階と伴出している。全体の文様構成が分からないのが残念であるが、枠状のボジ文は1の上段J字文が直線化した文様をモデルとした可

3b期 (加會利E3式中1段階)

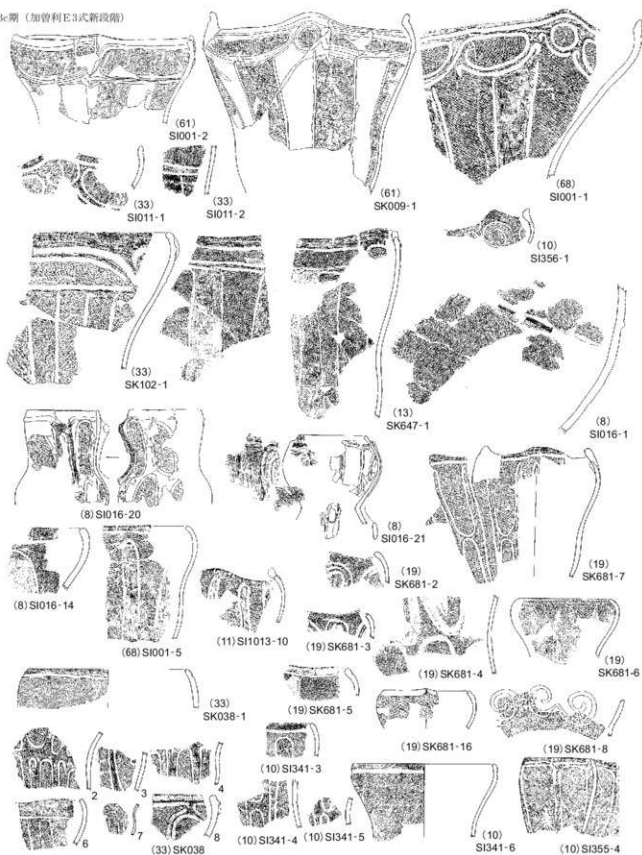


3b期 (加會利E3式中2段階)

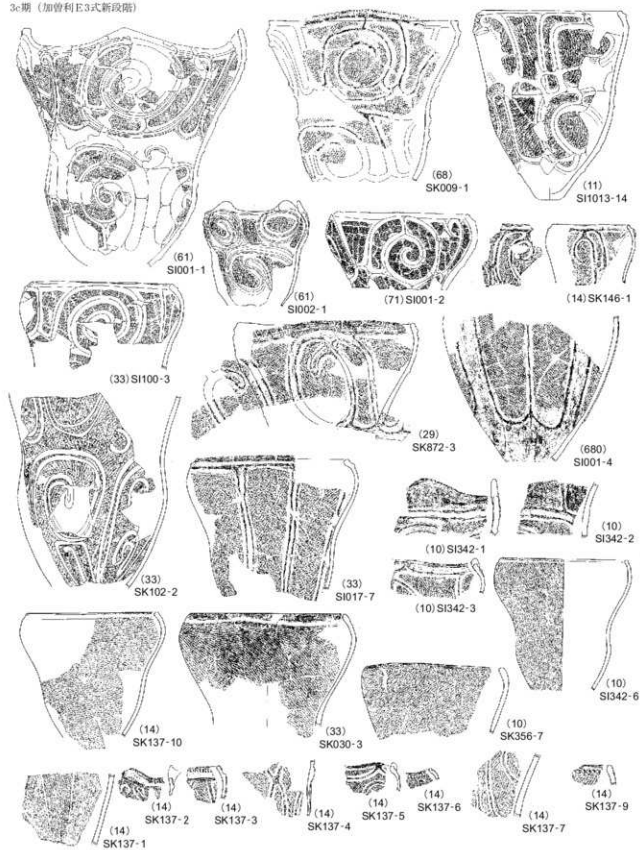


第139図 出土土器集成図(6)

3c期 (加魯利E3式新段階)

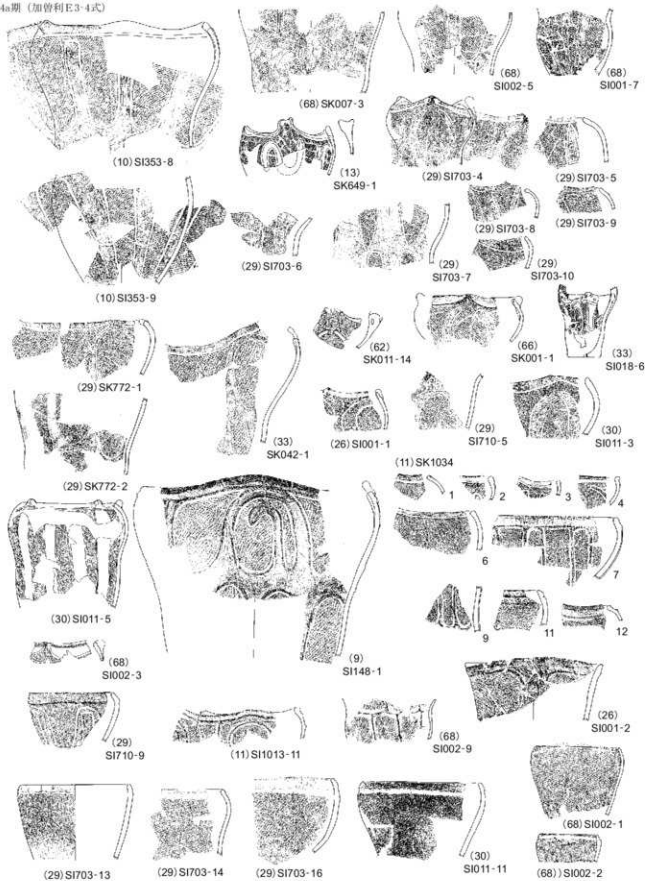


第140图 出土土器集成图(7)



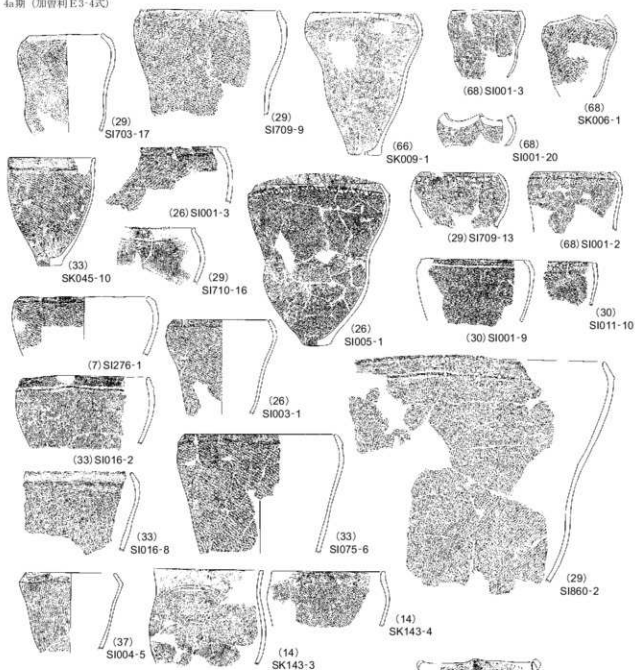
第141圖 出土土器集成圖(8)

4a期 (加曾利E3-4式)

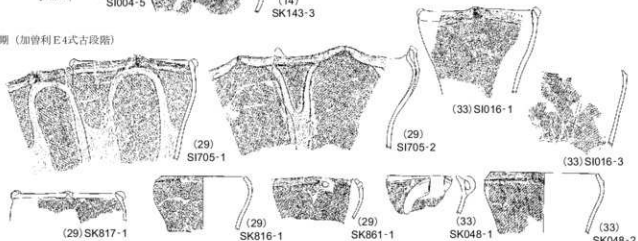


第142图 出土土器集成图(9)

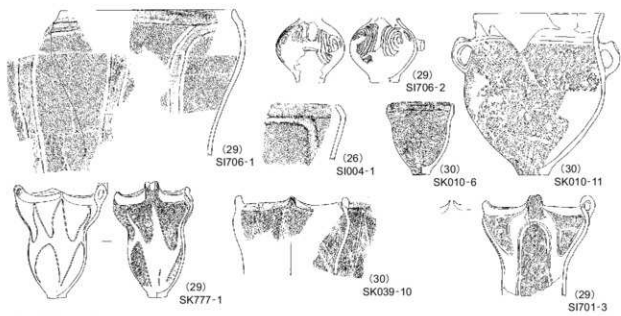
4a期 (加曾利E3-4式)



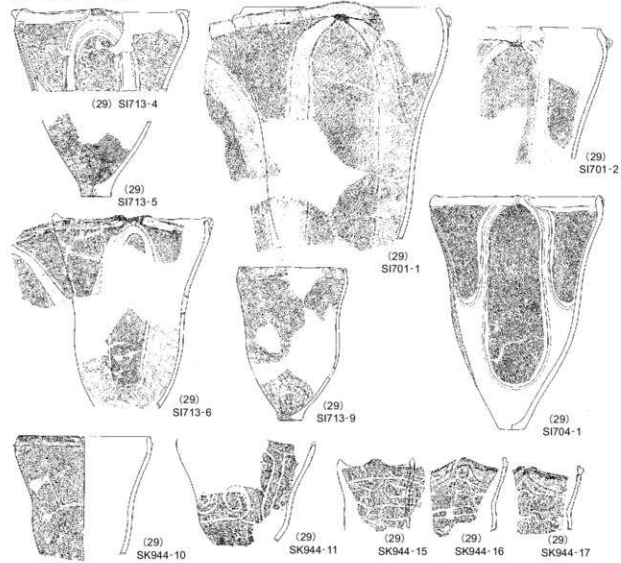
4b期 (加曾利E4式古段階)



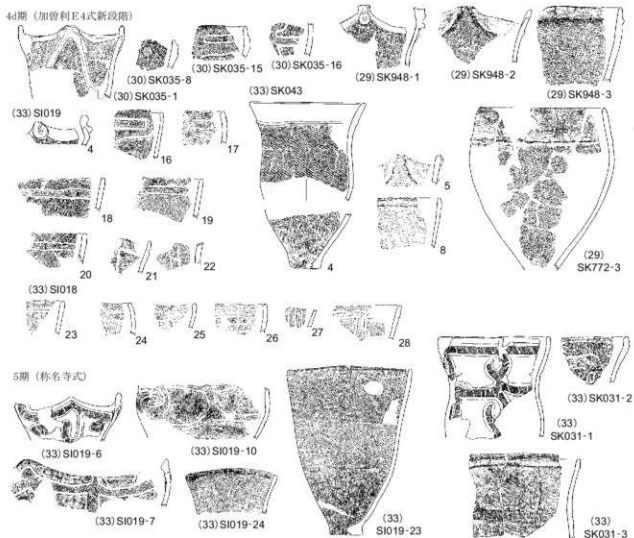
第143图 出土土器集成图 (10)



4c期 (加普利E4式中段部)



第144图 出土土器集成图 (11)



第145図 出土土器集成図(12)

能性が指摘できよう。称名寺式を模倣した在地製作の続加曾利E4式らしい³⁰⁾。

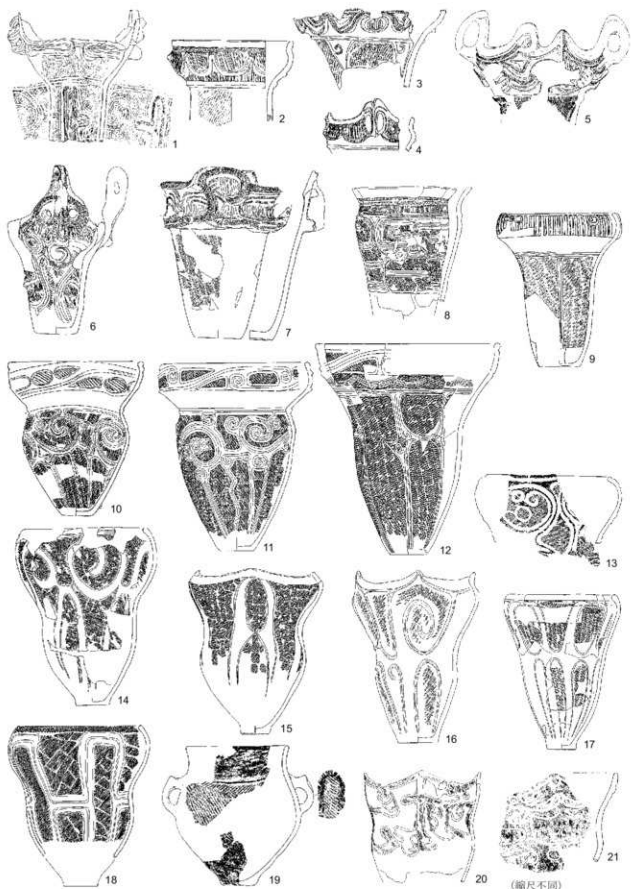
後5期

称名寺式以後は後期堀之内式、加曾利B式、安行式土器が各区から散漫に出土している程度であることから一括して後5期とした。

堀之内式は1式でも古い様相を示す(1)区-7・8、(7)区-31、(25)区-1、新しい様相を示す(26)区-8及び(60)区-16がわずかに認められる。

加曾利B式は(6)、(7)、(10)、(17)、(26)、(46)、(60)、(62)・(63)、(66)、(71)、(72)、(75)の各区からわずかずつ出土している。(7)区-1はB1式と思われ、(6)区-8は胴部に綾杉の沈線を施すB2式、(17)区-5、(46)区-1は広い弧状区画内に縄文を充填するB3式であろう。

安行式は(10)、(11)・(12)、(16)、(19)、(33)、(39)、(45)でやはり僅少である。このうち(11)・(12)



(縮尺不同)

第146圖 出土土器參考資料

区-1は1式の精製深鉢土器、(39)は同じく精製の甕形土器であろう。(45)区-1は唯一出土した晩期の土器である。安行3d式に近い。

注1 会津高田市教育委員会 1984『冨宮西遺跡—縄文時代早期・前期集落跡の調査』

2 横山 仁他 2009『研究紀要26—房総における縄文時代の非在地系土器について—』(財)千葉県教育振興財団

3 (財)福島県文化センター 1982『国営総合之内閣発事業母畑地区遺跡発掘調査報告X 七郎内C遺跡 七郎内D遺跡』日上市教育委員会 1980『諏訪遺跡発掘調査報告書』

4 笠間市教育委員会 2010『橋爪遺跡』

5 高橋良治他 2004『特集』房総半島における勝坂式土器の研究』『下総考古学』18 下総考古学研究会 p.23

6 大村 裕他 2014『中峠6次1住型深鉢の研究』『下総考古学』23 下総考古学研究会

当該土器について、柏市大松遺跡の報告書では加曾利E1式古段階としたが、上記論考で中峠6次1住型深鉢であるとの指摘を受けたので、これに従う。ただし、まったく同一の口縁部文様を持ち、かつ胴部に懸垂文を施す茨城県泉台遺跡群の土器に対しては、下記大村論文では加曾利E1式としていることから、両者は分類上・呼称上の違いにすぎず、同一時期と考える。

大村 裕 1998『勝坂V式・阿玉台IV式から加曾利E式への転換期の諸問題』『下総考古学』15 下総考古学研究会, p.72 大松遺跡については、下記文献を参照されたい。

(財)千葉県教育振興財団 2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書4—柏市大松遺跡—縄文時代以降編1』

7 (財)千葉県教育振興財団 2007『東関東自動車道水戸線水々井PA埋蔵文化財調査報告書4—酒々井町黒古沢遺跡—旧石器・縄文時代編』

8 これら2例は中峠6次1住型深鉢類似土器とはやや異なると思われる。祖型となるのは、下総考古学研究会のいう羽戸113住型深鉢(第146図3・4)であろう。羽戸113住型深鉢は勝坂式末期で、うねった隆帯に刻みが付き、その隆帯と胴部区画隆帯間は無文となるが、当該土器ではうねった隆帯には刻みが付かず、胴部区画隆帯間には集合沈線が充填されている。加曾利E1式古段階に含めた(10)SK402-3(第136図段上中央)はうねった隆帯と胴部区画隆帯間は無文で羽戸113住型深鉢に近いが隆帯には刻みが付かず、うねった隆帯は青割れで末端は半渦巻文を形成している。型式学的には、姥山貝塚B地点型深鉢(第146図5)→羽戸113住型深鉢(第147図3-4)→(7)SK244-2・(10)SK402-3・羽戸113住(第146図2)の変化が想定されよう。

(財)山武郡市文化財センター 2001『小野山田遺跡群II—羽戸遺跡—』

羽戸113住型深鉢、姥山貝塚B地点型深鉢については注5, p.19参照。

9 (財)千葉県教育振興財団 2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書4—柏市大松遺跡—縄文時代以降編1』, p.419

10 馬目順一他 1975『大畑貝塚調査報告』, p.146

11 SK321の1例は口縁下に中峠式の文様、胴部には大木8a式の文様を配し、本例の構成と同様である。

上三川町教育委員会 2004~2006『島田遺跡III~V』

12 西村正衛はこれらの押引文について「北関東—東北南半部の要素の伝播とその土器の搬入も考えられる。」と指摘している。

西村正衛 1984『茨城県稲敷郡江戸崎町村田貝塚』『石器時代における利根川下流域の研究—貝塚を中心として—』早稲田大学出版部, p.452

13 注10に同じ。第88図56・62など, p.150。

14 工藤幸尚 2006『付録3』中峠5次調査地点1号住居址炉体土器の位置づけ』『下総考古学』19 下総考古学研究会

15 (財)栃木県文化振興事業団 2000『御霊前遺跡1』

16 柳澤清一 2006『縄紋時代中・後期の編年学的研究—列島における小細別編年網の構築をめざして—』千葉大学考古学研究所叢書3 千葉大学考古学研究室, p.671

長山明弘 2010『加曾利E(新)式における土器系列の研究(1)—「連弧文土器」から「Y字状文土器」へ—』古

- 代) 124号 早稲田大学考古学会
- 17 以後、説明の簡便を図るため、U字状、S字状の沈線や隆線による区画文で内部に縄文を充填するものをボジ文、区画文内部を無文とするものをネガ文と呼ぶ。
- 18 多田遺跡210号土坑1である。ただし、本例はいわゆる梶山類と融合した文様となっており、E3式新段階に相当しよう。
- (財) 千葉県文化財センター 1992『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅶ』
- 19 長山明弘 2012「関東北に於ける土器系列の相関(1) - 「懸華状連接区劃土器」の分布と加曾利 E3式土器の終末(上篇)」『考古学論叢』I 千葉県文学部考古学研究室
- 20 小笠野町教育委員会 1995『塚越向山遺跡』『秩父・合角ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 21 狹山市遺跡調査会 2005『森ノ上遺跡-流通センター-建築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
- 22 柳澤清一 2009「埼玉県西部における縄紋中期末葉編年の検討-入間台地から北陸の板町遺跡へ-」『東邦考古』33東邦考古学研究会, p. 18
- 23 柳澤氏は隆線土器とE4式の微隆起線土器の関係を注目しているが、具体的資料が不足しているため仮説を述べることは控えたいとしている。注13文献, p. 392註22。
- あえて両者のつなぐ可能性のあるものをあげるとすれば、なお間隙があるが山梨県小屋敷遺跡例(第146図16・17)のような梶山類の規範である上下に同種文様を重ねる2帯構造から脱した例が想定されるのではあるまいか。
- 長坂町教育委員会 1997『小屋敷遺跡-県営圃場整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査』
- 24 柳澤清一氏のご教示による。
- 25 (財) 千葉県文化財センター 1986「新山台遺跡」『東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅱ-大栄地区(1)-』
- 26 一の谷遺跡調査会 1984『松戸市一の谷西貝塚発掘調査報告書』
- 27 国分寺市遺跡調査会 2003『恋ヶ窪東遺跡発掘調査概報Ⅲ-都営本町四丁目団地建替工事に伴う調査-』
- 28 横浜市ふるさと歴史財団 1992『船ヶ原遺跡A地点発掘調査報告』
- 29 柳澤氏から口縁部の微隆起線による半渦巻文は大木10式中段階の影響によるもののご教示を得た。
- 30 柳澤氏からご教示を得た。

(2) 土製品について

土器片円板

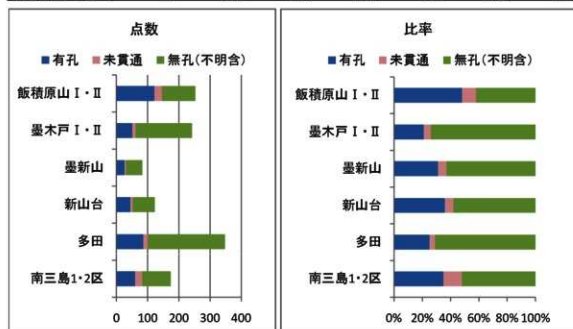
土器片円板¹⁾は(1)～(77)区を合わせて253点が出土した。完品は129点、欠損品は124点である。また、孔が貫通するものは122点、孔が未貫通のものは24点、無孔は91点、不明16点である。所属時期については遺構単位でまとまって出土した例をあげると次のとおりとなった。5点が出土した(11) S11013は加曾利E3式新段階、11点が出土した(29) S1711は同3式中2段階、13点が出土した(19) SK681は同3式新段階～3-4式、10点が出土した(33) SK038は同3式新段階、6点が出土した(61) S1001と同S1002も同3式新段階である。加曾利E4式が出土する遺構内からはわずかの出土であった。したがって、土器片円板が盛行するのは加曾利E3式中2段階から同3-4式段階と考えられる。

東関東の中期末の遺跡では有孔を含めた土器片円板が多量に出土することがある。本遺跡を含めて目に付いた遺跡での出土量を第20表-1に示した。有孔、孔が未貫通、無孔及び孔不明の3種別で集計した。いずれも総計で100点前後ないしそれ以上が出土しているがその比率は遺跡ごとに異なり、特に墨木戸遺跡や多田遺跡では無孔が多く、本遺跡では有孔が多い。

この土器片円板の機能を検討するため、総出土数253点のうち孔の有無が確定できないもの16点を除く237点に対して、孔の有無と欠損との関係、周縁の加工度合と孔との関係等について観察、集計を行った。まず、孔の有無と欠損との関連については第20表-2のとおり、有孔のものは完形24点に対して欠損は98

第20表-1 代表遺跡における土器片円板の種別集計

	有孔		未貫通		無孔(不明含)		計
	点数	比率	点数	比率	点数	比率	
飯積原山Ⅰ・Ⅱ	122	48%	24	10%	107	42%	253
墨木戸Ⅰ・Ⅱ	51	21%	11	5%	180	74%	242
墨新山	26	31%	5	6%	52	63%	83
新山台	45	36%	7	6%	71	58%	123
多田	86	25%	15	4%	247	71%	348
南三島1・2区	60	35%	23	13%	91	52%	174



第20表-2 孔の有無と欠損の関係

	比率	点数
無孔(未貫通含む)完形	44%	105
無孔(未貫通含む)割れ	4%	10
有孔完形	10%	24
有孔割れ	41%	98

Figure 20-2 is a horizontal bar chart showing the relationship between hole presence and damage. The categories are: 有孔割れ (98 points), 有孔完形 (24 points), 無孔(未貫通含む)割れ (10 points), and 無孔(未貫通含む)完形 (105 points). The x-axis represents the number of points, ranging from 0 to 120.

第20表-3 周縁加工と穿孔の関係

		未穿孔	有孔		
			片面未貫通	片面貫通	両面貫通
周縁加工	打ち欠き	12	1		1
	磨り浅い	20	2		3
	磨りやや浅い	32	8	3*	25
	磨り深い	27**	4	12	78
計		64	15	15	107

合計237点 不明16点 総計253点 *管状穿孔1点を含む
**片面全面磨り1点あり未穿孔に含む

第20表-4 表面穿孔と裏面穿孔

片面穿孔		両面穿孔	
表面穿孔	7	表裏孔均等	52
裏面穿孔	23	表面孔大	12
		裏面孔大	52

点、無孔及び孔が未貫通のものは完形105点に対して欠損は10点と対照的であった。穿孔ないしは結果として孔があく行為が、円板の欠損すなわち割れと深い関係があることが指摘できる。

土器片円板はまず土器片を円形に打ち欠くことから始まり、周縁の磨りが次第に進行して最終的に打ち欠きの痕跡が完全になくなる工程が想定される。また、孔は片面あるいは表裏面同時進行で穿孔が始まり、やがて貫通して孔がさらに広がってゆく工程が想定される。第20表-3は周縁加工の進行度合と孔の有無及び孔の貫通の進行度合の関連を示したものである。無孔の円板は周縁の磨りの進行にしたがって量が増え、磨りがやや浅いとした深い打ち欠き痕のみが残る段階と、磨りが深いとした打ち欠き痕が残らない段階のものがほぼ等量となる。両者で全体の1/4の量を占めており、磨りがやや浅い段階も含めて完成形といえるのであろう。さらに、無孔円板のみを出土する西関東の事例を考え合わせるとこれ自体が一つの製品ないしは道具であると考えられる。

有孔円板では周縁の磨りが深いもの（やや浅いものを含む）で孔が両面貫通するものが完成形であることはいうまでもないが、周縁の磨りが同様で片面貫通のものも15点あり、これらも完成形と考えておきたい。では、周縁の磨りの進行と穿孔の進行の関係、すなわちどのようなプロセスで有孔円板の完成形に至るのであろうか。まず、周縁が打ち欠きのみ段階であるのに孔が片面未貫通、両面未貫通、両面貫通が計3点ある。また、磨りが浅く、両面貫通のものが3点ある。これらは周縁の磨りより孔の穿孔が優先される事例である。一方、周縁の磨りがやや浅いものと深いもので、孔が片面未貫通のものが12点、両面未貫通のものが6点ある。これらは無孔円板が完成後、孔の穿孔が始まる事例である。また、周縁の磨りが浅く、孔が片面未貫通のもの、両面未貫通のものが各2点ある。これらは磨りと穿孔が同時進行している可能性が高い事例である。したがって、周縁の磨りが先行する例が一般的で、穿孔が先の場合及び同時進行の例は少ないと理解できよう。無孔円板は有孔円板の未成品でもあるのである。

次に、周縁の磨りの状態についてであるが、ほとんど真円になるまで均一に磨りがなされるものが多いが、面取り状に磨り面を残すものもある。また、南三島遺跡で指摘されたように磨り面が内面側に傾く例、表面側に傾く例があり、磨り面が丸みを帯びるものもある。磨りの方向は、擦痕の残るものから判断して周縁に対して平行のものがほとんどと思われるが、擦痕の残るものはごく少ない。

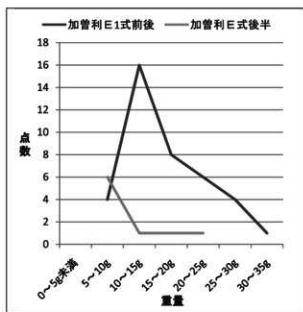
孔については、第20表-4に示したように片面穿孔の場合円板（土器片）の裏面に穿孔する例が圧倒的に多いことが指摘できる。これは穿孔するに当たって内湾曲する裏面の方が円板の中心点を捉えやすく、かつ孔が開けやすいからと考えられる。また、孔がほぼ真正な円形で回転による穿孔と考えられるもののほか、ほぼ半回転で開けた2孔が組み合ったもの、面取り状の平面が認められるものもある。やはり南三島遺跡で指摘された孔角の広いものもある。なお、穿孔による擦痕は認められない。

以上のように、円板は孔が貫通するものがほとんど割れていることから、有孔円板という製品を作成することが目的ではなく、孔面で磨り作業を行っている時点で割れて廃棄に至ったもの、すなわち孔及び周縁の磨り作業を行う道具、「磨り具」と考えたい。対象物は擦痕がほとんど認められないことから土器と同程度の軟質なものと思われる。周縁、孔とも面取り状の磨りが認められることから、手に持って扱われたものと思われる。

注1 土器片円板の呼称は有古南貝塚以来当財団の一部で使用されている呼称である。本報告ではこれまで単に円板と記載してきたが、より適切な表現と考えて土器片円板の呼称を用いることとした。
 (財)千葉県教育振興財団 2008『千葉東南部ニュートウン40-千葉市有古南貝塚-』

土器片鍾 (第147図)

土器片鍾は(1)～(77)区を合わせて50点が出土した。2点の欠損品を除く48点中39点が加曾利E1式前後に属し、9点は加曾利E式後半に属するものであった。平均重量は、前者が18.6g、後者が11.2gである。加曾利E1式期の平均重量は、同じ古鬼怒湾に立地する柏市大松遺跡の報告では、中峠式系が16.5g、加曾利E式が18.2gで、土浦市龍善寺遺跡、神崎町原山遺跡もほぼ同様の重量である¹⁾とされており、これらの遺跡と同じ結果となった。さらに、より湾口に近い阿玉台式期の稲敷市村田貝塚や香取市木之内明神貝塚などでも、平均重量は20g程度でやはり大差はない²⁾。古鬼怒湾における当該期の網漁は、対象魚を含めて同じように行われていたものと考えられる。



第147図 土器片鍾重量分布図

- 注1 (財)千葉県教育振興財団 2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書4-柏市大松遺跡-縄文時代以降編』, p.433
 2 西村正衛 1984『茨城県稲敷郡江戸崎町村田貝塚』『石器時代における利根川下流域の研究-貝塚を中心として-』早稲田大学出版部ほか

(3) 石器について

平成22年度以前の調査分については既に報告済であるが、ここでは便宜的に平成24年度までの調査成果のすべてをとりまとめ、ひとつの集落の全体像を明らかにしたい。

石器組成

本地区では、今回の報告分を含め、これまで縄文時代の石器は、総計6,913点出土した。剥片類や石核が大半を占め、総数は計5,860点（原石11点、石核92点、剥片1,395点・砕片4,338点、削片1点、軽石類23点）に及ぶ。

これに対して利器は大別21種、計1,053点（15.2%）を数える。内訳は、石鏃（主として凹基無茎鏃）308点、石鏃未成品293点、楔形石器88点、石錐25点、有舌尖頭器1点、尖頭器2点、二次加工ある剥片56点、使用痕ある剥片9点、磨製石斧49点、局部磨製石斧1点、打製石斧27点、磨石類101点、敲石12点、砥石2点、石皿53点、台石5点、軽石石製品1点、（有孔）円盤状石製品1点、石棒13点、二次加工ある礫2点、及び（有孔）浮子4点である。この中で有舌尖頭器と尖頭器については縄文時代草創期の遺物であり、縄文中期の石器組成から除外しなければならない。

以上の石器個々の諸特徴と石器組成は附表9と第21表にそれぞれ示したので、適宜、参照されたい。

利器のうち石鏃、石錐、及び楔形石器等については、遺跡内で製作された痕跡をとどめるが、他の石器群、特に礫石器は搬入品である。これは一般的な傾向であり、製作地は、おそらく採取地もしくは近傍の河原であろう。礫石器のうち磨製石斧は破損後、しばしば再加工され、他の器種に転用されている。これに対して石皿には完形品は皆無であり、転用例もほとんど認められない。また、破損した石皿の器厚を考慮すれば使い減りによる破損の可能性は低い。したがって、使用による破損ではなく、意図的な打撃による破砕の可能性が高い。このような遺存状況は石棒にもみられる。おそらく、その行為の背景には廃棄に伴う祭祀・儀礼であろう。

技術的特徴

剥片生産には両極打法が主体をなす。素材は小型で扁平なチャート礫である。両極打法（楔形石器と両極剥片の生産）に伴う損傷が、側面調整礫、磨石類、台石に観察され、ハンマーや台石に礫石器が、器種を問わず広く使用されていたことがわかる。

どうやら石核が剥離の進行に伴い小型化した場合や、原材料が小型で、通常の方法では剥片の剥離が困難な場合に両極打法が用いられたようである。そして、剥離の途上で生じた両極剥片・削片と最終的に残された扁平な石核（楔形石器）の双方が石鏃等の剥片石器の素材として使われている。

このような小型扁平な地産のチャート礫から素材剥片を生産する技術は、後期旧石器時代前半期（「遠山技法」）からみられ、良好な石材に乏しい下総の伝統的な技術といえる。

一方、二次加工（調整）技術に関連して再加工率の高さが指摘される。すなわち限られた資源を有効活用するために、たとえ破損しても再加工や転用を繰り返し執拗に使い続けた当時の人々の強い思い（節約志向）が伝わるのである。

石器石材

先に述べたように、遺跡内で製作された石器は石鏃をはじめとした剥片石器であり、未成品もみとめられる。これに対して礫石器は、いずれも搬入品であり、破損後は再加工され、中には他の器種に転用されているものもある。特に磨製石斧や石皿については徹底的に使い尽くされており、下総という石材消費地

第21表 飯積原山縄文時代石器石材別組成表

器種/石材	石 錐	石 錐 未 成 品	磨 製 石 斧	石 錐	有 舌 玄 武 岩	玄 武 岩	二 次 加 工 あ る 剥 片	批 用 痕 あ る 剥 片	磨 製 石 斧	磨 製 石 斧	打 製 石 斧	磨 石 類	砥 石	砥 石	石 風	石 杵	磨 石 類 品	円 盤 状 石 製 品	石 棒	浮 子	原 石	石 錐	剥 片	剥 片	削 片	磨 石 類	計	
ガラス質褐色安山岩	27	22	24	3		7	1																127	231		452		
チャート	125	170	30	12		1	19	3				1								1	7	25	613	204		3021		
燧石								3			1	1			4												10	
ホルンフェルス	5	4	2	1				3		9	6	2				1								15	88		136	
メノウ	3	14	6																		2	3	34	11			73	
安山岩			1					1		4	45	1		25					5								86	
花崗岩											1			4									1				6	
凝灰岩			1															1						2	4		8	
赤玉・黄玉(碧玉)	1																					1					2	
柱状頁岩			1																				4	1	1		6	
軽石												1					1			4						23	26	
砂質片岩											1																1	
白雲母緑泥石片岩																			1				1				2	
東北頁岩	7	1		1	1																		1	6	3		20	
黒曜石	113	61	3	7	1	24	5														1	61	420	1105			1801	
砂岩								14		6	26	3	2	3	1					1				72			128	
石英	1	2	2																					7	2		14	
石英斑岩										1	13	2			1												17	
石英安山岩											2								3								5	
粗粒玄武岩								9																			9	
多孔質安山岩														6													6	
粘板岩			1					1															1				3	
頁岩							3																				6	
黒色頁岩		1																							15		16	
雲母片岩											2																2	
流紋岩	13	14	10	1		5	1				5	1			1							1	37	33			112	
流紋岩質凝灰岩	1	1	1																					1	4		6	
トコロ石	2	2	5																		1		37	22			61	
メジュール																											1	
凝結砂岩																											0	
角閃岩								1																			1	
閃緑岩(ヘン岩)												1															1	
点紋片岩																				1							1	
緑色片岩								1																			1	
緑色岩							7	1																			6	
緑色凝灰岩			1				5			1														1			6	
緑泥片岩							1	3						11	1			3					26				47	
軟泥岩								2																			2	
合 計	308	293	88	25	1	2	56	9	49	1	27	101	12	2	53	5	1	1	13	2	4	11	92	1365	4308	1	23	6913

の特性がよくあらわれている。

石錐等の剥片石器は、おしなべてチャートを主体としているが、礫石器は個性的であり、打製石斧にはホルンフェルス、磨製石斧には砂岩・粗粒玄武岩・緑色岩、磨石類・石皿には安山岩、石棒には安山岩・石英安山岩がそれぞれ使用されている。このことはそれぞれの機能に応じた石材の使い分けがあったことを物語っている。

これらの石器石材の産地は基本的に鬼怒川系を主体とした北関東方面を中心として関東一円であるが、磨製石斧に使われている緑色岩に限っては、埼玉県北西部方面であり、利根川支流の神流川中流などに分布する秩父帯北帯の万場サブユニットのものと推定されている¹⁾。おそらく、この付近の河原で、当時の専業集団により集中的に生産され、生活財として供給されたのであろう。

また、石棒に使用されているデイサイト(石英安山岩)は白色から黄色の色調を呈する特徴的な岩石であり、産地は群馬県西端部の大山とその周辺である。この「大山石」による大形石棒は、鈴木素行によって近隣の群馬・長野方面はもとより関東一円に分布していることが確認されている²⁾。

第 22 表 石器の機能・用途別組成 (小林 1983 を改変)

使用目的等	生産用具			工 具	非実用的石器	
	狩猟具	植物採集・加工具	漁撈具			
	直接生産用具	石鏃	打製石斧	浮標 (浮子)	石鏃 砥石 磨石類の一部 敲石の一部	祭祀・儀礼
間接生産用具	剥片石器の一部	石皿 磨石類の一部 敲石の一部 台石の一部	剥片石器の一部	台石の一部 磨製石斧 剥片石器の一部	装身具	

※太字は比較的数量が多いもの

生産活動

本遺跡の石器組成は、第21表に示したとおり、石器組成の主体は、狩猟具 (石鏃) と植物の伐採・加工や工具として使用された磨製石斧・石皿・磨石類である。これに対して打製石斧は少量で、漁具は非常に貧弱である。このことから本遺跡における生業は狩猟・採集を中心としていたことが窺われる。

ちなみに関東・中部の縄文石器の様相を検討した小林康男によれば、縄文時代の中期には、その前半 (五領ヶ台、勝坂期) に「植物採集、加工具主体の石器組成が確立」し、打製石斧の急増と石皿、磨石類の中心の石器組成が現象化するのに対して、中期後半 (加曾利E期) には、石皿、磨石類には顕著な増減は認められないが、房総など関東の一部で打製石斧の減少と石鏃の増加が認められるという³⁾。

以上の小林の見解に照らし合わせると、本遺跡の石器組成は房総における中期後半の典型例といえる。

- 注1 中村由克 2013 「後期旧石器時代前半期における石斧石材の特質と意義」『考古学ジャーナル』№640 ニューサイエンス社, pp. 27-31
- 2 鈴木素行 2012 「大形石棒が埋まるまで―事例研究による「石棒」(鈴木2007)の改訂―」『考古学リーダー20―縄文人の石神～大形石棒にみる祭儀行為―』六一書房, pp. 108-134
- 3 小林康男 1983 「組成論」『縄文文化の研究7 道具と技術』雄山閣, pp. 16-27

(4) 集落について (第148～150図)

前回の(1)～(50)区までの報告で、加曾利E式前半の遺構群のまとまりが3か所、同後半のまとまりが2か所となることを指摘したが、今回の空白区の追加報告により、各まとまりの構成が明らかとなった。

まず、加曾利E式前半期では(6)区から(10)区東端にかけてのまとまりが最も規模が大きい。これを集落Ⅰと呼ぶことにする。集落Ⅰは長軸約180m、短軸約100mのおよそ14,000㎡の範囲に、約30軒の住居跡と約170基の土坑が散漫に分布する。土坑群は住居跡の分布の内側に位置するようにも見えるが、南東端では住居跡群より外側に広がっている。時期は不明または確定できなかったものを除き、住居跡は1a期(加曾利E1式古段階)のみで、土坑も大部分が1a期で、1b期(加曾利E1式新段階)の土坑は6基、2a期(加曾利E2式古段階)の土坑は5基とわずかで、きわめて短期で終る集落といえる。しかし、短期とはいえ集落規模は面積、遺構数とも中期環状集落に匹敵する規模である¹⁾が、継続しなかったのはいうまでもなく(78)区に展開する環状集落の存在である。この集落については整理中で、まだ詳細を明らかにできないが、長軸約200m、短軸約100mの典型的な環状集落で、1a期から後期まで継続することが分かっている。集落Ⅰとこの環状集落の関係の詳細についてはなお今後にゆずらねばならないが、結果的に集落Ⅰはこの環状集落に吸収されたのであろう。

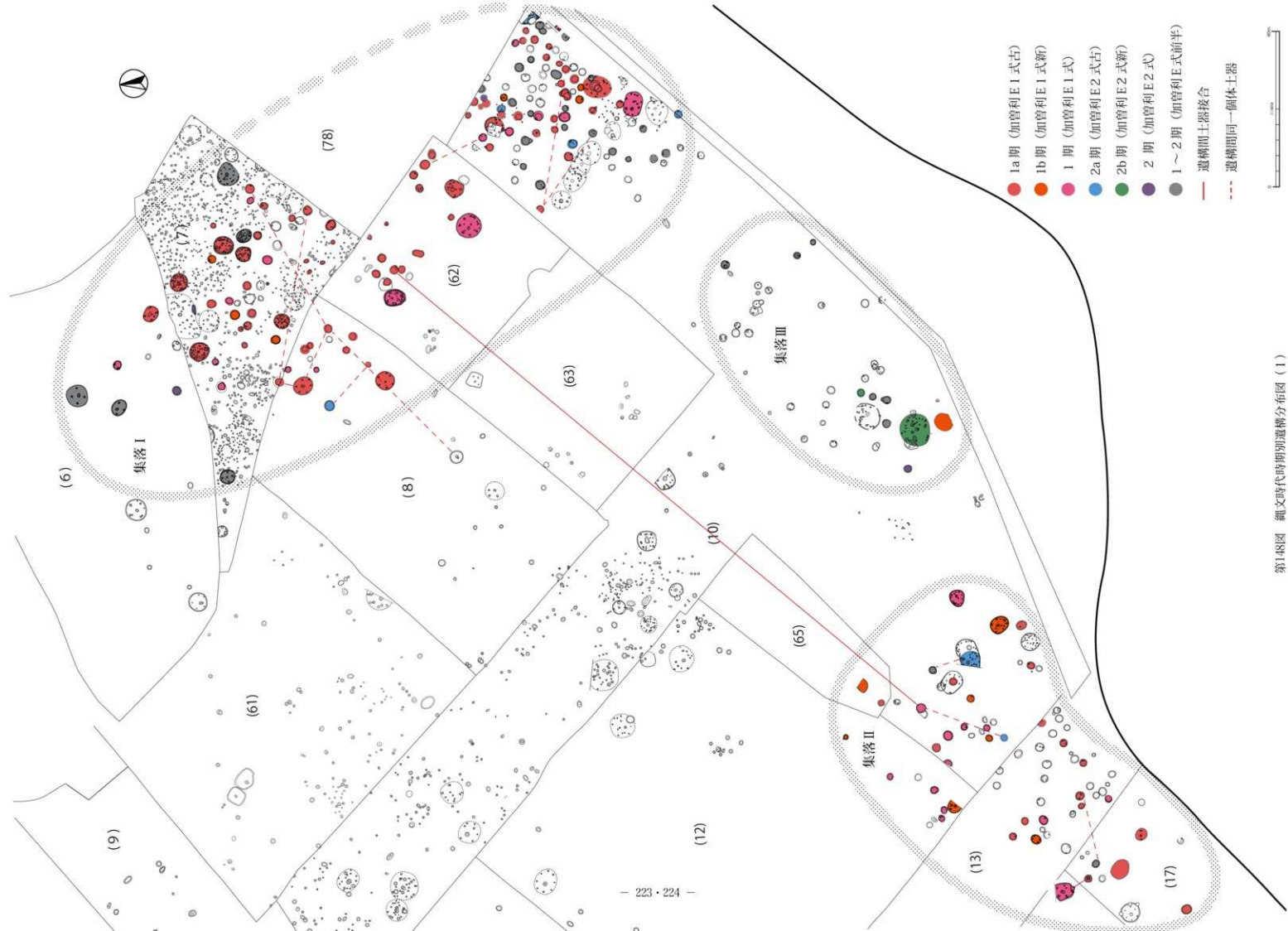
(10)区南端から(17)区にかけての集落は長軸約100m、短軸約60mのおよそ4,700㎡の範囲に8軒の住居跡と50基以上の土坑からなる。これを集落Ⅱと呼ぶ。住居跡は遺構群の分布の周縁にあって、中央には存在しておらず、かわって土坑群が分布している。遺構の時期別内訳は住居跡では1a期が2軒、1b期が3軒、1期が2軒、2a期が1軒で、やはり短期で終わる集落である。また、土坑は時期が確定できなかったものを除き、1a期が15基、1b期が3基、1期が10基、2a期が1基である。根拠はないが1単位集落の集落と見たい。

集落ⅠとⅡの中間に位置するのが集落Ⅲである。長軸約80m、短軸約50mのおよそ3,000㎡の範囲に住居跡2軒と土坑20基ほどからなる。遺構の時期別内訳は住居跡では1b期が1軒、2b期(加曾利E2式新段階)が1軒で、時期的に重ならないから集落とは呼べないが、説明の便宜上用いることとする。土坑は2b期が1基、2期が2基、1～2期が5基で、他は時期が確定できない。したがって、集落Ⅲは発現が集落Ⅰ・Ⅱよりやや遅れるといえよう。

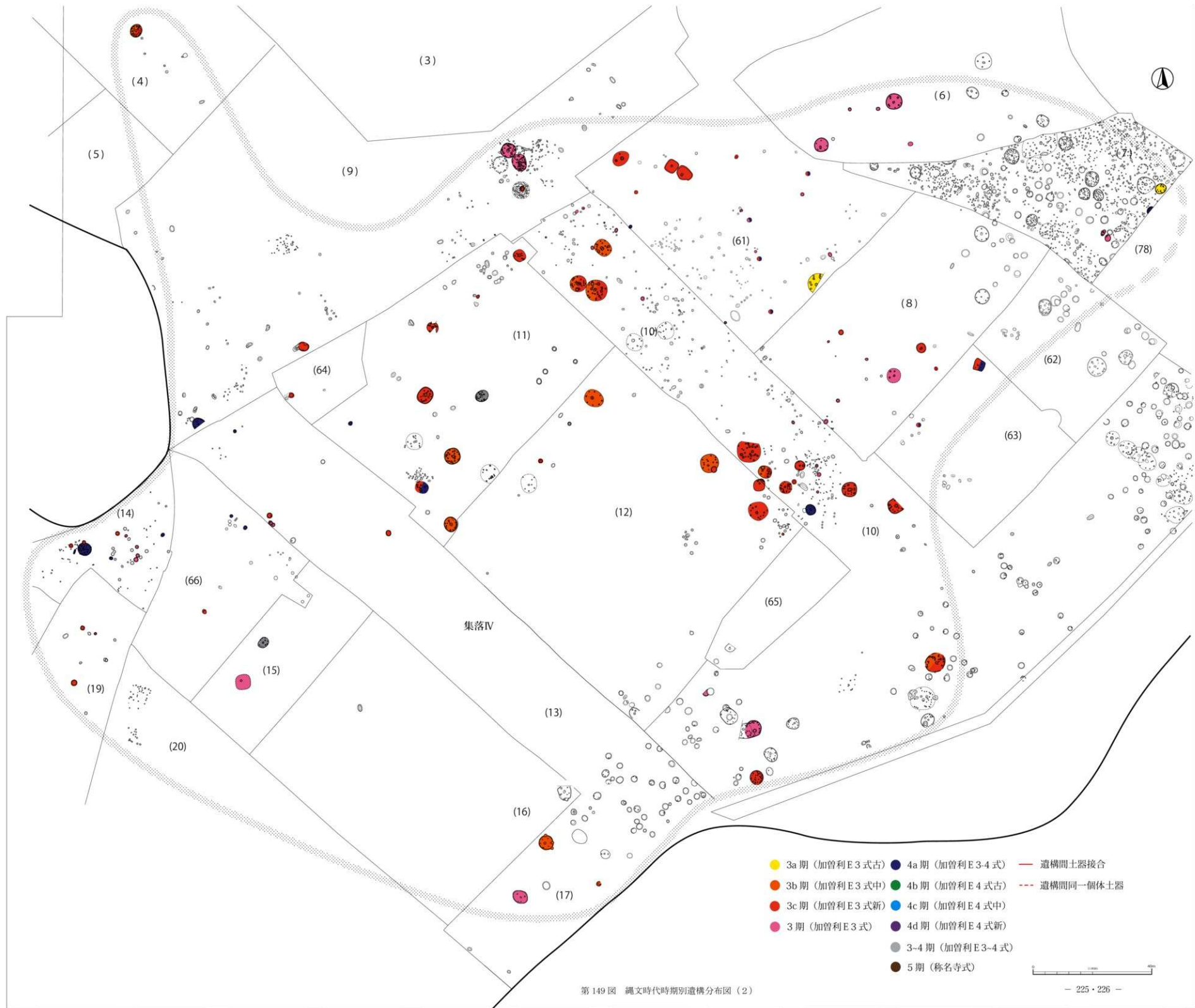
なお、これら3集落の関係については、集落Ⅱに属する(10)SK572と集落Ⅰに属する(62)SK013から出土した勝坂式末期の土器が接合しており、このことは両集落間において行き来があったことを示している。隣接する集落は互いに有機的な関連をもって存立していたのであろう。

次に、加曾利E式後半期では2か所のまとまりがあるが、いずれも3b期(加曾利E3式中段階)以降が中心となる。1b期以降、(78)区に展開する環状集落は、3a期(加曾利E3式古段階)まで引き続き周辺に遺構を分散させない強力な求心力を維持するようであるが、3b期(加曾利E3式中段階)に至るとにわか分散化が始まるようである。

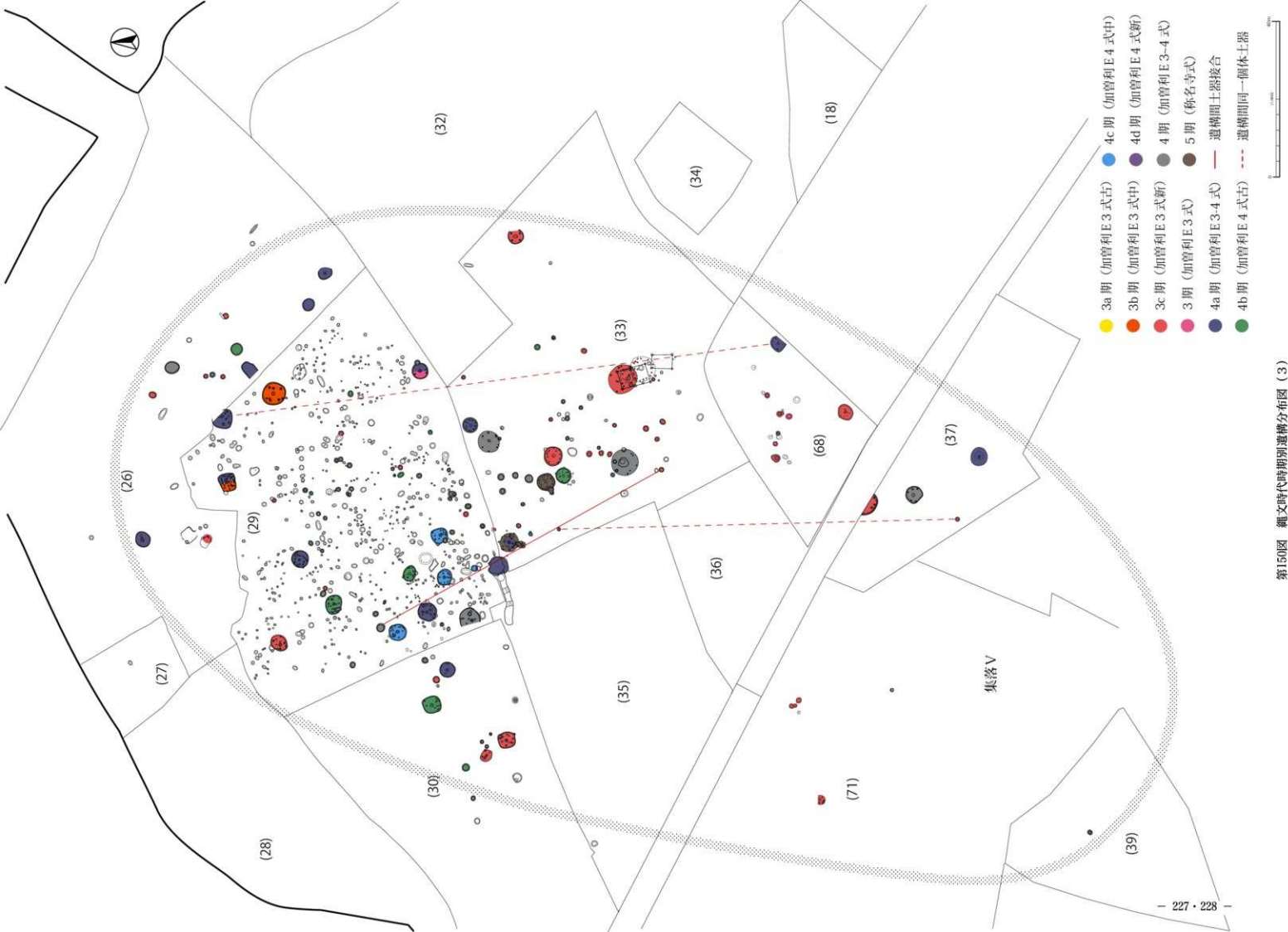
集落Ⅳは東が(7)区、西が(19)区に及ぶ約400m、北が(4)区、南が(17)区に及ぶ約300mの広大な範囲におよそ45軒の住居跡が土坑を伴いながら散漫に分布する。時期別内訳は単一時期に絞り込める住居跡のみ挙げると、3a期(加曾利E3式古段階)2軒、3b期(同E3式中段階)6軒、3c期(同E3式新段階)16軒、4a期(加曾利E3-4式)4軒で、3a期から始まって次第に増加し、3c期がピークとなり、



第148図 縄文時代時期別遺構分布図 (1)



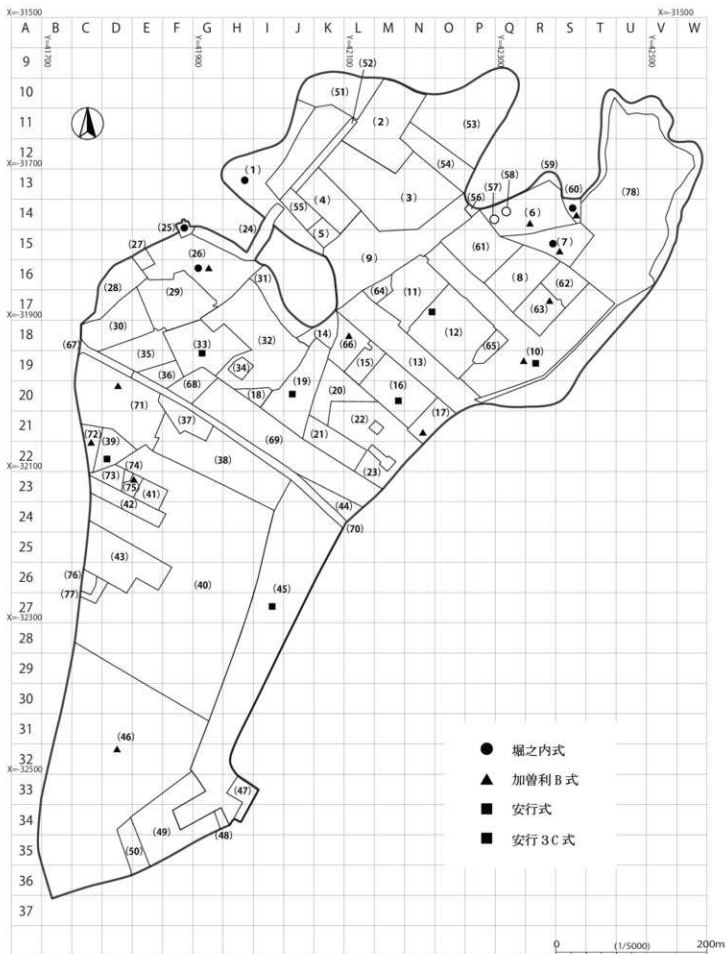
第149図 縄文時代時期別遺構分布図(2)



第150圖 縄文時代時期別遺構分布圖 (3)



第151図 縄文時代 前I期地区別遺物分布状況



第152図 縄文時代後V期地区別遺物分布状況

4a期で終息していることが分かる。各期ごとに見ると、(10)区中央に3c期の住居跡の集中があるほか、住居跡が互いに近接する場合と、完全に孤立する場合があつて分布に濃淡が認められる。こうした傾向は同じ分散型集落が検出された八千代市八王子台遺跡でも同様である²⁾。なお、貯蔵穴と思われる土坑も散漫に分布するが、住居跡1軒あたりの数は加曾利E式前半の集落Ⅰ～Ⅲと比べて明らかに少ない。

集落Ⅴは集落Ⅳの西にあつて、南北約300m、東西約200mの範囲に42軒の住居跡が土坑を併いながら分布するが、密度は集落Ⅳより濃い。また、掘立柱建物跡2棟を持つのが特筆される。時期別の内訳は単一時期に絞り込める住居跡のみ挙げると、3b期(同E3式中段階)1軒、3c期(同E3式新段階)8軒、4a期(加曾利E3-4式)13軒、4b期(加曾利E4式古段階)5軒、4c期(同4式中段階)3軒、5期(称名寺式期)2軒で、3b期から始まって次第に増加し、4a期がピークとなり、5期で終息している。なお、(33)SI019の埋塞は4a期であることから4a期、5期の住居跡各1軒として算出している。したがつて、集落Ⅳに比べ開始期、最盛期、終息期とも遅いことが指摘されよう。掘立柱建物跡2棟は集落の東側中央に位置する。長軸がずれて隣接することから、時期を異にして建て替えられたと考えられる。このうち1棟は3c期の住居跡(33)SI011と重複し新旧関係が不明であるが、集落Ⅴは3b期には住居跡は1軒のみであり、これに伴うとは考えにくいから、最盛期の4b期かそれ以降の所産と思われる。集落Ⅴ全体の何らかの施設であつたのであろう。また、集落内でかなり離れた遺構間で接合及び同一個体の土器が確認された。この事実も分散した遺構間であっても有機的な関連があつた証であり、掘立柱建物跡と併せてこうしたまとまりのない形態をとる、まさしく分散した集落形態がこの時期の特徴なのであろう。

縄文中期の環状集落に代わつて、こうした分散型集落はいつから現れるのであろうか。集落Ⅳでは最も古い住居跡は2軒であつた。(7)SI275と(61)SI005である。ともに時期決定に十分な量の土器は出土していないが、磨消懸垂文の幅がやや広かつたり、口縁部文様帯の渦巻文の巻きがゆるそうに見えることから、小細別は加曾利E3式古段階でもやや新しく第2段階と思われる。先に挙げた八王子台遺跡は加曾利E3式中段階のほぼ単一時期の分散型集落であるが、同3式古2段階と思われる住居跡が1軒あるとされている。また、本遺跡の近隣にはいくつかの分散型集落があるが、このうち黒木戸遺跡³⁾では加曾利E3式古2段階から、黒古沢南1遺跡⁴⁾、墨新山遺跡⁵⁾では同3式中段階から集落が始まっている。おそらく、千葉県では加曾利E3式古2段階から中段階に分散型集落が出現するのであろう。

注1 たとえば、やや小規模な環状集落である柏市大松遺跡では、同時期の遺構は住居跡21軒、土坑56基である。
(財)千葉県教育振興財団 2011『柏北部東地区埋蔵文化財発掘調査報告書4-柏市大松遺跡-縄文時代以降編』
2 (公財)千葉県教育振興財団 2013『西八千代北部地区埋蔵文化財調査報告書3-八千代市八王子台遺跡-』
3 (財)印旛郡市文化財センター 1995『墨木戸』
4 (財)千葉県文化財センター 2005『東関東自動車道水戸線酒々井PA埋蔵文化財調査報告書1-酒々井町黒古沢南1遺跡-縄文時代編』
5 (財)印旛郡市文化財センター 1997『墨新山遺跡』

3 奈良・平安時代

奈良・平安時代の遺構は、平成24年度までに既報告分を含めて竪穴住居跡77軒、掘立柱建物跡43棟、土坑19基、溝状遺構15条が調査された。最終の平成25年度調査地点の(78)区において該期の竪穴住居跡を1軒残すが、遺物については主なものは出揃ったと考えている。

(1) 出土土器の変遷

主な出土遺物は、土師器の坏・甕、須恵器の坏・甕・大甕・甗・壺などの土器類、鎌・穂摘具・刀子・鉄鎌などの鉄製品、紡錘車・支脚などの土製品、紡錘車・砥石などの石製品である。実用品がほとんどで、威信財と呼べるようなものは少ないが、「三倉」をはじめとする大量の墨書土器、(13) S11006から出土した人面の刻書を施した土製支脚は類例が少なく特筆される。

土器は、器種構成、法量、形態、製作技法、産地などの変化により、4時期に区分することができる。

1期(第153図)

今回の報告では、(65) S1003、(66) S1002が該当する。供膳具類はロクロ土師器坏、非ロクロ土師器、須恵器坏、煮沸・貯蔵具類は土師器甕・甗、須恵器甕・甗・壺で構成される。煮沸・貯蔵具類の組成は、2期以降もあまり大きな変化はみられない。墨書は坏の底部に記される。

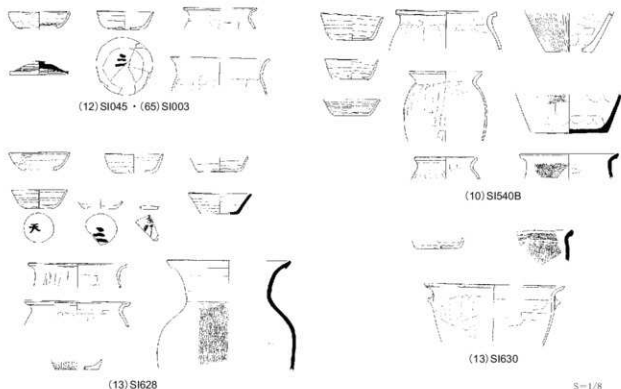
非ロクロ土師器坏は2種類あり、扁平なものは底部が丸味を帯びた平底で、底部が大きく体部と底部の境に稜を有し、内湾しながら立ち上がる。内面はミガキが施される。(66) S1002からは深めのものが出土している。平底でミガキは施されない(第109図1)。

ロクロ土師器坏は、口径11.4cm～13.2cm、底径7.0cm～8.5cm、口径/底径比の平均は1.64である。深めの箱型のもの、浅めの逆台形型の2種類がある。底部は平底が主体で、回転糸切離し後、外周もしくは全面に手持ちヘラケズリが施される。

土師器甕は常総型・在地型が主体である。いずれも胴部上位に最大径を有し、口縁部から頸部は「く」または「コ」字状に強くくびれる。常総型は、器高30cm以上を測り、胴部外面下方に縦方向のミガキが施される。口径が小さく肩が張り、底部の木葉痕が明瞭に残されているものがある。在地型は、胴部外面にヘラケズリが施される。器高は25cm以下で、15cm以下の小型のものも多い。器厚が厚手のものが少量みられる。武蔵型は(12) S1045/(65) S1003から出土した1点のみである。非常に薄手のつくりで、口縁部から頸部の形状が「コ」字状を帯びるのが特徴である。土師器の甗は、単孔で把手が貼り付けられる。

須恵器は、下総産と茨城県南部の新治窯産の出土量が拮抗し、1軒の住居跡から混在して出土する状況である。そのほかに出土量は少ないが上総産、東海産がみられる。(66) S1002出土の逆台形状の体部下端に幅広い回転ヘラケズリが施される坏(第109図5)、(13) S1628出土の頸部のくびれが弱い広口の甕は下総産で、吉川窯段階のものである。新治窯産は坏・蓋・甕・甗があり、(13) S1628の逆台形状の坏は東条寺桑木窯段階のものと判断される。(66) S1002出土の回転糸切りの坏(第109図4)は上総産で、石川窯段階、(66) S1002出土の長頸壺(第110図15)、中・近世の道路状遺構(21) S951から出土した水甕は猿投窯産である。いずれも頸部と胴部の接合は、粘土板が挿入される三段構成とみられ、0-10窯式に比定される。

本期は、形態・法量などで奈良時代と平安時代の過渡的な様相が認められ、上記の須恵器窯のこれまで提示された年代観などから8世紀第4四半期でも末葉を中心とした時期が想定される。なお、飯櫃上台遺跡(2) S1001から、底部が丸味を帯びた深めで箱型のロクロ土師器坏、赤彩が施された高台付盤、口径が大きい球胴形の常総型甕が出土している¹⁾。1軒のみであるが、本期の前段階に位置づけられよう。



第153図 奈良・平安時代1期土器

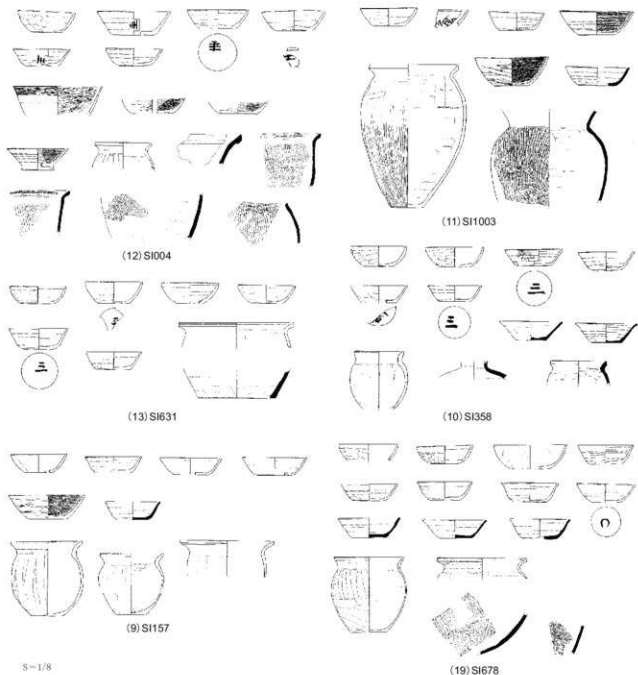
2期 (第154図)

今回の報告では、(63) SI001、(66) SI001、(69) SI001が該当する。供膳具類は、ロクロ土師器が約半数を占め、黒色処理が施されるロクロ土師器杯、高台付杯が出現する。墨書は杯の底部のほかには体部外面に記されるようになる。

非ロクロ土師器杯は、扁平なものは少なく、平底で口径12cm、器高4cm前後ものが主体である。体部が深めで内湾しながら立ち上がり口縁部は直立するもの、浅く直線的に開くものがある。内面のミガキ調整は不明瞭となる。ロクロ土師器杯は、口径11.4cm～16.1cm、底径6.0cm～8.5cmで、口径/底径比の平均は1.71である。体部は直線的に開くものと下端が内湾するものがある。底部調整のヘラケズリの範囲は、全面と外周のみ施されるものがほぼ同数である。黒色土器の杯・椀は、口径16cm以上を測る大型品に限られ、出土する住居跡も限られる。高台付杯も同様である。

土師器甕は、常総型は胴部の張りがやや弱くなる。

須恵器は、下総産を主体に新治窯産、東海産が混在する。下総産は、中原窯段階の杯・甕・甌・鉢が出土している。杯は口径11.6cm～13.5cm、底径6.5cm～7.3cmで、体部下端から底部は回転ヘラケズリまたは手持ちヘラケズリが施される。甕は、広口状の口縁部の甕は頸部の付け根が括れ、胴部上方の肩が張るものである。(10) SI358、(69) SI001 (第117図4)からは、この時期のものとしては希少な大甕が出土している。新治窯産は、杯は下総産と比べて底径が小さい。甕は頸部の付け根が強く屈曲するもののほか、(19) SI678から丸底の底部付近、格子タタキが施される胴部の破片が出土している。壺類は、(10) SI358から東海産の長頸壺が出土した。頸部と胴部の接合は二段構成である。



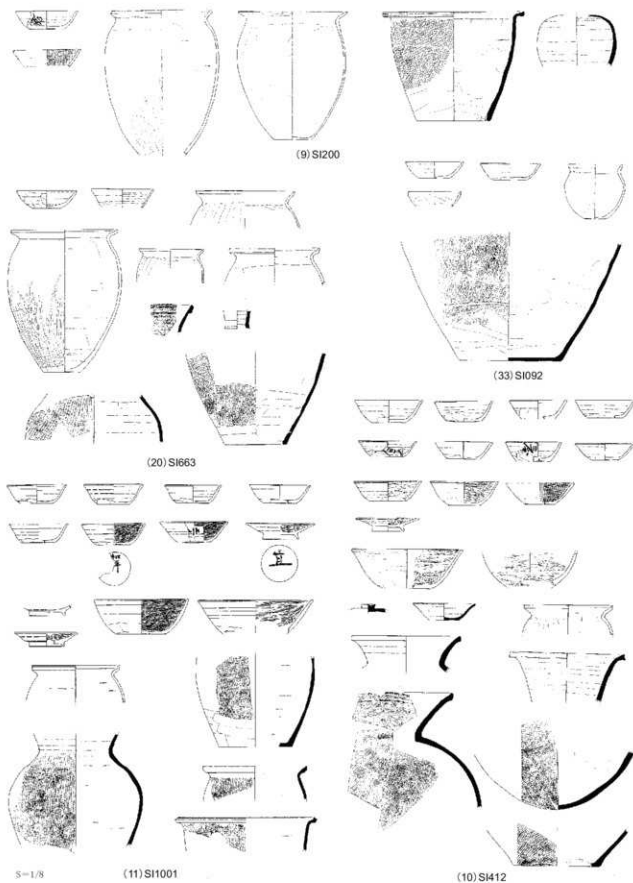
第154図 奈良・平安時代2期土器

本期は、中原窯段階の須恵器、ロクロ土師器環の口径／底径比などから、9世紀第1四半期を中心とした時期が想定される。

3期 (第155図)

今回の報告では、(64) SI001、(64) SB001、(66) SI003、(66) SI005が該当する。供膳具類は、ロクロ土師器が主体となる。黒色土器が普及し、新たに皿が出現する。須恵器環は出土量が減少する。

非ロクロ土師器環は出土量が少ない。体部が内湾するもの、体部が直線的に開くものとも2期に比べて



第155図 奈良・平安時代3期土器

やや小型化する。ロクロ土師器環は、口径11.4cm～19.9cm、底径5.8cm～10.6cm、口径／底径比の平均は1.82である。口縁部が外傾または肥厚し、体部下端から底部の調整は手持ちヘラケズリが施されるものが主体である。大型の環・碗のほかに、通常の環よりやや大振りの口径14.0cm～15.0cmの中型の環が現れる。高台付皿は、黒色処理が施されるものがほとんどで、やや大振りで深めの器形である。口径13.5cm～14.2cm、高台径6.9cm～7.6cmを測る。(64) S1001からは、削り込み高台の皿が出土している(第102図7)。無高台の皿は、(64) SB001から出土した1点のみである(第103図3)。

土師器甕は、常総型は口径が大きく、胴部の張りが強いものが多数を占める。在地型は口縁部の積み上げは鋭さを欠き弱くなる。厚手の甕はみられなくなる。

須恵器は、甕・甗が主体である。2期と同様に下総産を主体に新治窯産、東海産が混在する。環は、口径11.6cm～13.3cm、底径6.2cm～7.8cmを測り、口径／底径比の平均は、ロクロ土師器環と同じ1.82である。下総産の環は、体部下端から底部に回転ヘラケズリまたは手持ちヘラケズリが施される。長頸の甕は最大径の位置が胴部中位付近に下がる。(33) S1092からは平底の大甕が出土している。新治窯産の環は、(66) S1005から厚手で直線的に開くものが出土しており(第114図4)、東城寺寄居前B窯段階とみられる。東海産は甕・壺類が出土した。猿投窯産の大甕はこの時期から出土する。(9) S1200出土の長頸壺、(10) S1412出土の広口瓶は、K-14窯式の灰釉陶器である。

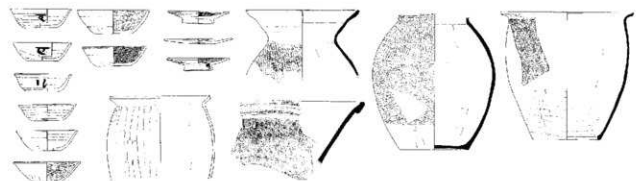
本期は、ロクロ土師器環・須恵器環の口径／底径比、K-14窯式の灰釉陶器などから9世紀第2四半期を中心とした時期が想定される。

4期(第156図)

今回の報告では、(65) S1002、(66) S1004が該当する。土師器は法量の縮小化、調整の簡略化が進行する。須恵器は3期に比べて出土量が増加し、甕・甗の法量分化が顕著となる。

ロクロ土師器環は、口径10.8cm～19.8cm、底径5.4cm～9.1cm、口径／底径比の平均は1.94である。体部下端から底部の調整は手持ちヘラケズリで、体部下端の調整が省略されるものがみられる。黒色土器は、大型の環・碗、中型の環、高台付皿、無高台の皿のほかに、通常の小型の環とほぼ同法量の環が現れる。高台付皿は、口径12.7～14.1cmとやや小型化し、坏部は浅く扁平になる。無高台の皿も同様である。非ロクロ土師器環は、出土量がわずかである。口縁部が内湾しながら立ち上がり口縁部が外傾するもの、同じく直立するもの、体部が直線的に開くものがあり、後二者は小型で、灯明皿として使用されている。そのほかの土師器の供膳具は、数量は少ないが汁口などの鉢が出土している。

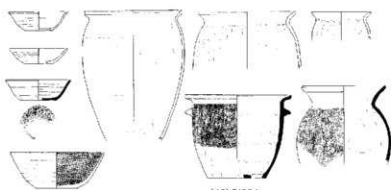
土師器甕は、常総型甕は胴の張りが失われ、径が細く長胴化する。胴部外面のヘラミガキなどの調整の簡略化、胎土の粗雑化などが指摘できる。在地型は口縁部の積み上げは形骸化し、断面形が方形に近くなる。須恵器は、下総産が主体となる。環の出土量が回復し、甕・甗は大型、小型が加わり、新たに鉢、丸底の大甕もみられるなど、器種・出土量とも増加する。環は、口径11.6cm～14.0cm、底径5.8cm～7.4cm、口径／底径比の平均は2.00である。上総産とみられる底部が回転糸切り離しのものも少量認められ、南河原坂窯などの製品とみられる。広口状の甕は、最大径が胴部中位以下となり、肩の張りは失われる。折り返し状口縁は厚みがなくなり形骸化したものも見受けられる。(65) S1002からは、土師器の甕の器形に近似するが、胴部外面にタタキ後ヘラケズリ、内面に当て具痕がみられる甕が出土している(第105図17・18)。宇津志野窯出土品に同種の甕が認められる²⁾。東海産の大甕は3期に比べて減少する。灰釉陶器は、(13) S1630などからK-90窯式の長頸壺が出土している。



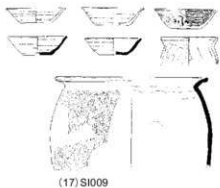
(11) SI1009



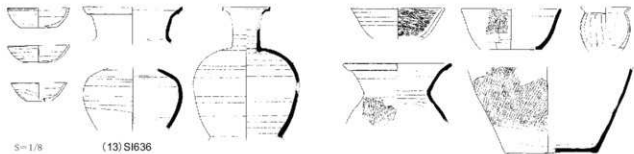
(11) SI004



(40) SI001



(17) SI009



S=1/8

(13) SI636

(15) SI004

第156図 奈良・平安時代4期土器

本期は、ロクロ土師器・須恵器杯の口径/底径比、K-90窯式の灰釉陶器などから9世紀第3四半期を中心とする時期が想定される。

- 注1 (公財)千葉県教育振興財団 2013『酒々井町飯積上台遺跡1-酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書1-』
2 千葉県教育委員会 1991『千葉市宇津志野窯跡』

参考文献

- 古代生産史研究会 1997『東国の須恵器-関東地方における歴史時代須恵器の系譜-』
(財)千葉県文化財センター 1993『研究紀要14』
東海土器研究会 2000『須恵器生産の出現から消滅』
房総歴史考古学研究会 1987『房総における歴史時代土器の研究』

(2) 集落の様相について

奈良・平安時代の遺構は、遺跡北西側から入り込む高崎川の支谷の谷頭部を中心に台地の東側にかけて分布し、東西・南北方向に方形に区画された溝状遺構の内側に、掘立柱建物跡主体で構成される建物群、その西側を中心に竪穴住居跡が集中する。縄文時代からその間の遺構は見つかっておらず、開拓・開墾によって成立した集落である。

掘立柱建物群について

掘立柱建物跡及び付属する竪穴住居跡によって構成される建物群については、既報告において検討されている¹⁾。掘立柱建物跡の集中箇所により、東部を第1建物群、東南部を第2建物群、中央部を第3建物群、そのほかの一般の掘立柱建物跡群及び竪穴住居跡群を第4建物群とし、さらにいくつかの支群に分かれるとした。以下概要を記すが、(1)で示した時期区分に従い見解に変更を加えた箇所もある。

第1建物群は、東西棟が主体の桁行2～5間の掘立柱建物跡27棟と竪穴住居跡3軒からなる。北側と西側は溝状遺構で囲まれている。掘立柱建物跡は同位置で建て替えを繰り返す。3時期の変遷が示されており、2～4期に相当する。各期とも大型の掘立柱建物跡を含む7～10棟と1軒の大型の竪穴住居で構成され、長方形に規則的に配置されるもので、周囲の竪穴住居跡群と比較して傑出しており、集落内の管理施設と想定されている。

第2建物群は、「寺」「三寺」などの墨書土器の出土により、村落寺院と考えられる一画で、西・南のL字形の溝状遺構の内側に桁行4間の双堂の仏堂、僧房、塔からなる4棟と周囲に厨などの付属の竪穴住居跡7軒が配置される。3・4期に営まれたものである。

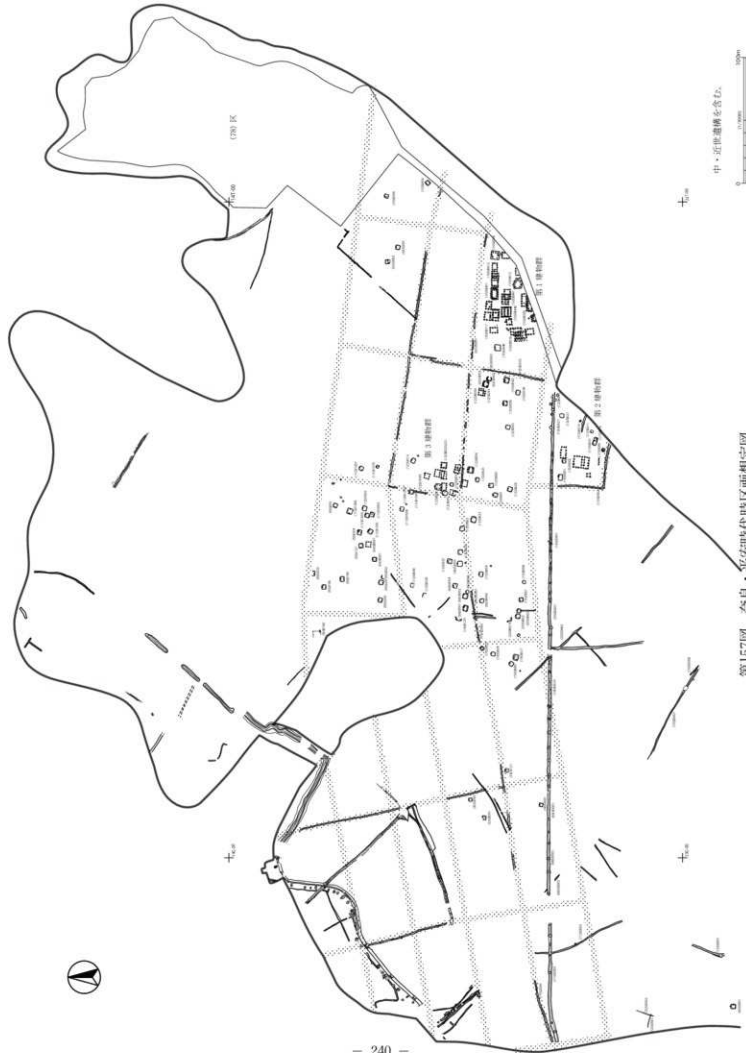
第3建物群は、桁行2～4間の掘立柱建物跡11棟と竪穴住居跡5軒で構成される。第1・2群ほどの隔絶性は認められない。近接する場所で建て替えられ、2期は竪穴住居跡のみ、3・4期は竪穴住居跡と掘立柱建物跡で構成される。「主」と記された墨書土器が出土しており、集落の指導者層に準ずる集団の建物群と想定された。2～4期に営まれたものである。

溝状遺構について

溝状遺構は中・近世のものも多く、既報告では時代・時期を明示しなかったが、建物群の周囲で検出された溝状遺構と規模・断面形・覆土などが近似するものを抽出した(第23表)。平均すると、規模は幅1.4m、深さ30cm、形状は、底面は平坦、断面形は逆台形である。底面は部分的に硬化した箇所がみられるものも

第23表 奈良・平安時代溝状遺構一覧

遺構番号	方位	長さ(m)	幅(m)	深さ(cm)	断面形	覆土	出土遺物	時期	備考
(10)SD430 (10)SD512 (65)SD001	N-84° -W	(97.0)	0.6~ 1.1	2.0~ 27.0	逆台形	暗褐色土 (含ローム)	ロクロ土師器環	2期	
(12)SD057	N-85° -W	(25.0)	0.7~ 1.0	8.4~ 16.2	逆台形	暗褐色土 (含ローム)			(12)SB072に切られる。
(14)SD054 (19)SD682 (66)SD001	N-80° -E	61.0	1.0~ 1.4	11.0~ 45.0	逆台形	黒色土、黒褐色土 (含ローム)			(12)SI679に切られる。
(71)SD001	N-74° -W	(51.1)	0.9~ 1.65	24.0~ 33.0	逆台形	黒色土 (含ローム)			
(6)SD008 (7)SD294	N-80° -W	66.0	0.4~ 1.2	14.2~ 25.9	U字形、 逆台形	黒褐色土 (含ローム)			
(8)SD033 (10)SD346 (10)SD554 (63)SD001	N-80° -W/ N-10° -E	(154.0)	0.7~ 1.6	4.4~ 50.0	逆台形	暗褐色土 (含ローム)	ロクロ土師器環・皿、常総型土師器甕、下総産須恵器甕、穂摘具、釘	4期	
(11)SD1049 (10)SD254 (12)SD038	N-80° -W/ N-10° -E	135.8	0.8~ 1.2	5.5~ 11.9	逆台形	黒褐色土 (含ローム)	非ロクロ土師器、ロクロ土師器環、須恵器甕	2期	(11)SI1009に切られる。
(10)SD535 (12)SD042 (65)SD002	N-10° -E	(92.5)	0.6~ 1.2	11.6~ 26.0	逆台形	黒褐色土 (含ローム)	ロクロ土師器環・甕、新治窯産須恵器環・甕・瓶・下総産須恵器甕	2・3期	
(33)SD022	N-83° -E	(79.0)	1.0~ 1.4	14.9~ 30.1	逆台形	黒褐色土 (含ローム)			
(33)SD054	N-11° -W	(53.5)	1.0~ 1.4	16.5~ 27.6	逆台形	暗褐色土 (含ローム)			
(26)SD007	N-11° -W	82.0	0.9~ 1.2	8.5~ 33.5	U字形、 逆台形	黒褐色土 (含ローム)			
(29)SD910	N-15° -W	(61.8)	0.9~ 1.5	7.0~ 25.0	U字形	黒褐色土 (含ローム)			
(17)SD002	N-82° -W/ N-3° -E	(72.0)	0.8~ 1.9	8.6~ 40.0	皿形・逆台形内側に段	黒褐色土 (含ローム)	非ロクロ土師器、ロクロ土師器環・皿、土師器甕、須恵器環・甕	3・4期	
(17)SD003	N-74° -W	15.3	0.6~ 1.5	10.7~ 22.3	逆台形	黒褐色土	非ロクロ土師器環	2期	道路状遺構
(14)SD150 (66)SD004	N-46° -W	(23.0)	0.25~ 0.29	10.0~ 12.0	逆台形		ロクロ土師器環、須恵器甕		



第157图 奈良·平安時代時区画想定图

あるが、道路としては機能しているものはない。

位置、走行方向、遺構との切り合いなどをみていくと、第1建物群の北側の(10)SD430・(10)SD512・(65)SD001などは、西端の(71)SD001まで続いていたと思われる。南北方向の溝は、この東西方向の溝を基準にほぼ直交ないし直角に掘り込まれる。東側では南から東にL字状に北側を長方形に画する溝が確認される。いわゆる条里制地割、方格子地割などと呼ばれるもので、計画的に土地を分割し園地を整備したものである。

南北方向に走る溝の間隔は、(11)SD1049と(10)SD346・(12)SD042は約105m、(29)SD910と(26)SD007は約100mで1町(109m)、東西方向に走る溝の間隔は、(11)SD1049・(12)SD038・(10)SD254と(12)SD057は48m～58m、(10)SD346・(8)SD033・(63)SD001・(10)SD554と(65)SD042・(10)SD430・(10)SD512は40m～50mで、東西方向は1町、南北方向はその半分の30歩(54.5m)の区画を企図したものと考えられる。1区画の面積は6段(5,940.5㎡)に相当する。第157図の網点は検出された区画溝をもとに集落全体の区割りを想定したものである。

第1建物群北側の(10)SD430・(10)SD512の内側に土塁または垣が存在した可能性が指摘されているが、溝の覆土は自然堆積と判断できるものが多いこと、3・4期の掘立柱建物跡・竪穴住居跡が溝を切っていることなどから、基本的には垣・塀などの上部構造を伴わない区画溝であったと考えられる。

第2建物群の南・東を囲むL字状の(17)SD002は、建物側に段を有し、南側に入り口が設けられるなど北側の区画溝とは構造・規模などが異なる。覆土中からは3・4期の遺物が出土している。地割のためでなく周囲と区画することを目的に設けられた溝であろう。

竪穴住居跡群と出土遺物の分布の変遷(第158図)

1期

竪穴住居跡5軒が3グループに分かれる。掘立柱建物跡は築かれず。東側の2グループは後の第1建物群の西隣の区画内に位置する。溝状遺構(10)SD535と(11)SD1049の延長線の内側の中央に空閑地を挟んだ西側に(12)S1045/(65)S1003・(10)S1540B、後の第3建物群の南側に(13)S1628・(13)S1630が2軒ずつ分布する。西側の(66)S1002は、高崎川低地に通じる谷近くに単独で位置する。いずれも溝状遺構に近い区画の縁辺に建てられており、宅地より園地・耕地が主体であったことを示している。住居の規模は(12)S1045/(65)S1003が20.6㎡で最大、ほかは12.5㎡～19.6㎡である。

遺物の出土状況を見ると、鉄製品は(10)S1540Bから鉄鍬が1点出土しているが、農具類の出土はない。墨書土器は、(12)S1045/(65)S1003から「三」、(13)S1628から「三」「奈野」「天」、(66)S1002から「三」2点が出土している。「三」が出土する住居跡は各グループのうちの1軒のみである。「奈野」は、高崎川を挟んだ対岸の台地上に位置する尾上木見津・駒詰遺跡の中核的な文字で、「奈」を含めると約150点出土している²⁾。

2期

南東側の区画に第1建物群が創設される。竪穴住居跡は19軒に増加し、広範囲に分布する。1期で営まれた3か所のグループの付近では、継続して1～2軒の住居が営まれる。中央付近に位置する(12)S1004・(13)S1631の2軒は第3建物群に分類されるものであるが、2期では掘立柱建物跡は築かれず、竪穴住居跡2軒で構成される。北東端の最大規模の住居跡(10)S1358は、掘立柱建物跡群とともに第1建物群を構成する。

北西側の谷近くに出現した5軒は同一区画内に位置し、西側の主軸を揃えた(11) S11003・(11) S11005・(11) S11006は1グループをなすとみられる。この区画は遺構の密度が高く、宅地主体で利用された可能性が高い。

東西に貫く区画溝の南側は、(15) S1007、(19) S1678、(69) S1001、溝の北側では、第3建物群の北側に(12) S1013、さらに北側の区画溝(10) S0554・(63) S0001の北東側には(63) S1001、(10) S1456が分布する。一つの区画に1～2軒の住居跡が営まれている場合、1期と同様に区画溝の近くに位置しており、園地・耕地が主で一角に宅地が営まれる景観が想定される。

住居跡の規模は、最大の(10) S1358は44.0㎡と突出し、次いで第3建物群の(12) S1004が24.3㎡、(14) S1129は約23㎡と推定され、ほかは10.4㎡～11.9㎡である。

遺物の出土状況を見ると、鉄製品は総数8点と少ないが、刀子、鉄鍬、釘などが出土している。

墨書土器は、(9) S1199から「庄」が1点出土しており、以後4期までに合計4点出土している。他の出土例から考えると本遺跡が荘園遺跡であることを示唆している。千葉県内で「庄」の墨書土器が出土した遺跡は、市川市下総国分寺跡、流山市思井堀ノ内遺跡、八千代市白幡前遺跡があり、思井堀ノ内遺跡は下総国分寺の荘園と考えられている³¹。

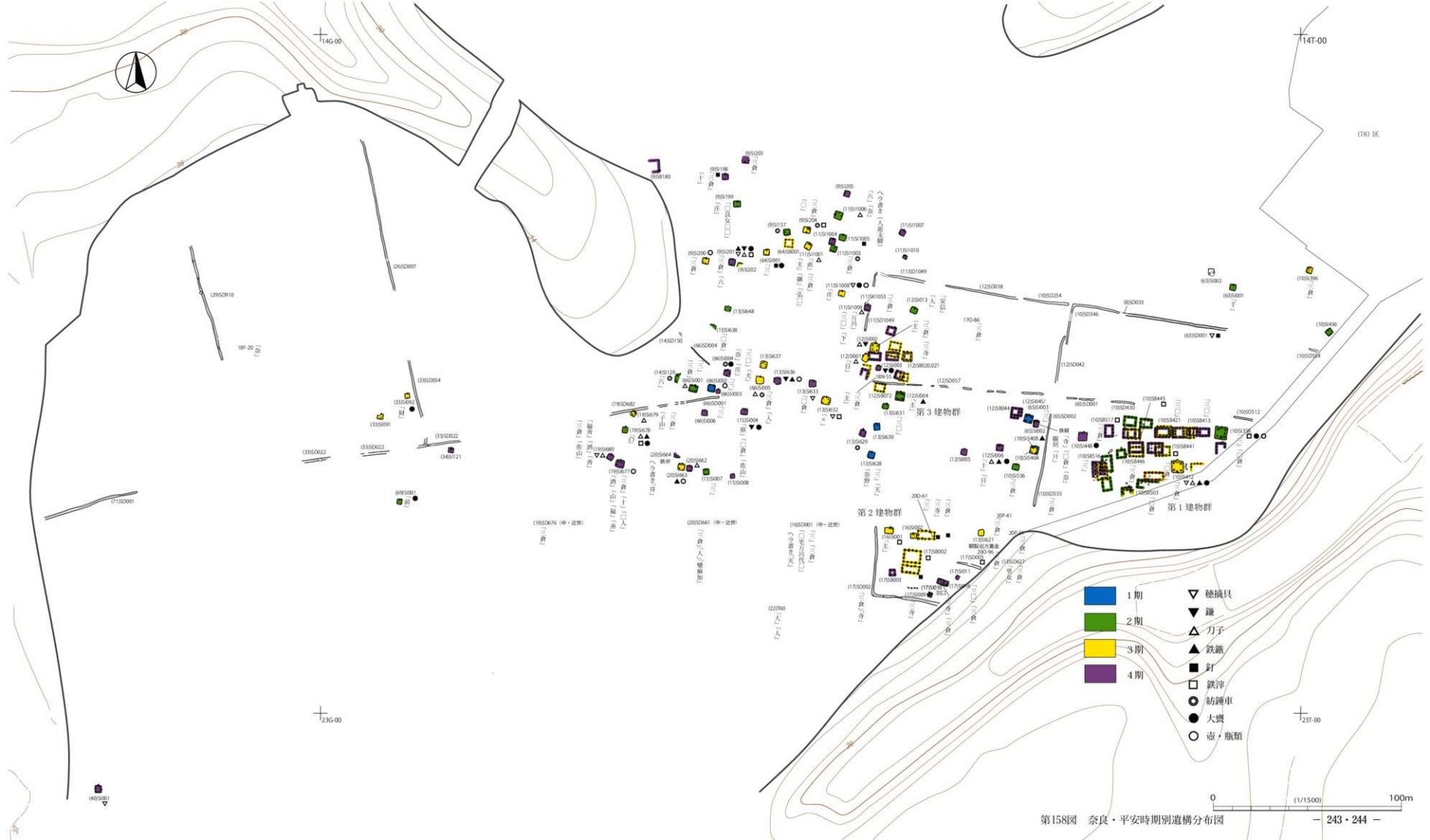
「三」は1期に引き続き出土し、2期から以後多数を占める「三倉」が出現する。屯倉(ミヤケ)は、5～6世紀に設けられたヤマト王権の地方支配の拠点とされている。7世紀前後は「三家」の表記が多く、奈良・平安時代には「三宅」と表記されるのが通例で、荘園の経営・管理の拠点である庄所・庄家の意味で使用されている場合が多い。ヤケは一つの経営体をあらわし、それにミ=御が付いた、特定のヤケを示すという³²。倉(ヤケ)は宅・家(ヤカ)が転じたものであることから³³、「三倉」をミヤケと読み、「三宅」と同意の字句と捉えたい。庄所は、大規模でかつ整然とした計画性を伴った建物群からなることから、本遺跡においては「庄」「三倉」墨書と同時期に出現した第1建物群を庄所と捉えるのが穏当であろう。

第3建物群の(12) S1004からは「主」と記された墨書土器が4点出土している。「主」は第3建物群などからその後も継続して出土し、その意味については後述する。(12) S1013からは僧侶の名とみられる「栄信」が出土しており、第2建物群の寺院が建立される以前から僧侶が寝居していたものと考えられる。また、この時期を特徴付けるものとして、(9) S1199から出土した神への奉獻を表した多文字の墨書などがある。墨書ではないが(11) S11006から人面の刻書を施した土製支脚も出土するなど、この時期の神仏への信仰の盛行を示している。これらが出土したのは集落の縁辺にあたる北端の区画が畝い場であったことを示している。(11) S11006からは「奈野」を略記したと思われる「奈」も出土している。

3期

竪穴住居跡は21軒と増加する。掘立柱建物跡を主体とする建物群は、第1建物群に加え第2、第3建物群が築かれる。

住居跡の規模は9.7㎡～44.1㎡を測り、長方形や小規模で明瞭なカマドをもたないものもあり、工房など居住以外の機能をもつものもあると思われる。基本的に2期と同じ区画内における分布が踏襲され、1～3軒で1グループをなすとみられる。約半数の住居跡が、北西から入る谷に接して広場を取り囲むように馬蹄形に分布し、2期では分散していたグループが集結したようにみえる。このような馬蹄形の住居の配置は労働力の結集と集団の紐帯の強さを物語るものとされる³⁴。この一帯は遺跡内でも標高が高く、接する谷は水田が営まれたと考えられる高崎川低地へ通じており、船作の利便性を考えると居住域として好



第158図 奈良・平安時期別遺構分布図

適地と言える。

(19) S1679、(12) SB072は東西を貫く区画溝 (66) SD682、(12) SD057を切って建てられている。溝の覆土は自然に埋没したものであることから、境界に対する規制・意識が弱まったためと推測される。

北東側では(10) S1396が2期から継続して営まれ、西側では(33) SD054・(33) SD022の北西側の区画に(33) S1091、(33) S1092が新たに営まれる。

第3建物群は馬蹄形に分布する竪穴住居跡群の懐とも言える東側に位置し、主屋とみられる床貼りの4間×3間の南北棟1棟、3間×2間2棟、2間×2間2棟の竪穴柱建物跡が主軸をほぼ揃え、大型の住居跡(12) S1002、長方形の隅カマドをもつ(12) S1001とともに配置され、2期の竪穴住居跡2軒から居宅と呼ぶにふさわしい構成に拡張する。

第1建物群の庄所は9棟の竪穴柱建物と南東側に最大の住居跡(10) S1412が1軒配置される。第2建物群の寺院は3期から造営される。4間×3間と4間×2間の双堂建物(17) SB002の北側に位置する長方形の住居跡(16) S1002からは鉄滓が出土する。北東側の住居跡(13) S1631からは銅製巡方の裏金具が出土しており、革細工などの工房の可能性もある。僧房とみられる4間×2間の(17) SB001に隣接する小規模な住居跡(16) S1002は僧侶など単身者の住居と考えられる。

そのほかの竪穴柱建物跡は、北側に2間×2間の(64) SB001が3軒の住居跡に取り囲まれるように建つ。柱穴の規模が小さく、納屋などの比較的簡易な建物と思われる。

遺物の出土状況を見ると、鉄製品は総数22点で、第1建物群の(10) S1412、第3建物群の(12) S1002から比較的まとまって出土している。刀子が8点と最も多い。農具は3期から出土し、鎌は(12) S1002から1点、穂摘具は第1建物群の(10) S1412、第3建物群に近い(11) S11008、(13) S1632から1点ずつの出土で、いずれも保有者が限られていたとみられる。穂摘具は、馬蹄形に分布する住居跡群の北側と南側で1点ずつ出土していることから、鎌を持つ第3建物群が耕営を主導し、その下で穂摘具を持つ統率者を中心に、共同で作業に従事する集団が北側と南側に分かれていたことを想定することができる。

鉄滓は、第1、第2建物群以外では、馬蹄形に分布する北側の(9) S1204、南側の(13) S1632から出土する。いずれも旧カマドがあり、カマドが作りかえられたとの所見が示されているが、鍛冶炉が併設されていた可能性がある。鉄滓は出土していないが、第3建物群中の長方形の(12) S1001、1・2期にも同様な住居跡があり、検討が必要である。

須臾器の大甕は、第1建物群の(10) S1412から4個体以上、(11) S11008、(33) S1092、(64) S1001から各1個体出土している。大甕は酒等の醸造や貯蔵に用いられたと考えられている⁷⁾。(10) S1412は大型のカマドを備え、「三倉」と墨書された坏が大量に出土しており、酒だけでなく庄所で催される饗宴やまつりなどの飲食物の供給を担う電屋的な機能をもつものと思われる。第1建物群の2期の大型の竪穴住居跡(10) S1358も同様の機能をもつものであろう。

墨書土器は「三倉」が最も多く、「三」も含めると半数弱の住居跡から出土するが、新たに出現した西側の住居跡からは出土していない。「三寺」「寺」は第2建物群の寺院を中心に出土する。「庄」は第3建物群の北西側に隣接する(11) S11008から出土している。

「主」は2期に引き続き第3建物群の(12) S1002から3点以上、第3建物群の北西側の(11) S1001から1点から出土しており、第3建物群の居宅の居住者の性格を表す文字と思われる。単に「戸主」を示すものとも考えられるが、(11) S1001からは「直」「継」「弘口」などの墨書土器も出土する。「直」(あたひ)

は国造に与えられる姓の一つであり、後裔の郡司層に直姓が多い。初期荘園の経営に大きな役割を果たしたのは在地首長・有力者層から任用された郡司層であり⁸⁾、このことを重視すれば「主」は郡司でも三、四等官である主政、主帳を指している可能性がある。施軸陶器等の威信財の出土が少ないのは、そのような下級の官人が管理・経営に当たっていたことを物語るのかもしれない。鎌・穂摘具の保有状況から推測したことも踏まえると、自ら水利・労働用具・種子などを準備し、労働編成と監督を行って直営していた状況が想起される⁹⁾。

4期

竪穴住居跡は30軒と各期を通して最多となる。住居跡の規模は4.42㎡～20.3㎡である。多くが既存の区画内での居住が継承され、北西側の住居跡群は第3建物群を中心とするが、明瞭な馬蹄形の分布が崩れ、分散する状況がみられる。馬蹄形の分布の北側では6軒から5軒と変化は少ないが、東側に隣接する(11)SD1049の北側の区画に(11)S11007・(11)S11010のグループが新たに営まれる。南側では3期の5軒から11軒と著しく増加する。北東側の区画溝(10)SD554・(10)SD001の北側は住居跡がみられなくなる。西側では(33)SD022の南側に(34)S1121のみとなり、遺跡の西端に(40)S1001が単独で新たに建てられる。

第3建物群は3期に比べて規模が縮小している。掘立柱建物跡は4間×2間の主屋、3間×2間2棟、2間×2間の2棟、小型の住居跡(12)S1003で構成される。

第3建物群の南側の区画には、西側に(13)S1629、東側に(12)S1005・(12)S1006、区画の北東隅付近に二面に幅広の庇が付いた2間×2間の掘立柱建物跡(12)SB044と(65)S1002の3グループが営まれる。第1建物群の庄所は、10棟の掘立柱建物跡と北西側に4期最大規模の住居跡(10)S1448が配置される。面積は20.3㎡で、2・3期に付属する電屋より小規模である。

第2建物群の寺院では、双堂建物(17)SB002は3期から継続し、南西側に塔と考えられる(17)SB003が建てられる。僧房とみられる(17)SB001は、(16)S1002とともに3期で廃絶し、北側の区画の(12)SB044・(65)S1002に遷移したものと推測される。(65)S1002は火災住居であるが、「寺」の墨書が記された灯明皿に使用された小型の坏(第104図9)、鉄鍋(第105図24)が出土しており、僧房に付属する電屋とみられる。南東側の長方形で間仕切りを有する(17)S1010・S1016からは羽口が2点出土しており、鍛冶工房と判断される。(17)S1009、(17)S1011も小規模であり、工房などの施設と考えられる。

そのほかの掘立柱建物跡は、北西側の谷に近い2間×1間の(9)SB180は、柱穴が小規模であることから簡易な建物であったと思われ、納屋、農耕で使用する牛馬の小屋などが想定される。

遺物の出土状況を見ると、鉄製品の総数は26点である。新たな種類として南側の(20)S1664から袋状鉄斧が1点出土している。鎌は3期の1点から5点に増加する。3期に続いて第3建物群の(12)S1003から2点、第3建物群の北西側の区画の(9)S1201、南西側の区画の(13)S1636、(15)S1004から各1点出土する。穂摘具も5点と増加し、北側の区画では刀子、鉄銚など鉄製品をほとんど一括保有する(9)S1201、南側は(13)S1633、(19)S1680などから出土する。3・4期とも鎌・穂摘具は、谷付近に馬蹄形に分布する住居跡群に集中しており、立地とともに稲作を担った集団であることを示している。

第3建物群のほかに北側の(9)S1202、南側の(13)S1636、(15)S1004から鎌が出土していることから、3期のように在地首長・有力者が直接経営せず、馬蹄形の分布の北と南に経営が分かれたことが想定される。3期にみられたような強固な馬蹄形の集落の分布が崩れたのは、労働力の分散による集落全体の紐帯

の弱まりも一因と考えられる。

須恵器の大甕は下総産が主体となる。下総産須恵器は東海産に比べ軟質で保水性が低く、酒などの醸造にあまり適していないと思われ、収穫した穀類の一時的な貯蔵に用いられた可能性もある。

墨書土器は「三倉」が大半を占めることに変わりはない。「主」はみられなくなる。第3建物群に近接する北西側に位置する(11)SI1009からは人名「万呂」が3点出土しているが、中・近世の溝状遺構(16)SD001から出土した4期の坏の底部に「□宅万呂代□」と記されており、同一人物である可能性が高い。「庄」は(66)SI004から2点出土している。「三寺」は第2建物群内からのみ出土する。「寺」が出土した(65)SI002と(66)SI004からは「奈」が出土している。南西側の(19)SI677、(19)SI680からは「福善」「福」「善」などの吉祥句が出土し、祭祀・儀礼の場が集落の南西端に移ったことがわかる。

小結

竪穴住居跡を中心とした遺構、出土遺物の分布状況の時期的な変遷をみてきた。集落の様相とその性格については大体次のようにまとめることができる。

8世紀末頃(1期)に高崎川に近い台地北側に条里地割に基づき半町の区画を基本とした園宅地が開拓・整備され、住居跡5軒からなる小規模な集落が形成される。以後、住居跡は1～3軒で1グループをなし、1区画に1～3グループが分布する。住居跡は区画の縁辺付近に位置することが多く、園地・耕地主体の土地利用が想定される。

9世紀第1四半期(2期)以降、荘園を示す「庄」の墨書土器が出土し、遺構は初期(古代)荘園遺跡の様相を帯びる。北東から入る谷津に近い区画内に掘立柱建物7～10棟、竪穴住居跡1軒が整然と配置される第1建物群が創設され、9世紀第3四半期まで同じ場所建て替えが繰り返される。区画の内外から庄所・庄家を示す「三宅」と同意と思われる「三倉」の墨書土器が多数出土し、荘園経営の中核をなす管理施設である庄所と捉えることができる。

庄所の設置と同時期の2～4期に、墾田が営まれたと思われる高崎川低地に続く谷津との間を中心に竪穴住居跡19～30軒を主体とする集落が形成される。竪穴住居跡からは「庄」「三倉」の墨書土器が出土し、荘園に属する集落と判断される。集落は中央に広場を設け、東側に荘園の経営・管理に直接当たった在地首長・有力者の居宅(第3建物群)、その北西側、南西側に耕作を担ったが農民が住む竪穴住居跡が分布する。在地首長・有力者は、「直」「主」の墨書土器から下級の郡司層であったと推測される。

住居跡の分布は、9世紀第2四半期(3期)に明確な馬蹄形を形成し、在地首長・有力者の居宅は、掘立柱建物跡群が主体となる。南側の区画には村落寺院、鍛冶工房などが運営される。9世紀第3四半期(4期)になると住居跡は増加し最盛期を迎えたようにみえるが、馬蹄形の分布が崩れ分散し、断絶する。

本遺跡は、平安時代前期に営まれた初期荘園であり、耕地以外の遺構の全体像とその変遷を明確に捉えることができる希少な事例である。今回のまとめでは、竪穴住居跡を中心に集落全体の様相を示すことを主眼とした。未報告の平成25年度調査の(78)区において、庄所と捉えた第1建物群の東側の隣接地が調査されており、一連の掘立柱建物跡、区画溝などが検出されている。その構造・変遷については次回の報告において再度検討したい。

最期に、本遺跡は現時点では記録が不明な荘園であり、領主の性格などは今後の課題であるが、現時点での見通しを簡単に述べておきたい。初期荘園の類型として、有力諸大寺の主導によって開発された寺社領荘園、皇族・貴族が領有した王臣家領荘園の2つに分けられる。通説では、前者は固有の荘民支配が未

確立で、周辺の班田農民の賃租（小作）による経営が主体をなし、後者は在地首長・有力者を荘長などに取り立てて、浮浪逃亡した百姓を招き寄住させて経営に当たらせたとする¹⁰⁾。本道跡では庄所の近傍に荘園村落が存在し、下級の郡司層が直接経営・管理に当たっていた状況が推察されることから、王臣家領荘園に分類されるであろう。

- 注1 (公財)千葉県教育振興財団 2014『酒々井町飯積原山道跡1ー酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書2ー』
2 (公財)印旛都市文化財センター 2014『尾上木見津道跡(第2・3地点) 駒詰道跡(第2~7・9地点)』
3 (財)千葉県教育振興財団 2010『流山運動公園周辺地区埋蔵文化財調査報告書2ー流山市思井堀ノ内道跡(旧石器~奈良・平安時代編)ー』
4 金子裕之編 1989『古代史復元9 古代の都と村』講談社, p. 75
鬼頭清明 1985『古代の村』岩波書店, p. 116
吉田孝 1978『ヤケについての基礎的考察』『古代史論叢 中巻』吉川弘文社, pp. 373-377
5 新村出編 1998『広辞苑 第五版』岩波書店, p. 2576
6 金子、前掲書, pp. 51-52
7 田中広明 2003『地方の豪族と古代の官人』柏書房, pp. 192-198
8 小口雅史 1991『荘園と村落』『日本村落史講座4 政治1(原始・古代・中世)』鎌山閣, p. 201
9 戸田芳美 1967『日本領主制成立史の研究』岩波書店, p. 34
10 荘園史研究会編 2013『荘園史研究ハンドブック』東京堂出版, pp. 10-26

写 真 图 版



飯積土台遺跡

飯積原山遺跡

柳沢牧墨木戸境野馬生手

図版2 飯積上台遺跡





第3ブロック



第3ブロック



24



25(a-d)



25d



25(b+c)



25a



26(a-c)

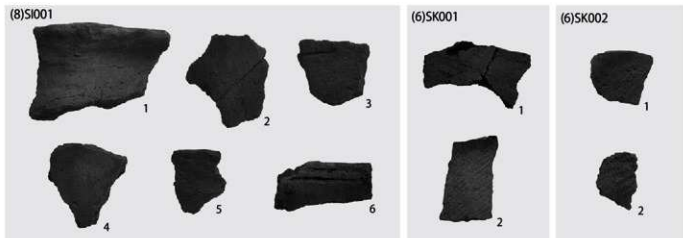


26(a+b)

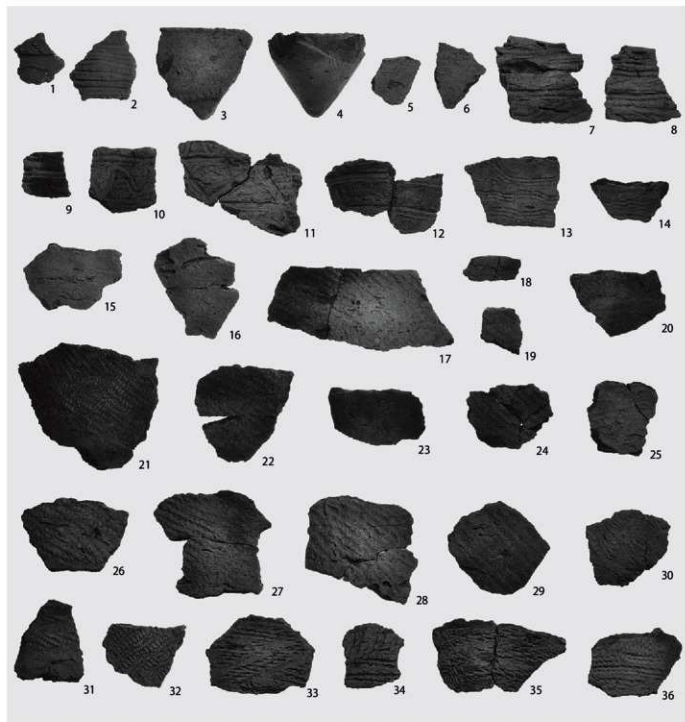


26c

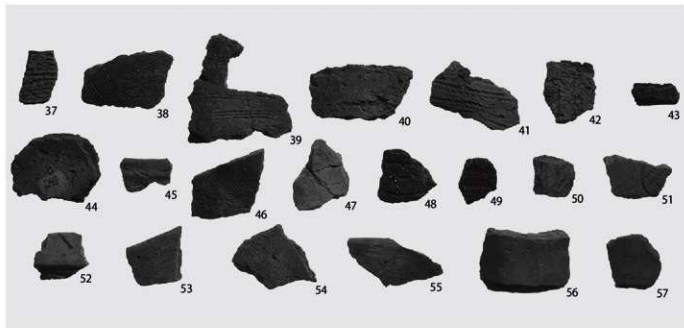




縄文時代住居跡・土坑出土土器



遺構外出土縄文土器(1)



遺構外出土縄文土器(2)



遺構外出土縄文時代石器



中・近世陶磁器



遺構外出土土師器



銭貨



(51) 調査前風景



(52) 調査前風景



(53) 調査風景



第23ブロック (北西から)



第24ブロック北側 (東から)



第25ブロック南側 (北西から)



第26-27ブロック (東から)



第28ブロック (東から)



(61)SI001・(61)SI002



(61)SI001・(61)SI002 遺物出土状況



(61)SI005



(61)SI005 炉・遺物出土状況



(61)SI006



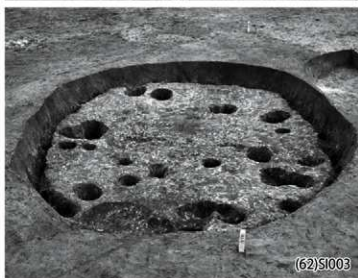
(61)SI006 遺物出土状況



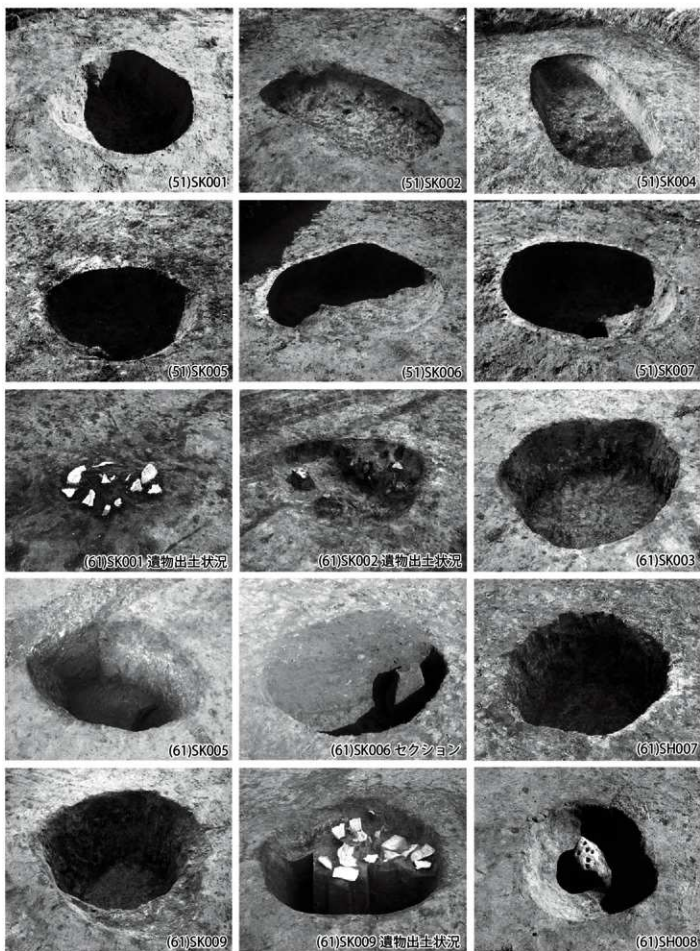
(62) 近景



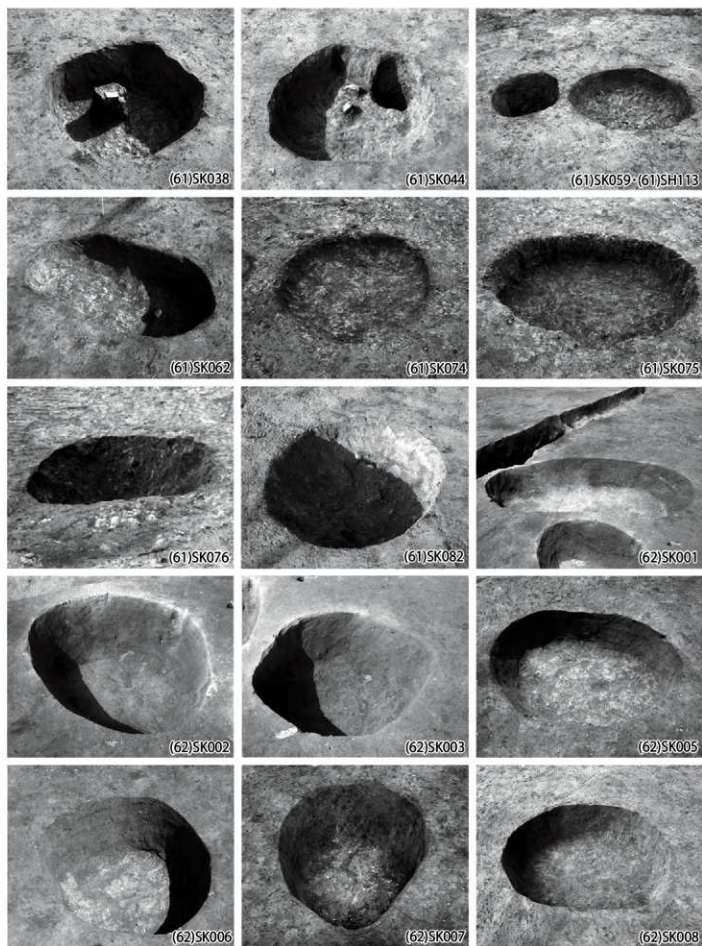
(62)SI001



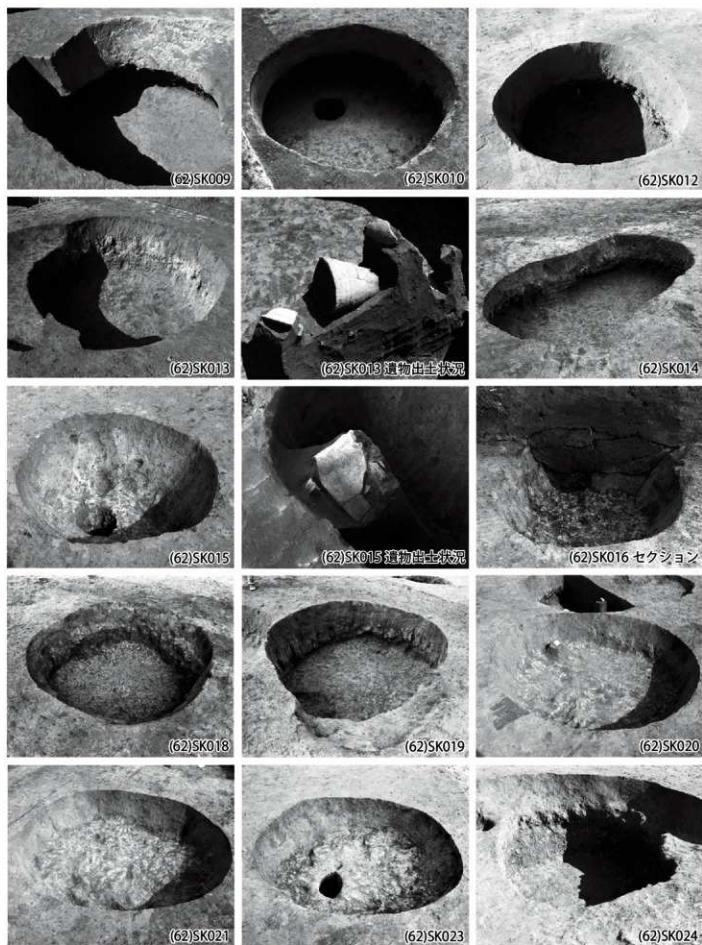




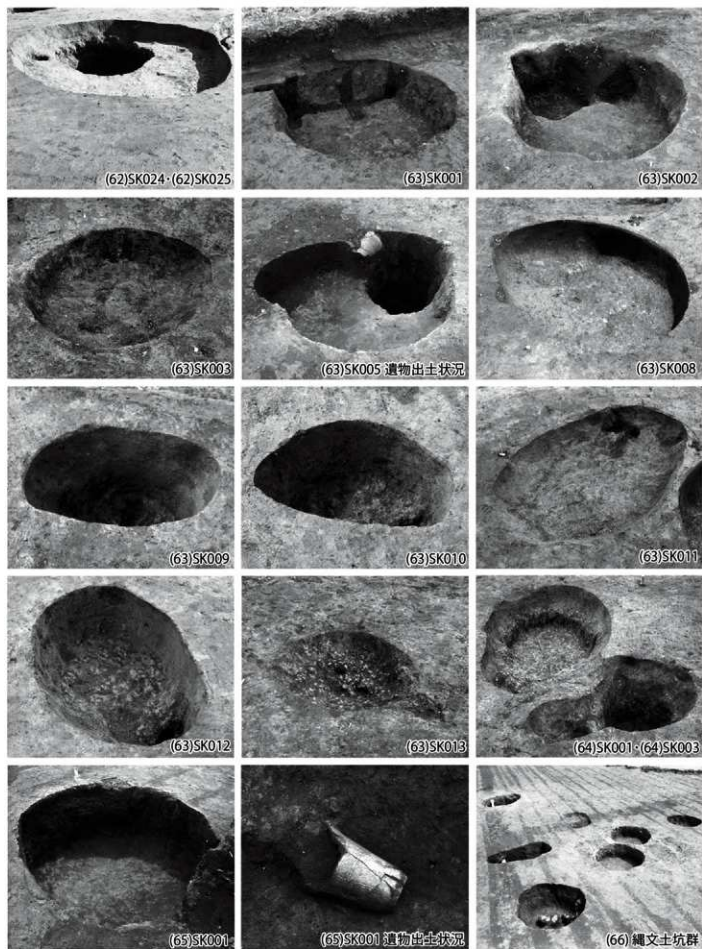
縄文時代土坑等 (1)



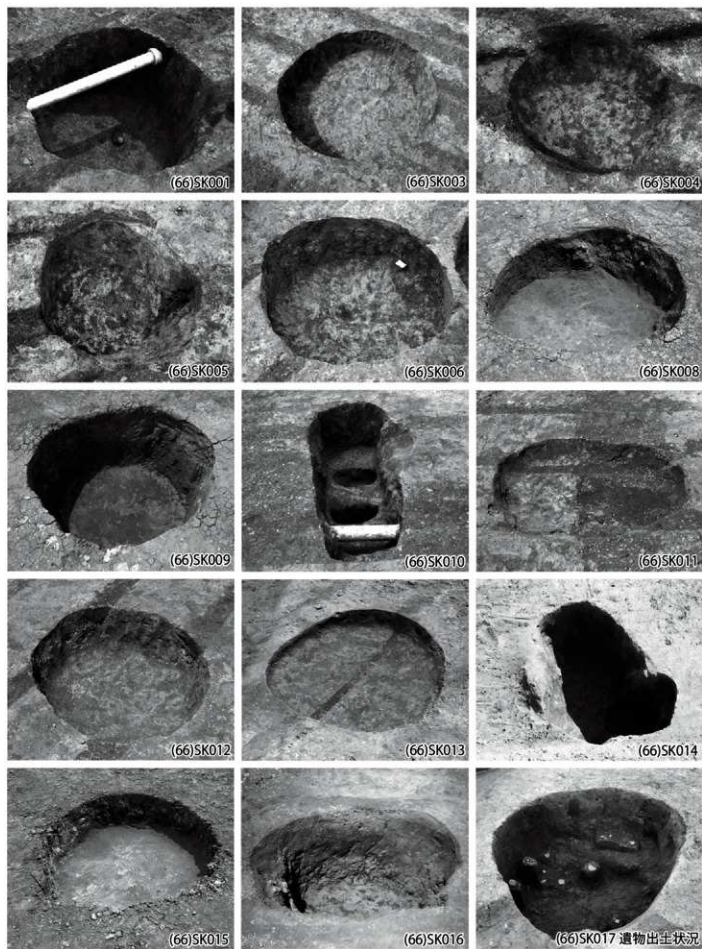
縄文時代土坑等 (2)



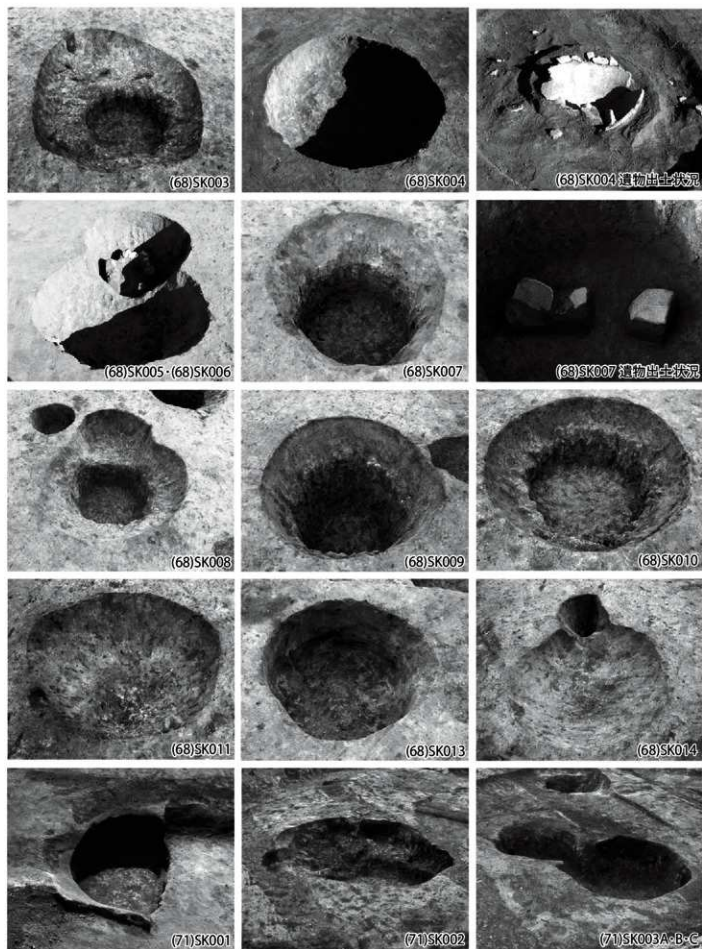
縄文時代土坑等 (3)



縄文時代土坑等 (4)



縄文時代土坑等 (5)



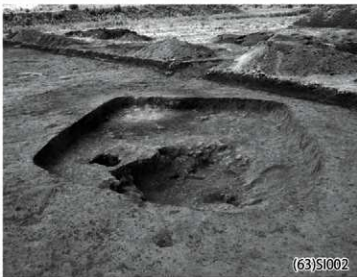
縄文時代土坑等 (6)



(63)SI001



(63)SI001 カマト



(63)SI002



(64)SB001



(64)SI001



(64)SI001 遺物出土状況



(65)SI002 焼土・炭



(65)SI002 遺物出土状況



(65)SI003



(65)SI003 カマド



(66)SI001



(66)SI001 カマド遺物出土状況



(66)SI002



(66)SI002 炭化材



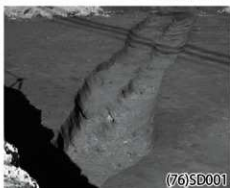
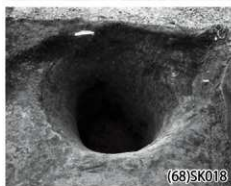
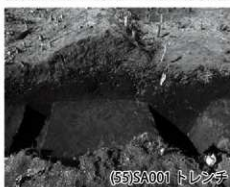
(66)SI002 遺物出土状況

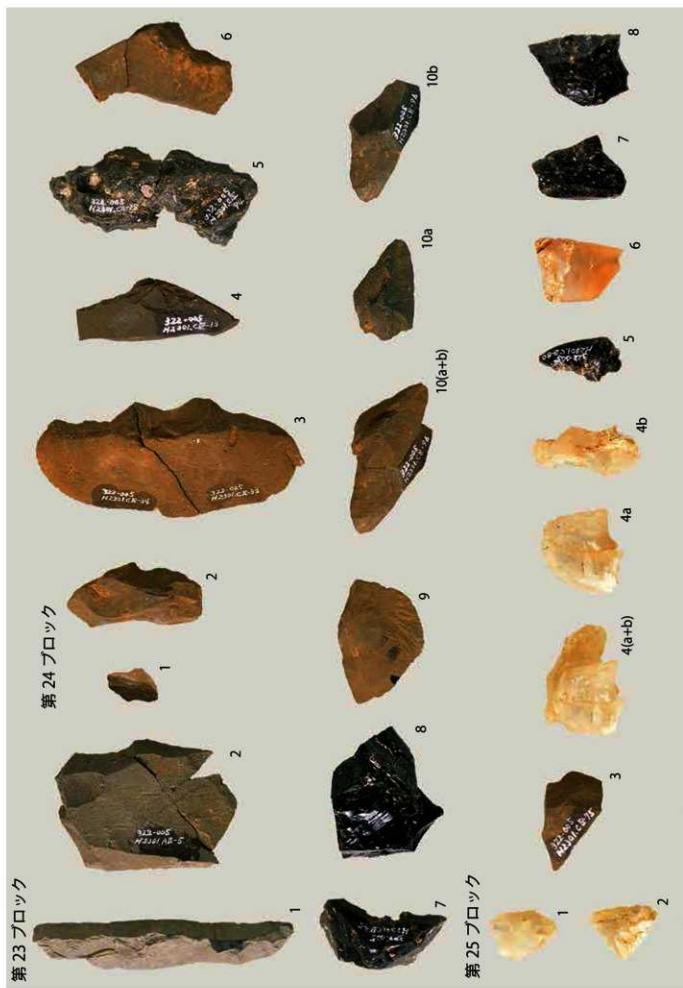


(66)SI003



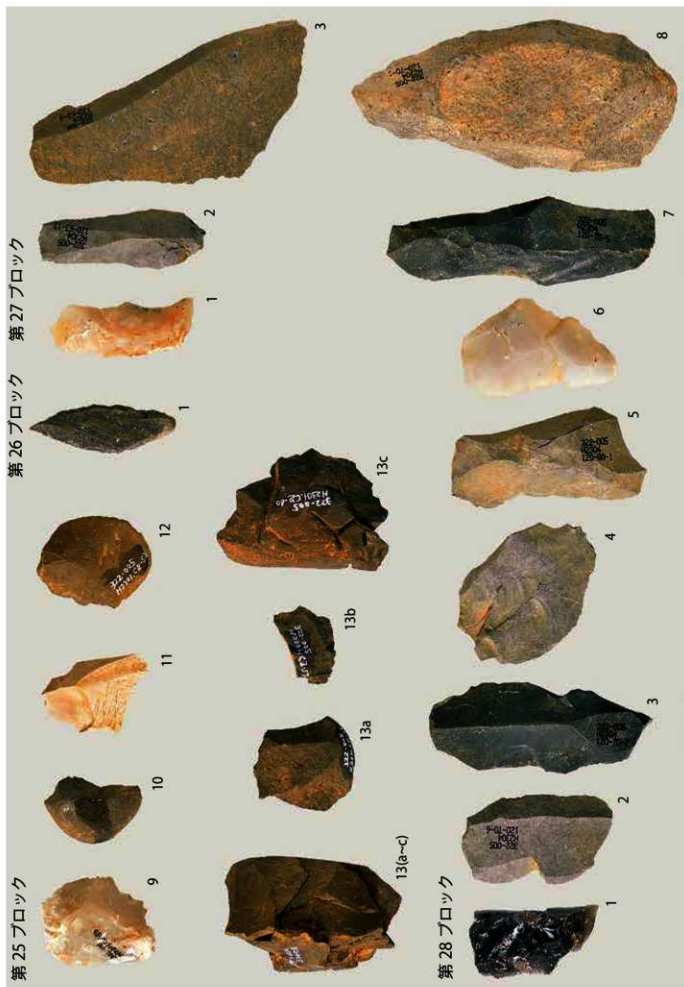




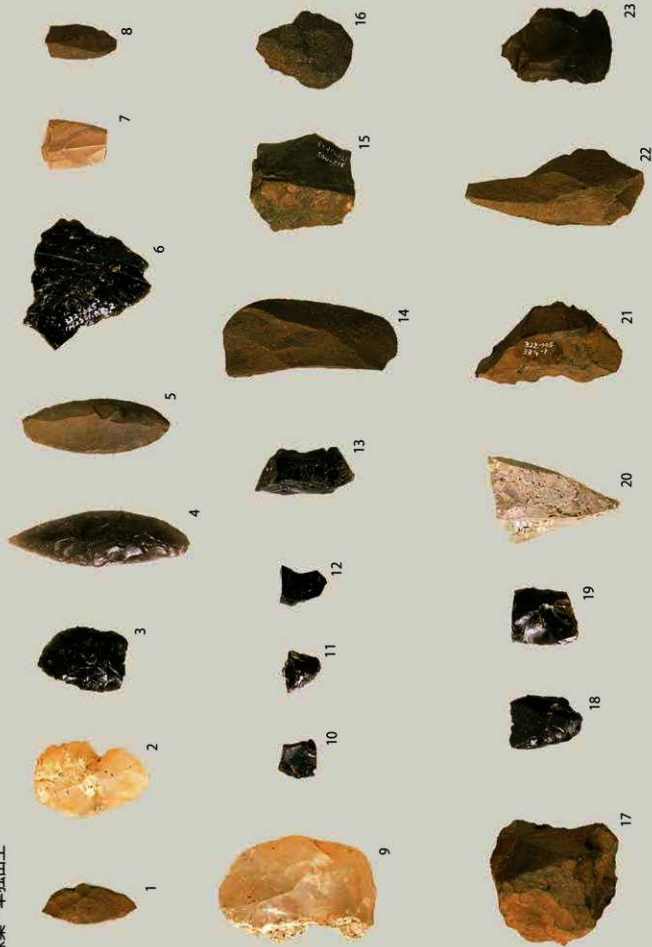


第25ブロック 第26ブロック 第27ブロック

第28ブロック



採集・単独出土



第 23 ブロック

第 24 ブロック



第 25 ブロック



第 26 ブロック



第 27 ブロック



第 28 ブロック

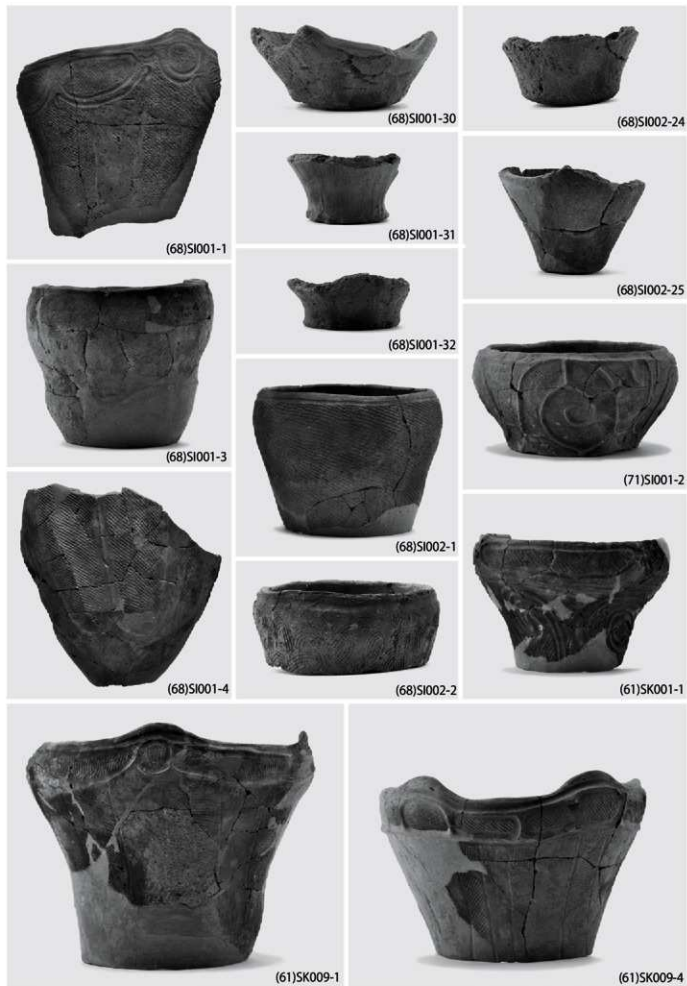


単独出土





縄文時代住居跡出土土器(1)



繩文時代住居跡出土土器(2)・土坑等出土土器(1)



縄文時代土坑等出土土器(2)



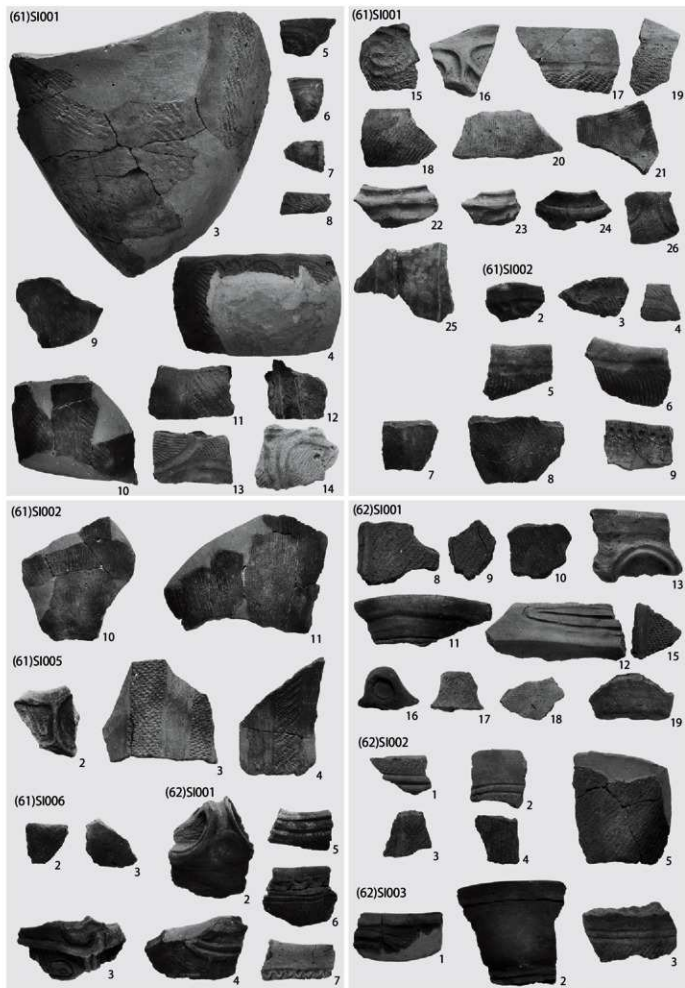
縄文時代土坑等出土土器(3)



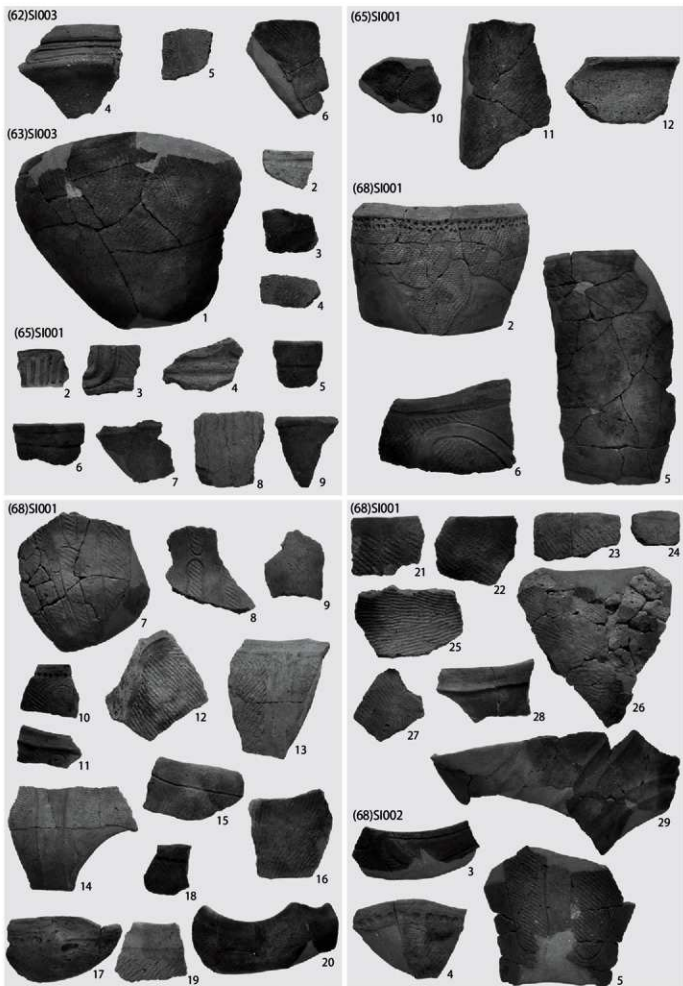
縄文時代土坑等出土土器(4)



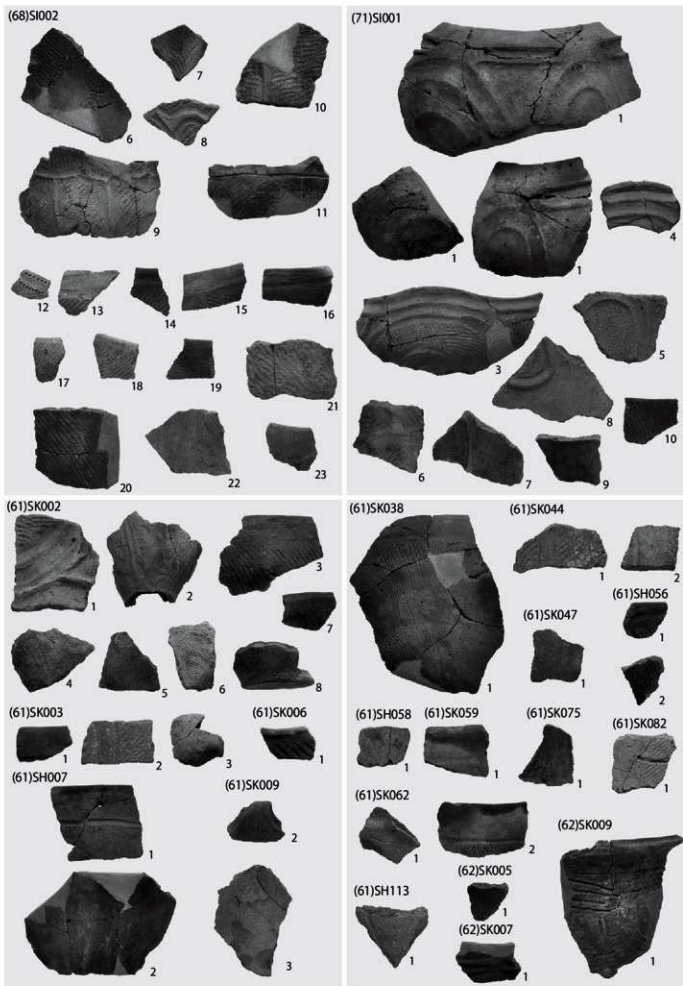
縄文時代土坑等出土土器(5)・遺構外出土土器(1)



縄文時代住居跡出土土器(3)

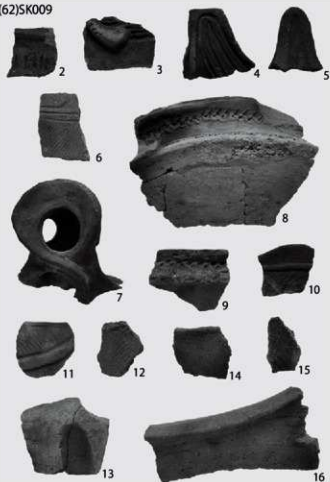


縄文時代住居跡出土土器(4)



縄文時代住居跡出土土器(5)・土坑等出土土器(6)

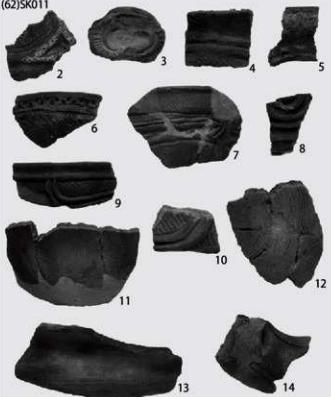
(62)SK009



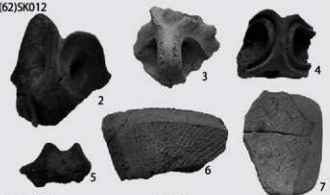
(62)SK010



(62)SK011



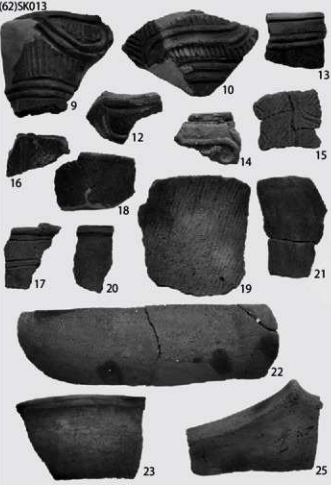
(62)SK012



(62)SK013



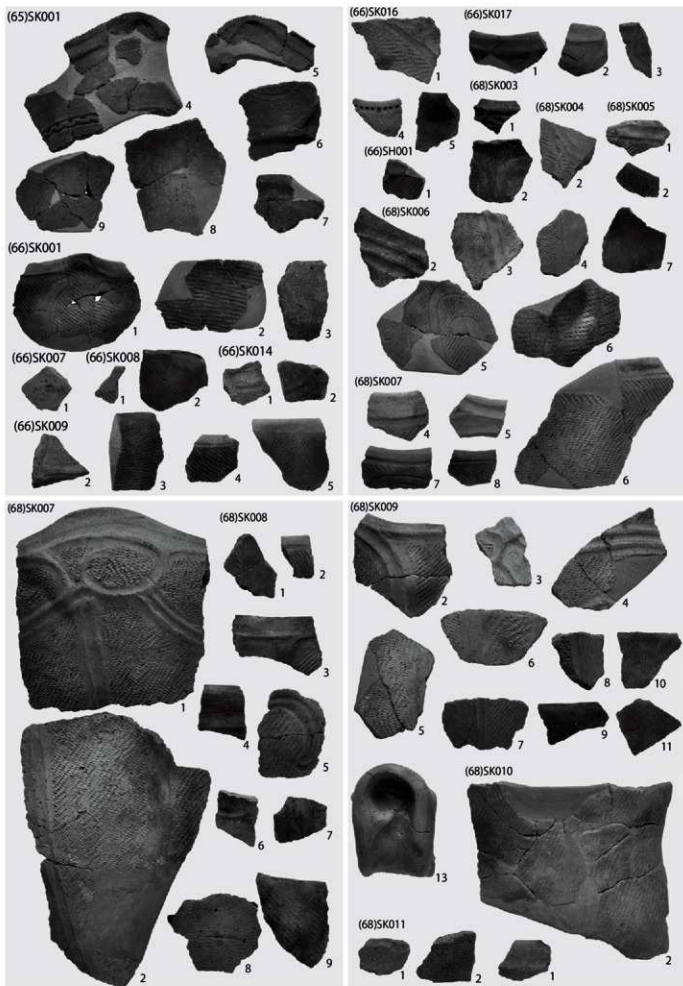
(62)SK013



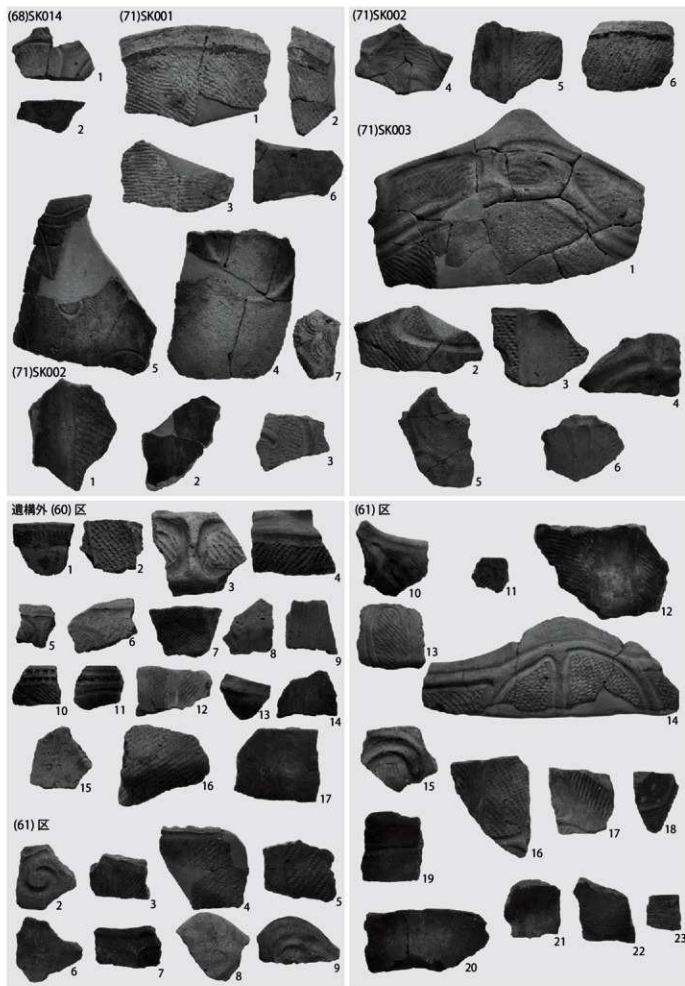
縄文時代土坑等出土土器(7)



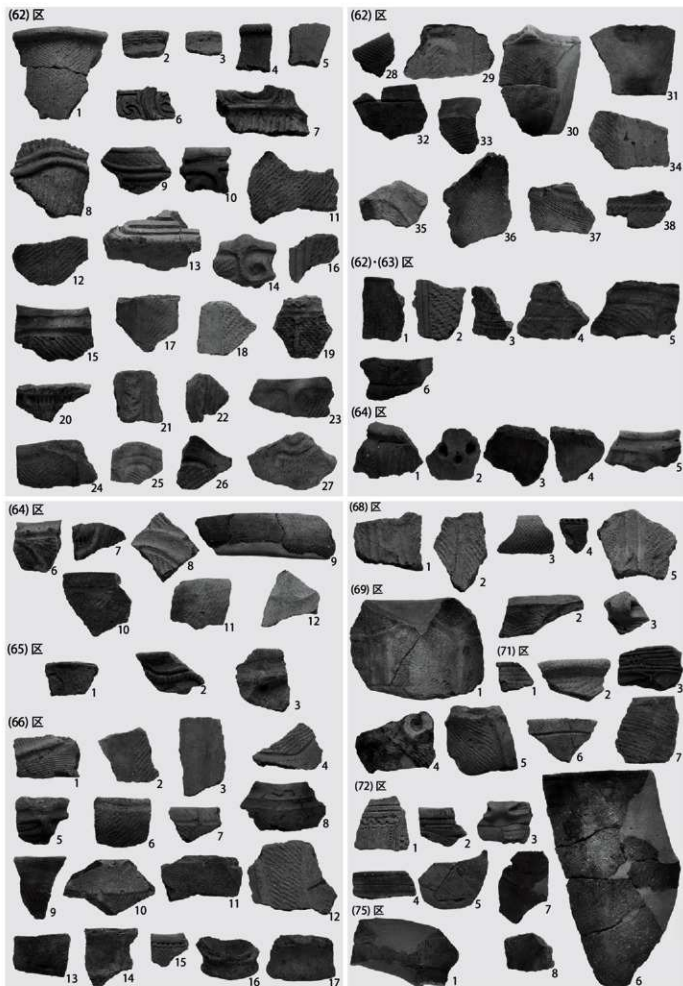
縄文時代土坑等出土土器(8)



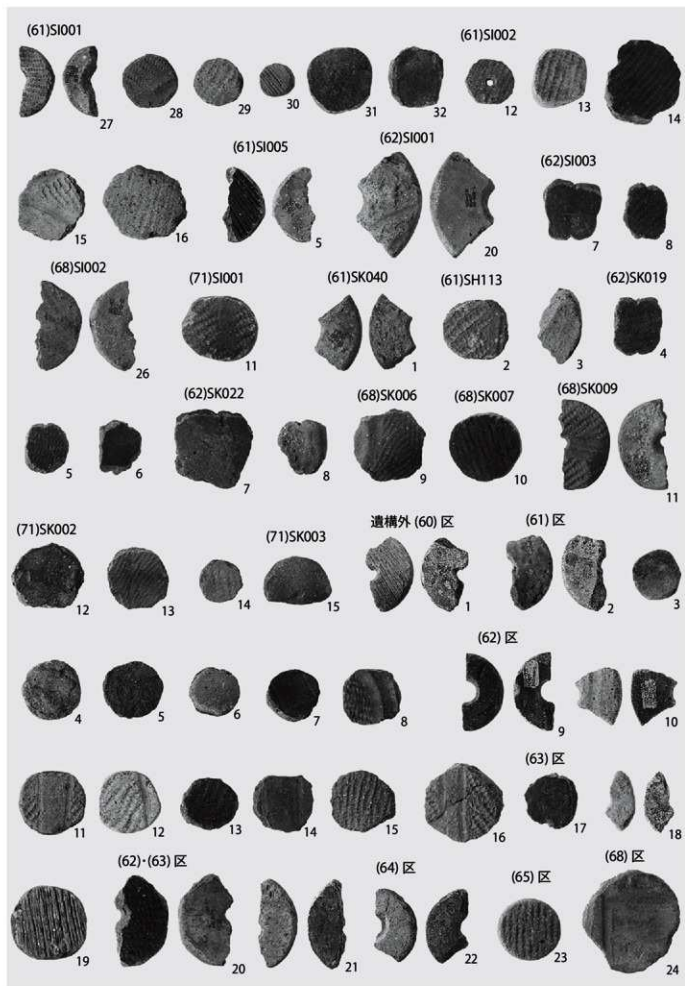
縄文時代土坑等出土土器(9)

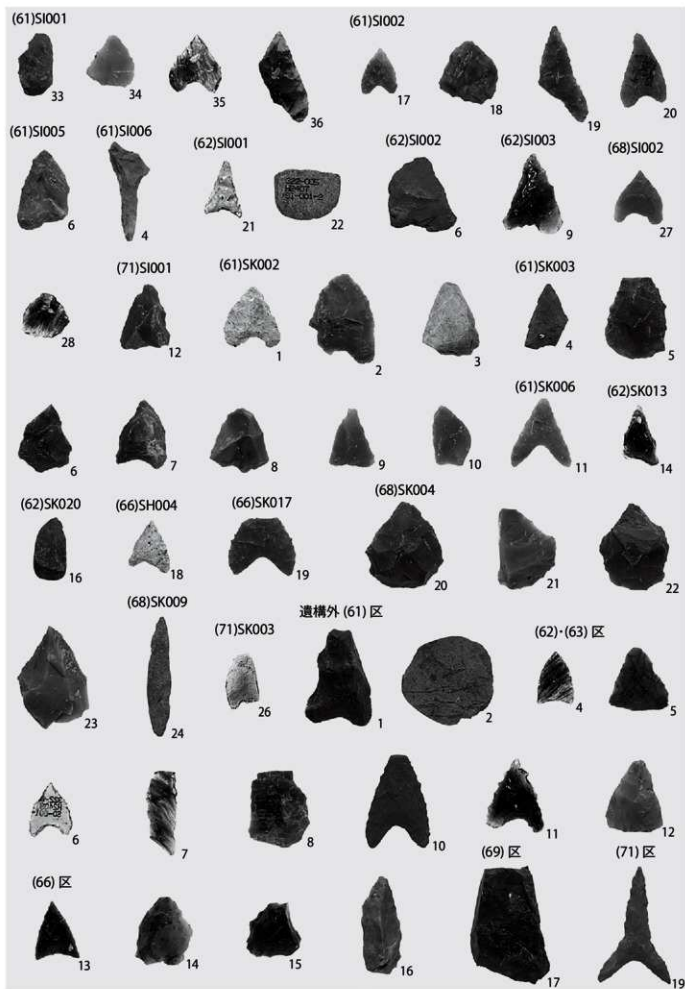


縄文時代土坑等出土土器(10)・遺構外出土土器(2)

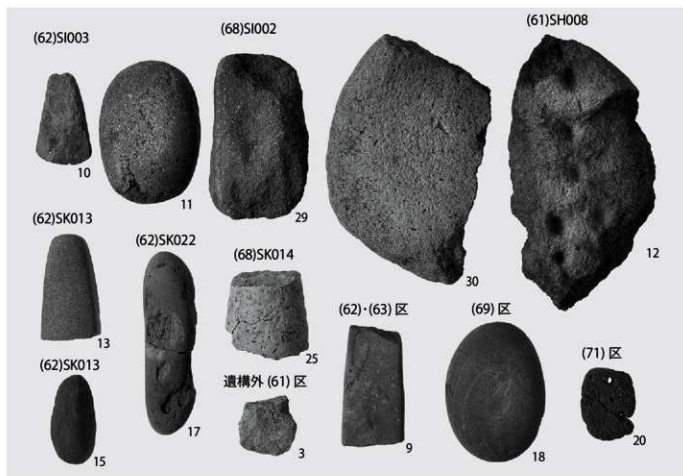


縄文時代遺構外出土土器(3)

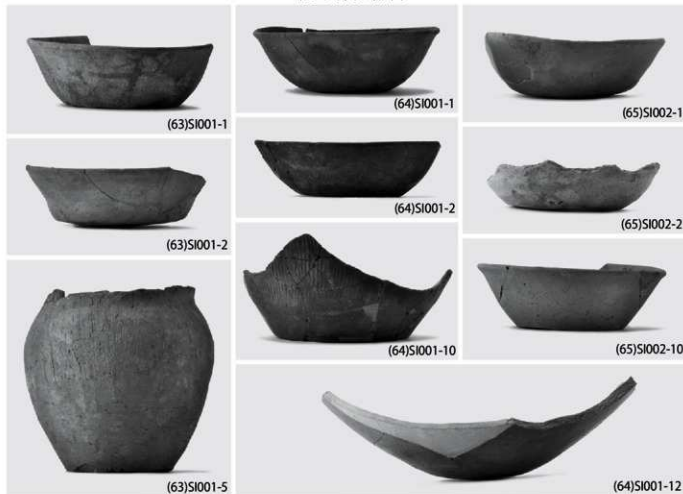




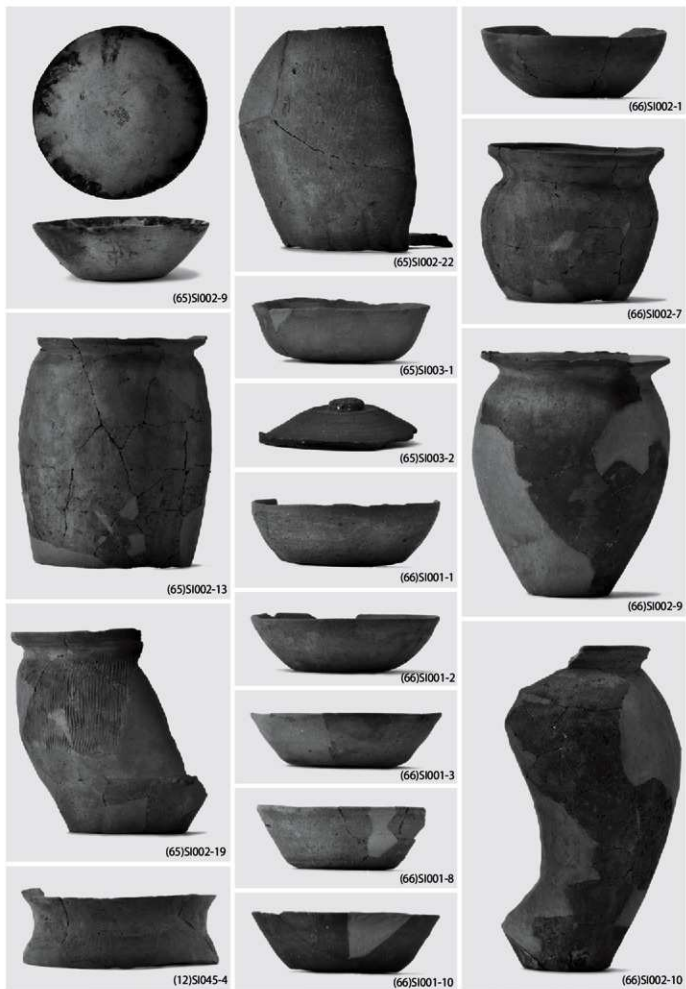
縄文時代石器(1)



縄文時代石器(2)



奈良・平安時代土器(1)



奈良・平安時代土器(2)



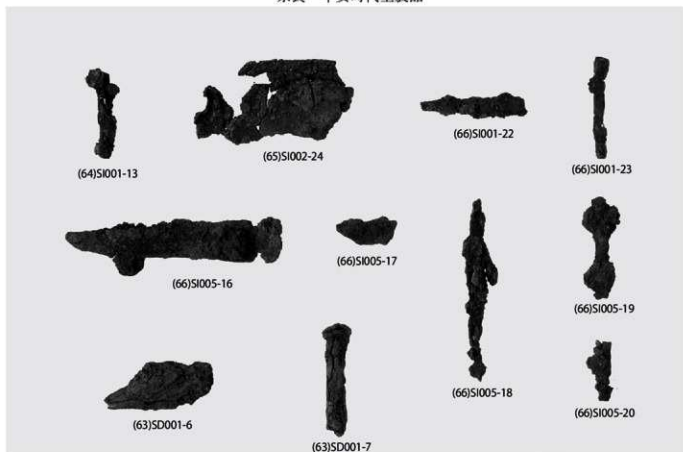
奈良・平安時代土器(3)



奈良・平安時代支脚



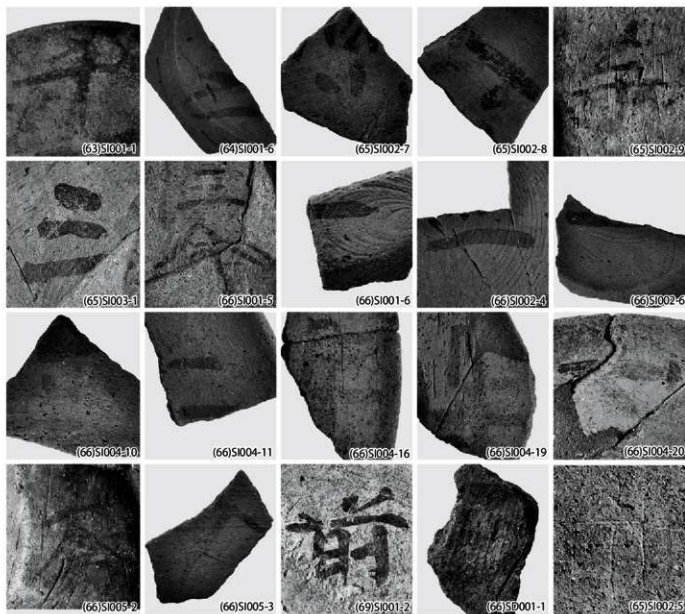
奈良・平安時代土製品



奈良・平安時代鉄製品



奈良・平安時代石製品



墨書・刻書



(1)SA001 調査前風景



(1)SA001 調査前風景



(1)SA001 トレンチ 1-2-3



(1)SA001 トレンチ 1



(1)SA001 トレンチ 2



(1)SA001 トレンチ 3



(2)SA001 北側



(2)SA001 南側

報告書抄録

ふりがな	しすいまいらいつみうえだいいせき2・いつみはらやまいせき3・やなぎさわかみきどさかのりまで							
書名	酒々井町飯積上台遺跡2・飯積原山遺跡3・柳沢牧場木戸境野馬土手							
副書名	酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書							
巻次	4							
シリーズ名	千葉県教育振興財団調査報告							
シリーズ番号	第738集							
編著者名	木原高弘 沼澤 豊 西川博孝 橋本勲雄							
編集機関	公益財団法人 千葉県教育振興財団							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地の2 TEL. 043 (424) 4848							
発行年月日	西暦 2015年3月27日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
飯積上台遺跡	酒々井町飯積上台390-1ほか	12322	009	35度 43分 07秒	140度 17分 47秒	20120417～ 20130325 (その間断続的に 調査第1章参照)	8,745	土地区画整理 事業に伴う埋 蔵文化財調査
飯積原山遺跡	酒々井町飯積字 宮田台551-4ほか	12322	005	35度 42分 54秒	140度 17分 50秒	20110216～ 20121221 (その間断続的に 調査第1章参照)	60,250	
柳沢牧場木戸境 野馬土手	酒々井町飯積字 宮田台523ほか	12322	005	35度 42分 44秒	140度 17分 46秒	20111006～ 20121031 (その間断続的に 調査第1章参照) (日本測地系)	571	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
飯積上台遺跡	集落跡	旧石器時代 縄文時代 中・近世	石器集中地点 1か所 竪穴住居跡 1軒 土坑等 5基 溝状遺構 4条 土坑 3基	旧石器時代石器 縄文土器、有舌尖頭器				
飯積原山遺跡	集落跡	旧石器時代 縄文時代 奈良・平安時代 中・近世	石器集中地点 1か所 竪穴住居跡 13軒 土坑等 115基 86基 竪穴住居跡 12軒 掘立柱建物跡 1棟 溝状遺構 6条 土坑・しし穴 3条 野馬土手・欄列 3条 溝状遺構 25条 炭窯 3基	旧石器時代石器 縄文土器、土器片円板、 土器片鐘、石鏃、楔形 石器、石皿、敲石、磨 石類、石棒 土師器、須恵器、紡錘 車、鉄製品、磁石 馬骨				
柳沢牧場木戸境 野馬土手	牧跡	近世	野馬土手 1条					
要約	<p>飯積上台遺跡、飯積原山遺跡、柳沢牧場木戸境野馬土手は、印旛沼に近い高崎川及びその谷部に北面する台地上に立地する。平成23・24年度に発掘調査を実施した地点の成果を所収した。</p> <p>飯積上台遺跡は、旧石器時代は、立川ローム層VI層下部からVII層上部のブロックが検出され、ナイフ形石器、削器、彫刻刀形石器などの遺物が出土した。縄文時代は、早期田戸土層式期の竪穴住居跡1軒、前期の土器などが出土した土坑等が検出された。遺構外からは後期加曽井B式土器までが出土した。</p> <p>飯積原山遺跡は、遺跡の北側の既報告で残った調査地点が主である。旧石器時代は、台地北端からIX層上部、IV層下部～V層のブロックが検出され、槍先形尖頭器、ナイフ形石器、角錐状石器などの遺物が出土した。縄文時代は、遺跡の北側に中期中葉から後期初葉を中心とした時期のフラスコ状土坑、円形土坑を伴う住居跡群が展開する。奈良・平安時代は、8世紀末から9世紀第3四半期の桑里地割の区画溝を伴う集落が検出され、「庄」「三倉」「寺」などの墨書土器が出土し、初期荘園と捉えられる。前回報告の掘立柱建物跡3か所は、荘園の現地経営拠点である庄所、在地首長・有力者の居宅、村落寺院、周辺の竪穴住居跡群は荘園村落と考えられる。</p> <p>柳沢牧場木戸境野馬土手は、近世佐倉七牧一つ柳沢牧の北西端に位置する南北方向に築かれた野馬土手で、北端と中央付近の土手の一部を調査した。</p>							

千葉県教育振興財団調査報告第738集

酒々井町飯積上台遺跡2・飯積原山遺跡3

柳沢牧墨木戸境野馬上手

—酒々井南部地区埋蔵文化財調査報告書4—

平成27年3月27日発行

編 集	公益財団法人	千葉県教育振興財団
発 行	独立行政法人	都市再生機構 首都圏ニュータウン本部 東京都新宿区西新宿6-5-1
	公益財団法人	千葉県教育振興財団 千葉県四街道市鹿渡809番地の2
印 刷	株 式 会 社	東 プ リ 千葉県船橋市咲が丘1-11-9
